
私の秘密の話をしよう

あきチャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の秘密の話しおじょう

【Zマーク】

Z9633M

【作者名】

あきチャン

【あらすじ】

中学時代のイジメが原因で弓き籠りの由子にはカツコヒーお兄ちゃんが居ました。

由子はお兄ちゃんの勧めで芸能界に入る事に…
お兄ちゃんとの怪しい関係、仕事で出会う美男子たち。
何故だかモテる由子は誰を選ぶのでしょうか。

由子と美形男子達が巻き起こす、お姫様ストーリーです。

第一章

私の名前は佐藤　由子、年は19歳。

よこい

乙女座のO型。

私の好きな物、パソコン、漫画、ドラマ…自分の部屋。

私の嫌いな物、侵害、男、人間…現実。

私は自分の部屋で自分の好きな物に囲まれているのが幸せ。

私はいわゆる…「引き籠り」

私が引き籠りになつた訳は単純。中学校時代の「いじめ」。

私は太つていて、同じ年頃の人たちの様に生きてみたい。
でも怖い。外が怖い。人間が怖い。

私は太つていて、同じ年頃の人たちの様に生きてみたい。
でも怖い。外が怖い。人間が怖い。

私は中学校に通つていて、三年間、いじめに耐えた。耐えに耐えた。
でも高校受験を迎え、気持ちは前向きだった。
きつと高校に通えばイジメなんて無くなる。そう思つてた。
でも実際は違つた。

高校に通い初めて一ヶ月、友達は一人も出来なかつた。

そればかりか…

高校生のイジメは陰険だつた。

中学時代は肉体的なイジメ。高校生は精神的なイジメ。
誰がやつてているか解らない。でも私の周りは異常な事ばかりが起

こる。

上履きは毎日ゴミ箱、教科書は字が読めない程落書きをされ、体
育着は変な汁が付いている。

一番キツかつたのがインターネットの裏サイト。

私のスリーサイズ、体重、訳が解らない病気や菌に感染している…
私の精神は完全に壊された。

私は高校を半年で退学して、以降引き籠りになつた。

精神的に弱つていた私は拒食症になり、やつれてしまつた。
両親は私のイジメを知つてから、私に対して腫れものに触るついで。

そんな毎日が続く中、私のお兄ちゃんが留学から帰国した。

私のお兄ちゃんは七歳年上。一人兄弟だ。

世間的にはイケメンという種類の兄。

私とは大違ひな種族だった。

でも、イジメられてショボンボリしている私が学校から帰ると、

「俺のプリンセス♪」

「俺の天女♪」

つて、口に出すのも恥ずかしい冗談で私を笑わせる。

引き籠る様になつてからも、お兄ちゃんは変わらず接してくれた。
夕食時には、一日の事を冗談を混ぜて面白可笑しく話す。

我が家の中ドメークーな兄。

私はお兄ちゃんが大好だつた。

そんなお兄ちゃんは二年前突然…

「俺はメイクに目覚めた！！」

つと書き置きを残し、一人ハリウッドに旅立つていった。

前日見た映画に感化され、翌日アメリカに旅立つ行動力のある人間なのだ。

まあ、自分勝手とも言つけど。

そんなお兄ちゃんが突然の帰国した。

お兄ちゃんは一年の間、本場の通常のメイクだけでなく、特殊な

マイクも学んで帰国したらしい。

突然帰国した理由は、日本で撮る映画の専属になつてくれとの依頼があつたからだつた。

お兄ちゃんは名指しで依頼がくる程腕を上げたらしいけど…
私にはそれを立派だつと褒める知識も興味もなかつた。
でも、大好きなお兄ちゃんの帰国は最高に嬉しかつた。

夕食時、私たち家族は久しぶりの家族団欒をした。

お兄ちゃんが突然いなくなつてからは家の中から笑いが消えて…
私は両親と一緒に夕食を取る事も無くなつていたけど。
今日は久しぶりに皆で食べよつてお兄ちゃんが言いだした。
私はお兄ちゃんの帰国が嬉しくて了承した。

お兄ちゃんはアメリカでの出来事を色々話してくれた。

行き当たりばつたりの旅、良い師匠に巡り合つた話。出会つた面白い人たち。

私は夕食の時間だけでは足りなくて、食べ終わつてからもお兄ちゃんの傍を離れなかつた。

お兄ちゃんは、

「荷物の整理をしたいから部屋に行くな。」

つと言つたので、私は言うとおりに部屋まで付いて行つた。
お兄ちゃんの持つていた荷物は服や日用品ではなかつた。

「お兄ちゃん、荷物つてこれ？」

私が指差した先にあるのはチョット大きめの箱。

「そうだよー、俺の一番大事な荷物！」

お兄ちゃんは滞在先から日用品は宅急便で送り、この箱だけは自分で持つてきたいしい。

「俺の秘密道具だよ。」

そう言つて、私に箱の中身を見せてくれた。

箱の中に入つていた物は…訳の分からぬ薬品や絵の具やら糸や

私が不思議そうに手に取つて見ていると…

「よしーお兄ちゃんの一年間を見せてあげよー。」

つと言つと、私の長い黒髪を束ね始めた。

「おつお兄ちゃん？」

私はビックリして兄の手を振り払つた。

お兄ちゃんも私の態度にビックリした表情だつたが、すぐ何時もの優しい顔に戻り、

「大丈夫、お兄ちゃんに任せなさい。」

お兄ちゃんの優しい、魔法な声に私は目を閉じて顔を預けた。

お兄ちゃんは暫く私の顔を優しく撫でていた。

私は少しどキドキしながらお兄ちゃんを受け入れていた。

「よし、最高だ…」

お兄ちゃんの優しく甘い声。

私はゆっくり目を開ける。

「由子、俺を見て…」

私はなんだか重たい瞼を開き、ボーッとお兄ちゃんの顔を見つめた。

「うん、俺のお姉様だ。由子、ここを見て…」

お兄ちゃんは何かを手に持つていた。

蛍光灯にキラツと反射したそれは…鏡。

「嫌つ！！ 鏡は怖い！！」

私は咄嗟にお兄ちゃんの手を叩いた。

お兄ちゃんは私の顔を覗き込んで…

「鏡が怖いの？」

つと聞いてきた。

私は正直に答えた。

「私、自分の顔が醜いのは知ってる。体だって骸骨みたいだし…

同級生が私の容姿の事でイジメた事はお兄ちゃんだつて知つて
でしょ？

なのに…鏡を向けるなんて酷い！」

私は兄にハツ当たりをしてしまつた。情けない…

「大丈夫、由子は可愛いよ…。」

お兄ちゃんは思つてもない事を口にした。

「ほら、鏡を見て御覧？お前は絶対に可愛いよ。」

甘く優しい声で私にもい一度鏡を向ける…嫌、嫌だ！自分の顔な
んて見たくない！！

「嫌あ――――！」

私は思わずお兄ちゃんを突き飛ばし家を飛び出した…

久しぶりに家を出た。こんな形で…

あの優しいお兄ちゃんが私が嫌がる事をしたなんて初めてだつた。

私は行く宛てもなく夜道を彷徨つた。

お金も持つて出なかつたし、仕方なく近所の公園のベンチに座つ
た。

私がボーッとベンチに座つていると、通りかかる人たちが私を見
てヒソヒソ何か言つている。

男の人なんて、ゆっくり前を通りチラチラ見ている。

私の顔はそんなに酷いの？私は見世物じゃない！！

私は死にたくなつた…いつそ電車にでも飛び込んでみようか…

「由子――！」

ビックリして振り返つた。

お兄ちゃんは息を切らせいる、どうやら私を探していたらしい。

「ごめん由子、お前がそんなに鏡が嫌いだなんて…」

私は少し考えて…

「お兄ちゃん、私はごめん。お兄ちゃん優しいから…ハツ当た

り??」

お兄ちゃんは苦笑いしながら私を抱き寄せた。

「馬鹿、ビッククリせんなんよ…心配するだろ？！」

「うん、『ごめんお兄ちゃん…』」

「俺のお姫様は馬鹿さんだなあ…こんな夜中に女の子一人で歩くなんて…」

「大丈夫だよ…私を襲う人なんて居ないから。」

「馬鹿由子！！！」

「ゴチン！…私は久しぶりのゲンコツ」という奴を味わった…

兄の腕に絡みつき私は家に帰った。玄関には両親が揃つて待っていた。

「馬鹿由子！」

またしてもゲンコツを食らってしまった。

久しぶり過ぎて嬉しかった。私は思わず泣いてしまった。

そんな私を見て

「うわっ強く叩きすぎたか？」

つと慌てる両親、そんな私を抱きしめて、

「シーツ」

つと指を立てるお兄ちゃん。

私と家族の距離は兄によつて一瞬で縮まつた。

私が落ち着くのを待つて、

「由子、そんなに鏡が嫌いなの？」

つとお兄ちゃんが聞いてきた。

「ううん、鏡に映つた自分を見るのが嫌なの。」

「そつか…」

「ごめんね、私もう落ち着いたし、お兄ちゃんも帰国したばかりで疲れたでしょ？」

「私、部屋に戻るね？」

「うん、お休み由子。」

お兄ちゃんは私の頭を撫でてくれた

私が部屋から出ようとした時、チカツと何かが光った様な気がした。

「えつな何?」

つとお兄ちゃんに聞いたけど、

「ん?どうかしたか?」

つと聞き返してきた。多分私の気のせいだろう。

いや、気のせいではなかつた。

お兄ちゃんは私の顔を携帯のカメラで一瞬の隙に撮っていた。

この一枚の写真が後の私の人生を大きく変えようとは…

第一章

お兄ちゃんは帰国して間もなく忙しく毎日を送っている。

私は相変わらず引き籠る毎日。

私とお兄ちゃんが会えるのは3～4日に一回位。正直寂しい。だからお兄ちゃんが家に帰ってきた時は何時も纏わりついた。お兄ちゃんは疲れていても、私を煙たがつたりしなかつた。

お兄ちゃんは私と一緒に居る時、よく私の顔を撫でてくれた。私はただ可愛がってくれていると思つていただけ…

ある日の夜、お兄ちゃんは大事な箱を持ってきて…

「由子、ちょっと仕事の練習させてくれない？」

つとつと言つてきた。

「うん、別に良いよ？」

つとつと、田を開じ顔を預けた。

私の醜い顔でお兄ちゃんの役に立つなら嬉しかった。

私でもお兄ちゃんの為に何か出来るんだ…！

私はびっくりと田を開じたまま、お兄ちゃんの立てる音を聞いていた。お兄ちゃんは何かゴソゴソ取り出しては私の顔に何か塗つている。何やら良い香りだなあ。

薄眼を開けてお兄ちゃんを見てみた。何時になく真剣な表情…

「あっ由子！まだ開けちゃ駄目…！」

「えへつじめん。」

お兄ちゃんと居る時間は私にとって癒しの時間だった。

暫くすると、お兄ちゃんはフインキをだす為つと言つて、ボーリッシュュな服を持ってきた。

「由子、一回これに着替えてくれない?」

「?/?、わかった。」

私は素直に差し出された洋服を持って自分の部屋へ向かった。よくよく見ると、ボーグ・シコットというより男物の服だった。きつと次の担当の役者さんは男の人なんだ…。つと氣にも留めずに着がえた。

「お兄ちゃん、これでいい?」

「おー、由子。見違えた!」

「当たり前だよ、これ男物の服じゃない。」

「実はね…次の仕事で担当になるのKJなんだよー。」

「へー、そうなんだ。」

私はKJと聞いても、ふーんとしか思わないが、KJという

のは今、一番人気のアイドル集団だ。

私は現実の男に興味は無いから顔は忘れたけど、すげく美形の集団らしく、

歌、バラエティー、ドラマ…まあ、マルチな活躍をしている人達つというのは知っている。

最近は海外進出も果たした世界的にも有名になりつつある…らしこれど。

「おーい由子、お前…女の子なら泣いて喜ぶ所だぞ?」

お兄ちゃんの反応は当然で、関心がない私の方が女として違つている。

自分の兄がKJの担当なんて普通の女の子なり、

(写真が欲しいー、サイン貰つてきてー、仕事場連れて行けー)

つてなるだろうけど…

「でも、私、興味無いし…」

「ふーん、そつか。勿体ない。」

だつて、お兄ちゃん以外の男なんて怖いに決まつてゐるし。

テレビでいくらアイドルやってても、本当は怖い生き物な筈だ。

私はそういう男を沢山見てきた。

私だつて最初からイジメられていた訳じやない。
顔や体系はつじつま合わせ。

本当の原因はアイドル的存在のクラスメイトに恋をしてしまった
から。

彼はクラスで一番女子から人氣があつた。
甘いマスクに優しい口調。皆から好かれていた。私も当然の様に
恋をした。

恋をすれば気持ちを伝えたくなる。私は玉碎覚悟で手紙を書いた。
(放課後、教室で話したい事があります。)

私は短い文章の中に、有りつ丈の勇気を詰め込んで彼の机の中に
入れた。

放課後、彼は来なかつた。代わりにクラスの女子が来た。
後は絵に書いたような場面。

「ブスの癖に告白なんてしてんじゃねーよ…」

「ブスは黙つて見てろよ…！」

「嫌、ブスはイケメン見ちゃダメでしょ？綺麗な物みると死んじ
やうよ？」

私だつて負けずに、

「なんで皆で来るの？今、人を待つてるからどつか行つて！」

精一杯言い返してみたけど…

「今日、私たち以外来ないよー。だつて本人から聞いたんだし！」

「彼、お前みたいなブスが手紙よこしたつて気持ち悪がつてたじ。

「いい迷惑なんだよ！このブス…！」

一人の女の子が私の腰の辺りを蹴飛ばしてきた。

私は倒れこむ拍子に、額の辺りを机の角にぶつけてしまつた。額
から血が出る…

「うわー、汚ったねー。」

「こいつ、血なんか出して、教室汚すなよー。」

私は、痛いし悔しいし…ただ泣くしか出来なくて…
女の子たちにも腹が立つたけど、手紙を出した事を喋った男の子
にも腹が立つた。

あの優しい顔の裏に、あんな事を平氣である顔が隠れていたなんて…ショックだった。

私は次の日から学校へ行く事が出来なかつた。

私は昔の嫌な事を思い出して少し涙が出てきた…

「あー由子！お兄ちゃんが折角メイクしたのに…もう一回やり直し。」

「ああ、『ごめん。お願ひします。』

お兄ちゃんは練習メイクを再び始めた。

お兄ちゃんは30分程私の顔をいじくり回し、髪の毛もセッティした。

「よし!完ペッキだ!我ながら良い仕上がりだ!」

「えつ本当?お役に立てて光栄です。」

「こちらこそとても助かりました。」

お互に頭を下げて笑い合つた。

「お兄ちゃん、もうメイク落としてもいい??」

私は慣れない化粧で顔が重くて重くて…早く顔を洗いたかった。

「うん、良いけど…最後にもう一回確認したいから真っすぐ立て。」

私は言われた通り立ちあがつた。

「はい、そのまま目を閉じて…」

私はゆっくり目を閉じた。

何だた急に目の前が明るくなつたと思つたが特に気にしなかつた。

「はい、有難う。顔洗つてきでいいよ。」

「はーい。じゃあ行つてくる。」

私は急いで顔を洗いに走つた。

その頃お兄ちゃんは、携帯を力チャカチャ弄つていた。

「悪いな由子…。」

私は顔を洗い終えるとお兄ちゃんの部屋へ戻つた。

「おにいちゃん、おまたせー。」

「おー、素ツピン由子ちゃん。そのままでも可愛いね。」

「お兄ちゃんつて優しいのか意地悪なのか解んないよ…。」

「ははは、ごめん。それより俺の携帯の待ち受け画面、見て見てー！」

お兄ちゃんは私に携帯を手渡した。私はその画面を覗き込む。

携帯の画面には美少年が映つていた。中性的な美少年だ。

白い肌、ピンクの脣。少し癖のある長めの黒髪。鼻筋も通つてい
て…

その美少年は、どこかお兄ちゃんに似ている感じだつた。

「うわー、可愛い男の子、お兄ちゃんがメイクした人？モーテルさ
ん？」

「そう、俺がメイクした中で一番の自信作…」

「ふーん、羨ましいな、私もこんな綺麗な顔に生まれたかった…」

「羨ましいか？」

「うん、私だつてお兄ちゃんとか、この子みたいに顔の良い人間
に生まれたかつたよ。」

「……生まれてみる？」

「……はつ？」

「いや…だから生まれてみる？」

「いつ言つてる意味が…」

「この写真の子、お前だよ由子。」

「へ？仰つている意味が…」

私が意味不明な顔をしていると、お兄ちゃんが私の顔を掴み、こう言つた。

「「」の写真の男の子は由子だよ。俺がメイクした由子。よく見てみて。服とか風景とか…」

確かに男の子が来ている服は今私が着ている洋服。背景もお兄ちゃんの部屋。

「いや…これはお兄ちゃんの悪戯に違いない。

「お兄ちゃん、こんな手の込んだ悪戯して面白い?」

私が言い放つと、お兄ちゃんは急に真剣な顔をして言つた。

「本当に由子の写真だよ。疑つなら男の子の耳の部分を見て御覧?

「耳…う…。あ…！」

写真の男の子の耳にハートのホクロがある。私の耳にあるホクロと一緒に緒だ…

「うわ、これ本当に私なの?嘘みたい…」

私は不思議な感覚に襲われ、暫く現実に戻れなかつた。

現実逃避している私に、お兄ちゃんはいきなり土下座を始めた…

「「」めん由子!実はお前にしか頼めないお願いがある…」

「へつ何?」

「俺が帰国した日、お前にマイクただろ?」

「うん、そういうえば…」

「俺、あの時のお前の仕上がりが自分でもビックリするぐらい綺麗で…」

「うつうふ。」

「俺、お前に見せたかったけど、お前は飛び出しちゃうからさ。」

「あの時は心配掛けました。」

「んで、お前を連れ戻した後、こつそり写真を撮つちやつて…しかも待ち受けにして持ち歩いてたんだ。」

それを担当の事務所の社長に見られちゃつて…。それで、社長

に写真の事聞かれて…

俺、咄嗟に自分の弟だつて嘘つこちやつた。」

「ふーん、ちょっと恥ずかしいけど。マイクした[写真ならいいや。思]い出になつたし!」

「いや……話しあそれじや終わらなくて……実は……」

お兄ちゃんは何か口ごもつて話しこへそりだ……そして意を決した様に話しあした。

「お前をKの新メンバーにしたいから必ず連れてこいつて!」

そう言つとお兄ちゃんは深々と頭を下げた。

「おつ お兄ちゃん、今…なんと?」

「いやね、社長が言つには、ＫＪの新メンバーオーディションがあるらしいんだけど、

書類選考の時点でパツするものが居ないらしくってさ。

そんな時に俺の携帯の写真みて、一目で気に入ったって。

いや…気に入られても…私も一応女な訳で。ちょっと複雑。

「でもお兄ちゃん、私女だよ?」

「分かってるよ。なんかＫＪの中に中性的な美少年を加入させたかつたって。

由子はイメージにピッタリ合つてや。」

「でも、私…外つて怖いし。まして芸能人の人の中に混じるなんて論外だよ。

人間怖いのに…顔の良い人間はもつと怖い。」

私の顔から血の気が引いていく。きっと間違いなく怖い思いをする…

…

「…由子、由子は毎日家に居て楽しい?

昼間もカーーテン閉めて一日中パソコン弄つて漫画読んで…」

「いいじゃん、好きなんだもん。漫画もパソコンも…

それに入間怖いし…。」

お兄ちゃんは真剣な顔で恐ろしい事を言った…

「お前は一生閉じこもつたまん生きていいくのか?」

親だつて何時までも居る訳じゃない。年も取つていくし。

もし明日家族が急に事故で死んで収入が無くなつたら?

閉じこもつたまんまでお前は生活できるのか?金は?食料は?

病気になつたら?

確かにお兄ちゃんの言つ事も分かる。

人間に明日の確証なんてない。明日は誰にも分からぬ。
考えたくないけど、もし明日家族全員が死んでしまったら？私は
どうやって生きていくのか…

閉じこもつてからの生活費は全部両親が払ってくれている。寝る
所も住む所も両親の物だ。

きっと私は…仕事もしないで貯金全部使い果して…毎日泣いて…
間違いなく飢えて死ぬ。

そんな事考えた事も無かつたけど…実際に起こらない確証もない。

「わっ私…皆に迷惑掛けてたんだね…。」

私は自分が情けなくて…でも外に出て行くのが怖くて…

自分でも思い通りにならない感情が涙になつて…溢れて止まらない。

お兄ちゃんは私の方をそつと抱きしめてくれた。

「由子、お前だって分かつてたんだろう？皆に迷惑かけてた事。
でも俺たちは迷惑だとは思つていなかつたよ。ただ由子が心配
なんだよ？」

俺たち人間は明日の保障が無いから今を精一杯生きてるんだよ。
もう由子にも人生を無駄に過ぎ去して欲しくは無いんだ…。」

「お兄ちゃん…」

「まあ、男装して芸能人は行き過ぎだと俺も思つたけどね…！
社長には明日にでも断りを入れておくけど…由子。」

「なあに？」

「お前が出来る範囲から始めよう。俺と一緒に。俺も一生懸命由
子を支えていくから…」

「お兄ちゃん…」

お兄ちゃんは私の背中に回していく腕を解いて…私の頭の天辺を
ポンポンって。

そして優しく頭に唇を押しつけてきた…親が子供にする様に…
私は心底安心して…なんだか元気が出てきた。

「よし、由子。少しでいいから。少しずつ俺と頑張りつな……」

お兄ちゃんは素敵な笑顔で私を見つめてくれた。

お兄ちゃんって世界一カッコいい……本当にそう思ひ。

翌朝、朝食を食べにリビングへ向かった。久しぶりに皆で食べた
くて…

「おつお早う。」

私はドキドキしながら家族に挨拶した。

「おつおはよう由子。」

「つ今日は…早いな…」

両親とも言葉が上手く喋れてないし…でも、顔は二三三三してい
た。嬉しそうだった。

私はチョットの勇気で両親を笑顔に出来た事が嬉しかった。

お兄ちゃんの顔を見てみた。チラシと顔を見せて、目が合つたら

ウインクしてくれた。

頑張るつていいな…

私は朝食を食べ終えると自分の部屋の窓を久しぶりに開けてみた。
風が顔の横を気持ちよく過ぎていく。揺れるカーテン。ほんのり
太陽の香り…気持ちいい。

私はこんなに気持ちのいい事を何でしなかつた、深く後悔した。

…色々後悔した。

イジメにあつてた時、もうちょっと頑張つてみても良かつたかな?
仕返ししてやれば良かつたかな?

せめて両親に相談して早く解決していたら?

一人で寮にでも入つて生活を一新させる事も出来た。

色々後悔して、思い出して悔しくもなつてきた。段々腹が立つて
きた。ムカついてきた…

何で？私は何一つ悪い事をしていらないのに！

私は被害者なんだ！なんで私が田に当たらぬ生活をしなくちゃいけないんだ！！

本当に腹が立つて、イライラしてきて… もう爆発しちゃいたくて
…叫んだ。

「ムカつく——! ちくしょ——! お前ら! 何時か見返してやる——覚えてるよ——!」

息が切れるほど叫んだ。ちょっと喉から血の味もする。
びっくりしたお兄ちゃんと両親が部屋に飛び込んできた。

「なつどうした？強盗か？」

「どうしたー！」

慌てた三人の顔は久しく見ていなかつた真顔で…
私は叫んでスッキリしたのもあるけど、爆笑してしまつた。
可笑しくて可笑しくて…笑いと涙が同時に出了。
不思議な位気分もスッキリしている。すごく爽快な気分だつた。

私は決めた。

「お兄ちゃん……」

「へ? どうした?」

「……私は、お兄ちゃんの提案……せいであるが、」

「アリの事。私が頑張つて見るが。

「えっあつマジ?」

「まーじい——！」

お兄ちゃんは凄く驚いた表情をしたけど、私の表情を見て
「そんな由子の顔…久しぶりに見た。…分かった。社長に話して

おぐ。」

「うん、お願いします。」

私はいつそのこと、大きな力ケに出てみよつと思つた。
私の事をブスだのキモイだの言つた人間たち。
ひと泡吹かせるのは私が有名になるのが一番手つとり早い。
それに芸能人ならお給料も沢山貰えるだろつし…皆に恩返しも出
来るかも…

ならば昨日の話はチャンスでは?つと思つた次第で。

夜、お兄ちゃんの帰宅を待つて駆け寄つた。

「お兄ちゃん…どうだつた?」

「うん、いやね…」

何か言いにくそうなお兄ちゃん。

「お兄ちゃん、何があつたの?もしかして駄目だつた?」

「いや、駄目つて事は無いんだけど…あのさ、なんだか社長は快
諾してくれたんだけど…

メンバーがね…一人だけ特別扱いなんて出来ないって。

書類選考はいいからオーディションには参加させりつて。」

「オーディションかあ…ってマジ?」

「うん大マジです。」

お兄ちゃんは氣まずそうに頭を伏せた。

「私なんて…コネがなくちゃ無理じやん…そつか…」

「いや、まだ落ちるとは決まつてないしねつねつ。一緒に頑張ろ

う…」

「うん…まあ無理だけどね…」

私は持ち前の?ネガティブを存分に發揮して落ち込んだ。
世の中、そんなに甘くないよなー。

引き籠りから一夜でシンデレラ…なんて起つる筈ないよな…は
あ。

「よつ由ナ一。」

お兄ちゃんは落ち込んでいる私を見て焦つている…。お兄ちゃんが悪い訳じゃないのに。

「お兄ちゃん…」

「へつどうした?」

「私…駄目もとでチャレンジしてみよつかな?」

「よつ由子ちゃん…良く言つた!!」

「うん、駄目でも私にはいい経験になる筈だし!頑張つて見るー!お兄ちゃんはギューッと抱きしめて、何時もの様に頭をポンポンつじ。

「お兄ちゃん…」

「由子は偉い!頑張り屋さんだー!あつと由子なら合格できるよ。それに…」

お兄ちゃんは何かを言いかけて…自分の鞄から何かを取りだしてきた。

「…お兄ちゃん、それ何?」

「これはなあ…由子ちゃん!プレゼント…Kのアバと写真集ヒドリマ全集!!!」

物凄い量を取りだしてきた。出るは出るは…

「戦いに勝つ為には、マズ敵を知る事!これはその一部です。」

お兄ちゃんは急に先生口調になり、私の目の前に本やらの口を並べ始めた。

「ちよつこれで一部なの?」

「はい、これは一部です。先生も全部は持てませんので厳選致しました。

「これからは私の言つとおり頑張つて進んでこまよ!」

「ふふっハイ!分かりました先生!」

「よし、偉い偉い!じゃあ…」褒美です。」

お兄ちゃんは私の頬にブチューっと唇を押しつけてきた。これには流石に私も動搖してしまつ…

「ひあー。おっお兄ちゃん?」

「あははっ由子は可愛いなあ!」

「もう、お兄ちゃんことひで由子は何時までも子供なんだね!い

いもん!フン!」

私は照れ臭い顔が隠せなくて…わざと怒った振りをした…

「あー、由子には演技指導も必要かなあ…?」

お兄ちゃんは突然考え込んでしまつ…何処まで本気なんだかあ?

私がお兄さんに貰ったKの資料を両手いっぱいに抱えて自分の部屋に帰った。

第四章

私はお兄ちゃんに貰つた資料を一つ一つ確認してみた。

まず「写真集」…メンバーの個別の写真集3冊と全員の写真集。

まず、リーダーKOJIIの写真集を開いてみた。

……うわあ、凄くいい男…。

一見冷たそうな眼差し、その中に潤んだ瞳…キラキラしてる。目鼻立ちはハツキリしている、彫りも深い。少し日本人離れしている。

何故か人を寄せ付けない…少し怖い感じの人。

次にJ E Yの写真集を開いてみた。

……うわあ…綺麗な男の人…。

思わずため息が出る綺麗な顔。でもちゃんと男のセクシーさも兼ね備えている。

写真集も何処か神秘的な感じのショットが多い。

次にKAJIの写真集を開く。

……うへー、たくましい体…。

写真集の半分は半裸。筋肉を前面に押し出す仕上がりだった。でもただの筋肉馬鹿つて感じじゃなくて、表情は優しい…頼れるお兄さんの感じだった。

取り合えず全員の写真を見て感じた事は、ちゃんと役割分担がされているなあ…って。

同じ個性のメンバーは居ないし、それぞれの個性が前面に押し出されている。

たしかに中性的な男の人は居ない…だから私に話が来たのか…

続いてCDを聞いてみた。

合計10枚ものアルバムを貰つたけど、全部を聞いてる時間は無いし…

取り合えず一番最初のアルバムと、最新のアルバムを聞いてみた。

最初のアルバムは…なんだか一曲一曲が丁寧な造りで、なんだか切ない。

どの曲を聞いても涙が出そうな…

男嫌いの私の心にスーっと染みてくるような悲しい歌声…
一体誰が歌っているんだろう…

CDジャケットを広げてみる。

ボーカルはKOJII、ベースはJEWY、ドラムはKAJI…まあ、予想通りだつた。

でも、あんな怖そうな人がこんな綺麗な声をしているなんて…

続いて最新のCDを聞いてみた。

やはりどの曲も丁寧な旋律が流れしていく…
でも何だか心に染みてくるような曲は無かつた。少し残念。

最後に本を読んでみた。まあ本と言つても雑誌のインタビューとかテレビで話した事とかの編集版。

KOJIIは23歳、JEWYは26歳、KAJIは25歳。

元は同じ雑誌で活躍するモデル。

あまりに人気があり過ぎて、社長が調子に乗つて他の活動をさせたら…爆発的大ヒット!
元から歌唱力があつたのと、演技もこなせる実力が相まって名メディアから仕事が殺到。

今や幼い女の子からお年寄りまで知るスーパー・マルチタレントにのし上がつたらしい。

この人達…凄いなあ…大変な苦労があつたんだろうなあ…

いや、男なんて皆一緒に決まってる！

表向きは良くて、裏ではきっと私みたいな人間をあざ笑うんだ…

まあ、オーディションすら通つてない私がこんな事考えても仕方ないけど…

私がオーディションに通つた暁にはキッチリ利用させて頂きます

！！

オーディション当日、私は朝から兄に付きつきりでメイクして貰つた。

朝起きた時の冴えないやつれ顔は何時しか美少年へと変わつていく…

今日でメイクは三回目だけど、やっぱり顔が重い気がする…

他の女の人々は毎日メイクをして大変だつたんだなあ…私ももう少し努力すればよかつたかな？

「よし、俺の可愛い王子様…完成！！」

私に向けて鏡を差し出すお兄ちゃん…私はまだ鏡を見るのが怖かつた。

躊躇している私にお兄ちゃんは優しく頭を撫でてくれる…

私は意を決して鏡を手に取つた…

鏡の中には、見た事も無いような美少年がビックリした表情で映つていた。

「お兄ちゃん…」

「どうした？由子。」

「お兄ちゃんつて詐欺師だよね。」

「はい？俺が詐欺師？」

「うん、これは詐欺の領域でしょう…」

「あはは、確かに。お前は王子様じゃなくて王女様だからね。おれは詐欺師じやなくて、魔法使いのお兄さんなの！」

「あは、何それ？」

「もういいから！そろそろ出発するぞ…」

「はーい！了解です。魔法使いのお兄さん！」

本当、お兄ちゃんは私に魔法をかけてくれたんだね…

オーディションはKJの事務所の一室で行われた…。

私は会場に着くまでに汗ダク…。

だつて電車に揺られるなんて何年振りか…

物凄く怖くて…でも今日はお兄ちゃんが居てくれたから。私が怖くて動けなくなつても、お兄ちゃんは私の表情を見て手を握つてくれたり肩を支えてくれたり。

お兄ちゃんのお陰で私は会場まで辿り着く事が出来た。

KJの事務所は大きなビルだった。KJの事務所は芸能事務所だけでなく雑誌なども出版している。

同じ会社だが複合ビルみたいな感じだった。

芸能事務所はビルの最上階だった。

お兄ちゃんは事務所の人と話があるからつて、私は控室に一人で行く事になった。

大丈夫！誰とも目を合わせないで下を向いて、お兄ちゃんが来るのを待つていよう。

私は一人で控室に向かった。

廊下にはKJの大きなポスターが貼つてある。デカイ顔だなあ…毛孔まで見えそうな大きなポスター…男の人なのにお肌スベスベだ…女としてムカつく。

私が眼をつけながらポスターを睨んでいる後ろで、何やら音がした…。

次の瞬間に…ボカツつと頭に衝撃が走る…

「痛ーーイ！！」

何が私の頭にぶつかってきた…私が後ろを振り向くと…

「お前、なに眼たれてんの？」

つて頭の上から誰かが喋りかけてきた。

私は頭が痛いのなんか忘れて…硬直してしまった…

立っていたのは少し幼さも残る美少年…

大きな瞳にうつすら日焼けした肌…

「お前、これからオーディション受けるなら、メンバーの写真に
眼たれるなんて止めた方がいいぞ。」

……おーーい！き・い・て・ま・す・かあー？

私は久しぶりに生の若い男と目が合つて…体が強張つて動けなく
なつた。

どうしよう、どうしよう…お兄ちゃん…怖い！！！助けてお兄ち
やん！！

私の体から血の氣が失せ…私は倒れそうになつた…。

フラつく足元…とにかく此処から逃げ出そう…

私は転びそうな足を引きずつて逃げるように事務所から出てトイ
レに駆け込んだ…

「怖い…怖い…怖い…。」

私の頭の中は恐怖で一杯になつてトイレから出れなくなつてしま
つた。

トイレに閉じこもつて10分位経つて、私の携帯が鳴つた。

「はい…。」

私は携帯に出た。お兄ちゃんからだつた。

「由子…今何処に居る？」

「…トイレ。」

「はあ？もうすぐオーディション始まるぞー。」

「分かつた。今行く…。」

私は嫌嫌トイレを出た。

控室の前にお兄ちゃんが立つていた。

「馬鹿由ー心配させるなー！」

「『ごめんなさい…』」

「…つ良かつた…」

お兄ちゃんは心配して私を探しまわっていたらしい。『ごめんねお

兄ちゃん。

お兄ちゃんに簡単なメイク直しを施され会場に向かつた。

会場には15人位の綺麗な美少年が椅子に座つていた。
正面には会社の人達らしいオジサンたち…メンバーは参加していない様だった。

良かった…あの綺麗な瞳に見られると…固まる自信があつた。

私は一番端の椅子に腰かけた。

一人一人自己PRを始めた。

歌を歌う者、ダンスを踊る者、芝居を始める者…いろんな個性が飛び出した。

審査を終えた人は会場から次々に出ていく。

…審査も終盤、さつき私の頭を叩いたアイツの順番になつた。

「14番、雪。年は18歳です。宜しくお願ひします。」

彼は深々と会釈をしてから演技を始めた。

サッカーのリフティングだった。

延々とリフティングが続く中、彼はKの一番のヒット曲を歌い

始めた…

彼の綺麗で元気な歌声は運動しながらとは思えない安定した音量
だつた。

審査員は全員息をのむ…私もそんな歌声に心を奪われる…

「有難うございました。」

彼の演技が終了した。なんだかあつという間に感じた。

彼が会場から出していく瞬間、私は彼と目があつた…

「が・ん・ば・れ」

彼は口パクでそう言つてくれたけど…私は顔を背けてしました。

「最後の人ー、えー由君かな？では初めて下さい。」

「あつハイ！…」

私は昨日まで一生懸命練習した曲を熱唱した。
元々低めの声だったし、少年イメージなら多少女っぽい印象も悪くないからって。

お兄ちゃんのアドバイス通りに歌つた。精一杯歌つた。

会場に若い男の人が居なかつた所為か、自分でも上手に歌えた。

「はい、お疲れ様です。後ほど結果を発表しますので控室でお待ち下さい。」

「はい、有難う御座いました。」

私は控室に戻つた…

お兄ちゃんは控室で待つてくれた。

私はお兄ちゃんの胸に飛び込んだかった…が、周りの田もあるので我慢した。

30分程待つていると一人の中年の男性が控室に入つてきた。

「お待たせいたしました。結果を発表いたします。」

呼ばれた方は別室にて説明がありますので部屋を移動してください。まず番号1番の方…」

次々に番号が呼ばれる…一番から順に13番まで。もしかして全員合格なの？

「13番の方…以上です。お疲れ様です。」

…えつ、落ちたの一人だけ？まじっすか…

悲しいというより恥ずかしい！早く帰りたい…！

私が荷物を纏めている間に、呼ばれた人達はワイワイしながら部屋を出て行つた。

いきなり静まり返る部屋…聞こえるのは私の声と…男の鳴き声？

「うう…くそ…」

ボソボソ聞こえてくる呟き…声の方に視線を向ける。彼だ。雪だ

つた。

雪は荷物を乱暴に鞄に押し込んでいる。自分の悔しさをも詰め込んでいる様だった。

私は雪の綺麗な涙に見惚れてしまつた……なんて純粋な涙なんだろう。

私が雪に見惚れている時、お兄ちゃんは私の横で複雑な表情をしていた……

その時、咳ばらいが聞こえた……

「ゴホンッ。お忙しい所失礼します。」

私と雪が振り返つて見ると、さつき控室に結果報告をしにきた中年男性が話しかけていた。

「お二人とも、おめでとうござります。」

「はっはい？」

「お二人はK」の新メンバーに選ばれました。」

……。

「えつ？ぼつ僕たちは落選したんじや……」

雪が男性に尋ねた。

「お二人は最終選考を行うことなく、全員の意見が一致して選ばれました。」

「えつうつ嘘…マジ？」

「はい、本当です。おめでとうござります。」

「でも、僕たちは番号も呼ばれなかつたし、他の方たちも自分たちが残つたつて……」

「はい、このまま帰すのは惜しい人材も居ましたので、いっそ他にもユニットを作つてしまおうかと。」

……。

私達が現実を理解するには少し時間が必要で……また現実に戻るのもキツカケが必要だった。

そのキツカケはお兄ちゃんがくれた。

「おめでとうー！由ー！」

お兄ちゃんは私の頭を優しく叩く…ポンポンって。何時もの感覚に私は現実に戻つて実感した。

私は芸能人になつた…うわあ…引き籠りからアイドルなんて！体中の血液が沸騰しそうになった。口の中の水分が一気に蒸発する…。

足も痙攣してきた…腰なんて今にも抜けそうだ…

私はお兄ちゃんにもたれ掛け何とか立つていた。

一方雪はまだ夢の中に居るようだつた…。

そんな雪を見て私は可笑しくて…

そんな時、控室のドアが開いた。

まるで後光が射しているような光の中、彼らは現れた。

部屋の中に入ってきたのはKJのメンバーだった。第一声はKAJIだつた。

第一回

「んにゃ、KJたよ、宣ぐね！」

テンションMAXのKAJIに空かれた

「…………おいKAJII、男相手だぞ？」

別にいいじゃん。第一印象は大切だよ？」

そんな二人を

私たちは呆氣ことられて茫然と眺める

「おお――！！本物だ！！

つと興奮の雪を尻日に私は硬直。

(うわつ 生の美男子…嫌！怖い！)

和懷仲

卷之三

卷之三

「アカウントの登録」

兄の仕事名を叫んで食いついたのはＫＡＪＩさん。

「はい、実はここに居る由は私の弟でして……」

「えつ本当に？」

「はい、宜しくお願ひします。」

「へー、そうなんだあ。由君、これからも宜しくね！」

硬直している私の手を取り、パンパン上下に振りまわす。

文前

「ほい僕は雪と話します。宜しくお願ひします。」

空かさず雪も自己紹介をする。

「ああ、宜しく。」

「……宜しく。」

「宜しくねー！」

メンバーが挨拶を返す。

そんな中中年のおじさんが、

「色々打ち合わせる事がありますので、一回場所を移しましょう。

」

つと切り出し、私たちは控室を後にした。

場所を会議室に移し私たちはミーティングに入った。

私は始終拳動不審だつたけど、空かさずお兄ちゃんのフォローがあつた。

色々と話をする中、メンバーの特性が見えてくる。

良く喋るし、兄キ的印象と違いお調子者のＫＡＪＩ。

何かとクール。ずっと女性の話に持つていこうとするＪＥＹ。

始終寡黙なＫＯＵＪＩ。

そのままと言えばそなただけど。

司会進行は中年の男の人。

「私はマネージャーの高田と言います。宜しく。

君たち二人は今日からＫＪのメンバーになります。

まず初めに、一人にはココにサインしていただきます。

差し出されたのは数枚の契約書。

内容は…勤務体制の事。収入の事…色々な注意事項が書かれている。

最後の一枚に…

(メンバー内の秘密は絶対に厳守)

メンバーの秘密って何だらう?

「あつあの…。」

私は意を決して質問してみた。

「この秘密厳守っていうのは…」

メンバーが一斉に私を見た。ひい！恐ろしい！！

「あつそれは追々分かりますので、取り合えずサインしちゃって下さい。」

「はつはい！…」

お兄ちゃんは私の契約書をチョックしようと手を伸ばしてきただけで、

何だか今すぐ書がなくちゃいけない不陰気に飲まれ、私は急いで契約書にサインした。

「はい、これでお一人は正式にKのメンバーになりました。

皆でKを盛り上げて行きましょう！」

「はつはい！」

田中さんの勢いに押され、私も景気よく返事をする。

「ひやっひやい！」

雪は噛みながら返事をした。

「今日は顔合わせ程度でお終いになりますが、明日からは忙しくなりますので覚悟して下さい。」

田中さんの優しくも裏のある口調は私の緊張を更に高める…
私が冷や汗を流していると…私の手を優しく握ってくれたのはお兄ちゃんだった。

「落ち着いて…大丈夫。」

口パクで私に合図を送る。私はお兄ちゃんの顔を見て冷静を取り戻す。

私とお兄ちゃんは真つすぐ家に帰った。

私は家に着くなりベッドに倒れこんだ。

久しぶりの外出に加え、絶世の美少年に囲まれた一日。地獄の様な日だった。

私はすぐ眠りに落ちた…

眠っている時も今日一日の夢を見た。

久しぶりの生男。美男子のアップやスキンシップ。

シンデレラストーリを歩むであるひ自分の気持ちの高ぶり…

私は魔されていた…

全身を流れる汗…握りしめた手…

隣の部屋のお兄ちゃんが私の異変に気づいて駆け付けた…

「…由ー由子ー大丈夫かー?」

お兄ちゃんは寝ている私の体を揺する…でも私は夢から覚めない。夢の中では鋭くセクシーな瞳が私を見つめている…

私の体は益々強張り…でも私は夢から覚める事が出来ない…

…。

「由子ー由子ー」

お兄ちゃんが優しく私を抱き起します。

「うつうん…怖い…」

私は夢の中の瞳から逃げようとした夢の中で走り続ける。私の呼吸も乱れる。

「はつはつはつ…はつ…はつ…」

私の呼吸が一瞬止まる。

「よつ由子ー!?

苦しそうな私を見て、お兄ちゃんの顔色が曇る…

「助けて…お…兄…ちゃん…」

私は苦しくて怖くて…

…。

…次の瞬間、私の中に温かい空気が入ってきた。なんだか気持よくて、温かくて。

私はやつと目を覚ます事が出来た。

私が目を開けると…お兄ちゃんの顔がすぐ近くにあった。なんだか唇が熱くて感じる…

お兄ちゃんは私が目を覚ましたのに気が付かないらしく、横を向いて呼吸を整えている。そして…
お兄ちゃんの顔がもう一度近づいて来る。

お兄ちゃんの綺麗な唇が私の唇にそっと触れた。

お兄ちゃんは私に空気を送り込んでくる。

私はボートとした頭で考えた。

「ん？ なんでお兄ちゃんは…

お兄ちゃん、私に何してるんだら？…

私は送り込まれた空気に嘘せかえる。

「「ほつ」」ほつおつお兄ちゃん？」

私はようやく言葉を喋る…

「よつ由子…はあ…、良かつたあ…。」

お兄ちゃんは私をキツく抱きしめた。

お兄ちゃんは暫く私を離そうとしなかった…
顔は青白く体も小刻みに震えて…可哀そうに。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

私はお兄ちゃんがどうにかなつちやつたかと思つて…

「ううん、もう大丈夫。」

お兄ちゃんは震えた声で答える。

ぎゅーっ…お兄ちゃんの腕の力が強くなる…

「お兄ちゃん…どうしたの？」

お兄ちゃん…何があつたのかな？

「何でもないよ…」

お兄ちゃんは甘い声で私の耳元に囁いた…

お兄ちゃんは私を抱きしめたまま…

頬に…首筋に…唇を落としていく…

私はお兄ちゃんを抱きしめ返し…暫く一人で抱き合つた。

私は体の奥に疼くような感覚を覚えた…

第六章

昨日の夜の事、あんまり覚えていないけど…
一体私たち兄弟に何があつたのかな…

朝が来た。

私は重い体をベットから起こす。

隣にはお兄ちゃんが座りながら眠っていた。

私はお兄ちゃんを起こさない様に顔を洗いに行く…

部屋に戻ると、お兄ちゃんは自分の部屋に戻っていた。
どうやら私が起きるのを待っていたみたい。

私は身支度を済ませ朝食を食べに下の階へ降りる。

私達は朝食を済ませ、お兄ちゃんにメイクをしてもらひて、一緒に家を出た。

今日も電車で事務所に向かった。

やつぱり電車は苦手だ…満員の電車は男の人気が近くに居るから…

私が事務所に着くと、ド派手な衣装の雪が待っていた。

「おう、おはよう!」

「おつおつおはよう…」

私は声を振り絞つて挨拶をする。

(由子…お兄ちゃんは仕事があるから今日は側に居れない…大丈夫か?)

お兄ちゃんが私に耳打ちする。

(うつうん、私…大丈夫!)

(そ う か … 何 か あ つ た ら 直 ぐ に 電 話 し て 来 い よ …)

心 配 そ う な お 兄 ち ゃ ん の 顔 …

私 は 精 一 杯 の 強 が り を す る。 本 当 は お 兄 ち ゃ ん が 居 な い と 不 安 な の に …

雪 と は 部 屋 の 中 で 一 番 遠 い 席 に 座 り 、 次 の アクシ ョン を 待 つ て い た。

暫 く す る と 、 マ ネ ー ジ ジ ャ ー の 高 田 さ ん が 入 っ て き た。

「 お 早 い づ い ざ こ ま す。 」

私 と 雪 は 会 釈 を す る。

「 今 日 か ら は 歌 、 演 技 な ど の 実 技 レ ッ ス ン を 受 け て い た め に す る。 実 力 が 付 き 次 第 、 徐々 に メ デ イ ア に 出 し て い く 予 定 で す 。 し か し 、 一 般 認 知 度 が 低 い ま ま テ ビ ュ ー を せ る 訳 に は い か な い の で 、 近々 ポ 料 サ ー 摄 り を し て 、

「 テ ビ ュ ー の 前 に ファ ン に 顔 を 知 つ て も う い ます。 」

「 は あ …… 」

「 今 日 は メ ン バ ー が 到 着 す る の を 待 つ て 、 そ れ ぞ れ の キ ャ ラ 設 定 や 売 り 方 を 打 ち 合 わ せ し て 、

「 決 ま り 次 第 レ ッ ス ン を 受 け て も う い ます。 」

「 は あ …… 」

「 で は 、 も う す ぐ メ ン バ ー も 来 る と 思 つ の で 各 自 用 意 さ れ た 衣 装 に 着 替 え て お 待 ち く だ さ い。 」

「 は い。 」

高 田 さ ん は 部 屋 を 後 に す る。

私 た ち は 高 田 さ ん が 居 な く な つ た 部 屋 で 緊 張 の 糸 を 解 く …

「 ぶ つ は あ — — — ! ! ! 」

「 は あ …… 」

私 も 雪 も 大 き なため 息 …

部 屋 の 隅 に は 名 前 の 書 か れ た 衣 装 が 置 い て あ つ た。

私は衣装を取りに行つた。雪はすでに手に持つてゐる。

「うーん、これで全部かな？」

どうやらスーツの様だ。

私が衣装を持って更衣室に行こうとするといふと、横では雪が素つ裸で着替えていた。

卷之三

私は言葉にならない悲鳴を上げ、逃げるよ^ウにして更衣室に飛び

入む。

「へんな奴だなあ」

「私は雪が着替えると同時に高田さんが入ってきた。
「メンバーが到着しましたので、会議室に

三

「九一〇」

二人で会議室に向かう。

会議室の扉を開けると、室内の汗が廊下に流れた。

「アリス」第一

雪が隣で挨拶をしている。

卷之三

私も雪ほどの元気ではなしけど、精一杯頑張って声を出す。

アッシュの邊に立つ
今日も元氣だ

卷之三

卷之三

返事すらしてくれないKOUJIさん。

お二人は玉子に座ってください。

上座に案内される…。気まずいんですけど

「今日は一人のキャラ設定と今後の方針などを話し合いたいと思います。」

高田さんが司会進行。

「……いいんじゃねーの?」この前高田さんが言つてた通りで…。初めてKOJII-Eさんが口を開く。

「ああ、イメージ通りだ…」

JEYさんが後に続く…

「うんうん!! 一人とも思つていた通り! ピッタリだ!」

KAJI-Eさんはノリノリで返す。

「ではキャラの方向はこの前離した通りで行きます。」

私と雪は顔を見合わせる。

「雪さん、由さん、お一人のキャラ設定を説明します。」

私と雪は息をのんで話を聞く。

「まず雪さん。あなたは健康第一の元氣者。落ち込む事を知らないスピーツ万能少年。

ある時は可愛い弟、またある時は元気な王子様。

でも一瞬見せる悲しそうな瞳にお姉さんはズツキュン… イメージは捨てられた子犬。」

「ズツズツキュン?? 子犬?」

思わず肩を落とす雪。そういうえば雪が着ている衣装はなんだか子供っぽい色合いだ。

そして、私の着ている衣装もなんだかピンクやら白やらの色が多い…嫌な予感が…

「そして由さん。あなたはか弱い美少年。

透き通る肌、いかにも病弱な眼差しでグループのマスクコット的存在。

今にも倒れそうなのに、一瞬見せる猛獸のような瞳にママさん

メロメロ。イメージは手負いの兎。」

「メツメロメロ? ? うつ兎?」

信じられない言葉に失神しそうな私。

「つと、こんな感じで行きます。」

「……。」

一人とも言葉が出てこなかつた。

「えー、グループ全体の方針と致しましては……。」

高田さんが一生懸命何かを説明しているけど、私の耳には全然入つてこなかつた。

隣の雪も同じように、心此処にあらずつて感じで空中をボーッと眺めている。

「よ…しわ…由さん。」

「はー!」

私は自分の名前が呼ばれていた事に漸く気付く。

「では今後はこのように活動してもらいますので宜しくお願ひ致します。」

「はつはい…」

まずい…全然聞いてなかつた。

高田さんは用事があるからひと先に会議室を出て、部屋にはメンバーだけが残つた。

「さて…どうしようか…」

JOEYさんが口を開く…

「まず改めて自己紹介をしてもらおう!」

KAJIさんが乗つかる。

「はつはい!僕は雪と言います。年は18歳です。

趣味はサッカー。特技もサッカーです。後は踊りにも自信があります。宜しくお願ひします。」

雪がハキハキと応えていく。

うわつ私も何か喋らなくちゃいけないの?人前で話すなんて…どうしよう。

「えつと、私は由です。…」

後に言葉が続かなくて…どうしよう。沈黙の時間が流れる。

メンバーは顔を見合わせ、不思議そうな顔をしていく。

私は全身で冷や汗をかい、必死に言葉を振り絞ろうとする。

沈黙の空氣を破ったのはKOUJOJIさんだった。

「お前の兄貴はSATOさんなんだろ？？」

「えっはい。」

「ふーん…」

……それだけ？

KOUJOJIさんの発した言葉はそれだけだったが、沈黙を破るには十分だった。

「ぶつ…あははは…！」

JEYさんが大笑いしだした。あの美しい顔の原型が分からない位大口を開けて…

「ちよつちよつとJEY…」

KAJIIさんは苦笑いしながらJEYをたしなめる。

「…。」

KOUJOJIさんの顔色が赤くなりプルプル震えだす。

そしてKOUJOJIさんはいきなり立ち上がり、控室を出て行つてしまつた。

私と雪が呆気にとられていて、KAJIIさんが説明してくれた。

「いやー、これからこんな二人のやり取りは年中日撃すると思うけど、心配しないでね！」

別に中が悪いとか、JEYが喧嘩売つたとかじゃなくて、これは何時ものかけ合いなんだ！」

「はあ…でも、顔まで真っ赤にして怒つてたんじや…」

雪が心配して聞いてみる。

「大丈夫！KOUJOJIも怒つて飛び出した訳じゃなくて、あれね照れてるんだ。」

「あ？あんなに怖そうな人が照れてる？そんな馬鹿な…！」

私たちは暫く談笑をして今日は解散になり（私は殆ど喋れなかつたけど）、

私と雪は歌のレッスンに向かう事になつた。
とりあえず荷物を纏めようと衣装を脱いだりと部屋まで戻つた。

「おい！先に行つてるぞー！」

「あつああ…」

雪の着替えはメチャクチャ早い！

更衣室なんて使わないで、バツつと脱いでザツと着る。衣装だけはキチンと畳んでいたけど。

一方私は更衣室に隠れコソコソ着替えるから、どうしても時間がかかる。

お兄ちゃんの言いつけ通り、胸にはさりじを巻いていたが少し緩んでしまつて…

仕方なく巻きなおしてたら余計に時間が掛つてしまつた。

私は身支度と、お兄ちゃんに教わった応急メイク直しをしてから部屋を出た。

私は時間も無かつたので早足で廊下を歩いていると…

うつすら開いていたドアの隙間から、なんだか悲痛なうめき声が聞こえてきた。

（何だか苦しそうな声…もしかして急病人でも居るんじゃ…）

私は恐る恐る隙間から中を覗いてみた。

つめを両の正体はＫＯＵＣＨＥだった。

「うう、うう…」

壁の方を向いて、体を丸めて蹲っていた。

（もしかして急に具合でも悪くなつたのかしい…

声、掛けた方がいいのかな？でもＫＯＵＣＨＥさんつて怖そうだし…）

躊躇したものの、明日の朝刊に載るような事は避けた方が良さうなので、

意を決して話しかける」と云つた。

「ＫＯＵＣＨＥさん…どこか具合でも悪いんですね？」

私はＫＯＵＣＨＥさんの肩に触れた。

瞬間、ＫＯＵＣＨＥさんの体が跳ねあがつた。

「ＫＯＵＣＨＥさん？」

やだー本当に具合が悪そうー私は触れた手に力が入る…つといきなり、ＫＯＵＣＨＥさんは私の手を掴んできた。

「！！！」

私は声も出せないほどジックリしてしまった。

次の瞬間、ＫＯＵＣＨＥさんは私の手を振り落とす。

「ほつといてくれ…」

「でも…どこか具合が悪いんぢゃ…」

「別に何でもないー！」

急にＫＯＵＣＨＥさんが立ちあがつて…顔が真っ赤に染まつていた。でも、苦しそうというよりは…恥ずかしやら気まずいやうの表情をしていた。

えつまさか、さつきのまだ尾を引いてるのかしい…

イメージとのギャップが激しすぎて…私は大爆笑してしまった。
だつて…あんなに眼光の鋭い人が…笑える。

私の大爆笑を見て、ますますKOIJIIさんの顔が赤く染まつた。

耳まで真っ赤に。

「いい加減にしてくれ！！」

KOIJIIさんは怒って部屋を出て行ってしまった。

なんだか怒ってた割には全然怖くなかった。

なんだか面白い人だなあ。

つて、私、今笑つてた？

外に出るのが怖くて仕方なかつたのに…目の前に顔のいい男が居たのに。

私、順応性高いなあ…

でも、KOIJIIさんつて同じ匂いを感じたというか…
人を寄せ付けない感じは自分と似ている気がした。

「すっすいません！遅れました。」

私は歌のレッスンの為に雪と一緒にタクシーに乗り込んだ。
私は後から乗り、なるべくドアに体を密着させて座つた。

タクシーの中で雪は一人でひたすら喋り続けていた。

私は必死に相槌を入れていた。

最初は密室空間に男と居るなんてゾーっとしたけど、到着するころには結構慣れていた。

雪は一生懸命話しかけてくれて、なんだか子犬がジャレついてくる様な…

雪とはい友達になれそうだつて思った。

歌のレッスンつと言つても、一日発声練習ばかりさせられていた。
お腹の筋肉が破裂しそうだった…明日は筋肉痛だ。
お腹を撫でながら帰り支度をしていた。

「お前ってなんでＫＪに入らうと思つたんだ？」

雪はいきなり質問してきた。

「えつうーんと……」

私は言葉に詰まつてしまつた。

まさか本当の事は言えないし……

「ゆつ雪は？」

私は咄嗟に質問返しをする。

「えつおれ？そりゃーＫＯＵＪＩＥの歌唱力だよーーーあの歌声は半端じゃない！」

それに表現力！ＫＪの歌つて全部ＫＯＵＪＩＥさんが作つてんじやん？マジ天才！！

「へえー、雪はＫＯＵＪＩＥさんに憧れてオーディション受けたんだ……」

「当然……」

雪の真つすぐな気持ちは凄いなあ……

「んで、お前は？」

「え？わた……じゃなくて僕？うーんと……僕もＫＪに憧れて……」

適当に嘘をついてしまつた。

「へー、誰のファンなの？」

しまつた！そこまで考えてなかつた。

「えつと、僕もＫＯＵＪＩＥさん。」

うん、ＫＯＵＪＩＥさんはボーカルだし……一番妥当かと。

「そつか！いよなーＫＪ。つてか、今は俺たちもメンバーだつたな！アハハ……」

なんだか話しやすい人だなあ雪つて。

「でも、お前つて変わつてる奴だよなあ。実は昨日は嫌な奴だと思つてた。」

「へつ本当？」

「うん、本当。だつて初めてお前見たとき、ＫＪのポスター睨みつけてたし……」

何だか話しかけても素つ氣ないし…話し方は女だし、お高くとまつてんのかと思つてた。」

(話し方に女出てた? 気をつけなくちゃ…)

「そんなことないよ! ひつ 酷いなあ…」

「ゴメンゴメン! でも今日一日見てて違つて分かつたから。

何だか一生懸命頑張ってるし、素つ氣ないのも緊張してたんだろ?」

(ラッシュキー!なんか誤解してる! 本当は男が嫌いなだけですけど。)

「うううん… 大物芸能人が目の前に居るかもって思つたからや。」

「そつか… まあ始まつたばっかだけど、お互い頑張ろうなー!」

雪が手を差し出してくる。

「うん、頑張ろう!」

私も手を握り返す。

握った雪の手は嫌な感じがしなかつた。
雪つていい奴かもしない…

第八章

レッスンも終り、私は家に帰った。

疲れて家に帰る。当たり前の事だけど、私にとっては久しぶりの経験。

体は疲れてるのに、気持ちが高ぶつて…

お兄ちゃんは私より先に帰つて来ていた。

私は今日一日頑張った事を報告して、お兄ちゃんに喜んでほしかった。

私はお兄ちゃんの部屋を訪ねた。

「お兄ちゃん、起きてる?」

私はドアをノックした。

「うん?由子?起きてるよ。入つておいで…。」

お兄ちゃんは仕事道具を広げて床に座り込んでいた。

「由子、今日は一緒に居れなくてゴメンンな。」

「うん、大丈夫だよ!KJの人達とも何とか話せたし。」

「…ちやんと話せたのか?」

「うん、リーダーのKOHIOさんは何だか可愛い人だし、雪君も何だか友達みたいに話しやすいの!」

私は少し興奮した口調で、今日一日の出来事を話して聞かせた。

お兄ちゃんは黙つて私の話を聞いていた。

「そつか…由子、頑張ったな…」

お兄ちゃんは私の頭をポンポンしてくれた。

「うん、おにいちゃんのお陰だね。私…引き籠り卒業出来そうだよ!」

「そつか…良かつた。でも由子…頑張るのは良いけど、体調は気を

使えよ。」

「分かってるよ！大丈夫！」

「なりいいけど……」

……。

「お兄ちゃん…本当にお兄ちゃんのお陰だよ。お兄ちゃんに魔法をかけて貰つたから…」

お兄ちゃんが私を変えてくれたから…」

私はお兄ちゃんに感謝の気持ちでいっぱいだった。

「お兄ちゃんは何時も私を助けてくれる…本当に感謝してるんだよ。」

「由子…そつか、分かった。なら由子…」

「何？」

「お兄ちゃんにお礼は無いのかな？」

「お礼？」

「うん、お礼。」

「えつ私…お兄ちゃん…何か欲しい物あるの？」

「うん、実は高級な腕時計が欲しくてね…」

「ええ…今はチョット財布事情が…あつあのね、私頑張ってお給料稼いでくれから、そうしたら…」

私が焦つて返事をすると、

「あはは…！冗談だよ！お前は本当に可愛いなあ。」

「じつ冗談？もづ…」

「お礼はお前の話で良いんだよ。その日の出来事を毎日俺に聞かせて。」

「話しづ…」

「やう話し。お兄ちゃんにお前が頑張つてる報告をして…

お兄ちゃんは、お前が生き生きしてゐ事が嬉しいんだから。」

「そんな事…うん…お安い御用です…」

私とお兄ちゃんは約束をした。

その日の出来事をお兄ちゃんに毎晩報告する事。

もし仕事で時間が合わないなら携帯に電話なりメッセージを残す事。

「私、毎日お兄ちゃんに報告するね！」

私がお兄ちゃんに報告する事でお兄ちゃんが喜んでくれるな…

私とお兄ちゃんは指切りをした。

「ほら、明日も早いんだろ？ もう寝る。」

「えー、だつて何だか気持ちが高ぶっちゃって…」

「そつか、久しぶりの一人外出だもんな… よし、お兄ちゃんがオマジナイをしてやる！」

「オマジナイ？」

「もう、口元に座つて。」

お兄ちゃんは私を自分のベットに座らせる。

「体を楽にして横になつていいよ？」

「うん…」

私は言われたとおりに横になる。

「さあ… 田を閉じて… 僕に全部預けて…」

お兄ちゃんは私の顔を撫でる… 私は頷き体の力を解く…

お兄ちゃんの綺麗な指が私の体に触ってきた。

お兄ちゃんは私の頭をポンポン叩いてから、腕、腰、足、肩と、マッサージを施す。

私の疲れた体に染まる… 私はつい眠くなつて… お兄ちゃんのベットで寝てしまった。

「由子… 寝ちゃつた？」

「…うーん、お兄ちゃん…」

私の寝息を確認すると、お兄ちゃんは私の頭にそつと唇を押しつける。

「なんか… 裏田に出そつた… 折角男しか居ない所に遣つたの…」

お兄ちゃんは私の頬にキスをする。そして体に布団を掛けて部屋を出て行つた。

私はお兄ちゃんが居なくなつた事も気付かないで部屋で朝を迎えた。

私はお兄ちゃんを探して家の中をグルグル歩き回る…

「由子、どうしたの？」

「あっお母さん、お兄ちゃんは？」

「もう、とっくに仕事行ったわよ？」

「えー、先に行つちゃったの？一人で事務所行くの嫌だなあ…」

「子供じゃないんだからー由子も少しお兄ちゃんの負担、減らしてあげないとね！」

お兄ちゃん、今日リビングで寝てたわよ？貴方、お兄ちゃんのベッドで寝ちゃってるから。

お兄ちゃんだって仕事してるんだし、少しお兄ちゃんを卒業しないとね！

そうなのかな？私、お兄ちゃんに迷惑かけてるのは分かつてると心配かけりだけど…

外から見ても負担掛け過ぎてるのかな？もうお兄ちゃんに心配かけたくないな…

私も怖いだの言つてないで頑張らないと…

「うん、そうだねお母さん…私も頑張らないとね！」

「由子…」

お母さんは私の肩をポンポンしてくれた。

「行つてきます！」

私は身支度を済ませて家を出る。

マイクは私が寝ている間にお兄ちゃんが済ませてくれたし、洋服もお兄ちゃんが用意してくれた。

お兄ちゃんの負担にならない様に、自分でマイク覚えなくちゃなあ…

初めて一人で電車にも乗れた。

怖くて怖くて仕方なかつた…けど、頑張らなくちゃ…

私は恐怖の時間を何とか乗り越え事務所に着いた。

「おはよう由ー！」

事務所では、先に来ていた雪が出迎えてくれた。

つてか、昨日に増してテンション高いなあ雪つて。

「あのさあのさー！聞いた？今日の事！」

「へ？ 今日つて何かあるの？」

「なんか、皆で写真撮りするんだって…メンバー全員参加…」

「そりなんだ…」

「ええーっ、テンション低めだねえ…俺なんて興奮しまくりなのに！」

「そんなに撮影が楽しみなの？」

「つてか、俺たちの顔が全国に出るんだぜ？？」

…そつかーKの写真って色んな所で見るし、ファンなら絶対チエックするし…

「社長がイメージ作りやすい写真集から始めようって！」

写真集かあ…いくら私の顔が詐欺的に別人でも写真集は緊張するなあ…アップもあるだろうし…

「由、一緒に頑張ろうなー！」

「ああ…うん、頑張ろうなー！」

私と雪は拳をぶつけ合つ…絵に描いたような男の子の挨拶。なんだか照れ臭いなあ…

私と雪は衣装に着替えて撮影がある部屋に向かひ。

部屋では既に撮影の準備が始まつておつ、お兄ちゃんの姿もあつた。

「お兄ちゃん…！」

私はお兄ちゃんに駆け寄つた。

「あつ由子…じゃなくて、由ー！仕事中はお兄ちゃんつて呼ぶなつて言つてるだろ？」

「えへへー！」めんね？お兄ちゃん見かけたら嬉しくなつちやつて…

「えつそつか…次からは氣をつけろよ？」

「はーいー！」

お兄ちゃん、口調は怒つてゐるくせに、顔は一ヤけてゐじ。

私と雪がお兄ちゃんに少し濃いめのメイクを施される。

ますます別人になつたみたいだ。なんか少し色っぽいメイクだなあ……

私と雪の支度が終わつた頃、いきなり部屋に緊張が走つた。KJの三人が現れたからだ。

「おはようございます。」

「お疲れ様です。」

スタッフが次々に挨拶をする。まるで王様みたい。

私と雪も挨拶をしにメンバーの前へ行く。

「おはようございます。」

雪が先に挨拶をした。

「おっおはようございます。」

私も続いて挨拶をして会釈をする。

「お早う!今日は撮影だけど緊張してない?」

KAJIさんが優しく話しかけてくれる。

「はい、少し緊張しています。」

私が正直に答える。

「緊張なんてするのは、気持ちが弛んでる証拠だ……」

KOUEさん気がキツイ言葉を浴びせてくる。

「たつ弛んでなんか…真剣です。」

KOUEさん…昨日私が笑つた事でも根に持つてゐのかしら…

「撮影はじめまーす。」

スタッフの掛け声と共に撮影はスタートした。

「はい、もつと笑つてー!」

カメラマンはメンバー一人一人を写真に収めていく。

私は多少引きつりながらも一人のショットを撮り終える。

顔が幾分か痛い気が…

「では、メンバー全員のショット行きまーす!」

とうとう来たか…五人のショット…

嫌だなあ…密着するかもしれないし…

私は嫌嫌ながらも立ち位置に着く。

私と雪を取り囲むようにして三人が後ろに立つ。背中が熱い…

「皆さん、もう少し動き下せーーー！」

この状況で何をしようと?

私が固まっていると…

「皆さん、イメージ設定の通り、由と雪を軽く舐めて下せーーー！」

高田マネージャーの声が響く…

「はーーー！」

なんだかノリノリなJ E Yさんの声が後ろから響く。

そういうえば打ち合わせの時…これからグループの方向はとか何とか言つてた様な…

ヤバイ、殆ど覚えてない！一体どんなグループイメージなんだっけ…

「雪…雪…！」

私は小声で雪に話しかける。

「どうした？」

「あのや…忘れてないかもう一回復習したいんだけど…グループ全体のイメージってどんなだっけ?」

「へ？あの初期メンバーのマスクシート。お兄さんたちは可愛がる反面虐めちゃうつてやつ？」

「へつ虐めちやう？」

「何だよ、忘れちゃったのか？」

「うん、実はあの時つて緊張しすぎてあんまり覚えてないんだ…」

「ふーん、じゃあ一回だけ言つた？おれもあまり口に出したくないしな…」

ええ！口に出したくない事をさせられるのでしょうか…

「俺と由はくっのマスクシート的存在で、初期メンバーの玩具にされている。」

三人からは友情以上の感情を持たれていそうなスキンシップを受けているものの、

何だか満更でなさそうな感じが女性の萌えの心を捉える。

初期メンバーはお兄ちゃん的ポジション、新メンバーは可愛い弟。
何やら怪しげな感じがゾクッときちゃう。

雪は説明し終えると顔を青ざめながら正面を向いた。

「雪くーん、顔色悪いよーーー…ちょっとメイク明るめにして?
」
「はい。」

お兄ちゃんが雪のメイク直しに入る。

私は今日の撮影が無事に終わるかどうか…不安だった。

第九章

「宜しくお願ひしまーす。」

撮影が再開する。

私は緊張つといつより恐怖で動けない。

横に居る雪をチラ見する。雪の顔色はお兄ちゃんのお陰で良くなつたものの、表情は硬い。

背中に緊張が走る。

「雪…」

雪の後ろに居るJ E Yさんが雪の肩に手を回す。

雪の肩がピョントと跳ねる。

J E Yさんは雪の耳に口を近づけ囁く…

「雪つて何処が感じる?」

フーーっとJ E Yさんの息が雪の耳に掛る…雪は顔を真っ赤にしてブンブン頭を振る。

ひーー！雪が襲われる！！

私がJ E Yと雪のやり取りを顔を引き攣らせながら見ていると…

「由…」

私の後ろから声がする。

私の肩に逞しい腕が巻きつく。

「かつK A J Eさん…！」

K A J Eさんの腕が私に絡みつく。

内心は嵐の様だつたか、一生懸命作り笑顔で応える。

「由…顔が引き攣つてるよ?」

K A J Eさんは絡んでいた腕の力を緩め、体に触れない様に氣を使つてくれる。

K A J Eさん…

しかし優しいK A J Eさんを尻目に後ろからセクシーな声が聞こえ

る。

「ＫＡＪＥ… そんなんじや〇Ｋ出ないぞ?」

なんて事を！つと思いながら後ろを振り向いたら… ＫＯＵＪＥさんは
の鋭い眼光が私を見ていた。

「ひづやるんだ…」

ＫＯＵＪＥさんは私の肩を掴み私を自分の方へ向かせる。

「由…俺だって恥ずかしいし、仕事でも男となんてつて思つたび、
やるしかないんだ。」

でも決して無理しないで…一緒に頑張ろうな。」

ＫＯＵＪＥさんの甘くてセクシーな声が優しく私に流れてくる。
でも今日は支配される声じゃなくて…守ってくれそうな声。

「ＫＯＵＪＥさん…」

私は嫌な緊張の中、優しく放たれた言葉に思わず涙が出てきた。
ＫＯＵＪＥさんは私の量類に手を添えて、短い髪を耳に掛けてくれ
た。

「馬鹿だな…こんな事で泣くなんて…」

「す、すいません。」

「うひ…や、馬鹿というか…単純だな。」

「…ＫＯＵＪＥさん?」

「これからは毎日虐めてやるから…覚悟しておけよ?」

「ひい、マジですか?」

「ああ、大マジだ。」

急に真剣なＫＯＵＪＥさんの顔がそこにはあった。
私は急に緊張する。

「その表情だ!…」

カメラマンは興奮してシャッターを切る。

「ほづ…」

スタッフにびよめきが起こる。

「彼…良いんじやない?」

「うん、ＫＯＵＪＥとの絡み…最高だわ…」

私の「口」が変わる表情：KOUSHIの優しい顔や真剣な顔。何だか良いショットが撮れたみたいだ。

皆が感心する中、一人だけ表情を強張らせる人がいた。

「……由…子。」

お兄ちゃんは震える手で指に挟んでいたメイクブラシを折った。

「はーい！ いつたん休憩に入りまーす。」

私たちはすぐさま離れて休憩に入る。

「それぞれ衣装とメイクを直して一時間後撮影再開します。」

私は衣装を着替る。

何だか全身真っ白な衣装。白いワイシャツに白いズボン。変なの…私は着替えを済ませ、お兄ちゃんの元へ走る。

「お兄ちゃん…」

お兄ちゃんの顔を見たら気が抜けて…

「由…辛くないか？」

少し考えて答える。

「うん！ 大丈夫！ この位何でもない！」

私は精一杯強がつて見せる。

もうお兄ちゃんに心配かける訳にはいかないしね…！

「そうか…ほら！ メイク直すぞ？ 目え閉じろ…」

私は言われた通りに目を閉じる。

でも… お兄ちゃん少し変な顔をしてた様な…

私たちが休憩をしている間、スタッフは忙しく動き回る。何やらセットも変えるよつだ。

運ばれてきたセットは、真っ白な布が沢山。

光沢のある布、少し皺のある布…

スタッフは次々に壁にセットしていく。

真っ白い部屋が出来あがる。

次に見た事も無い大きなベッド。白い部屋の真ん中に置かれた。

最後に真っ赤なバラの花を散らせて完成したらしい。

「撮影再開しまーす！」

元気なADが号令をかける。

現場に緊張が走る。

「はい、じゃあ皆さんはベットの周りに行つてください。」「ADが私たちにベットに行くように促す。

カメラマンが悩んでこる、そして指示を出す。

「うーん、決めた！由さんで行こー！」

「くつ僕？」

「由さんはベットにズカツと座つてー！」

「はあ…」

私はベットに腰を下ろす。

「あー、そんな端つーじやなくて…靴脱いで枕に座っちゃつて…！」

「はあ…」

私は言われたとおりに移動する。

「じゃあ皆さんは由さんを取り囲んでーあつ由さんは足を前に伸ばしてー！」

「はーい！！」

メンバーが私を取り囲む。私も言われたとおりにする。

「はい、皆さん膝をついて…あつ雪さんは由さんの足に寝転がつて！」

「はーい。」

雪が私の足元に寝転がる。

「あーそりゃなくて！太ももに顔を埋める感じでー！」

「いっはっはい…」

雪は嫌そうな顔をして私の太ももに寝転がる。

そんな嫌そうに演る？そりゃ雪にとつては同性の太ももだらつかない…

「残りのメンバーは由さんの体に頭預けて！」

皆無言で私の体に頭を乗せる。

「はーい、その位置でお願いします。撮影始めます。」

カメラマンがシャッターを切り始める。眩いフラッシュが光る。

「皆さん、表情固いですよー！」

本当に皆の表情は硬かった。

「うーん、聖母マリアに縋る天使って設定なんですけど……皆さん、もつと柔かい表情下さい…」

カメラマンの注文に入る。

「マリアっつて…」

J E Y さんがため息をつく。

「仕方ない…一頑張りだ…」

K O U J I R O やんはそつ弦くと私の太ももを擦り始める。

「ひー！」

私は思わず声をあげる。

「由…」

J E Y さんはヤラシイ手つきで私を擦る。

「由くん、じめんね」

K A J I サンは優しく足を触る。

「俺も嫌だけど、ちよっとの辛抱だから…」

雪は私の太ももに頬刷りをする。

私の頭の中は真っ白だった。

「表情固いなあ…なんか適当に話して下せい…」

適当つて言つたつて…私は口が渴いて…声なんか出ないよ。

「由…」

J E Y さんが話しかける。

「はひ。」

私は噛みながら答える。

「ぶつ…！…はひだつて…！」

J E Y さんは思わず噴き出す。

私は少しムクれる。

「ごめんごめん！あー由君。君は好きな女性でも居るのかな？」

「こつこつ…居ないです。」

私は女の子だつてば！

「うーん、恋は人生の必需品じゃないか！勿体ない。」

「はあ…」

「うーん、じゃあ、大切な人は居るだろ？」「大切な人？両親とかお兄ちゃんの事かな？」

「はい、居ます。」

「そうか…じゃあ今から俺たちを由君の大切な人達と置き換えてご覧？」

私はお兄ちゃんの顔をチラリと見た。

「…！」

お兄ちゃんの顔を見て私はビックリした。今まで見た事も無い顔。悔しいそうな、それでいて怒っている様な…人でも殺しそうな表情。私は思わず目視線を戻す。

お兄ちゃん…

「由君、俺たちを大事な人だと思つて撫でて…」

J E Y さんがアドバイスをくれる。

「はい、やつてみます。」

私は四人を家族に置き替えながら…想像してみる。何時ものリビング…集まる大好きな家族。

私は家族の真ん中で寛いでいる。

「そう、その表情貰つた！」

カメラマンは忙しなくシャッターを押しまくる。

「由さん以外、目を閉じ下さい…！」

メンバーが目を閉じる。

私は皆の頬や頭を優しく撫でる。

「はーい！ゾクゾクする画が撮れましたーー今日は終了となります！」

「お疲れ様です！」

スタッフが声を上げる。

すぐさまメンバーは私の体から離れる。

私も少し痺れた足を引きずりながらベットから降りる。

「…あいつの足って…なんかムラムラ来ないか?」

J E Y さんが K O U J I E さんに話しかける。

「おい、男の足だぞ? お前らしくないな…」

K O U J I E さんが答える。

「ははっ お前だつて何か感じる所があつたんぢゃないの? 顔、真っ赤だぞ?」

K O U J I E さんが慌てて両頬を手で隠す。そして、急いでスタジオを出でいく。

「あいつも面白いな! 撮影中は平氣なのに…終わつた途端にこれだ。」

J E Y さんが呟いていると K A J I E さんが合流する。

「でも確かに由君の足って…何つていうか…」

「まあな。少し肉が付き過ぎだ。凄い細身なのにな…」

「まあね。とにかく撮影は終わつたし、早く帰ろひつよー。」

一人もスタジオを後にする。

撮影は無事? 終了した。

全体的には無理やりだつた氣がするけど…

「雪…」

私は雪の側に駆け寄つた。

「おつおつ…由か。」

「お疲れ様ー! 雪!」

「お疲れ…」

心底疲れた表情の雪。

「もう嫌だ…あんなの耐えられない…」

雪はブルブル体を震わせながら言つ。

「だつて耳に息吹きかけるわ急に背中抓るわ…終いには綺麗な顔であり得ない言葉の数々…。」

雪は、今はメイクで分からぬけど、顔色が悪そうだ。

「それに…今度は野外撮影だぞ？」

「へつ野外？」

「ああ、まあ写真集だからな。色々な場所で撮るだろ普通。」「うえつまたこんな事やらされたのかな…」

私が弱音を吐くと雪が、

「まあ、男同士気持ち悪いけどな。それが女性に受けたなら仕方ないんじゃないの？」

「うん、仕方…無いよね。」

「ああ、頑張るしかないよ。別に写真集だけが仕事じゃないし。しかし…お前って随分着やせするのな？」

「へつそつかなあ…」

「うん、太ももとか…なんか女みたいにプー「プー」してると…変な気分になっちゃうよなあ…」

「じじじ…「冗談だよね？」

「ふつ冗談に決まってるだろ？」

「何だ、ビックリさせんなよ！気持ち悪い。」

「悪い。あとにかくお疲れさん…！」

「ああ、お疲れ…！」

私と雪はハイタッチで別れ、雪は控室に戻つていく
「つたぐ、マジで勃ちそうだつた…俺…変態なんだろつか…」
雪は独り言を囁きなつがら控室で苦悩していた。

私も控室に戻るのとした時、急にお兄ちゃんに腕を掴まれる。

「わつ…あつ…おにいちゃんか。」

私はホッとする。でも…お兄ちゃんは少し怖い顔をしていた。
お兄ちゃんは私の腕をキツく掴み引っ張つていく。

「おつお兄ちゃん？」

私の問いに答えもしないで…お兄ちゃんは私を自分の控室に連れて行つた。

第十章

お兄ちゃんは私を控室に連れて行った。バタンシッ！と大きな音で扉を閉める。

「おつお兄ちゃん？」

何時もと違う様子のお兄ちゃんに少し体を強張らせる。

「どうしたのお兄ちゃん…」

私は不安な声でお兄ちゃんに話しかけた。

お兄ちゃんは私の腕を強く引っ張り、私を自分の胸へ引きずり込み、そして…

私を強く…思いつきり抱きしめる。

「おつお兄ちゃん？」

私はお兄ちゃんが少し怖かつた…

「……大丈夫か？」

「えつ？何？」

「あんな事…知つてたらお前をく」になんかに…」

「だつ大丈夫だよ！心配しないで。」

「本当か？辛かつただろう？」

お兄ちゃんは私の頬を両手で掴み、目を見つめながら囁く。

それに…不安で仕方ないって顔をしていた。

「ちょっとね…怖かつたけど大丈夫！お兄ちゃんも近くに居たし…」

「そうか…でも本当に辛いなら辞めても良いんだぞ？」

「ふふつお兄ちゃん…この前と矛盾してるし…」

私がほほ笑むとお兄ちゃんは急に真剣な顔をした。

「もういいんだ…お前の事は俺が一生守つてやるから…」

「一生、お前の側に居てやるから…」

お兄ちゃんはそう言って、私の胸へ顔を埋める。

なんだか大きな赤ちゃんみたいだ。

お兄ちゃんの言葉に今朝のお母さんの言葉が蘇る。

「お兄ちゃん…私は大丈夫だから…もう少し自由になつて良いんだよ…」

「由ナ…」

私はお兄ちゃんの頭をポンポンする。いつもと逆だな。

「お兄ちゃん…そんな心配するなら初めから女の格好させてくれた良かったのに…」

女の子でデビューしてたら男の人の事で悩む執拗なかつたのに…」

私は以前から不思議に思っていた事を聞いてみた。

お兄ちゃんはなんで私を男のグループに参加させたのだろう…

「それは…その…あれだよ…」

お兄ちゃんは何だか話しくそつだつた。

「まあ良いけどさ…あつちよつとトイレに行つてくれるね…」

私は諦めて部屋を出る。せつとやの内話してくれるだらう。

私が部屋を出ていた時、お兄ちゃんは一人で何か咳いていた…

「くそつ本当に女の格好で自信付けてやればよかつた…裏目ばっかりだ…くそつ…」

お兄ちゃんは壁を思いつきり殴つた…拳が血で滲む…

私はトイレから戻る途中、またあの声を聞いた。

「うつくづ…」

もしかして…私は声のする方を見る。

あつやつぱり。悶絶するＫＯＵＪＥさんだ。

ＫＯＵＪＥさんは今日も頭を抱え、壁を向いて蹲つている。

あれ?でも今日は赤面していなかつたような…もしかして今度こそ具合が悪いんじや…

私は少し迷いながらも声をかけた。

「あの…ＫＯＵＪＥさん…」

私は少し離れて声をかけた。

私の声にKOUJO-Eさんはすぐ反応した。

「……なんだ、お前か…」

声の調子からして今度も恥ずかしがってるだけの様だ。

「もしかして…また何かありましたか?」

「はあ?何かつて??お前の所為で」E-Yにからかわれたんだろう?

?

KOUJO-Eさんは怒つている様だ…私、何か気に触るような事したつけ…

「あの…私何かしましたか?気付かずにはいません…」

私は頭を下げた。身に覚えはなくとも一応誤つておいた方が無難だらう。

「あつ悪い…別にお前の所為じゃ…」

KOUJO-Eさんは頭をポリポリ搔きながら起ちあがつた。

「でも何で…?男だぞ?うーん…」

KOUJO-Eさんは頭を傾げ何だか考え込んでしまつた。

「あのおー、僕はそろそろ…」

私は部屋を出ようとした時だつた。

「待て…」

KOUJO-Eさんの声が聞こえる。

綺麗で支配される声…私は立ち止まる…動けない。

「お前…そんな顔だけど、ちゃんと男だよな?」

KOUJO-Eさんが私の顔をマジマジ覗きこむ…ひー…美男子アップ!

私は体が硬直する…

「うーん…胸も無いし…男だ…」

なつ失礼な!これはサラシです!…元々小さいけどさ。

「おつ男です!…」

私はムキになつて声を張り上げる。

「うーん…ちょっと失礼。」

はつ?失礼つて…あつ!-

KOUJO-Eさんは私の腕を掴み、一瞬でKOUJO-Eさんの胸の中に

私は収まつた。

「…………」

私は思わず硬直する…

「あれれ？なんでだ？訳が解らん……」「
ちょっと訳が解んないのは私の方ですけどお———！

KOUEさんはすぐ私を離した。

「すまん…俺は病氣らしい…」

「へつびつ病氣なんですか？」

「ああ…お前…男だもんなあ…「つーん…」

KOUEさんは再び考え込んでしまった。

私はその隙に部屋を飛び出した。

怖かったなあー、美男子に抱きしめられるなんて…つて、あれ?
そういうえば…全然怖くなかった様な…
むしろ心地よかつた気が…

うつと!そんな筈はない。気のせいだ…

私は考えるのを止め走り出した。

「あれは男だ…あれは男だ…あれは男だ…血迷うな俺…」

KOUEさんのお経の様な独り言は暫く続く…

「はあはあ…おつお兄ちゃん!!」

私は息を切らし自分の控室に戻った。

「あれ?」

そこにお兄ちゃんの姿は無かつた…

「先に帰つたのかな?」

私はあまり深く考えないで帰宅の準備をする。

私が家に着いてもお兄ちゃんの姿は無かつた。

「お母さん、お兄ちゃんは?」

「えつまだ帰つてきてないわよ?」

まだ帰つてきてないのか…私は夕食を食べお風呂に入り、寝る準備

をする。

時間は深夜を回り午前一時。まだお兄ちゃんは帰つてこなかつた。
お兄ちゃん、今日は他に仕事があるとか言つてなかつた様な…どう
したんだろ？

私は電話ではなくメールを送る事にした。もし仕事中なら邪魔する
訳にはいかないしね！

（お兄ちゃんへ、今日の報告。

報告で言つても一寸一緒にだつたから知つてるよね。

今日は写真を沢山撮りました！怖かつたけど皆の期待に応えられ

るよひ…

お兄ちゃんにこれ以上心配かけない様頑張るね！）

お兄ちゃん、メール読んでくれたかな？

私は明日の為に布団に入る。

でも、お兄ちゃんからのメールの返事は無かつた。

第十一章

お兄ちゃんは朝になつても家に居なかつた。
ケータイにも着信はない…
お兄ちゃん…

私は一人で事務所に向かう。
あんなに怖かつた電車も何とか乗れるようになつた。
その気になれば私もやるもんだ！

事務所にもお兄ちゃんは居ない…
お兄ちゃん、何処に行つたんだろう。

今日は野外撮影だつた。
メンバー全員で車に乗り込み撮影場所へ向かう。
車内では私の隣に雪が座つた。

「今日、外で撮影だな！」

「うん… そうだね…」

私はお兄ちゃんが気になつて上の空だつた。

「…何時にも増してテンション低いなあー、どうした？」

「いや…別に…あのや、雪つて兄弟居る？」

「え？ 兄弟？ 居るよーー！」下に妹がね。それがどうかしたか？

「ううん、何でもない。」

「変な奴だな… もしかしてSATOさんと何かあつた？」

「えつ別に何もないけど… どうして？」

「いや、急に兄弟なんて聞いてくるから。」

「…、雪つて妹と仲良いの？」

「えつ妹？… 最悪。」

「」

「え？」

「あいつは俺の事、バイ菌位にしか思つてないんだよ。会話すら無いし。

でも俺がＫのメンバーになつた途端に態度が急変してさ…

俺の写真撮つて売り出すし、メンバーの私物持つて来いだのさ…

あいつは悪魔だ…」

「…へえ、パワフルな妹さんだね。」

兄弟つてそんモンなのかな…私たちが仲良しなのかな…

「雪つて妹とメールとかする?」

「メール?つてかアドレスすら知らん…なんで?」

「いや…あのさ、おに…兄貴が昨日家に帰つて無くてや…」

私は雪に相談してみた。

「ふーん、でも良い年の大人の男なんだし、家に居なくとも不思議じゃないと思うぜ?」

つてか、むしろ健康だろ。外で女とでも居たんじゃねーの?」

うーん、お兄ちゃんに彼女か…

お兄ちゃん位素敵な人なら居ても不思議じゃないか…

「てか、お前ら兄弟つて、本当に仲いいよな。」

「えつそつかな?普通だと思うけど…」

「俺なんて、一日…いや、一週間居なくたつて妹所か親だつて心配しないぜ?」

「えつそんなもんなの?」

「普通そつだろ…お前だつて外泊位するだろ?」

「いや…俺はした事無いんだ…」

「…えつマジで?」

「うん、大マジ。」

「お前…それは不健康だろ。今時女の子でもバンバンやつてるの?」

…」

「…マジっすか…」

「……よしー今日撮影終わつたらお泊まり会だーー!」

「へつ？」

「だから、モヤシの由君に風を当てしやるー。そんなんじゃ男として欠陥品だー！」

「いや……でも……」

おつね泊まり会なんてとんでもない！

ひつー晩男と迺(なゐ)すなんて死んでしまつ。

私が答えに困つていて、後ろから声が聞こえてきた。

「何だか面白そうな話してるね！」

「あつＫＡＪ－Ｅさん！聞いてました？『イツの初お泊まり会の話。』

「俺もその話乗つた！由君を男にしてやるつー！」

「マジつすか？やつた！しかし不健全すぎますよ『イツ』。」

「何？何の話？」

ＪＥＹさんが話に加わる。

「……ふーん、お泊まり会があ……面白やうだね。歓迎会もしてないし……乗つた。」

「うわー！歓迎会！嬉イーー！」

隣で雪がはしゃいでいる。

「おい、ＫＯＩＣＨＥも勿論参加だぞ？」

ＪＥＹさんが後ろに座つているＫＯＩＣＨＥさんに話しかける。

「……ああ、丁度いい。分かつた。」

「何が丁度いいのか分からんが……まあ決定といつ事でー。」

「やつたーー由、楽しみだなーー！」

「……あつああ……」

私は反対意見をいう間も貰えずには決定してしまつた。

仕方ない…口ケ先でお兄ちゃんに相談してみよつ。

一緒に来てくれるかな？

「でも、メンバーだけの歓迎会つて事で、スタッフ＆友達は連れてくるなよー。」

ＫＡＪ－Ｅさんが余計な事を言つ。

「場所はお前の家なーー！」

KAJIさんはKOKOちゃんを指差しした。

「！なんで俺の家…」

「お前の家が一番広いから。」

JEYさんは迫力のある声で言い放つ。

「じゃあ、仕事終わったら皆でKOKOの家にレッスンーー！」
なんだか異常にノリノリのKAJIさんが叫んでいると、撮影現場に着いた。

「今日の撮影はココで行います！」

スタッフが今日の予定を説明していく。

今日は都内某所にある噴水での撮影だった。
縁に囲まれた公園の中にポンと噴水がある。
レンガで出来ている噴水はとても可愛らしい。
「では皆さん、衣装とメイクを終えた方から撮影に入りますので宜しくお願いします。」

私たちは準備のためにトレーラーへ向かつ。
中にはお兄ちゃんが待っていた。

「おっお兄ちゃん！良かった…」

私はお兄ちゃんに駆け寄った。

「由子…」めんな、昨日は連絡しなくて。」

「ううん、私は大丈夫！お兄ちゃんだって忙しいもんね！」

「あ…ごめん、早く着替えを済ませてこ。」

「うん、分かった。」

私はお兄ちゃんの顔を見たら安心して、今日の夜の事を相談するのを忘れていた。

私はシンプルなズボンに厚手の真黒なワイシャツといつ衣装に着替える。

私は噴水に向かう…

既に準備を終えたメンバーが先に撮影を始めていた。

「いいねえ…くうー！」

興奮したカメラマンが狂ったようにシャッターを押しまくる。

噴水には全身ずぶ濡れのＫＯＵ－Ｅさんが居た。

頭から滴る雫…透ける衣装…濡れた妖艶な顔。

濡れた髪の間からレンズを睨みつけている…「わあ…エロい…！」

私には刺激が…鼻血が出そう…

続いてＪＥＹさんの番だった。

長めの髪から水が垂れる…色っぽい女性のような感じだ。

顎を急に上げ、濡れた髪が後ろに流れる。濡れた喉仮が…セクシー

！！

腰が抜けそ�だった。

そしてＫＡＪ－Ｅさんの番。

上半身裸の衣装に真っ白な布を頭から掛けている。

雪もはじき返しそうな逞しい体…下から見上げる視線は少し怖いけど…カツコいい…！

体を預けたくなる。

雪の番が回ってきた。

雪は頭から水を被るというか、水と戯れている。

溜っている水を蹴飛ばしたり、いきなり泳いでみたり…可愛い…！

思わず抱きしめたくなる。

とうとう私の番が回ってきた…

私は恐る恐る噴水に足を入れる…

洋服…透けないかな。

私は取り合えず水を手に当ててみた。冷たい水が袖口に流れてくる…

「あー、由君…取り合えず頭から行つて…！」

カメラマンの注文に入る…頭があ…

意を決して水に飛び込む。ブクブク…。

息が苦しくなつて飛び出す…

私は噴水のレンガ部分に腰を下ろした。

「うおう！由君、そのまま寝転がつて……」

カメラマンが指示をだす。

私はカメラの方に体を向け横になる。腕は自分の胸元に置き、乙女ポーズ。

イメージは中性的だつたし……こんな感じかしら……

「いいねえー！いいねえー！……」

私の周りをグルグル回るカメラマン……指が腱鞘炎にならないのかしら……

カメラマンの興奮はピークに達したらしく、力尽きた様にその場に座り込んだ……

「はあはあ……皆……サイコーだわ……」

どうやら個別の撮影は終了したらしい……

「ではー、最後にメンバー全員のショット行きまーす！」

スタッフは大きな声で号令をかける。

私たちは濡れた衣装のまま噴水に腰を掛ける。

真ん中にＫＯＵＪＩさん、その両脇にＫＡＪＩさん、ＪＥＹさん。ＫＡＪＩさんの横に雪、ＪＥＹさんの横に私。最初は普通にポーズを取つていただけど……

「駄目駄目！！そんなんじゃ女性は逝かせられない！！全然ダメ……」

「雪！由！ＫＡＪＩとＪＥＹにもたれ掛つて……」

うわつ思つてた通り……やっぱり絡むんですか……

私と雪は隣に頭を預ける。

「うーん、もう少し……雪！ＫＡＪＩの太ももに頭置いて……」

「うつ……はーい……」

嫌そうに言われたとおりにする。

「うーん、由は……ＪＥＹの胸にもたれ掛つて一手はＪＥＹの腿……」

ＪＥＹは由の肩抱いて……」

「……はあ。」

私もＪＥＹさんも言われた通りにする。

綺麗な顔の割に胸板が…やつぱり男の人だなあ…

「ふうーーー！これよ！これよ！」

すっかり女言葉になつたカメラマンが写真を撮りまくる。

私はJ E Yさんの胸の中で早く終わるのをひたすら待つ。

「……由…」

上から声が聞こえる…

「まあ、最近忙しくてな…悪いい。」

「はあ、何がですか？」

「お前が気付かなかつたないなら良いんだけど…勃つちやつた。」

「はあ…何がですか？」

「……お前が馬鹿で良かつた。」

「おううつけいーーー！」

カメラマンはその場に倒れこみ、撮影は終了した。

濡れた服が気持ち悪い！！

私は急いでトレーラーに飛び込んだ。

第十一章

トレーラーに飛び込んだ私は急いで着替えを済ます。
他のメンバーが戻つて来ない内に…

「ンンン…ドアを叩く音がする…

「由…居るか?」

お兄ちゃんの声だ…

「うん、大丈夫だよ…お兄ちゃんでしょ?」

「あ…入るぞ。」

お兄ちゃんは入るなり私の前に来て…

「大丈夫か?」

「うん、昨日よつマシ!」

「そ…か…」

お兄ちゃんは何だか泣きそうな顔をして…いる。

「なら良いんだ…」

お兄ちゃんは私の肩を掴み、椅子に座らせる。
ドライヤーを持つと、私の髪を乾かし始めた。
お兄ちゃんの優しい手が私の髪を梳ぐ。

「由子…昨日はゴメンな…」

「うん、もう良いよ!」

「ちょっと一人で考えたい事があつてな…」

「ふーん、もしかして好きな人の事?」

「えつなつ何をいきなり…」

「あのね、ここに来る途中に話したんだけど、
お兄ちゃん位素敵な
人なら、

恋人の一人や二人居るんじゃないかつて。」

「…誰とそんな話したの?」

「うん? 雪だよ?」

「雪…あの同期か…ずいぶん仲が良いんだな…」

「別に…仲良くな無いけど、メンバーの中で一番話しゃやすいからだよ?」

「え? 話しゃやすいのか。」

「お兄ちゃん、昨日は彼女と一緒にだったの? 隠さなくとも聞いてのこよ?」

「…」

「…そんな人、居る訳ないだろ?」

「ふうーん、まあ言いたくないなら庾ごこちやーの内紹介してよ!」

「…ああ、紹介したい人が出来たらな…。」

お兄ちゃんは髪を乾かし終わるとトレーラーを出て行けりとした。

「お兄ちゃん…!」

私は呼び止める。お兄ちゃんに相談したい事があったから。

「うん、何だ?」

「あのね…今日の夜の事なんだけど…」

「夜、どうかしたのか? ああ…今日は絶対帰るからな。心配するな。

「…」

「うん、違うの…今日の夜ね…」

私が話そうとした時、お兄ちゃんに声が掛る。

「SATOちゃん、SATOちゃん、お電話でーす…」

ドアを叩く音、よほど急いでいるのか大きな音だ。

「あー、話は帰つたら聞くから!」

「うん、お仕事頑張ってね!」

「ああ、気をつけて帰れよ?」

「うん、じゃあね。」

私は相談する事も出来なかつた。どうしよう…

私は自分の荷物を持つてトレーラーを出ようとしたら、他のメンバー

が流れ込んできた。

「おお…夜の相談してたら遅くなつた…!」

雪が興奮した様子で話しかけてくる。

「あのさあ…夜の事なんだけど…」

私は断りきと話を切り出すと…

「ああ…楽しみにしてるよ? KOPPROトユース歓迎会&由くんの初めての外泊会!」

「いや…だから…」

「早く行きてーなあ。KOJICOさんのお家ってスゲー広いんだって!!」

雪は話し終わると濡れた服を一気に脱ぎだした。

みるみる脱いでいく…後はパンツだけ。

見ていられなくてトレーラーを飛び出す。

私たちは事務所のバスに乗つて戻った。
事務所に着くと直ぐに解散つという事になった。

「由ーーー出発だあーーー！」

雪は私の腕を掴み、勢いよく駐車場に引っ張つていく。

「ゆつ雪ーーー！」

雪の勢いに押されて何も言えなかつた。

事務所の地下にある駐車場は私の見た事も無い様な高級車が止まつ
ている。

「俺たちはメンバーの車で送つてもいいんだぜ? KJの助手席…く
う。」

感動に浸る雪に、

「あのせ、行き成りだと親も心配するからちょっと電話していいか
?」

私は両親かお兄ちゃんが反対してくれるのを祈りつつ電話を掛ける。
数回コール音がなつた後、お母さんが出た。

「あつお母さん? わ…僕だけど…あのね…」

私が説明しようとしたら…雪が私の携帯を取り上げた。

「もしもし！ 今晚はーー！ 僕は雪と言います！ 今晚由くんをお預かりしますのでーー！ 宜しく。」

「えつえつ…」

携帯からお母さんの動搖した声が漏れてくる。

「ちょっと！ 雪！ 反して！」

私が携帯を取り返した時

「大丈夫だよー。心配し過ぎだ！」

「うん、でも…」

「男なんて裸一貫あれば良いんだ！だからお前はそんなモヤシみた

いがほんば

「支那」

北齊書卷之三

卷之三

私は携帯を取り戻せ！（トトロ）

雪は携帯を高く掲げ、私には届かなかつ

「今晚、お前が男になつたと思つたら返してやる。」

「……本当？」

「ああ、本当だ。」

分かつた。

男らしく振舞って携帯を取り返そう！！

私は腹を決めた。

「アーティストの心」

「えー、一諸(なまこ)ばーの?」

「よく見ろ!!皆スボリツカーダ。一人乗り!!

「へえー、一人しか乗れないんだ

「お前って……まあ良いや。俺はKA-

59

「えつ雪？」

ブロロロロ…パン！

KAJIさんは良い音をさせながら車を発進させた。

「お前はKOJIROに乗せてもららえ。」

「えつ？」

「俺は男は乗せない。」

JEIさんはそう言い残し、さつたと車を発進させる。

……。

後ろから鋭い視線を感じる。

私は恐る恐る振り返る。

「……早く、乗れ。」

「はあーーー。」

私はKOJIROさんの車に乗り込んだ。

真黒なスポーツカー。デザインもカッコいい。

車内も清潔に保たれていて、乗るのが恐れ多いような。

「汚すなよ？」

「もつ勿論です。おつお願い致します。」

「つ怖ーーー！KOJIROの自宅が何処にあるか知らないけど、着くまで怒られてたら…

KOJIROさんの自宅は、車で20分位の所にあった。

「着いたぞ…」

私は車から降りる。

「つわあ…高いマンション…！」

一体何階建てなのか、数えるのも面倒なくらいの高層マンション。

その最上階、ペントハウスがKOJIROさんの家だった。

私はKOJIROさんの後をトコトコ付いて行つた。

エレベータから降りると、広いエントランスが広がっていた。

「つわあ…広…！」

私は思わず興奮する。

「…そつか？まだ玄関にも入つて無い。」

いやいや… Hントラックスだけで、私の部屋よつ遙かに広いですけど…

KOココさんはカードをドアに差し込む。

ピピッ！と電子音が鳴り、ドアが開く。

Hントラックスに部屋の空気が流れてくれる…

香水なのか… 芳香剤なのか… 物凄くいい香りがした。

「入れ……」

「はっはい。」

私はKOココさんの部屋へ入った…

第十三章

私は広いリビングに通された。
リビングには大きなソファーが置かれ、大きなテレビが壁に掛けてある。

「うわあーっ」

私は部屋の中をお上りさんの様に眺める。

必要最低限の電化製品。『ミミ』つない室内。清潔そのものだった。
「そんなに不思議な部屋か？」

KOUEさんはビールを持って部屋に現われた。

私はビールを受け取ると、大きなソファーに腰掛ける。

「不思議というか…こんな広いリビング…テレビでしか見た事無くて…」

「そうか？普通だと思うが…」

KOUEさんは自分のビールを開け飲み始めた。

私は借りてきた猫の様に動けなくなつた。

沈黙の時間が流れる。

……。

「あつあのおー。」

私は沈黙に耐えられなくて、話を振る。

「何だ？」

「他の皆さんは？」

「ああ…買い出しだ。」

「買い物ですか…」

「俺の家には客を満足させる程の食料は無い。」「あつそりですか…」

……。

また沈黙になる。

……。

うーん、気まずい。

私は沈黙に耐えられず何とか話題を探そうと必死で考える。

「あのー、ここの家って何部屋位あるんですか？」

「4部屋。」

「あつそですか…」

……会話が終わってしまった。

うーん、なんか話題は無いだろ？

私は必死に考えていると、急に鼻がムズムズしてくる。

「はつはつ。」

「は？」

「はつはつハックショーネン…！」

私は大きなくしゃみをしてしまった。

そこら中に鼻水を飛ばす。しまった……。

「おつお前……」

ひー！KOUEIさんの鋭い眼光が突き刺さる…

「すみません！すみません！実はさっきから寒くて…」

髪を乾かし着替えもしたが、撮影中ずっと水の中に居たから体が冷えたらしい。

「そうか…風呂でも入つてこい。」

「ふつふつ風呂ですか？」

「遠慮する事は無い。あいつ等も着き次第風呂入るだろ？」

「皆さん入るんですか？」

「ああ…大抵な。今日なんて不衛生な水に入つたんだ。奪い合いでなるぞ？」

今なら一人でゆっくり入れる。そのつもりで湯も張つてあるしな。

「でも…着替えも無いし…」

「ゲスト様の寝巻が置いてある。」

「はあ…左様で…」

「どうした？入るのか？入らないのか？」

私が答えに迷つていいと…

「今入らないなら後でイモ洗いだぞ？」
「いいモは勘弁です！！私は即答する。

「はつ入らせて頂きます！！失礼します。」

私は逃げる様に風呂場へ向かう。

シンプルなバスタブにシャワー。

設備はシンプルだが、広い浴室だつた。

私は洋服を脱いでシャワーを浴び始めた。

体を洗い、バスタブに首まで浸かつた。

芯から温まる…気持ちいい…ああ…顔も洗いたい…

私は皆が付く前に出ようと立ち上がった時…事件は起ころる。

浴槽から片足を出したと同時に、いきなり浴室の扉が開いた。

「おい、バスタオルが無いだ…へつ？」

「……へつ？」

私もKOUJIIさんも石の様に固まる…。

KOUJIIさんの視線は私の胸元…スッポンポンの胸元。

KOUJIIさんはそのまま視線を私の足元に持っていく…

「なつ無い…」

KOUJIIさんは目を丸くして固まる。

「お前…もしかして…」

私は言葉も出せずに固まる。

その時だった。

玄関が開く音がして数人の足音が聞こえる。

「おーい！着いたぞーーー！」

「おじやましまーす。」

メンバーが着いたようだ…。

まつまづい…

KOUJIIさんも慌てた様子で、

「おつおつ。」

つと返事をする。

「風呂があー？」

J E Yさんの声が聞こえる。足音が近づいてくる。

私とK O U J E サンは顔を見合わせる。

J E Yさんは脱衣所の前で止まる。ドアノブが降りる……。

私の顔面から血の気が失せる……

J E Yさんが扉を開ける瞬間、K O U J E サンが浴室に飛び込んできた。

「こつK O U J E サン??」

「あつ。」

私は焦つて体を隠そうとする。でも隠す物が無い……

「なんだあ、一人して風呂か？」

J E Yさんが脱衣所から話しかけてくる。

「あつああ……体が冷えてな……」

K O U J E サンは声を裏返しながら答える。

「だよなあ……水冷たかったもんなあ……俺も入ろうっと……」

ガサゴソ洋服を脱ぐ音が聞こえた……

「あつ！！」

私は咄嗟に声を出した。

K O U J E サンが振り返る。

「悪い……ちょっと由の相談に乗ってるんだ……」

「あつ相談？うーんと……そつか、また後にするよ……。」

「悪いな……」

J E Yさんはリビングに戻つて行つた。

私とK O U J E サンは大きなため息を吐いた……

良かつた……ばれなくて……つて、K O U J E サンにバレた。

体の隅から隅まで見られた……もうお終いだ……

「お前……女だったんだな……なるほど……俺は正常だつたか……」

K O U J E サンがブツクサ独り言を言つていてる。

とつ取り合えずこの場から逃げなくては！！

私はKOUJOさんの脇をすり抜け脱衣所に避難しようとしました。

「おひおこーー！」

KOUJOさんは私の腕を掴む。

「お前… 一体どういうつもりだ？ その体…」

「いえ… これは… あの…」

「答える… “じうこうつもつだ…”

KOUJOさんは鋭い目つきで私に詰め寄る…

「すつすみませーー後で説明するので取り合えず服を…」

私は掴まれている腕を振り払おうとする。

「服つて… あうーーすまん。」

KOUJOさんは私がスッポンポンなのを忘れていた様子で慌てて手を離そうとした。

私は脱衣所に向かおうとした時… 緊張の為か逆上せたのか、浴室の段差に躓いてしまった…

「あつーー！」

私は転んでしまってない。体が宙に浮いている。

KOUJOさんが支えてくれていた。

「すつすみませ…」

KOUJOさんが支えてくれたのは… 私の小さな胸…

私はKOUJOさんに胸を握られながら固まる…

KOUJOさんも私の胸を握り締めながら固まる…

一体どうなってるんだ？？この展開は…

私の意識は一瞬空へ昇つて行つたが、直ぐに正氣を取り戻した。

私は状況を冷静に確認… したくもない。

まぎれも無くKOUJOさんは私の胸をわし掴みしてくる。

「はつ離して下さーー！」

私は掴まれた手から逃げようともがく。

でも、KOUJOさんは動いひとつしない…

「あのおーー！」

私は恐る恐る後ろを振り向く…

KOUJUROさんは…気絶でもしているか、正面を向いたまま白由をむいていた…

「…KOUJUROさん?」

私はもう一度声を掛ける。

「…！」

KOUJUROさんの目に黒い光が戻った。

ああ…これで服が着れる。

「降ろして下さい。」

私はもう一度KOUJUROさんに話しかける。

KOUJUROさんの視線が私を捉える。

「あの、これは…キチンと説明しますから…」

私がKOUJUROさんの腕に手を掛けた瞬間、私はKOUJUROさんに正面を向かされる。

クルッと半回転させられ、私はKOUJUROさんに抱きしめられる格好になつた。

「あつあつ…」

私は恥ずかしいというより頭の中が真っ白。

KOUJUROさんは何を思ったのか、私に顔を近づける。

「やつ止めてください…。」

私は両手でKOUJUROさんの顔を引き離そうとする。

でも、KOUJUROさんに両手首を掴まれ、壁に押し付けられる。

私は体を隠す事も、逃げる事も出来ずに…ただ自然に涙が溢れてくる…

「……泣くな…」

KOUJUROさんが耳元で囁く…あの甘く切ない声で。

でも私は涙が止まらない…

「…もう、泣くな…」

そう言ってKOUJUROさんは私の頬を伝つて いる涙を舐めはじめた…

初めての感覚に私は腰が抜けそうだった…

かつ顔…！舐めた…舐められた…！

私はビックリして涙が止まつた…

KOUJIIさんは涙を舐め終わると、今度は唇を舐めはじめた…

「じつKOUJIIさん…んつ…」

私は口を塞がれ喋る事が出来ない…両腕も動かない…たつ助けて…！
お兄ちゃん…！

私は必死にもがいた…逃げようとした。

でもKOUJIIさんの力が強すぎて逃げられない…

KOUJIIさんは私の口の中に自分の舌を入れてきた…初めての感覚。

な…何これ…私の口中で動くKOUJIIさんの舌…

…頭がボーッとしてくる…気持ちいいかもしない…

男の人でも唇つて柔かいんだな…温かいし…

お腹の下の辺りが疼いてくる…モジモジしていく…

KOUJIIさんは私の口を舐めた後、顔を胸の方へ持っていく…

「ああ…」

思わず声を出してしまつ…くすぐつたい。

次の瞬間、KOUJIIさんの腕の力が抜けてきた。

こつこつこれはチャンス…！

私は近くにあつたボディーブラシを掴む。

「えい…！」

力一杯KOUJIIさんの頭めがけ振り降ろす…

パゴーン…！！

良い音が浴室に響く。

KOUJIIさんの全身の力が抜け、私の上にもたれ掛る…

「じつKOUJIIさん？」

私はKOUJIIさんの顔を覗き込む…

「…！…！」

KOUJIIさんは、また白目を剥いていた…

「ふんつ ザマー 見る!...」

私は浴室にＫＯＯシーハさんを残し、せつと服を着る。

第十四章

私はKOUJIIさんを風呂に残し、リビングに戻った。

「あれ？ KOUJIIは？」

「あつなんかもう少し入ってから出るって言つてました。」

「あつそう…じゃあ俺も入ってこよう…」

そう言つとEYさんは服を脱ぎ始めた。

あつという間にパンツ一丁になると風呂へすっ飛んで行つた…

そういうえば、必死で殴つちやつたけど… KOUJIIさん大丈夫だつたかな…

浴室からEYさんの声が聞こえてくる。

「おつおい！ KOUJII… KOUJII…！」

うーん、力入れすぎたかな…でもアレは正当防衛だよね…

暫くすると一人は浴室から戻ってきた…

EYさんに肩を貸してもらつてはいるものの… KOUJIIさんの足取りは大丈夫そう。

ああ、良かつた…って、正体知られてるんだつた。

詐欺とかで訴えられたり、賠償金請求されたらどうしよう…

「あれ？ KOUJIIどうかしたの？」

何も知らないKAJIさんが尋ねる。

「いやね、風呂入つたらKOUJIIが服着たまんま倒れてるからさ…」

「えつKOUJII、何があつたの？」

「ああ…絶体絶命。」

「…………わからん…」

KOUJIIさんがボソボソ答える。

「はつ？」

「はつ？」

JEYさんもKAJIさんも返す。

「いや……だから、覚えてない。」

「まじで？」

「ああ、由にタオルを持って行って……脱衣所の辺りから覚えてない。なんで服着て浴室に居たのかも……おい由、俺は何やつてた？」

「この人……本当に覚えてないのかしら……」

「えつ？俺にタオル持つてきてくれて……一緒に風呂入つて……少し話した後、俺は普通に出ちやつたんで後の事は……」

取り合えず白を切ておこう。

「……ふうーん……言われてみればそんな気が……」

……。

爆笑が起こる。

「お前ー、自分の行動位覚えてろよー。」

「KOJI君さんつと面白い人ですねー。」

ああ良かつた。無事な上に忘れてくれてるみたいだ。

KOJI君さんは、たちまち顔を真っ赤にして他の部屋へ飛び込んで行つた。

これからはKOJI君さんと一緒にになるのは避けなくては……

「KOJI君さん、始めましょうよーー！」

入浴を終えた雪が、ドア越しに話しかける。

「……先に始める……」

室内からか細い声が聞こえる。

「はあ……じゃあ先に始めます。」

「ああ……」

雪は諦めてリビングに戻る。

「皆さん！これから由くんの初体験の会を始めまーすーーー！」

雪が仕切り始めた。

「とりあえず酒でも飲みながらビデオでも見ましょーーーー！」

それぞれがビールの缶を開けぶつけ合い、一気に流し込む。

さつ酒なんて飲んだ事無い……でも……折角だしチヨットだけ……

私は初めてのビールを一口、口に含んだ……まつマズイ！苦い！

「あて……由……お前つて如何にもつて感じなんだけど一応聞きます。」

「うふ、何を？」

まさかお前は女だろ？なんて聞かないよね……

「お前……まさか女……」

うわ、いきなり！まさか皆も気付いてる？

「ううん……絶対に違う……違う……違う……」

私は大声を張り上げる。

「はっ？ 何が？」

雪は不思議そうな顔をする。

「えつだつて女つて……」

私も不思議そうな顔をする。

「違うつて答えになつて無い。俺は女抱いた事あるのかつて聞こいつとしたんだ。」

「へつ抱いた事……つて。」

「SEXだよ。セ・ツ・ク・ス……お前……あるよなあ……」

SEXつてあの……小学校の性教育で習つた、あの行為の事ですかあ？

私が必死で頭を回転させている時、雪は……

「あつお前まさか……その年で童貞なんて……まさかなあ……」

男の人つて皆そうなのかしら……

「もつ勿論！……当たり前だろ？」

私は虚勢をはる。

「まあ、そりやーそうだ。」

「その顔でチエリーはあり得ないわな？お姉さまたちが黙つて無いわな？」

JEYさんが突つ込んでくる。

「まあ、そりやーモテモテでしたから……」

私が自信満々に嘘を吐くと……

「今日はこの後、綺麗なお姉さん達も手配しついたから…」

えつ今何と？

「ラッキーじゃねえ？みんなモテルとかタレントの卵りしこせー？」

雪が私に耳打ちする。

「何がラッキーなの？」

私は真顔で聞き返すと…

「お前つて鈍いな。」「

雪は呆れ顔で私を見る。

「まあ…後のお楽しみだ…！」

そう言つと雪は酒を飲みほした。

？？綺麗なお姉さんとお酒でも飲むのかしり…ああ、コンパニオン
さん？

暫くするとKOUJOさんが部屋から出てきた。今日は早く回復で。

「お前…わざわざ聞こえてきたけど…おなか…」

KOUJOさんはJEEYさんを睨む。

「えへへーーー当たり！」

「JEEY…勘弁してくれ…」

なんだかKOUJOさんは、うんざつした顔でJEEYさんを見る。

「だつて今日は由君の初外泊だぜ？お兄さんとしては色々な経験を
ね！！」

JEEYさんはニヤニヤしながら答える。

まあ、コンパニオンさんの経験なんてあまり無いだろう…
ちょつと楽しみになつてきた。

「はあ…部屋は汚さないでくれ…俺の寝室も立ち入り禁止だ…」

KOUJOさんは仕方ないつて表情で言つ。

「はーい！ゲストルームだけね…！」

JEEYさんは親指を立てる。

よく解んないけど、KOUJOさんはコンパニオンのお姉さんが嫌
いなのだろうか…

「あれ？由..酒進んでる？」

赤い顔をした雪が話しかけてくる。

「えつあのさ…ビールって苦手みたいで…」

私は一口飲んだだけのビールを雪に渡す。

「そつか…じゃあ俺が飲んでやるから、お前はカクテルでも飲むか？」

「うん、 そうしてみる。」

折角だし、ちょっとお酒の世界を体験してみようかな？

雪は立ち上がり、カクテルを持って現れる。

「はい！一気に行けよ？」

私はカクテルを受け取り、一口飲んでみる。

ゴクッ…あつ甘ーい！美味しい！

私は丁度喉も乾いていたので一気に飲み干した。

「おお！イケるねえー！」

雪はそう言つと、私の渡したビールを飲みだす。よく考えると…間接キス！ちょっと恥ずかしいな。

「はい！おかわり！」

KAJIさんは私に新しいカクテルを手渡す。

「あっすみません。」

さつきとは違うカクテルを受け取り一口飲む。

今度はちょっと苦いけど、フルーツの酸味が効いてる。これも美味しい！

また一気に飲み干した。

「おお…ハイペース！でも綺麗所が来る前に潰れちゃうのは勿体ないからお終いな？」

KAJIさんは私からグラスを取り上げる。

私は自分の顔が火照つているのをKAJIさんに教えられた。なんか、体も中に浮いてるみたい。

皆、酒を飲みながら雑談している時、玄関のチャイムが鳴る。

第十五章

「はーい！」

雪はスキップしながら玄関に向かつ。

ガチャつと開く音が聞こえると、黄色い声が聞こえてくる。

「失礼しまーす」

「お邪魔しまーす」

中には低い声も…

「…失礼します。」

数人の女性 + 二人の男性。

それぞれソファーや床に座り、もう一度乾杯をやり直す。

私は力クテルを貰つてご機嫌。

雪は鼻の舌を伸ばし、J E Yさんは既に口説きモード突入。

K O U J Iさんは隅の方で仏頂面で酒を煽る。K A J Iさんは…隣の美少年と何やら話しこんでいる。

K A J Iさんつて女性に目もくれない…硬派だなあ…

私が感心して見ていると…

「由…今日のK A J Iさんは男なんだって。」

「へえ…つて何が？」

私が聞き返すと、

「あれ？お前聞いてない？K A J Iさんつてオールマイティーらし
いぜ？」

「…何が？」

「あはつお前つて純情なのか馬鹿なのか… K A J Iさんは両方イ
ケるつて事。」

「何がイケるの？」

「…お前は天然なんだな。あのな？男も女も抱けるつて事。いわゆ
るバイつてやつ。」

うわあ……初めてみた。本物のバイセクシャルの人。

「お前は……誰か気に行つた人居たか？」

「へつ？」

「女だよ。女！」

雪はニヤニヤしながら聞く。

「えつ？」

「今日はOKらしいぜ？ゲストルームも4部屋あるらしいし。」

「？？あつ今田つてそういう…」

鈍い私でも気付く。

「お前の外泊記念に特別にJ E Yさんが席儲けたんだ。

皆素人だけど、芸能人だし…ほら、あそこの女の子は次の連ドラ決まってるし、

あそこに居るお姉さんは大御所俳優の隠し子つて噂だぜ？」

「へえ…雪つて物知りだよね。」

私が違う所に感心していると、

「それにお前には関係ないけど、あそこに座つてる男…」

雪が指差した先には、無言で酒を啜る男の人。

「あいつ…見た事無い？」

私は顔をガン見してみた。うーん、覚えが無い。

「わかんない？あいつ…オーディションに来てた奴だぜ？」

「へえー。」

そう言われても…あの時は自分の事で一杯だったから…

「あの後別室に呼ばれて、デビュー決まつたらしいぜ？」

「へえー、そうなんだ。」

あまりピンつと来なかつたけど、言われてみれば居た様な…

「まあ、かなり良い男だけど、なんかK O O J Eさんとキャラ被るもんな。」

まあ、たしかにK O O J Eさんとフインキが似てる様な氣も。

目つきが鋭くて、筋の通つた鼻、影のある空氣…彼も美男子に分類されるな。

「俺らってラッキーだったな。」

「えつ？」

「今回のオーディションはマスコット系が欲しかったみたいだし、つて、自分で言つて悲しくなるけど…あいつは綺麗系だもんな。

「ふうーん…まあ。そういうば…」

私は頷き、貰つたカクテルを空にして、もう一杯注ぎに行こうと立ち上がる。

立ち上ると、足が宙に浮いていそうな…フワフワしていく。
お酒つてこんな感じになるんだなあ。面白いー！

私はキツチンに向かい、自分でカクテルを作ろうとした…けど、沢山ビンが並んでいる。

お酒なんて初体験の私に作れる筈は無かつた…

私がビンを手に取り悩んでいると、後ろから肩を掴まれる。

「おい、そのビンくれ。」

私は振り返ると、あの美男子が立っていて、私を上から見ていた。
背が高いんだなあ…

「えつこの瓶？」

「ああ…それ使いたい。」

彼はビンを持つと、力チャカチャ何か液体を作り始めた。

「そつそれ何？」

「あつ？見りや分かるだろ。う。」

「俺さ…酒つて全然知らないんだよ。」

「ふーん、スレッジ・ハンマー。」

「へえ…これ甘い?」

「いや、あんまり…甘いの飲みたいのか?」

「うん、でも作り方解なんくて…」

「ちょっと待つてろよ?」

彼は何かを作り始めた。

「ほら… これ飲んでみる。」

私は一口飲んでみる。……甘くて美味しい！

「うわー、これ美味しい！なんて名前？」

「これが？カシスオレンジ。」

「へえー、有難う！！」

私は受け取ったカクテルを一気に飲み干した。

「お前、いくら甘いからって…そんな飲み方してると潰れるぞ？」

「大丈夫！グルグル回つて気持ちいいんだ。」

「それを酔うつて言うんだ一般的に。」

「あは！まだまだ！よくテレビだと電信柱に片手ついて…オエエー

つてなつてくるんだろ？」

「おやじか…お前名前何て言うんだ？」

彼はかつこ良く酒を飲みながら質問してきた。

「俺？おれは由子…じゃなくて由だよ。君は？」

「俺はTAKA。本名は鷹。宣しく。」

鷹は右手を差し出してきた。

「うん！宣しくね！」

私は差し出された手をブンブン振りまわした。

鷹はお代りを作ってくれて、

「由はこれをチビチビ飲みなさい！」

つと念を押してきた。

「はあーい。」

つと私は受け取つてリビングに戻つた。

リビングに戻ると人数が減つていた。

つてか1人しか居なかつた。

「ＫＯＵＪＥさん？一人ですか？」

「ああ…皆部屋に籠りやがつた。」

「あつそうですか！－！」

私は自分の顔面が熱くなるのが分かつた。

「でも、確か女性の数つてメンバーより多かつた気が…帰られたんですか？」

「いや、ＪＥＹが三人連れてつた。誰の為に儲けた会だつての…。4人でゲームでもするんですかねえ…広いんだから、リビングでやればいいのに…」

私は四人でボードゲームでもしているんだろうと勝手の解釈をした。

「由つて可愛い顔して大胆だなあ…」

「えつ？だつて折角だし…皆でやつた方が楽しいですよね…」

「まあ…そういう趣味の人も居るが…」

「ねつ俺が呼んできます！！！」

私はイソイソと沢山の声がする部屋に向かう。
知識の無い酔っぱらいは性質が悪い。

「おつおい！！」

なんか鷹が焦つてるけど、酔っぱらつてる私の耳には入らなかつた。

一応扉はノックをした。でも、返事を待つでもなく扉を開ける。
ガチャガチャ……鍵掛けてるし。

私はドアを叩きまくつた。

「ＪＥＹさん！遊ぶなら皆で遊びまし…むぐつ…」

私は後ろから鷹に羽交い絞めにされ、鷹の大きな手で口を塞がれる。
私はそのままリビングに連れ戻された。

私は何が何だか分からずに鷹に問う。

「鷹、なんかマズかった？」

鷹は真っ青な顔して私の頭にゲンコツをきます。

「馬鹿か！最中に呼び出すなよ…お互いバツ悪いだろ？が…」

「あつまあ…集中してる時に水差すのは悪いもんね。」

「当たり前だ。お前だつて突つ込んでる時に声掛けられても無理だ

るつ？」

「…何を突っ込むの？ああ！！黒ひげ危機一髪？」

「はあ？お前は…意味分かんねー。俺は真面目に話してるんですけど？」

「？」

なんだか鷹が怒り始めた。

「えつ私も至つて真面目なつもりなんですが…」

私は怒った男の人怖くて…少し涙目になつてきた。

「お前、何泣いてんの？…えつマジボケ？」

「グスツ…俺、ボケてなんか無いし…真面目に話してるだけだよ。」

鷹は拍子抜けした顔で私を見る。

「…ああ。今、全部理解した。怒つてごめんな?」

「グスツグスツ…」

「ああ…もう分かつたから泣くなよ…」

鷹は私の頭を撫でてきた。

私は咄嗟に体をビクツと強張らせる。

「脅かしちゃつたか。でもチョットは世間勉強しようつな？
説明すると、J E Yさんは今…最中だ。」

「グスツなつ何の最中なの？」

「だからあ、SEXだよ。皆さんで乱交真つ最中なの。スッポンポン相撲やってるの。」

私は少し考えて…何で気付かなかつたのか恥ずかしくなつた。

私の顔が見る見る青ざめるのを見て、鷹が大笑いしていた。

第十六章

私と鷹の漫才の様な話を黙つて聞いていたＫＯＵＪＥさんは、突然立ち上がった。

「俺：何だか具合悪くて…先寝るから。適当にお前らも帰るなり泊まるなり好きにしろ。」

つと言い残し、自分の寝室に入つて行った。

その後も鷹と雑談していたが、何故かＫＯＵＪＥさんの事が気になつた。

あんだけ頭を強く叩いたし、もしかしたら…

私は鷹との話が途切れた時、ＫＯＵＪＥさんの様子を見に立ちあがつた。

「なんだかＫＯＵＪＥさん具合悪そうだし、ちょっと様子みてくるね。」

「ああ、分かった。」

私はＫＯＵＪＥさんの寝室へ向かつた。

「ＫＯＵＪＥさん？」

私はドアをノックしながらＫＯＵＪＥさんに声を掛ける。

でも、ＫＯＵＪＥさんからの返答は無かつた。

私はドアノブを捻つてみる。ドアはすんなり開いた。

私は声を掛けながら寝室へ入つて行つた。

「ＫＯＵＪＥさん？ 具合はどうですか？」

私は盛り上がりがつたベットへ近づいていく。

「…………。」

目の前で話しかけているのに、ＫＯＵＪＥさんから返事は無かつた。

私は最悪の結末が頭を過る。

もしかして、脳内出血でもしきやつたかしり…

もしかして…死んでる?

私の顔色は一気に青ざめる。急いで盛り上がりてる布団を揺さぶる。

「KOUJIIさん！KOUJIIさん！」

「うう…由か？」

KOUJIIさんの声が聞こえた。

「KOUJIIさん？大丈夫ですか？」

「……あ…」

KOUJIIさんは、ゆっくり体を起こす。

私は顔を見て安心した。KOUJIIさんの顔は真っ赤になつて…
そう、何時もの恥ずかしがりだつた。

「KOUJIIさん…もしかして…」

「…あいつ等が泊まりに来た時は何時もこんな調子だから…

お前も気にはせず楽しんで来い。俺の事はほつといてくれ…」

「KOUJIIさん…KOUJIIさんは良いんですけど…女の子…」

「俺は参加しない主義だ。好きな女じゃないと勃たないんだ。」「あつそつそうですか…」

風呂場で勃つて襲つてきた人のセリフとは思えない…

「大丈夫そうで安心しました。俺、戻ります。」

「ああ…女はJEEYが持つてつたけど、終わつた馬鹿女は戻つてくれるかもしれないから、

酒でも飲みながら待つてろ。」

「えつ別に…分かりました。」

私は部屋を後にした。

とにかくKOUJIIさんは無事でよかつた。

私はリビングへ戻つた。

リビングでは鷹が一人酒を飲んでいた。

「KOUJIIさん、大丈夫だつたよ。」

一応鷹にも報告する。

「そうか…分かつた。」

鷹は、興味なさそつた返事を返す。

「さて、なんか女性も居なくなつたし、飲みなおそつか！」

「ああ……そうだな。由どじや花が無いが……まあ、こんな日も悪くないか。」

私は酒の勢いも借りて、男の人と自然に会話をする事ができた。

「鷹も散々だつたな……JEYさんに全部持つてかれて。」

私は鷹をからかう。

「別に……俺はKAJEWさんに呼ばれただけだし。」

私は目を丸くして固まつた。

「えつ鷹つて……そつち系？」

私はマジマジ聞いた。

「べつ別に！俺は早く売れたいんだ。今日だつて本当は来たくなかつたんだ。

でも、事務所に行かないと首位の事言われて……仕方なく。

「へー、じゃあ鷹はノーマルなんだ。」

「ああ。でも男は全然つて訳でもないぜ？何なら為すか？

丁度女は全員持つてかれたしさ！」

鷹は私の頬を軽く撫でた。まるで、私で遊んでいるかの様に。

「ばつ馬鹿！俺はノーマルだ！！」

私は少し怒りながら手を払う。試すなんてトンデモナイ！

「冗談だよ。面白いなお前……」

鷹はクスクス笑う。

それから一時間後、時間は深夜を回り、私の意識も飛びかけていた。目の前はグルグル……幸い吐き気は無いが、どうやらココが限界の様だ。

私は鷹に、

「ごめん鷹、俺……先寝る。」

私はフランフラン起きあがる。

「そりが…俺も明日バイトあるし、そろそろ寝るか。」

鷹も起ちあがつた。

私はフランフランと、空いているゲストルームに向かう。

…でも、何故か鷹は私の後を着いてくる。

「鷹？ なにか様？」

私は振り返つて顔を見る。

「別に…寝るんだろ？」

鷹は自然に答える。

「えつ鷹は一体何処で寝るの？」

「何処つて…ゲストルーム以外何処にあるんだ？」

「でも、ゲストルームつて後一部屋しか空いてないよ？」

「…別に…ベットキングサイズだつたし、一緒に寝ればいいじゃん。

「鷹がトンデモ無い提案をしてきた。

確かに、残っている部屋を私一人で使うのは気が引けるけど…

「いつ一緒に無理だよ！」

私は思いつきり否定した。同じ布団に入るなんてとんでもない。

「別に男同士いいじゃねーか。それに、さつきも説明したけどさ、

俺はホモじやないぜ？

それに、お前みたいなガキじや勃つもんも勃たん。だから大丈夫。

「それが大丈夫じゃないから私も必死なんですが…

「でつでも俺、すつぐく寝姿悪くて…絶対鷹をベットから落とす自信がある！」

「私なりの精一杯の良い訳。

「ああ、大丈夫だろ。ベットデカイし…早く行こうぜ？」

そう言つなり、鷹は私の腕を掴んで寝室に入つて行つた。

ゲストルームの中は大きなベットとテレビが置いてあるだけのシンプルな部屋だ。

私は取り合えず入口付近で立ち竦む。

「お前、何やつてんの？寝ないの？」

鷹はイソイソと布団に潜り込む。そして隣に置いている枕をポンポン叩いている。

「あっああ……俺も寝るよ。」

私はベットの端の方に寝転がった。

「おやすみー。」

鷹は一言私に声をかけた後、直ぐに寝息を立てた。

私は何だか拍子抜けした。心配する事も無かった。

私も早く寝てしまおう！朝になれば携帯だつて返してくれるだらうし。

私も寝る努力をした。そして……酔っている私に眠りは意外なほど早く訪れた。

「んんんー。」

時間は三時。まだ真夜中。鷹がモゴモゴ動き出す。

私は微妙なベットの揺れに一瞬意識は戻つたものの、また直ぐ眠りに落ちた。

「しょんべん……もれそつ……」

鷹はトイレに行きたいらしく、部屋を出て行つた。

暫く経つて、鷹は部屋に戻ってきた。そして再びベットに入る。

大人になると、何故か夜中に目が覚めると、その後は中々寝付けないものだ。

もちろん鷹もそんな感じで一向に寝付けなかつた。

寝る努力をしても寝付けないので、横に居る由を横目で見ていた。

（ふーん、綺麗な顔してんなあ……本当、女みてえだ。まつ毛も長いなあ……）

鷹は寝ている私のまつ毛を指で突つつく。

私は目の周りに不快感を覚え手で擦る。

「ううーーん……。」

そのまま「ロソッ」と鷹の方に寝がえりを打つ。

(面白いかも…)

鷹は私が寝ているのを良い事に、何やら悪戯小僧的な表情で「一ヤ一
ヤ」としている。
意識の無い私は気付くはずもなく、初めての酒は私に深い睡眠をも
たらしていた。

第十七章

私は鷹の方を向く状態で寝返りを打っていた。
鷹は一瞬ビクンとするものの、私の寝息を確認すると一ヤリと笑う。

「いこつ…起きねーな。」

鷹は私の顔をシンシン突く。

「はう…。」

私は顔に違和感を感じ顔を擦る。でも気付かない。

「あはつ」コイツ本当に起きないや…。面白れー。」

一人で笑う鷹。気付かない私。

鷹は私の唇を突く。

「こいつ…ブーブーだし。本当に女みてえー。」

私は唇を触る感覺はあるが、夢の中の為、無意識に口に当たる何かを食べようとする。

私は鷹の指をペロリと舐める。

「あつはあ…」

鷹は体をよじる。

鷹は直ぐに指を離し考え込む。

鷹はもう一度私の口に指を当てる。

私は無意識に鷹の指を咥えた。そして口の中で回す。

鷹の体が微かに震える…

私は夢の中で何かを食べていた。…でもこれ…味がしないなあ…マズイ。

私は、鷹の指に思いつきり噛みついた。

「…！」

鷹は全身を仰け反らせ悶えている。

「まじ痛え…うわっ歯形付いたし…」

鷹は薄暗い室内で自分の指を凝視していた。

「こいつ……ぜってー許さん！って、俺が悪いんだけどや。」

鷹は独り言を呟つと、私の隣に座つた。

そんな鷹に気付かない私。気持ち良ぐ眠りの中にいる。

鷹は私の寝顔を暫く見ていた。

「しかし、男とは思えない。ＫＪに居る以上男なのは確かなんだが

…

鷹はそう咳くと、私の髪に触れる。

「うわっ髪の毛も細いなあ…」

鷹は次に私の頬に触れた。

「ちょっと痩せ過ぎだ。でも綺麗な肌だ…ムカつく。」

そのまま鷹は私の頸を伝い、鎖骨に指を滑らせる。

「スベスベしやがって…あれ？こいつ…喉仏も無い…まあ声は高いけど…

瘦せてる男でこんな出てない奴つて珍しいな。」

鷹はそう言つて、私の布団を少しだめくる。

私は一瞬ビクツつとしたが、また直ぐ眠る。

「…ちょっとだけ…」

鷹は私の胸元のボタンを一つ外す。そして胸を軽く触る。

「あつやつぱり胸は固いや。つて俺正氣か？」

サラシでガチガチに固めた胸は当然固い。

でも鷹はそれがサラシによる物だとは気付かなかつた。

「やべつ男相手に何勃つてんだ？俺つてそつちの趣味あつたのか？」

鷹は暗く独り言を呟く。

「あーー！もう！俺も寝よう！」

鷹は布団を半分以上もぎ取つて布団の中に体をねじ込む。

それから三十分後、私は異常な喉の渴きに目を覚ます。

私はフラフラ布団から出て、リビングに水を飲みに行つた。

「確かあ…テーブルにあつた様な…あつ水発見！」

私はミネラルウォーターを見つけ、一気に飲み干した。

「ゴクゴクッ。ふはーーー生き返った。」

水が喉に染まる。水ってこんなに美味しかったつけ。

私は水を飲み終わると、早く布団に戻りたかった。体が重かつたからだ。

フラつく足取りで部屋へ戻る。

私は勢いよくドアを開け、布団の中へ戻る。

隣からは寝息が聞こえる。

「良かつたー。まだ寝てる…ふああー。寝よつ。」

私の意識は直ぐに無くなつた。

暫くしてＫＯＵＪＥさんが急に田を覚ます。

「つ何だ？地震か？」

急いで体を起こし、辺りを見る。

どうやら地震では無いようだ。

KOUJOHさんは再び布団に体を戻そつとした瞬間、右手に温かい物が触れる事に気付く。

恐る恐る隣を確認する。

「…あれ？なんで由が…」

私は知らずに部屋を間違えていた様だった。

すでにスヤスヤ眠る私を見て、KOUJOHさんは諦めたように布団に潜つた。

「しかし今日は変な日だった。風田で氣絶なんて初めての経験だったし、

記憶障害も初めてだ。しかもトドメに俺の布団に他人が居る。」

KOUJOHさんはぶつぶつ独り言を言つ。

しばらくしてKOUJOHさんも眠りにつき、私は体の窮屈さを感じ寝返りを打つた。

しかし思いつきり寝返つた為、KOUJOHさんの上に乗っかる感じになってしまった。

私は抱き枕感覚でKOUEさんを抱きしめながら眠った。

KOUEさんは息苦しい感覚を覚え田を覚ます。

「んつあつ由の野郎…」

KOUEさんは私の体を突き飛ばし再び眠りの態勢に入る。しばらくして私はまた寝返りを打つた。そしてまたKOUEさんの上に…

しかも今度は足まで絡ませて…

「おいつ由！重い…」

KOUEさんは私に話しかける。でも私は眠ったまま。

「つこじつは…戻れ。」

またKOUEさんは私を突き飛ばそうと肩に手を掛ける。体半分元に戻った所で私は必死にKOUEさんにしがみついた。こんな具合の良い抱き枕…手放してなるものか！

私は力一杯KOUEさんに抱きつく。

「はあ…今日は厄日だ…」

KOUEさんは諦めたように田を開じる。

私は良い気持ちで眠り続ける。なんて気持ちのいい抱き枕なのかしら…

私は枕に顔を擦りつけ、曲げた右足に力を込める。

「あつ馬鹿野郎！なんて所を…」

私の右膝はKOUEさんの股間にクリーンヒットしたらしい。

私の右膝はグリグリとKOUEさんの股間を擦り上げる。

「ああ…ばつ馬鹿由…やめろ…。」

KOUEさんの息遣いが熱くなる。

私は抱き枕に突如発生した突起に膝を掛け、足の固定を図る。

ああ…膝がずり落ちてこない…なんて快適な枕…

私は体が安定した事により一層深く眠りに落ちる。

「まじで…限界だ…」

気の毒なKOUEさんが懸命に闘っているのに、私は追い打ちを

掛けてしまつ。

「ちよつちよつと待つてくれ…」

私はＫΟＵＩｰさんの首に腕を絡ませ、顔をＫΟＵＩｰさんの顔面に擦りつける。

はあー、なにやら良い匂いがする枕だ…

私はグリグリ体を擦りつけた。

「あはあつこつコイツ… 本当は起きてるんじや…」

KΟＵＩｰさんは私の耳元に息を吹きかける… くすぐつたい…

「あ…んんつ」

私の甘い声がＫΟＵＩｰさんの耳をくすぐる… そして…

KΟＵＩｰさんの頭の中で何かが外れた。

KΟＵＩｰさんは私の唇を自分の口で塞ぎ、舌を中心に入ってきた。

私は、甘い何かが口の中で動くので、無意識に自分の舌で追つた。

ようやく捕まえたソレを、私は離すまいと必死に吸いつく。

KΟＵＩｰさんの息は益々荒く、そして熱くなる…。

第十七章（後書き）

書き終わって、何処まで工口っちく書こうか悩み中です。
どなたかご意見、ご感想、アドバイス等々頂けたら幸いです。

第十八章（前書き）

R18表現入っています。苦手な方はご注意ください。

第十八章

koujyuさんは口を離す。

私はひな鳥の様に口をパクパクさせるが、直ぐに寝息を立てる。

「お前…絶対起きてるだろ…」

KOUJUさんの問いに息一つ乱さない私。

「何処までやつたら起きるんだ?」

KOUJUさんは少し笑い、私に体を向ける。

KOUJUさんは私の服のボタンを一つ一つ外していく。
あつという間に、私の上の寝巻を完全に脱がされた。

「なんでコイツは布なんて卷いてるんだ?」

KOUJUさんは私の胸のサラシに手を掛ける。

少し緩んでいたサラシは、いとも簡単に緩み、そして…
私の小ぶりな胸がKOUJUさんの手に飛び込む。

「あつこいつ…マジかよ…。」

KOUJUさんは少し考え、今日の出来事を思い出した。
「そうだ…全部思い出した。」

KOUJUさんは深くため息をつき、私の胸を見つめる。
「…由、続きた。」

KOUJUさんは私の小さな胸の突起を自分の舌で包む。

「うつんつあ…はあ…」

私は体の芯を走る感覚に身をくねらせた…

私は起きるというよりも、体がフワフワ浮いている感じで意識が戻らない。

KOUJUさんは暫く私の胸で遊んだ後、自分の手のひらを私のズボンの隙間に差し入れる。

KOUJUさんの手は、私の下着に差し掛かり…少し角度を変えて突き進んだ。

KOUJUさんの指先に、ヌルツとした感覚が伝わる。

「あつ」

私は殆ど意識は戻っていたが、何故か体が動かせなかつた。頭はぼんやり…でも体は熱く、疼いていた。

KOUJIIさんの指が私のソコを優しく撫でる。

時折音を立てながら動く指の感覚、痛気持ちい感覚に私は酔つた。

「お前は俺の物だ。覚悟しておけよ…」

KOUJIIさんの甘い声が頭に響く。

私はいつの間にか下の寝巻も脱がされ、裸になつていた。すこし肌寒い風が私の体を撫でて、流石に私も目が覚める。

「うん…あつあれ?」

私は自分が裸なのに直ぐ気がついた。そしてKOUJIIさんの腕の中に居る事も…

「なつなんでKOUJIIさんが?」

私は状況が理解できない。

「お前が俺を誘つたんだ。」

「えつだつて私はゲストルームで寝てたはずなのに…」

「お前が…ちつ、もういいから…黙つてろ。」

私はKOUJIIさんに両腕を掴まれ、胸を口に咥えられた。

「あつああ…」

体の芯に響く快感…足をバタつかせて耐える。

「やつ止めてください!人を呼びますよ?」

KOUJIIさんは私に言った。

「人を呼びたいなら呼べばいい。俺は手を離さないからな。お前の恥ずかしい格好を見てもらえばいい。」

そうだった…私は男だと思わせなくてはいけなかつた…

今人を読んだら、お兄ちゃんの顔に泥を…

「くつ。」

私は顔をしかめ、KOUJIIさんを睨みつけた。

「理解したか…唇間の続きだ…」

そう言ってKOUJIIさんは私の胸から顔を外し、さらに下へと進

んでいった。

「きやついいや…」

KOUJUKEさんは、私の一番熱くなっている部分を口に含む。

私は唇を噛み締める。

初めて味わう感覚は、私の意識を吹き飛ばしそうだった。

執拗にKOUJUKEさんはソコを攻めた。私は腰の力が入らない。音を立てながら指と舌で弄ぶ姿に、私は怖くなつて泣きだした。でも、怖いだけじゃなくて、それが続く事を望んでいる自分にも腹が立つた。

「泣くなよ…」

KOUJUKEさんは私の頭を優しく撫でる。

「だつて…私初めてなのに…こんな事つて…」

「初めて…分かった。出来るだけ優しくするから…」

そう言つてKOUJUKEさんは自分のズボンに手を掛け、一気に下まで降ろす。

「！…！」

見た事も無い形が目の前に…

ヤバイ！流石にヤバイ！！

私は焦つて室内を見渡す。…あつ枕元に逃げられそうなアイテムが！！

KOUJUKEさんは私の様子に気付かずに、自分を私の入口に押し当てた。

私はそれを取ろうと、力一杯腕を上に延ばす。

もつもつちよつと…あと少しで手が届くのに…

その時、鈍い痛みが私の腹部に走る。

「ああ…いつたつい！」

私は悲鳴とも思える声を上げる。同時に体が上にずり上がる。

KOUJUKEさんは自身をグイグイ侵入させる。

体に激痛が走つた…なつにこれ…痛い…

KOUJUKEさんは私の中に自分を殆ど入れ終わると、腰をゆっくり

動かし始めた。

ベットが揺れる…ギシギシ音もある。

私は音がするたび激痛に耐えた。そして、少しづつ体がずり上がり、

指先に冷たい物が触れた。私は枕元にあつた電気スタンドに手が届いのだ。

私はスタンドを握ろうと指先で手繕り寄せる。そして、私はスタンドの柄をしつかり握り、KOUJIIさんの顔を睨みつけた。

私は力一杯スタンドを振り下ろす。床に飛び散るガラス。

でも、KOUJIIさんにダメージは無かつた。

「同じ手なんて通用しない。お前は俺の物だ。」

「あっああ…。」

KOUJIIさんのスピードは益々上がり、私も苦痛以外の何かを下腹部に感じた。

二人の息は熱くなり…私は体の奥深くから湧きあがる快感に、声を抑えるのに必死。

シーツを握り、唇を強く噛みながら…私の口角から血が流れる。

「…馬鹿な奴。」

KOUJIIさんは一言呟いて、流れた血液を優しく舐め、自分の舌を侵入させる。

口を開かれた私は、もう声を抑える事なんて出来ない。

そう思った瞬間、自分の中の何かが昇りつめる感覺に襲われた…そして、

KOUJIIさんは体を小刻みに震わせながら果てた。

第十九章

気付くと朝になっていた。

隣にＫＯコ－エさんは居ない。

私はゆっくり体を起こす。

「痛つ」

下腹部に痛みが走った。私が処女ではない証拠。

私の目から熱い涙が流れる。私。無理やり。

それに今頃ＫＯコ－エさんは皆に正体をばらしてるとかも知れない……

お兄ちゃん。『メン……』

私は暫く鳴き続けたが、このままではしょうがないと思い、部屋を出る覚悟をする。

あつと皆に責められる。怖い……

誤つて説明して……とにかく家に帰りたい……

私は涙を拭いて……意を決してドアを開ける。

まぶしい光が目に刺さる。朝日が眩しい。

私はソロソロとビングに向かつ。

「おお！」

雪が私に向かつて声を掛けた。

ビックリと体を強張らせる。

「どうどうした？怖い夢でも見たか？」

雪は心配そうに私を覗く。

「えつ何つて……」

私がオドオドしていると、後ろから声が掛る。

「おい由。朝飯の支度手伝え。」

その声に昨日の恐怖が蘇る。

オドオドしながらキッキンへ向かつた。

「あつあの…」

「お早'づ…」

「あつおつお早'づ…あつま…あつあの…」

私は涙田でく〇〇ヒーさんと話しかける。

「昨日は楽しかったな。」

「はつ？」

「全部覚えてる。何を見たか、何をしたか…何をされたか。」

「あつあの…嘘を付いていたのは誤ります。でもあんな仕打ちって…」

「あれは俺を殴った罰。お前風呂で俺の事殴つたら。」

「おつ思い出したんですか…でもあれって正当防衛つていうか…」

「まあ、やうとも言つたゞな。」

「もう昨日の様な事は止めてください…バラすなら早くバラして…」

「…お前は皆に知られたいのか？女だつて事…」

「そつそんな事…」

「なら黙つてやる。感謝しや。そのかわり…」

「その代わり？」

「俺の言つ事を聞け。」

「えつ？」

「俺が呼んだらすぐ来い。俺が姦りたい時に姦らせろ。」

「ちょっとなんですかソレ…」

「言つた通りだ。」

「そつそんな…」

「返事は早くな…一週間待つてやる。」

「そつそんな…」

KOUJIさんは話しあわるとコンビングに朝食を運び、居なくなつた。

姦らせられて…そんな条件つて…でも断れば全部終り。お兄ちゃん

も仕事クビだらうな…

私は食事中も上の空だった。

「お早'づ'い'やひこまーす!」

雪は元気に事務所のドアを開ける。

私は雪の影に隠れるように事務所に入る。

「おこー! 由ー」

安心する声が聞こえる… お兄ちゃん…

「由.. お前、昨日どうしたんだ..」

お兄ちゃんは私の方を掴みガクガク揺する。

「おつ お兄ちゃん…」

私が答えに詰まっていると、雪が話に割り込んできた。

「S A T O セん.. すいません。電話で話した通り、男だらけのお泊まり会してました!」

「おつ 男だらけ?」

「はー! 僕が由の携帯奪つて無理やり連れて行きました! 由を怒らないで下さい。」

「おつ お前ー!」

お兄ちゃんは雪の胸元を掴んで、壁に押し付ける。

「おつ お兄ちゃんー!」

私は一人の間に割り入る。

「S A T O セん.. 無理やりしことて何ですけど.. ここ年の男が外泊もした事無いなんて…

ある意味不健康だと思います。」「

「ぐつ」

お兄ちゃんは言いつ返す言葉が無いらしい… 言われてみれば確かに不健康だ。

「S A T O セん.. 弟思いなのは立派ですが、つよつと行き過ぎだと思います。」

「……まあ、確かにそうかも知れないな…」

お兄ちゃんは雪から手を離す。

「生意気ってすみません。」

雪は一言お兄ちゃんに詫びると、自分の控室に入つて行つた。

「お兄ちゃん…」

私は怒り心頭のお兄ちゃんに近寄る。そつと肩に触れる。

「由子…大丈夫だったか?」

お兄ちゃん心配そうに聞いてくる。

いつそKOJIIさんとの事を相談しようと思つたが、こんな様子ではKOJIIさんを殺しかねない。

「だつ大丈夫!ゲストルーム占領して早く寝た!」

私は咄嗟に嘘を言つ…お兄ちゃん「メン。

「そつか…良かつた…」

お兄ちゃんは深くため息を付き私の方に頭を乗つけた…

本当は相談したかった。あんな事はもつ…嫌だ…

私はお兄ちゃんの頭を強く抱いた。

私はお兄ちゃんと分かれ、控室に入つていぐ。

入るなり雪が私の目の前で頭を下げた。

「由ー…ゴメンな? SATOさん、怒つて無かつた?」

「えつ大丈夫!ありがとね雪…」

「あんなSATOさん初めて見た。本当に心配なんだな…お前の事

…

「ああ…心配症なんだ。」

「いい兄貴じやん!あつこれ携帯返すな?」

雪は昨日奪つた私の携帯を返してくれた。

「あつ有難う。」

私は雪から携帯を受け取る。

「そういえばお前…せつかくのチャンスだつたのに…残念。」

「へつ何が?」

「何つて…女だよおつんつな!」

「あつああ……雪は大満足そうじやん！早くから消えてたし……」

私はニヤニヤ雪の顔を見た……けど、雪は不機嫌そうな顔をしている。

「俺さあ……緊張して酒煽つて……」

「うんうん、それで？」

「勃たなかつた……」

「……何が？」

「だから！勃起しなかつたの！……最悪だ……」

「つて事は、出来なかつたの？」

私は留めの質問をぶつける。

「ぐー！由つて可愛い顔して酷い事聞くよな……ああ……そりですみ……」

出来ませんでした！」

雪は頬を膨らまして拗ねてる。可愛い！

「そつか！俺も似たようなもんだ！次に期待だ！」

私は落ち込む雪の背中をポンポン叩いた。

その日は一日レッスンだった。

夕方までビックリ身体を動かし大声を出し… クタクタだ…。
私はフラフラと自宅に帰り、リビングに行く。

「あれ? 誰も居ないの?」

静まり返った自宅。誰も居ないみたい。

私はキツチンの冷蔵庫を開け、冷えたミネラルウォーターを一気に
飲み干す。

冷蔵庫の扉を閉めると、そこにはメモが貼つてあった。

『お爺ちゃんが入院したそうです。お見舞いに行つて来ます。
明後日には帰るから、一人で待つて下さい。』

お爺ちゃん… 心配だな。

私はお母さんの携帯に電話を入れる。

「もしもし… うん、そつか… はーい。」

お爺ちゃんは大した事ないみたいだけど、暫く泊まつてくるって。
お兄ちゃんと一緒にあ…まあ、お兄ちゃんが居れば何も怖くはない
けど…

私は病状が心配無いと聞き、安心した。

とりあえず汗だくの身体を洗いたくてお風呂に入る事にした。
浴槽に熱いお湯を張り、首まで一気に浸かる。

「ふあーーあ… 癒される…」

こうしていると… 嫌な事まで忘れそうだ。

でも… 昨日は色々あつたな… あんな事が無ければ楽しかったのに…
楽しかった?

私… 楽しんでた?

ちょっと前までは、男の人だけじゃなくて家族以外全員怖かった。
でも… 今は普通に話して、一人で電車にも乗れるようになった。
多分、雪が親切してくれたお陰、お兄ちゃんが背中を押してくれ

たお陰。

私つて、数人の人達の為に、なんて人生を無駄にしてたんだろう。
怖がらないで一歩踏み出せば…もつと違った人生が待ってたんだ。
有難うお兄ちゃん…雪。

でも、この先どうしたらいいんだろう…

私、ＫＯＵＪＥさんの言つとおり…した方がいいのかな。
お兄ちゃんに相談しようか…

お兄ちゃん、私の事嫌いになるかな。

そうだよね、汚れた妹なんて…痛々しいよね。

私は浴槽の中で考えた。考えて…頭がフラフラする。
頭がボーッとして…やばいって分かってるけど、身体が…動かなくて…
助けを呼ぼうにも…誰も居ない。どうしよう…

私の意識が…薄れていぐ。

「よ…こ…由子！大丈夫か！」

お兄ちゃんの声…

私は目を覚ます。

おでこには冷たいタオル。

クーラーの効いたリビングのソファード、全身を冷やしてくれている。

「お兄ちゃん…有難う。」

私は身体を起こす。

「由子…いい年して何やつてんだ…心配させやがって。」

「「「めん…お兄ちゃん。ちょっと考え事してて…」」

「…仕事、上手くいってないのか？」

「つづん…皆優しいよ…昨日だつて楽しく…樂し…」

私は…言葉に詰まる。

いつそ相談しようか。誰かに話したら楽になりそう。

「…昨日、本当は何かあつたな？」

「…ＫＯＵＪＥさんに女だつてバレた。」

「…そうか、それで？ＫＯＵＪＥは何て言つてた？」

「…別に。」

「別について事無いだろ？黙つてるとかバラすとか。」

「一応黙つてくれるつて。」

「そつか…もし何か言われたり要求されたら俺に相談しろよ？」

俺は仕事首になつたつて構わないんだから。」

「首つて…そんなの駄目だよ！お兄ちゃんが頑張つて手に入れた仕事なのに…」

「やつぱり…お前、何か言われたんだろ？」

お兄ちゃんの誘導作戦に引っ掛かつてしまつた。

「べつ別に！…なんで…も…」

思い出すと怖い。昨日の事。でも…言えないよ。
恥ずかしくて情けない。無理やり犯されたなんて…やつぱり言えないよ…

「由子…！お兄ちゃんに隠すな！」

お前をＫＪに入れた時から、ずっと覚悟はしてたんだから…」

「…だつ大丈夫！ただ私の美声を手放したくないんでしょ？…もう、心配症なんだから。」

「由子…お前がそう言つならこれ以上聞かない。でも、何かあつたら直ぐ相談しろよ？」

「分かつたつて…！有難う。」

お兄ちゃんはそれ以上聞いて来なかつた。

「…もう、大丈夫か？」

体調を気付かってくれるお兄ちゃん。

頭は少しボーッとしてるけど…身体はひんやり冷えて…むしろ寒い。

「…寒い。」

「…すまん、ちょっと冷やしそぎたかな?」

お兄ちゃんはそう言つて、私にパジャマを渡してきた。

一重に着ろつて事?

私は自分の体を見て…驚愕する。

私…素っ裸じやない!

まあ…風呂で倒れたんだから最初は裸だらうけど…

「もあーーー!上に何か掛けてよー!」

私は恥ずかしくて一本の腕で身体を隠した。

「だつだつて!早く身体を冷やさないとつて……なあ、お前、これ

何だ?」「

お兄ちゃんは私の胸を指差す。

そこには…赤くアザになつた…キスマーチ。それが何個も。

「こいつこれは…ぶつけたの。」

「…ぶつけた?小さく何度も?」

「そつそつ!痛かつたなあー。」

…ちょっと無理がある?

お兄ちゃんは、胸を隠している私の両手を握り、上に持ち上げる。

「ちよつ…やあ!!恥ずかしいから!!」

力強く握られた手は、私には解けない。

「昨日…何されたんだ?正直に言え…」

「…何も。」

「嘘はやめろ!…誰に付けられた?こんな…何回も…」

「…言わない。」

「なんで?何で俺以外にこんな事…」

俺以外つて…お兄ちゃん、日本語が変ですが?

「言わない言わない言わない…」

呪文のように繰り返す。言えないよ…無理やり奪われたなんて…

「くそつ!…俺のせいだ…俺の…」

お兄ちゃんは…苦痛の表情で泣いた。

「お兄ちゃん…お兄ちゃんの所為じゃないよ?ただ私が不注意だつ

ただけ。」

「誰だ？お前にこんな…殺してやる…お前を言ふ。」

お兄ちゃんの見た事のない表情…怖い。

「お兄ちゃん…お願い。怖いから…」

「殺してやる…俺がきつちり罰を『えてやるか』、お前教える…」

「言わない…絶対に言わない…」

こんなお兄ちゃんに教えたらい…本当に殺しに行きそ�で…

「由子、お前は平氣なのか？悔しくないのか？」

「悔しいよ？怖いし痛いし…苦しいよ？

でも、お兄ちゃんが犯罪者になるのはもっと嫌…私が我慢すれば…」

「馬鹿か！…また他の奴に姦られるのを黙つていろつて言つのか？」

「…でも、お兄ちゃんが居なくなる方が嫌。」

「くつそんな…俺の所為で由子が…俺の由子が…」

「ごめん、それに私は我慢できる。大丈夫。」

「犯されるのを我慢できるのか？それっておかしいだろ？」

「…我慢、できるよ。」

昨日の事…最初は痛かつた…でも、痛いだけじゃなかつた。

最後は…頭がボーッとして…良かつたのも事実で…お兄ちゃんには言えないけど。

「由子…お前。平氣なんだな…男に姦られるの…」

「平氣な訳…ない。ただチヨツト…」

お兄ちゃんの顔色が変わる。

「お前、おれがどんな思いで我慢してたか分かるか？」

田の前に素っ裸で倒れてる女田の前にして…それなのに…俺の気持ちが解るか？」

…分かるよ。心配してるんでしょ？

ああそつか…心配してたのに私が名前教えないから起つててるんだ…貞操觀念の薄い妹を怒ってるんだ。

「ごめん、心配しなくて大丈夫…悩まないでいいよ？」

お兄ちゃん…私の事でそんなに悩まないで…

私、お兄ちゃんが怒つてる姿なんて見たくないの。

「俺がどんなに我慢してたか…お前に分かるか?なに?」

「もう我慢しなくていいよ?」

お兄ちゃん…もう自由になつていいよ?

私の為に…馬鹿な妹を心配してる時間を、自分の人生に使って欲しい。

「……分かった。もう我慢なんてしない。おれは自分のやつたい様に姦る。」

インストネーション間違つてない?

お兄ちゃんは、私の腕を握つている手に更に力を込める。

「おっお兄ちゃん?」

「いいんだろ?我慢しないで。」

「?/?まあ、やつ言つたけど。ヒツヒツかく服着たいから手を離してー」

「…無理。」

「はつ?意味わかなな…ふぐつ」

お兄ちゃんは…私の口を塞ぐ。血の匂いで。

第一十一章

お兄ちゃんは私の膝を割つて、自分の腰で自由を奪つ。
止まらないキス。お兄ちゃんの唇の感覚が私の五感を奪つ。
柔らかくて…包みこんでくれる様な優しいキス。でも…

「お兄ちゃん??」

私は口をすらし、お兄ちゃんの目を見る。

兄弟でキスつて外国じゃないんだから…!!

でも…お兄ちゃんの見た事もない表情…何だか、凄く悲しそう。

「お兄ちゃん！手を離し…むぐつ。」

再び覆い被さる唇。

怖い…何時もの優しいお兄ちゃんじゃない。
やつ止めて…嫌いに…なるかも。

両手に力を込める。でも…ビクともしない。
なんだか…昨日のＫＯＫＩさんとの事がフラッシュバックの様に
蘇る。

お兄ちゃんは深く私に侵入した。

口の中を泳ぐ舌。

気持ち悪…くないかも。

でも、兄弟でこんな事…出来る筈が無い…!!

お兄ちゃんは私がモーモーハ文句を言つても、両手の戒めを緩めてくれない。

そればかりか…私を片方の腕で制圧して…片方で私の内腿を触つて
る。

「お兄ちゃん…嫌…やめ…ふうん。」

お兄ちゃんの指が私の薬を…パリシッ！と下腹部に電気が走る。

もつ…これはスキンシップの域を超える。

これって、恋人がする行為。どこの世界でも兄弟ではない行為。

「おっお兄ち…グスシ…離して…」わ…怖いのおーフウッグ

スッ。」

何だか、怖くて泣けてきた。

こんな…お兄ちゃんじゃない…！

私を守つてくれた、優しいお兄ちゃんじや…

今までの優しさが嘘に思えぢやつから…お兄ちゃんを嫌いになりたくない。

お願い…苦しめないで…

私が泣きだして、急にお兄ちゃんの理性が戻つてくる。

お兄ちゃんは私の手を離し、私の上からも退いた。

「…俺、どうかしたた。『メン。』

私は、何も話さない。というか、何を話していいか分からなかつた。

「…顔、洗つてくれる。」

お兄ちゃんは部屋を出て行つた。

お兄ちゃんの居なくなつたリビング。静まりかえつてゐる。

時計の音が力チカチ聞こえて…今までの事が夢だつたと錯覚する程静か。

お兄ちゃんは…私が好きなのかな？妹として…それとも女として…もつ、どうしたらいいか…

ひとつあえず…パジャマで武装しよう。

顔を洗いに行くと言つたお兄ちゃんは、お風呂に入つていたみたい。

脱衣所の扉が開く音がして…パタパタと歩く音。

お兄ちゃんが出てきた。

私の体は一瞬で緊張する。

もしさた…あんな事されたら?

また泣く?それとも…受け入れる?

嫌われたくないなら、お兄ちゃんの望み通りに…

でも、それをしたら兄弟では困らない!

“ひしめい…ひしめい…”

お兄ちゃんの足音は、リビングの扉の前で止まる。

私は扉が開くと思い、思わず身構える。

「…由子、『めんな…』」

お兄ちゃんは一言呟いて一階へ上がりで行った。

私はホッと胸をなでおろす。

…良かつた。

私は、お兄ちゃんの部屋のドアが閉まる音を確認して、自分の部屋に行つた。

ベッドに飛び込み…深く息を吐いた。

落ち着く…自分の空間。

何だか、ＫＯショーカーとの事も、お兄ちゃんとの事も…静だつた様に思える。

とにかく寝よう。

寝て忘れてしまおう。今だけは…

でも、お兄ちゃんが隣に寝ると寝付けない。

お兄ちゃんの部屋からも、時折物音が聞こえるし…

お兄ちゃん…今何考えてるんだろう。

お兄ちゃんも苦しいでるよね、きっと。

何時も私を助けてくれたお兄ちゃん…きっと私の側に居て欲しい。

お兄ちゃんを困らせたくない。

今度、お兄ちゃんが私を求めたら……もしかしたら感じてしまつかも……
さつきは咄嗟の事だつたし……少し怖かったけど。

何よりもお兄ちゃんに抱かれる怖さより、嫌われる方が怖い。
それには、さつき……お兄ちゃんの中に異性を感じてしまった自分も居たの。

もう一考へても分かんない……とおりあえずは現状維持で……
つと、自分なりの解釈をした瞬間、私の携帯電話が鳴った。

画面には雪の名前が映つてゐる。急いで電話に出た。

「もしもし？ 雪？」

「……俺。」

俺？ どちら様？ 雪より声が低い様な……

「お前、もう忘れたのかよ……鷹だよ……」

「……あつそりいえば……鷹に似てる。」

「似てる？ 本人だつちゅーの……ぎやははははー……」
なにやら電話口は盛り上がつてゐる。

「……何？」

君たちは楽しそうでいいね……ととけようと妬みを込めて喋る。

「いやあ、雪からお兄さんの事聞こえて……ちょっと心配で電話した。」

「鷹……いい奴！ ……ごめん、あんな口調で喋つて。

「だつ大丈夫！ 大丈夫……だよ……」

なんだか鷹の優しさが染みる。

「……お前も今から来る？」

「くつ何処に？」

「事務所の近くの居酒屋……雪と一緒に飲んでる。昨日の残念会だ。

「……どうじょうかな……」

今、ちよつとそんなワインキジや無いし……お兄ちゃんも心配だし……

「お前、本当は冗談とやり合ったんじゃないのか？声暗いし……」

「やつやつやり合つた？まだ姦つてません！！！」

「なつ何を急に！そんな訳ないだろ……」

「私は声を大にして否定する。

「そつか！ならいいけど…大丈夫か？」

鷹：優しいなあ…

「うん…だつだいよう…ぶ…グスつぶええええ…」

下品な鳴き声を挙げた。だつて…鷹が優しくて、急に緊張の糸が…

「なあ、お前の家って何処なの？」

「えつ？ ×区の×だけど…」

「分かつた。ブツツーツーツー…。」

電話が急に切れる。…嵐の様な電話だ。

あつしまつた！！住所教えない方が良かつたかな？

だつて…家では普通に女の子だし…もしかして…家まで来ちゃつたらどうしよう…

おつお兄ちゃんに聞いて…って、今聞ける状況じゃない…どうじょうう。

私は万が一の為に、軽くメイクをしておいた。

メイクしておいて良かった。

案の定、鷹がやってきた。

私の携帯が鳴る、今度は知らない番号。取り合えず電話に出る。

「はい？」

「俺！」

「…もしかして、鷹？」

「おお！今度は一発正解！」

「…何？」

早く帰つて…と言わんばかりの低い声…自分なりにだけど。

でも、鷹は私の口調に気付き、急に真面目に話しだした。

「なあ…ちょっと外出でこいよ。」

「えつ！こんな時間に？」

「こんな時間つて…お前、本当に箱入り息子だな。

まあ、とにかく、客が来てんだ。普通、家に入れるかお前が出てくるか…礼儀じやね？」

まあ、そう言われてしまつと。でも、この家に入る訳には…

「分かつた。今行くから。」

私は電話を切る。

お兄ちゃんに気付かない様に階段を下りる。

静かに玄関の扉を開け、外で待っていた鷹に近寄る。

「折角来てくれたのに悪いんだけど、今うちの中人様を招待できる状態じやなくてさ。」

「ああ、急に来たしな。まあ、とりあえず歩かねえ？」

「…ああ、そうだね。」

私はチラツとお兄ちゃんの部屋を見上げる。寝ているのか真っ暗。ちょっとと位なら平氣かな？

それに、深夜外を歩くなんて危ないと思つたけど、一見逞しい男が一緒なら大丈夫。

私は鷹の後ろを付いて行つた。

私たちの姿が家の前から完全に消えた時、お兄ちゃんの部屋に電気が付いた。

お兄ちゃんはカーテンを開け、私たちが歩いて行つた方を見つめていた…

第一十一章（後書き）

お兄ちゃん…なんだか可哀そうな感じです。
作者の気持ち次第ではあります、そのつけあつと…

第一十一章

私と鷹は、近くの公園のベンチに座った。

「なあ……何かあった？」

「鷹が優しく聞いてくる。

「んつ？まあ……兄弟喧嘩だよ。どこの家庭でもあるだろ？…」

「…昨日の事か？」

「うーん、まあ色々な！でも、もう大丈夫だから。」

「…話したくないなら聞かないけど…遠慮せずに相談しそうよ？」

「…ありがとな！」

私と鷹は、くだらない話をし、私の家まで送ってくれた。

「じゃあ、またな！…今日は有難う。」

「おう、お互いでビデオ前で忙しい身だけど…頑張ろつね…」

「ああ。頑張ろつ！」

「これからは、友達兼ライバル！…」

鷹は自分の右手を差し出す。

「うん！友達兼ライバルな！…」

私は、差し出された手を力強く握り返した。

玄関のドアをそっと開け、忍び足で一階に上がる。

自分の部屋に滑り込み、物音を立てない様に布団の中に潜つた。

隣の部屋からは…何の音もしない。

お兄ちゃん…寝ちゃったのかな？

私は目を閉じ今日の事を考えて…

お兄ちゃん、なんであんな事したんだろうなあ。

多分、今こいつも解らないや。もう、取り合はず寝ます……。

翌朝、田覚ましの音で起きた私は、下のリビングに降りてこべ。

電気も点いてない…お兄ちゃん、まだ寝てるのかな?

私は起こして行こうと思つたけど…ちょっと勇気が無いや。

朝食を済ませ、厚化粧を施す。

…お兄ちゃん、まだ起きてこない。物音もしない…

私は、恐る恐るお兄ちゃんの部屋のドアをノックする。

「おひお兄ちゃん…起きていぬ。」

…部屋からの返事は無い。

「お兄ちゃん? 開けるよ?」

私は部屋のドアを開ける。

そこにはお兄ちゃんの姿は無かった。

キチンと整ったベット。寝ていた形跡は無かった。

お兄ちゃん…あれから出掛けたのかな?

お兄ちゃんも気まずかつたのかな?

私は遅刻しそうだったのに、深く考えずに家を出た。

事務所に着くと、雪が出迎えてくれた。

「おはようー! 田ー。」

「あーーお早づ雪。」

朝から元気な雪を見ていると、私の気持ちも元気になるねー。

今日は朝からレッスン!

午前中は歌。午後はダンスとハードスケジュール。

でも、お兄ちゃんと顔を合わせる心配が無くて、少し楽…。

雪と一緒に、事務所の車に乗り込み、スタジオに向かった。

午前中は、喉と腹筋を酷使、午後は身体全体を酷使。
芸能人って…思つたより楽しけないね。ふう。

今日のスケジュールを終え、私はスタジオの端に座り込み、
身体を雪と雑談していた。

「雪ひて、妹と仲つて良く無いんだけ？」

他の兄妹つてどうなんだろ?…。

「妹お? もう最悪だよ…って、俺が一方的に嫌われてるんだけどな。

「……あつあのを…キンシップなんてする? ほつほり、俺の所は
男兄弟だからや。」

「いや…まず無い。ってか、俺が肩なんて叩こうもんなら…」

「…? もんなら?」

雪は握り拳を私に向けて、真剣な顔で言い放つた。

「グーだ。渾身の力でグーパン!!」

「…へつへえー。そつか…。」

なつなんとパワフルな妹さん。

「つてか、兄妹なんて皆そうだろ? まあ、俺ん所は特に妹が恐ろし
いから…この前なんて…。」

雪は、妹との壮絶バトルを聞かせてくれた。

普通、兄妹なんてこんな感じなのかな? 私たちが特別に仲が良いつ
てこと?

私が手の掛る妹だったから? 引き籠りだったから? それとも…
お兄ちゃんが私に対して、兄弟以上の感情を持つていいから?

私と雪はスタジオで分かれ、私は電車で帰宅した。

玄関の扉を開けると、家の中は真っ暗だった。

お兄ちゃん、まだ帰つて無いのかな？

私は、帰つてくる途中に買った弁当を食べ、お風呂に入った。

風呂から上がつてもお兄ちゃんの姿は無く…

私は、お兄ちゃんの帰りを待たないで寝てしまった。

だって…顔合わせても、お互い気まずいだけでしょう？

私は、レッスンの疲れもあり、すぐ寝付いて翌朝まで起きなかつた。

その後も、お兄ちゃんと顔を合わせない日は続いた。

どうやらお兄ちゃんは、家に帰つて来ている様子が無い…

お兄ちゃんは毎日仕事場には顔を出している様だから、私に逢いたくないんだろうな…。

そんな日が数日続き、両親が自宅に戻つてきた。
そして、両親が帰宅すると同時にお兄ちゃんも家に帰つてくる様になつた。

一見は、何事も無く、以前と同じ光景に戻つた。

お兄ちゃんも、あえて私を避ける様な態度は見せず、以前と変わらない。

でも、私はあの日以来、お兄ちゃんを少し警戒する様な態度を取つてしまふ時があつて…

その度、お兄ちゃんは少し悲しげな顔をする。

今日も、何時もの様に事務所に顔を出す。

そして、何時もの様に雪が私の所に駆けてくる。

「おいつ！由！聞いたか？」

「…今事務所に着いたのに、聞いてる訳にでしようが！」

「あつそつか……んじゅあ、早くマネージャーに聞いてくれ……俺、待つてるから!」

雪のハシヤギ様、多分相当良い事が有ったんだろうな……

私は、Kのマネージャーの所に顔を出した。

「お早いります。」

「おお…由ーおはよー!」

「あの…さつき雪が話を聞いてこいつて…何かあつたんですか?」

「おっ早速本題だね!…『ホンー実は…。』

溜めるマネージャ。

「実は?」

「実はね…由と雪のメディアデビューが決まりました!!」

「…メディア…って事は…テレビですか?」

「そう!…テレビ出演決まりましたよーーー!」

わつ私がテレビに出るの??

アイドルグループだから当然つちやあ当然だけど…

「あの…どんな番組ですか?」

「なんか…反応薄いね?まあいいけど?あのね…歌番組ですよ…」

「うつ歌?」

「そう、歌。まだ新曲の歌い込みはやつてないから、既存の歌をメンバー全員で歌うんだ。

取り合えず顔を知つてもらおうって事でねーー!」

「そつそつですか…。おっ俺…上手く歌えるかな…。」

「ちよつと…毎日ボイトレしてゐでしょ?」

「まあ…。」

「収録まで一週間しかないけど、頑張つてねーー!」

私はマネージャと分かれ、雪の元に戻つた。

「雪…話聞いてきたよ。」

「なつビックリだろ？もつデビューだぜ？さすがKJ。」

「まあ… そうだね。… 雪は楽しみ？不安は無いの？」

「不安？そりやなあ… 当然ある。」

「不安があるのに… 雪つて凄いね。俺は… プレッシャーで死にそうだ。」

私、正直不安で押し潰されそうだった。

収録で失敗したら？歌、間違えたら？

「… 由、最初は誰だつてプレッシャーが有るのは当たり前。でも、乗り越えられれば… 多分それは自分の自信になる。自分に返つてくる。」

「悩んでないで、一緒に我武者羅に頑張ればいい！！！」

雪の、目から炎が出そうな気迫に、私の緊張が解けた。

私つて、本当に雪に助けられてばっかりだね？

もつと… 早く雪に逢いたかったな。

私が引き籠りになる前に、そして… アイツじやなくて、雪を好きになりたかった。

雪だつたら… 女の子の気持ち、大切してくれそう。

あれつもしかして私… 雪が好き… なのかな？

その日は午前中歌のレッスンに行き、午後はオフだった。

私達は張り切つてレッスンを受け、クタクタでスタジオを出た。何時もならレッスン後に雪と雑談するんだけど…

今日は用事があるらしく、雪は早々と帰つて行つた。

私は一人、スタジオから駅に行こうと思いバス停に立つていると、一台のスポーツカーが停留所に止まつた。

窓ガラスが開き、一人の男が声を掛けってきた。

「おい、由。ちょっと付き合え。」

人間の行動まで支配する声…KOUJO-Eさんだつた。

私は言われるがままに、車に乗り込んだ。

KOUJO-Eさんは私を連れて自宅に戻った。

リビングの大きなソファーに座り、KOUJO-Eさんは私にビールを手渡す。

疲れもあつて、私は貰つたビールを一気に流し込んだ。

「…由、この前の返事、聞かせろ。」

「…この前つて…あつ…！」

わつ忘れてた…今日が返事の期限だつた。

「お前、まさか忘れてないよな？」

低く、そして有無を言わせない声。

「わつ忘れてません。でも…まだ結論出てなくて…。」

私の曖昧な返答に、KOUJO-Eさんは少し苛立つたようにフウッつと息を吐いた。

「…今すぐ返事しろ。期限は『えたんだ』。」

「…。だつて…」

「俺の言う事を受け入れるか、家族を借金塗れにするか…今、決めろ。」

そんな、今すぐなんて言える訳無い…！

好きでもない男を受け入れるなんて…出来ないよ。でも、家族に迷惑掛けたくない。ビリijoつ…。

「…返事が無いって事はこのって事か？」

「……。」

答えられない以上、沈黙するしか無かった。

「解った。じゃあ…BYE。」

KOUEさんは俺に別れの言葉を告げると、自分の携帯を取り出し、電話を始めた。

『KOUEです。…ああ、由の事で話があつて、今時間大丈夫ですか？社長。』

「…この男、社長に告げ口？信じらんない…」

「…ちょっとチヨット待つてください…。」

私は慌てて携帯を取り上げる。

「…何だ？俺の言いなりになるのか？」

私は、少し考えてから結論を口にした。

「はい、KOUEさんの言つとおりにします。」

「…懸命だ。」

KOUEさんは携帯を取り返し、通話を切つた。

「由、今日からお前は俺の物だ。ほかの男に触らせんなよ。」

「…な…でわた…し？」

「あつ？何言つてんだか聞こえねえ。」

「何で…私なんですか？KOUEさんなら、もっと美人の人でも寄つてくるじゃない！」

何で私なの？一晩の過ちなら解るけど…なんで私に執着するの？貴方なら美人の相手、いくらでも居るじゃない！！！

「…解らない。お前だけだつたんだ…。」

「何が…ですか。」

「…お前だけ、抱きたい、抱けると思つたんだ…。」

何か、よく解らない理由。

「私だけですか？」

「お前以外、勃たなかつた。前は誰でも良かったのに…今はお前にしか勃たないんだ…。」

それつて…イ ポつて奴? んつ違うか。
この前、私の事無理やりしたもんなん…。私にしか…勃たないって言つてたし。

「考えるな。今言つた事は忘れる。それより…早く姦らせや。」

「はつ?」

何を言われたのか理解しようと考えていたと、私の上元KOUJO-Eさん
さんが覆い被さつてきた。

「IJKOUSHOさん!! やめて下さっこ…!!」

「ああ? さつき俺の物になつたんだろう?」「

「でつでも!! 心の準備といつか…身体の準備といつか。」

「んなもん、要らねえだろ。」

KOUJO-Eの舌が、私の口内を犯す。
捩る舌が、なんとも卑猥な音を立てて…

私は、深すぎる口づけに息が出来なくて、顔を横に背けた。

「あつあの…せめてお風呂に入らせて下さい。レッスンしたままで

…。汗臭つんんつ!!!!」

私の言葉を遮る様に、また舌が侵入してくる。

口内を凌辱され、私も心外だけど、下腹部が熱くなってきた。

さつきよりも長く舐められ、私は窒息寸前で解放された。

KOUJO-Eさんは、私をお姫様抱っこ状態で、自分の寝室に連れて

行つた。

「 IJハ KOUHCO-HOさん! お風呂を…。」

せめて、 IJの汗臭い身体を流したい…!!
でも、私が暴れたもんだから…足でKOUHCO-HOさんの脇腹を蹴つてしまつた。

KOUHCO-HOさんが、私の眼を睨んでくる。

「 … 風呂は駄目だ。」

一言で却下された。

「 わつ私も女の子だし…せめて汗の匂いは落としたいんですね…。」

最後の抵抗。

「 … 汗臭いのも、中々良いぞ?」

はい、また一言で却下。

私はKOUHCO-HOさんのベットの上に投げ飛ばされ…朝までずっと抱かれた。

何回も何回も…私が気絶しても、起こされては行為が始まる。

体中が快感に染まり、私は見ず知らずの世界へ引きずり込まれる…。

とつとつドロココの提案を受け入れてしまいました。
あーあ。

第一二三章

朝までKOUJOHさんに抱かれた。

体力は限界、意識も朦朧。

私はシャワーを借り、全身を洗い流す。

正直忘れたかった。KOUJOHさんに抱かれていた事。

強めに身体を擦る。皮膚が赤くなる程に…。

気持ち悪かつた訳じゃない。むしろ行為の最中、身体は喜んでいた。でも、人間つて割りきれないよね…好きでもない男に抱かれるって…。

それに…多分だけど私…雪が気になつて仕方ないの。

いつも優しい雪。

たまにキツイ言葉もあるけど、それは私の為の言葉。

いつも雪に救わっていた。

助けて貰つた故の感情かもしれないけど…今雪の事を考へるとドキドキする。

それつて恋つて言わないかな?

私の中では、雪が王子様だった。

だからこそ、KOUJOHさんに抱かれている事が罪悪感の様に感じてしまつた。

そして、KOUJOHさんの行為で感じてる自分にも嫌悪するの…。

私はシャワーから上がり、リビングに行つた。

KOUJOHさんはビシッとスーツを着ていて…ちよつとカッ「良かつた。

朝日に光る髪が揺れて…絵画の様。

この人に…抱かれてたんだ。

……うつ！無し無し！！嫌々抱かれたんだから…！

KOUEさんは私に気付くと、一杯のコーヒーを差し出してきた。
私はそれを一気に飲み干し（熱かった！）、何も喋らずソファーに座った。

「……腹…。減つて無いか？」
いきなりの言葉。

「・・・はつ？…別に。」

貴方とは恋人でも友人でもありませんって感じ。私は人身御供の心境なのに。

「…ならいい。早く支度しろ。」

「はい？何でですか？」

「今日からメンバー全員での歌合せだ。お前待つてたら遅刻しそうだ。」

「はあ…。そうですか。先に行つて下さつて結構です。」

今更優しい気遣いですか？別に待つてなくとも結構ですよ。

「…早くしろ。」

まだ…。

この支配声。面白く無かつたり、都合が悪いと何時もこれ。

「はーい。直ぐ支度します。」

ご機嫌損ねると後が怖い。

私は急いで支度に取りかかった。

時間にして30分程。私は男子に変身した。

どっから見ても男！最近は化粧にもなれたな…！

私は荷物を纏め、玄関で待っていたKOUEさんの元に小走りで

行つた。

「…遅い。」

たつた一言でKOUEさんが苛立つてるのが解る。声が凄く低い。
「すみません。これでも早く終わつたんですけど…。」

「…早く靴を履け。俺まで遅刻する。」

これ以上刺激しない様に素早く靴を履く。

一緒に駐車場まで降り、一緒に車に乗り込んだ。

私は一人でスタジオに行くつと言い張つたけど、KOUEさんが強制的に乗せた。

初日から遅刻したら大変な事になるつて脅すから。

一般道をかつ飛ばすKOUEさんの車。

高速道路じゃないのに物凄いスピード…。死神の足音聞こえますよ

…。

出発の後れを取り戻し、集合時間内に到着。

私はヨロヨロした足取りでスタジオに入った。

「お早うございます。」

新人はまず丁寧な挨拶…！基本。

「おはよーー！由！！ドキドキするなーー！」

目を輝かせた雪が犬の様に走つてくる。

可愛いいくつて、凄く元気！こっちまで元気になるね！

「俺さあ、昨日緊張で寝れなかつたよ。でもテンションは高いから

大丈夫うーーー！」

何時もの雪の元気。私の目の前で止まり、手をきつく握ってくれる。

キヤーーー！

昨晚の事なんて一気に吹つ飛ぶよーーーありがとう雪。

私のすぐ後ろから、KOJIIさんが入ってきた。

「…おはよう。」

うわつまだご機嫌斜めですね。以外に頑固だな…。

KOJIIさんは私の顔を見て、チツと舌打ちしながら歩いてくる。

ワザとらしく私と雪の間を割つて入り、繋いだ手を離れさせ、満足そうにスタジオの奥に消えていった。

本当にワザとらしい！最低！

身体は献上したけど、心までは貴方には触れさせません…！

メンバーが全員揃つた所で、歌合せに入った。

もともと既存の曲だし、何回も聞いた事のある曲。楽勝！

私はヘッドホンを装着し、目を閉じて自分のパートに専念した。

美しいギターソロからの曲。『秘密』という曲名なの。

ある女性が、ご主人とは別に、心には愛する人が居るって曲。

切ないメロディーだけど、難易度が高い曲。

でも…何回も練習したから大丈夫！

良いフレッシュヤーは自分に返つて来る！

そうだよね？雪。

全員が立ち位置に着き、綺麗なハーモニーがヘッドホンから流れる。私も音を聞きながら、一生懸命に音程を取る。

うん！良い感じに乗れた！

…でも、隣から変な空気が流れてくる…。

隣を見れば雪が真っ青な顔をしていた。

もしかして雪…緊張してるの？

額は汗だらけ。昨日はあんなに威張つて話してたのに…

『雪？大丈夫？』

ヒソヒソ声で話掛けた。

『うん！大丈夫！……じゃないかも。』
珍しく臆病な雪の姿…。

『雪…緊張は自分に返つてくる…だよ…』

口パク＆ガツツポーズで表現。

段々、雪の顔色が良くなってきて…雪の日が元気に輝き始めた…！良かっただ。私にも恩返しが出来たかも？

無事に音合わせが終わつた。

「じゃあ、午後は踊りの方を合わせるので、宜しくお願ひします…」スタッフが話しかける。

私たちはスタジオ内の食堂で昼食を取る事にした。

関係者や役者しか出入り出来ない、芸能関係者が安心して食事できる場所だった。

私は何を食べようか考えていた。

正直お腹が減り過ぎて…だつて…見栄はつて朝食食べなかつたからむ。

本当に色々なメニューがあつて…迷うなあ…全部美味しそう…

私がメニューを独り占めで考えていると、雪が話しかけてきた。

「由…今日は有難うな…自分で調子の良い事言つとい…カツコ悪かつたな俺…。」

伏し目がちに話す雪。

「そんな事無いよー雪が真剣に音楽に向かい合つた結果でしょ？」

何時つて雪は真剣にKの事考えてたし、緊張だつて足引っ張らな

い様に考へての事でしょ？

私、いつも近くに居たから知つてゐるよ~

「…お前、本当に…。」

雪が下を向いたままフルプルしてゐる…泣かせちゃつた？

「良い奴だなあああ――――！」

雪は私に抱きついてきた…きや―――「ラッキー！――

「ゆつ雪！！」

嬉しくて恥ずかしい！メンバー全員居るので

「…早く決める。」

突然不機嫌な声が頭の上から聞こえてくる。

雪の頭を掴んで、私から引き離す大きく細い指…。
もう…！幸せだったのに…。

「あつすみません！」

雪は謝りながらメニューを見始める。

私は横目でＫＯＣＨさんと顔を見ると…「つわつ凄く不機嫌…！睨
んぐるし…！」

触らぬ神に祟りなし…！私は知らんぷりでメニューに田線を戻した。

各自注文した料理を食べ終わると、休む暇なく午後の合わせに入つ
た。

私はＪＥＹさんとＫＯＣＨさんに挟まれる立ち位置からスタート。
振りつけ 자체は難しく無い。ただ、立ち位置が途中から変わつたり
して…

曲を流しながら通し練習を繰り返した。

でもねえ…難しくは無いんだけど…チョット変な振りがあるんだよ

ね。

私と雪が一瞬抱き合い、ＫＯＵＣＨＥさんとＫＡＪＥさんで私たちを引き離すっていう振り。

クループイメージ的には変じゃないんだけど……
今の私の心境みたい。

私の心には雪が住んでて、ＫＯＵＣＨＥさんに身体を奪われる……今
の私その物！
なんか……嫌な予感がするなあ……。

その後も2日位全員で通し練習をした。

残りは雪と一人でレッスンに通う日々。

私は雪と幸せな時間を過ごした後、ＫＯＵＣＨＥさんに抱かれるとい
う日々を過ごして……

一週間の後、収録本番の朝を迎えた。

第一十四章

収録本番の朝、久しぶりに楽な身体を引きずり、ベットから起きる。
「ふあーーーーー良く寝たあーーーー！」

昨日は珍しくKOJOさんからの…アレの命令が無かつたから。
流石に本番前日はお呼びが掛らなかつたの。

昨晩は正直ホツとした。

夜遅くまで抱かれ、真夜中にそつと自宅に帰る生活だつたから…
たまにならキツク無いんだけど、連日お呼びが掛つてたから…。

私はマイクの乗りも良く、ご機嫌で事務所に向かつた。

「お早うーー由ーー」

今日も元気に駆け寄つてくる雪。毎朝の光景、私の元気の素！！

「お早う雪！今日は頑張ろうねーー！」

「あーーー全国に俺たちの顔が映し出されるんだーー頑張らないとなーー！」

「うんっーーーーで、皆は？」

一日事務所で集合してからTV局に向かう予定なのに…。

「お前が一番最後ーーなんか三人は先乗りしてるらしいよーー俺は
お前待ちーー！」

「へーっそりなんだ…。つて、雪の事待たせてたんだね、ごめん。
待たせてごめんね？」

軽く頭を下げる私。

「いいよー俺が緊張して、早く来すぎただけの事だから。」

「雪…緊張してるの？」

そんな風に見えないな。

「まあな。流石にテレビは緊張するだろ。…あつ…思に出した！なんかＴＶの放送に合わせて、

」の前の写真集も発売されるらしいぜ？放送の翌日…‥」

「へえー！事務所も策士だね。話題になつた所で写真集か…。売れるといいね！」

「ああ…そうだな…。」

「つて、由！早く支度しろ！スタジオで衣装合わせとかしない」と…「あつ…そつか。マイクも念入りにしておかないと…。」

私と雪は、事務所の車で局に入つた。

「お早'ひ'びやいます！×2°。」

私と雪は、揃つて挨拶。

大型の控室にはメンバーが居て、既にマイクやら着替えを始めていた。

「おこつ…由…‥。」

私の耳に馴染んだ声…お兄ちゃんの声。

「あつお兄ちゃん…。」

思わず呼んでしまつた私に軽くチヨップが飛んでくる。

「こらつ！仕事中は？」

あつ仕事中は… SATOさんでした。

「はこつ SATOさん。すみません。つで何ですか？」

お兄ちゃんとの掛け合い…久しぶり！

あんな事…があつてから、お互い気まずくて…

家族の前ではお互い普通に過ごしてたけど、前みたいに一人きりになる事は一度も無かつた。

ちよつと寂しい感じがしてたんだけど、やつぱりお兄ちゃんと話すと…落ち着く。

「由はこの衣装。雪はこわい。一人とも早く着替えてきて……」「はーーーい×2。」

私と雪は、簡単な仕切りの更衣室に入つて行く。

うーん、衣装つていつてもスーツか。

あつでも、中性的なイメージなのか、インナーにレースが付いてて胸が目立たない！

多分、イメージって言うより、お兄ちゃんが選んでくれたのかな？私は小振りなスーツを着て、更衣室を出た。

「ふつ。由…レース付いてるや…！女みてえーーー！」

雪がからかい半分で、私の胸のレースを引っ張つた。

「ちょっ雪ーー！」

私が、『止めて』と言つ前に、KOUJOさんは雪の手を捻り上げた。

「…KOUJOさん？…手、痛いですうううーーー！」

KOUJOさんは力一杯捻つたから、雪は痛そうに助けを求めてた。

「…お前が触るから…つい。」

「ついつて、別に触る位…。」

雪は離して貰つた手首を擦りながら抗議していた。

確かに…男同士なら触る位…不自然ではない様な…もしかして墓穴？

「……いや、レースが取れたら困るから…。」

「…俺、そんな馬鹿力じやないですよーーー！」

雪は苦笑いしながらメイク台の前に座つた。

もうつー雪になら…触られても良かつたのに。貴方より…ね！

「本当、馬鹿KOUJOー！久しぶりの歌番組で柄にも無く緊張ですか？」

先に準備を終えたKAJIさんとHEYさんがKOUJOさんのお

馬鹿振りを笑つた。

「……おっ…お前ら…。」

全身フルフルさせるKOUJUROさん…。なつ何か嫌な予感が…。

「まつ待てKOUJUROー！おつ抑えてくれ！」

慌てるKAJIIさん。

「いひKOUJUROー！すまん！つい面白くて…いつ嫌、何でも無い。」

フォロー出来てないJYEYさん。

アレが出ませんように…

メンバーが心の中で願った事…それは、KOUJUROさんの極度の恥ずかし屋つて事！

一旦籠つたら最後、数時間は止まらない、あの例の奴！！

最近は強引＆悪魔のKOUJUROさんしか見て無かつたから忘れてたけど…

アレ発症したら本番所か、打ち合わせすら出来ないじゃない！もう、本番前に余計な事しないで一人とも…!!

案の定KOUJUROさんは控室を飛び出し…10分待つてみたが来なかつた。

私たちは、KOUJUROさんを手分けして探す事にした。

えつつと…KOUJUROさんが好きそうな場所…

多分、いや絶対に人間が居ない場所で丸まっているに違ひ無い…!!

私は、空いている控室を次々に確認していった…。

何で私が一番最初に見つけちゃうんでしょ？

私は、一人でブツブツ喋っているKOUJUROさんを直ぐに発見した。

「KOUJUROさん？本番まで時間無いですよ？」

私は肩に手を置き、帰る様に促す。

「…ほつといてくれ。」

KOJIIさんは動じない。

「もう、子供じゃないんだから…何時もの強引な口調を止め
何処に行っちゃうんです?」

ムニカシヤマ

私の言葉に、ヒケツと反応する。効いてる？

「KOKOROさん？一緒に来ないならスタッフさん、呼んでもりますよ？」

KOJIIさんは急に立ち上がる。おつ作戦成功ですか？

呼ひたけれは 呼へにいし

ひ、開き直り！……せ、何で言い遅した？良いか解なしよ

私が答えて語るでしょと
久松さんから前に口を開いた

「：ただし、困るのは一人でな。」

「…私は困るなしだった…」
その直後、私は木口さん

KOJIROさんは私の腕を掴んで自分に引き寄せる。

私は急に引っ張られて、素直に胸の中に収まってしまった。

卷之三

「
…鎮めさせろ。
」

一言呑み下すと、KOUJI-SANの口が私の文句を塞ぎ止めた。

桂川文庫
新編
卷之三

強い力で、離れる事も出来ない。

「騒ぐな。気付かれるぞ？」

KOJUKEさんは耳元で囁く。

確かに廊下にはスタッフさんとかタレントさんが歩いてる。声を出したら気付かれる！

知られたら…ホモセクシャル扱い？事務所クビ？一家解散？

私は何時もの様に大人しくキスを受け入れる。

私の唾液を全部吸いつくす様な激しいキスが続く。

解放された時には、身体が熱く火照っているのが解る。

「お前は隙が多いんだよ…。」

KOJUKEさんは、怒った様な声で言つ。今のキスの事？自分からしておいて…。

「なついいきなり何ですか？今のキスは無理やり引っ張られたから…。

」

私は少し声を荒げ言い返す。

「…雪になんて胸…触らせやがって…。馬鹿女、淫乱女…！」

…はいつ？雪つて…あつ控室の事？

「あつアレは不可抗力で…って、何でKOJUKEさんに言われなきゃいけないんですか？」

私たち、恋人でもなんでも無いのに…。

「…お前は俺の物だと言つた筈だ。なのに…雪に触らせるなんて…。

」
「べつ別に触らせた訳じゃないし、雪は男のつもりで触つたんじよ？」

怒る方が可笑しいと思ひますけど…。」

それに、胸胸言つけど、レースは触られたけど、胸揉まれたとかじや無いし。

何でそこまで言われなきや……。もしかして…。

「ＫＯＵＪＩＥさん、もしかしてヤキモチですか？」

「……はあーー？俺がヤキモチイー？」

あつですよね！貴方様がヤキモチなんて…。

「悪いか？俺がヤキモチ焼いちゃ…。」

意外な一言。

「えつ今…何て？」

思わず聞き返す。

「だからーー！ヤキモチ位人間焼くだろ？普通…。」

うわっ！本当にヤキモチ？

私を毎日の様に抱いてる貴方がヤキモチ？
でも、ヤキモチって好きな相手に焼くんだけよね…もしかして、私の事？

「あつあつ…ＫＯＵＪＩＥさんって、私の事…んんつ…ちゅっ止め…て。」

最後まで言えない内に、ＫＯＵＪＩＥさんの舌で塞がれてしまった。

頭がボーッと白くなる様な優しいキス…。

何時もの奪うキスじゃ無くて…愛おしそうに抓むキス。

この人、本当に私の事…。

でつでもー！私は雪が好きなの！

貴方に心は…。

KOUSHIさんは、私の衣装のチャックを降ろしていく… しり ハハ
で致すので？
勘弁してえーーーーー！

KOJUROさんは慣れた手つきで私の服を膝下まで下げる。下着も全部。

机に手を付き、丸出しのお尻を突き出す様な格好をさせられる。

…何回もエッチしたけど、こんな丸見えな体勢…恥ずかしすぎる…

「IJU KOJUROさん!止めて下さい一人が来ますよおおお…」

逃げたい…でも、男の人の力に敵う筈が無い。

私は抑えられたまま愛撫され、受け入れる準備をされてしまった…。

「くぅ…んああ…！」

深く挿入され、思わず声が出てしまつ。

「…おい、声出すと入ってくるぞ?」

「そっそんな事言われても…んつんん…はあ、くぅ。」

声出れないなんて…無理…！

何回もKOJUROさんは私の腰を持ち、強く私を揺さぶった…。
頭では解つてゐる。でも、身体が反応してしまつ。

KOJUROさんは私の腰を持ち、強く私を揺さぶつた…。

机はガタガタと音を出し、臀部からは卑猥な音が聞こえる…。

「由…逝く、逝くだ…。」「中に注がれる熱い液体…。

私は衣装が汚れるのを気にしながら座り込んだ。

「ほり、立て。」

へたり込んでいる私の二の腕を掴んで、KOJUROさんは私を立たせる。

「ほり、足開け。拭いてやる。」

見れば、手にはウエットティッシュを持っていたKOUJOさん…

「いっいいえ、自分で出来ますから…。」

子供じゃなのに、人に下拭いて貰うなんて…あり得ない！

「早くしろ。衣装が汚れる。」

「…衣装、汚したら大変だ…でも…拭いて貰うのは恥ずかしい…。」

「じつ自分で出来ますよ…。」

「早くしろ！股から俺のが垂れてきてるぞ…！」
えつ？垂れ…うわっ…！本当に…！」

私は戸惑はずも、衣装に垂れるのが怖くて、大足を開いてしまった。
「やれば出来るじゃん。少し…動くなよ。」「…」
何と言う痴態。醜態。もう…氣絶したいよ…！
「あつあの…すみません。でも、垂れたの拭いて下されば、後は自
分で…。」

私の言葉に、KOUJOさんは顔を見て話しかけて来た。

「…別に、何時もやられてる事だろ？今更恥ずかしがるなよ…。」
「えつ？今、何と仰つた？何時もやつてる事？

じゃあ、行為した後、私が気絶してる時は、KOUJOさんが拭い
てたんですか？嫌あ…！

そんな馬鹿な行為をしていると、突然部屋のドアをノックする音が
聞こえた。

『ドーン…』

その音に、一人ともビクツつてなる。誰？

「あの、誰か居るんですか？……鍵…は掛つて無いな。
」の声は…うそ！…中に入つて来ないで！…！」

「入りますよ――！失礼します。」

段々と室内に廊下の光の筋が出来る。

私は、ビックリして動く事も出来ない。それはＫＯＯヒーＨさんも同じようだ。

「……由…。お前、何やつてるんだ？」

見られた…見られてしまつた…。

ビハッショハ、ビハッショハ、ビハッショハ…。

「ＫＯＯヒーＨさん、これは一体どうこいつ事ですか？」

怒りに満ちた声が私たちを襲ひ…。

第一十四章（後書き）

何だかシユケベな話に…。
あの声の持ち主は…誰でしょう！
やっぱり解っちゃいますよね？すみません。

第一十五章

声の主はお兄ちゃんだった。

お兄ちゃんの目線の先には、剥き出しの私の尻。

そして…太股に垂れた自分の物を拭いているKOUJOさん。

解るよね…私たちが今まで何してたか。

「…別に、愛し合ってる者同士の自然の行為ですけど。」

KOUJOさんは平然と答える。

お兄ちゃんの顔色が変わっていく。

真っ赤な顔に、険しい目付…。こんなお兄ちゃんの顔、見た事無い。

「あつ あの…お兄ちゃん…。」

何て言つて良いか解らない。

どんな良い訳並べても、私たちがSEXしていたのは明らか。

この前とは状況が違う。だって目の前に私を犯した男が居るんだもん。

お兄ちゃん、今日は怒るだけじゃ済まないかも…。もしかしたら… KOUJOさんの事、殺しちゃつたらどうじょग。

良い訳しなきや…。お兄ちゃんが納得する様な、お兄ちゃんがKOUJOさんに手を出れない様な…。

「KOUJOさん、愛し合つてるのは何事ですか?」この前由子に酷い事をしたのも貴方なんですか?」

「…」の前?何時の事だか?ほほ毎日してるから解んないです。

「…あつ 貴様…。」

火に油を注ぐよくなKOUJOさんの言葉。信じらんない…。

「うしょつ…」のままだと本当に飛びかかりそうな勢いだよお兄ち

やん。

「由、お前だつて自分から進んで俺に抱かれてるんだろ？」
KOJUROさんが私に向かつて言ひ。

「由…どうなんだ。」

お兄ちゃんも私の言葉を待つてる。

「…うん。私が望んで抱かれてるの…。」

嘘でも… う言ひしかないでしょ？ お兄ちゃんの為に…。

「本当か？ 本当はお前、嫌なんだろ？ 取引で抱かれてるんだろ？

それに悔しつつて、怖いつて言ひてたじやないか！… そ、うなんだ
う…」

お兄ちゃんの縋る様な由…「めんねお兄ちゃん。

「最初は嫌だつた。悔しかつたし苦しかつた。でも…

今はKOJUROさんの事が好きで… 私からお願ひしてるのでよ。」

お兄ちゃんの顔を見たら… 泣いてしまってしがだつた。

「解つてもらえましたか？ 僕たち、愛し合ひてゐるんです。」

KOJUROさんは冷たくお兄ちゃんに言ひ。

「…由子、本当か？ 本当なのか？」

信じたくない、お兄ちゃんの心の声が聞こえなかつた。

「…うん、本当に本当なの。心配しないで…。」

私の言葉を聞いて… お兄ちゃんはボートとした表情で部屋を出て行つた。

お兄ちゃんの事、傷つけた… う…

その後、私は無言で後始末を済ませ部屋を出みつとした。

「おこ、待てよ。」

KOJII-SANさんが私を呼びとめる。

「…なんですか？」

「…心、此処に在りづか？そんなにショックか？」

「…別に。」

冷たく答えた。

だって、ショック所じゅ無い。もう…どうしたらいいか解らない。やつとお兄ちゃんが家に帰つて来て…お兄ちゃんと元に戻れるかもつて思つてたの。」「

こんな見られて、元に戻れる訳無い…！

悔しい…悲しい…寂しい…

「…そうか。済まなかつた。」

いきなりの謝罪。

「えつ？」

初めての謝罪に、思わず振り返る。だって…謝るなんてビックリしちゃつて。

「KOJII-SANでも悪いって思ひ事、あるんですね。」

絶対許さない。

「…あんまりだな。俺だつて局でやつちまつた事については悪かつたと思つてる。」

「その事だけ…ですか？」

「ああ。当然だ。他に悪い事したか？」

お兄ちゃんへの言葉…悪いと思つてないんだ。

「お兄ちゃんにあんな言い方…他に言い方は無かつたんですか？」

「あれは…ああ言つしか無かつた。だってお前…兄貴と何か無かるんだろう？」

「なつ何かで何ですか？」

「例えば、兄貴に愛してると言われたとか…もしくわ兄貴に抱かれてるとか…。」

「なつ何ですかそれ！有るわけ無いじゃないですか！」

それに近い事はあつたけど……愛してるなんて、私たち兄弟なのに……

「ふーん、感が外れたか？……いや、俺が手を出したのが早かつただけか？」

「なつなんの事ですか？」

「多分、SATOさんはお前の事、本気で愛してるぞ。気付かなかつたのか？」

あんな熱い目で俺とお前睨んで……あれは嫉妬の籠つた目付きだつたのに……」

「まつまさか！私たち、兄弟なんですよ？」

確かにスキンシップの激しい兄弟だとは思つてたけど、まさか…ね？

「普通、あそこまで嫉妬剥き出しられて氣付かない奴居ないだろ？」

俺がSATOさんにあんな言い方したのだつて、それが原因なのに……」

「そうなんですか？」

「俺だつてお前手放す訳にはいかないし……受けて立つだろ、男として……」

「なつなんですかそれ……」

そんな事言われても……

「それつてお前……なあ、お前は俺の事、どう思つてんだ？」

「なついいきなり何ですか？」

どう思つてるつて……決まつてるじゃない！

「私をダツチワイフか何かと思つてる男の人だと思つてますけど？」「ふん！嫌み位言いたくなる。

「ダツ？つてお前、酷いな。そんな風にしか思われて無かつたんだな。」

「だつて、脅迫してるじゃないですか！」

「まあな。でもそもそもしなきや……手に入らないと思つたんだ。

まあ、最初は本当に出来心だった。でも今は……お前と一緒に居たくて……

「お前の事だけ抱きたいんだ。……愛してるんだ。」

「きつ急にそんな事言われても……。」

「だって、脅迫して女抱く男なんでしょう？」

「信じられないか？」

「あつ当たり前じゃないですか！私にした事棚に上げて……そんな事言わないで！」

「もう、何なのよ……」

「そうか……当然だよな。俺が悪い。でも……本当にお前の事を手放しあく無いんだ。」

「ずつと……傍に居て欲しいと想つてる。なあ……駄目か？俺じゃ駄

目か？」

今まで見た事無い様なＫＯＵＥさんの顔。
縋る様な眼……この人、本気なんだ……。

「……無理です。だって……そんな事急に言われたって……。」

信じられないし、考えらんない！だって、脅迫して私を犯してたんだよ？解つてる？

「だよな。当然だ。……俺はもつお前の事、無理に抱かない。呼び出しもしない。」

俺の……俺が信じられる時が来たら……返事をくれないか？それまで

「俺は……待つから。」

「……わかりました。それでいいな。」

「ああ、それで良い。ありがとう。」

KOUKEさんが可愛く笑う。へえ……こんな顔もするんだ。

私とKOUKEさんは部屋を出た。

樂屋に戻ると… メンバーが血相変えて駆け寄ってきた。

「おいっ！馬鹿ＫＯＵＪＩＥ！いい加減にしろーー！」

ＪＥＹさんが怒りだす。

「お前が変な事言つから…。」

ＫＯＵＪＩＥさんは膨れ顔で答える。

「とにかく…後は一人がマイク終えるだけだから、早く済ませて…！」

ＫＡＪＩＥさんが急かす。

私とＫＯＵＪＩＥさんは鏡の前に座る。
そして…後ろにお兄ちゃんが立つ。

お兄ちゃんは何も喋らないで、黙々と作業をこなす。

私も声を掛けられない…なんて話したらいいか解んない。

ＫＯＵＪＩＥさんのマイクの時も同様。いや、それ以上に不気味な空気が漂つてる。

不機嫌なＫＯＵＪＩＥさんに、怒りの籠った目で見るお兄ちゃん。

それは当然、メンバーから見ても異様な光景で…

先にマイクの済んだ私は、メンバーの質問攻めにあつた。

「なあ…お前ら、何があつた？」

雪が心配して聞いてくる。

「つうん…別に、無いよ？」

嘘…「じめんね雪。

正直に言える訳無い。言つたら…軽蔑するでしょ？

「何時も爽やかなＳＡＴＯさんが…珍しいな？」

不信がるＫＡＪＩＥさんにＪＥＹさん。

「まあ…珍しいといえばそうですね。家ではたまにあるんですけど

…。」

嘘です…」こんな顔のお兄ちゃんは初めてです。

作業を終えた一人は、直ぐに席を離れる。

お兄ちゃんは「スメ類を片付け、ＫＯＣＨさんは隅のソファーに
ドカッと腰を落とす。
あつ氣まづい…。

「Ｋｏの皆さん…そろそろ移動お願ひしまーす！」

天の助けか、スタッフの声が響く。

皆ぞうぞうと部屋から出て行き、最後に私が部屋を出ようとした時、
お兄ちゃんは私の腕を掴んで、部屋に引き戻した。

「…なあ由？大丈夫か？」

いつものお兄ちゃんの優しい顔。

「なつ何が？」

解つてゐるけど…自分の口から言えない。

「お前、さつきはＫＯＣＨが居たから本当の事言えなかつたんだ
ろ？」

今なら一人きつだ。正直に答える。

「だつだから…さつき言つたでしょ？」

やつぱり…そう来たか。

「嘘をつくな！お前がそんな女じやないのは、俺が一番知つてる。

真剣なお兄ちゃん。

お兄ちゃんには…隠せないのかな？

でも、隠さなきゃいけない。お兄ちゃんの為に…

「全部本当だよ？私…ＫＯＣＨさんが好きなの。」

お兄ちゃんの目を見て、きつぱり否定した。

お兄ちゃんは私の言葉を聞いて…真つ青な顔をした。

「よつ由子…。俺は…！お前が…」

お兄ちゃんが何か言いかけた時、雪の声が私を呼ぶ。

「おーい！由ー！早く来いよーー！」

「つ。由..早く行け。」

お兄ちゃんは横を向く。

「うううん。行つてきます。」

私は少し不安を覚えながら、雪たたきに合流した。

第一十六章

メンバーと共に立ち位置に着く。

「3…2…1…。」

スタッフのカウントダウン。緊張が高まる。

インポートが流れ出し、私たちは緩やかに動き始める。

曲も半分過ぎ、いよいよ変な振り付けの節に差し掛かった。私は打ち合わせ通り、雪の元に歩み寄る。

雪も私の傍に来て…抱き合つた。

きゅーーん！…雪ーーー！

私は一瞬、スタジオの中に居る事を忘れる。

そして…KOJI-Eさんが私の腕を掴む。

私は打ち合わせ通り、KOJI-Eの方へ連れて行かれる。もうちよつと…雪と抱きあつて…いたかった…なんてね！

局はそのまま進み終盤に差し掛かる。

少し…息が苦しくなってきた。練習の時は平氣だつたのに…やつぱり緊張してると負担がかかるのかな？

私の顔が微妙に引き攣る。

KOJI-Eさんが私の方に一瞬目線を送つてきた。

すると…KOJI-Eさんは私を抱きしめる様に歌い始めた。なつ何するの…！…つと一瞬思つたけど…私の事、助けてくれたのかな？

引き攣つた私の顔を隠してくれたんだよね…。

それに気付いたKAJIEさんも、雪を隠す様に歌い始める。KEYさんは中立をとる様な立ち位置に着き…曲は終わった。

「すっすみませんでした！！」

収録を終えた私は、開口一番で謝った。

「もひ、ビックリしちゃったよ。打ち合わせと違うんだもん。」

「雪、『めんね？それに…』KOUJOさん、有難うございました。」

KOUJOさんは照れた様に下を向く。

「大丈夫！初めてのTVだし！最初は皆緊張するんだよ？それに、

雪だつてギリギリだつたよな！」

KAJIIさんは明るく笑い飛ばしてくれた。

「そりそり俺も…つて！マジですか？」

雪も笑いながら突っ込む。それを笑って見ているEYさん。

ありがとうございます。

私たちは楽屋に戻り、衣装を着替える。

「あれっ？お兄ちゃんが居ない。先に帰ったのかな？」

私は帰宅の準備を終えると、さつさと帰らうとした。

「おい！何処行くんだよ…！」

雪が私の手を掴んで引きとめる。ちょっと嬉しい。

「えつ？何処つて…自宅？」

「なつ聞いてない？これから打ち上げだけど…。」

「うつ打ち上げ？」

「ああ。普通はライブ後なんかにするんだろうけど…初めてのTV
お疲れつて事で急きょ決まった！」

「なあ…由も行くだろ？」

ウルンツと可愛い目で訴える。そんな顔されたら…行くわよ…。

「ああ…行くよ。」

「良かつたあ！じゃあ急いで着替え済ませるから…。」

雪は嬉しそうに着替えに向かった。

私たちにはマイクロバスに乗り込み、近くのバーに向かった。

貸し切りになつてて、中には知つてゐる顔が待つてた。

「おう！お疲れ様——！」

「あつ鷹！——どうしたの？」

それに……この間のお泊まり会のメンバーとか事務所の人達が待つてた。

「初丁！おめでとう……緊張した？」

鷹が私の肩に腕を絡ませながら聞いてくる。

「まあな。チヨットだけな？」

「へえ……何気に大物？」

鷹が感心してくれると……雪はあつさりネタばらし。

「嘘！由……顔引き攀つてたじゃん……」

「あつ速攻バラした！」

三人でお笑い。いいなあ……こんなフインキもー。

「じゃあ、また後で来るから……」

鷹は知り合いを見つけた様で、何処かに行つてしまつた。

176

皆グラスを持ち……乾杯の掛け声と同時に、一気に酒を流し込む。

「ふはあ——！最高！！」

雪は美味しそうな顔で飲み干した。

「あつお代り貰つてくるけど、何か持つてくる？」

雪に声を掛ける。

「おつ！気が効くね！じゃあ、ビール……」

「うん。了解。」

私はカウンターにお代りを貰いに行つた。

「すみません。ビール二つ下さい。」

「はい。かしこまりました。」

バー・テンさんはオシャレなグラスに入つたビールを手渡す。

それを受け取ると、ウキウキと雪の元に戻つた。

「はいっお待たせー。」

「おっサンキュー！」

雪はビールを受け取つて、半分位まで一気に飲む。

「ふはあ…。ああ美味しい！しかし…緊張したな！」

「え？ 雪も緊張したの？」

そりやあ、俺的にもあのアドリアは助かった。

「なつ何？俺は顔に出さなかつたぞう

私に腕を回し、私の頬を優しく抓る。

こそばゆい痛みが嬉しい。

「おーつかまつるかーあがみ?」

私たちを引き離す様にKOHCOさんとSEYさんが現れた…。ワ

ה'זט

「そ、そうっす！ ただ嬉しくて……。」

雪も慌てて良い訳をした。

「何で冗談だよ！今田ぐらいい浮かれてやる！」

「...」

「おひつ酔つぱう！」

KOJIさんがJOEYさんを引き剥す。たつ助かつた！。

「何だよお、少し位高いじゃん！何かこの一人、異常に可愛いやし

なつ何を言い出すんだ?この人は……。

「まあ……確かに可愛い顔してるが……。

「珍らしく、おまんは和の顔を見て言うな。」ハレたヤニでし。

ＪＥＹさんが突つ込む。

「べつ別に。正直に言つたまでだ……。」

「顔を真つ赤にして、 Pruittと何処かに行つてしまつた。」

「また始まつた。本日一回目……！」

「もひ。ワザとだなＪＥＹさん。」

「おひ俺、探してきましょうか？」

雪が名乗り出る。

「ああ、いいよ！そのうち出でてくるからやー……それで、俺は回つてくるな！」

ＪＥＹさんは他の人の所に行つてしまつた。

「なつ何だつたんだ今……！」

「さあ。」

雪と顔を見合つて笑う。

でも何か…超幸せーーー！

「でも…確かに可愛いよな。」

「へつ何が？」「

「いや…お前だよ。俺は男顔だけど…お前つて本当に女みたいな顔してゐよな。

お前が女だつたら…超好みなのにな、残念。」

「……もつもう！何言つてるんだよ！」

「いや、「冗談だよ！お前は男だしな。ただ…女だつたら惚れぢやつかもつて話！…！」

「なつ何馬鹿な事言つてるんだよ！」

自分でも顔が赤くなるのが解つて…横を向いた。

「じつ冗談だよ…そんなありえない話だし、本氣で取るなよ…」
雪まで真つ赤な顔になつて…。

「…なあ雪、もしも俺が女だつたら？本氣で惚れる？
もし私が正体を明かしたら…もし女だつて名乗り出たら？

雪は私を受け止めてくれる？

「…由、…ゴメン。『冗談が過ぎたな』」

真面目な顔で…謝った。なんかシヨツクだよ…。

「…いや。…さて！飲もうぜ！！」

空気を変えたくて明るく切りだす。

「あつああ…飲もう！飲もう飲もう…！」

一人でグラスを合わせ、残りを一気に流し込んだ。

私は何度もお代りを繰り返した。

だつて…正体を明かす前に振られた心境で。

告白すら出来なくて玉碎みたいな？

正直シヨツクで…。早く家に帰りたい…。

「おい…大丈夫か？」

いつの間にか横に居た鷹が、心配そうに声を掛ける。

「んああ…だつ大丈…夫かな？」

「おいおい。駄目じやん。…そろそろ終いだけど、帰れるか？」

「うーん…大丈夫…かも？」

「意味が解らん…おいつお…い…。」

鷹の声が、遠くなっていく。

……………。

ゆらゆら気持ちいい…温かくて…心地いい…。

私は、頬を伝う冷たい空氣に起こそられる。

「あつれ？ここ何処？」

見える景色は、明らかに何処かのマンションのホール。

「おつ起きたか？」

「たつ鷹？わつ私…。」

私、鷹にオンブされてる…！

「あーあ…まだ酔ってるな？私つて…おカマか？」

やばい！咄嗟に出でしゃつた！

「あつ鷹…あのさ、ここ何処？」

「こゝ？俺のマンション。」

「たつ鷹の？」

「ああ。本当は家まで送ろうと思つたんだけど…お前の兄貴、五月

蠅そうだし。」

「そつそつか…ありがとづ。」

「まあ…少し酔い冷ましたら帰れば良いんじやない？」

そつ言つて、鷹は玄関の鍵を開ける。

私は鷹の言葉に素直に甘えた。

鷹は私をソファーに寝かせ、水を持ってきてくれた。

「あつありがとづ…。」

「いえいえつどういたしまして。」

鷹は二ツコリ笑つて…その場で着替えをし始めた。

ジヤケットを乱暴に脱ぎ捨て、ベルトをカチヤカチヤ鳴らす。

前を緩め…ワイヤーシャツも一気に脱ぎ棄てる。

逞しい…若く美しい男の身体が目の前に現れる。

「きやつ…！」

思わず声を出す。

「きやつて…変な奴。」

だつて…！鷹は男同士つて思うだらうけど…。

けつ血圧あがりそつ…それに…鼻出血そつよ…。

とつとつ取り合はず…一曰落ち着いつ。

「おつおい…！大丈夫か？顔色悪いぞ？」

「だつ大丈夫…あのさ…トイレ貸して…。」

「はつ吐くのか？そつそこの扉だ…！」

部屋に吐くな…！つと言わんばかりに焦る鷹。

私はヨロヨロ立ち上がり…トイレに向かう。
ドアを開けると、当然だけビ田の前には便器。

人間つて…深酒してから便器見ると…吐きたくなるんだね。初めて
知った。

「うええ―――！」

ダイナミックにまき散らしてしまった。

「うわ―――！マジかよ…。」

私は全身嘔吐物塗れ…臭い…。

鷹はため息をつきながら、私を風呂に放り込んだ…。

第一十七章

全身嘔吐物まみれの私…鷹に風呂場に放り込まれてしまった。

「マジ…洒落にならんだろ？」「…取り合えず全身洗え。」

鷹はそう言って、風呂のドアを閉める。

鷹が起こるのも無理ないよね…自宅のトイレが物凄い事になつたんだから。

私は心の中で詫びながら、シャワーを捻つた。

頭から湯を掛け、身体に付着した異臭を洗い流す。

うーん、折角だからシャンプーも借りてしまおうか。

…うん、サッパリした。となると、服も全部脱ぎたい。

…よし！脱いじゃえ！

私は勢いよく素っ裸になり、身体を綺麗に洗つた。

「おい、着替え置いておくな。」

突然、ドアの外から鷹の声が聞こえる。

「ひやい！あつ有難う。」

声を裏返しながら礼を言つ。

だつて…KOJIIさんとの事が頭の中に蘇つて来て…。
どうどうか中に入つて来ません様に…！

鷹は、タオルと着替えを置き、脱衣所を出て行つた…良かつた。私は、鷹が脱衣所から出て行つたのを確認して、風呂から出た。身体を拭き、鷹が用意してくれた着替えを確認する。

袋に入つたままの新しい下着に、Tシャツ&Gパン。

私は、鷹に感謝しながら着替えを済ませた。

「たつ鷹…有難う。」

鷹はソファードラムを見ている途中だった。

「おう。今度からは気を付けて飲めよ?」

「うん、そうするよ。…あのさ、悪いんだけど、雑巾とか貸してくれないか?」

「はつ? 何で?」

「だって俺…鷹のトイレ汚しちゃって…ごめんな? 直ぐに掃除するから…。」

早く綺麗にななくちゃ! 鷹に申し訳ない…。

「ああ、もう俺がやつておいたから大丈夫だよ。」

嘘! 鷹に掃除させちゃったの? うわあ…最悪。

「マジで? 本当にメソン!! 僕…なんて謝つていいいのか…。」

鷹は私の顔を見て立ちあがる。

「本当、あり得ない奴だよな!! 由以上に面白い奴見た事無いや…
ふつ。」

噴き出し鷹…そんなに私って変?

「うう…今日は返す言葉が有りません…。」

「ふつ! 本当に変な奴。まあ、少しそこの布団にでも寝てる。んで
落ち着いてから帰ればいいから。

あつ! もうゲロは勘弁してな!」

「もう大丈夫だよ。じゃあお言葉に甘えて…。」

これ以上の醜態を晒す前に、気分を落ちつけよう。

私は鷹に言われた通り、ベットを拝借した。

ベットには氷枕が置いてあった。なんて気が効くのかしら…。

私は気分良く氷枕に頭を埋める。

気持ちいい…頭の中がスッキリしてくる…。

そして私は…知らない間に眠ってしまった…。

突然、頭に軽い痛みが走つて目が覚めた。

「痛つ…あれ? 私…寝ちゃったんだ。」

取り合えず、さっきまで鷹が居たソファーを見る。

でも、鷹はソファーに居ない。何処に行つたんだろう。

私は部屋中をキヨロキヨロ見回した。……ん？隣に気配が

うわあ！隣で鷹、寝てる！きゃあ————！

私が慌ててベットから降りた所為で、鷹も目を覚ました。

「ううん…あれ？俺まで寝ちゃったか…。どうだ？少しばかり悪くなつたか？」

「あつうん。もう大丈夫！」

鷹が氣を使つてくれたお陰で、氣持ち悪いのは収まつていた。

「由…面倒だから泊まつてくれか？」

眠そうに目を擦りながら鷹が提案する。…でも、

「ううん、大丈夫。ありがとうな？お陰様で復活したし…今日は帰るよ。」

いくら話しやすい鷹でも、一晩同じ部屋で過ごす訳には…

「まあ、兄貴も五月蠅そつだしな！…！」

「まあね。散らかしちゃつてゴメンな？借りた服は今度返すから…。

私は荷物を持ち、玄関に向かつた。

靴を履き、玄関を開ける。

「じやあ、お邪魔しましたつて…何で鷹まで靴？」

鷹は、私の後を追う様に靴を履き始めていた。

「いや…お前みたいな女顔、どこの変態さんにでも襲われたら…俺が兄貴に殺されそうだ。」

「送つて…くれるの？」

鷹、優しいんだな。

「おつお前…そんな女みたいな言葉使い辞めろ！なんか…変な気分になる。」

鷹が嫌そうな顔で私に言った。

「うつつか？気付かなかつた。ごめん。」

「もう、早く行こうぜ？」

「ああ…。」

一人して私の家に向かった。

鷹の家から私の家までは車で20分位の距離にあった。

鷹は車を持つていない為、私をバイクの後ろに乗せて送つてくれた。初めて乗るバイクの後ろ…緊張しちゃうな！

それに…何処を掴んでいいのか解らない！

こういう時つて…鷹にしがみついた方がいいの？それともバイク？私は取り合えず、鷹の服の裾を手でキツク握つた。

「おいつ！ちゃんと掴まつてろ！振り落とすぞ？」

鷹は信号待ちで停車した瞬間そう言つて、私の両手を掴み、自分のウエストに導く。

これつて…抱きつけつて事？きつ緊張しちゃう。

信号が青に変わり、鷹が走りだす。

全身にGか掛り、落されまいと力を込める私は、必然的に鷹にしがみ付いていた。

鷹は、大きな川の上に掛る橋の上を走らせる。

深夜という事もあり、結構なスピードで走つた。風が気持ち良い！

私は鷹にしがみつきながらも、流れる景色と夜風を楽しんでいた。

そんな私の目に、見慣れた人影が映る…。

「たつ鷹！ちょっと停まつて！」

私は鷹の服をグイグイ引っ張つて合図を送る。

鷹はそれに気付き、バイクを停車させた。

「どうした？あつチヨイ飛ばし過ぎた？」

鷹はヘルメットを外し、私の方を向く。

「ううん、違うんだ…。あそこに…。」

私は人影の方を指差す。

そこには…全身汗だくのお兄ちゃんの姿。

走りながら辺りをキョロキョロ…止まつては振り返り、また走り出す。

多分…私を探してゐるんだよね…。

正直、怒られるのが怖くて停まりたく無かつた。

でも、必死の形相で私を探すお兄ちゃん…放つておけないよ。

「鷹…ちょっと待つて？」

私は鷹に借りていたヘルメットを手渡し、反対車線のお兄ちゃんの元へ走つて行つた。

「お兄ちゃん！」

私は声を出しながらお兄ちゃんの傍に行く。

お兄ちゃんもそれに気付き、私の方を見る。

「由子！！！」

お兄ちゃんは私の傍に走つて来て…私をきつと抱きしめた。まるで…親が子供を抱きしめる様に。

「お兄ちゃん…もしかして私の事…探してたの？」

「あ…脣間の事もあるし…お前が帰つて来ない気がして…怖かつたんだ。」

お兄ちゃんは、私を抱く力を緩めない。それどころか…ますます腕に力を込める。

「お兄ちゃん…心配掛けで」「めんね？でも、ＫＯＵＪＩさんとは…別れたから。」

お兄ちゃんにはＫＯＵＪＩさんの事を好きだって嘘ついてる…本当は全部話して、ＫＯＵＪＩさんは何もしないって言つた事を話したいけど。

でも…結果は同じだから…お兄ちゃんの為の嘘なら許されるよね？

「ほつ本当か？本当に別れたんだな？」

お兄ちゃんは力を解き、私の腕を掴んで顔を覗いてくる。

「うん、本當だよ？心配掛けてごめんね？」

精一杯の笑顔をお兄ちゃんに送る。

「そうか…良かった。」

はあつと深く息を吐き、頭だけ私の胸に崩れ落ちた。

そんな私たち一人のやりとりを不思議そうに見ていたのは鷹だった。ポカーンと口を開けてる。…やばい！帰つていよいよって言えば良かつた！！

「たつ鷹！待たせて『メンな？』

私はお兄ちゃんから離れ、鷹の方に駆け寄る。ついする。お兄ちゃんに説明しなくちや！遅く帰つてきた理由。

鷹と一緒に話してもらおつ…！

でも…鷹は何か手を振り…叫んでる？聞こえないよ…。

「えーー？何ー？聞こえないよー！」

もつと近くまで行かなくちや！

私は鷹の傍に駆け寄る。その時だった。

「ドンシ！！！！キイイイイ…！」

突然、私の身体が前に飛ぶ。痛ああ！膝がヒリヒリ、手のひらも痛い。

いま…誰かに背中を…押された？

私は振り返る。

そして…目の前で、恐ろしく…一生忘れられない光景が始まつていた。

一台のトラック…お兄ちゃんの必死の顔…

お兄ちゃんに突っ込むトラック…宙を舞うお兄ちゃんの身体…

「お兄ちゃんあああーーーん！……」

私は恐怖で動けない…動く暇も無い。

それは一瞬の出来事…

お兄ちゃんは轢かれそうな私を突き飛ばし、自らが代わりとなつてトライックに当たつた…

お兄ちゃんは、私の代わりに宙を舞い…橋の手すりを越えて行つた。

ドボーンーーーン！…

水に落ちる音が聞こえる…。

私は直ぐにでも確認したかった。でも…足が動かない。
怪我では無くて、恐怖で動けない…。

「！」の馬鹿野郎！…！

鷹が直ぐに来てくれて…橋の手すりから下を覗きこむ。

「……見えない。」

一言呟くと、携帯を取り出し、電話をかけ始めた。

鷹は救急要請をし終えると、私の傍に駆け寄つた。

「…大丈夫か？」

「おっおっお兄ちゃん…お兄ちゃん…は？何処？」

「…川に…落ちた。」

「たつ鷹…お願ひ…助けて…お兄ちゃん…助けて…。」

震える声で何とか喋る。

誰か…誰か…誰か…助けて…

お兄ちゃんを助けて！…！…！

第二十八章

鷹が呼んでくれた救急車やレスキュー隊は直ぐに来た。

皆、必死に川に落ちたお兄ちゃんを探してくれた。

私は救急車の中で手当てをして貰いながら、お兄ちゃんが見つかったという連絡を待っていた。

でも……いくら待っても、吉報は届かない。

私を乗せた救急車の隊員は、私に病院へ行くように促した。でも、お兄ちゃんが見つかったという知らせが無い今、私はここから動きたく無かつた。

「由……心配なのは解るけど……。」

一緒に乗っていた鷹が私を宥める。

自分では気丈にしていたつもりだつたけど……

鷹から見れば酷く取り乱している様に見えたんだろう。

「そんなんじや兄貴に怒られるぞ！お前の為に身体張つたんだろう！心配なのは解るけど、お前が元気にならないと……。」

「でも！私の……私の所為で……。」

頭を激しく振つた。私が悪いの……私が……！

「由……」

鷹が声を荒げて止めよつとする。でも……

「由……由子……！」

鷹が突然私の名前を呼ぶ。そして……痛いくらいに抱きしめた。

「落ち着くんだ由子……落ち着け……。」

鷹の胸に抱かれながら、少しづつ落ち着きを取り戻した。

「はあはあ……どうしよう鷹……私の所為でお兄ちゃんが……。」

鷹はさらに強く私を抱きしめ、優しい声で話し始めた。

「由子……お前が此處で取り乱した所で、お兄さんの発見が早くなる訳じゃない。

それよりも、お前はお兄ちゃんと治療を受けて、じゃお兄さんが見つかった時……

一刻も早く駆け付ける事が出来るよひにした方が……お兄さんが見て喜ぶに決まってる。」

鷹は私に言い聞かせる様に話す。

「……うん、そうだよ……ね。鷹の言うとおりにする。鷹、一緒に居てくれる?」

一人だと……また発狂してまいそうで怖い。

「ああ……ちやんと傍に、お前の傍に居るから……。」

鷹はそう言つて、私の頭を撫でてくれた……。

私は鷹と一緒に病院に向かつた。

私はお兄ちゃんのお陰で、膝と手のひらの擦り傷だけで済んだ。消毒してガーゼをあててもらい、帰宅出来る事になった。待合室で会計を待つている時、病院に両親が飛び込んできた。

「由子……！」

お母さんが私の元に走つて来て、私を強く抱きしめた。お父さんは涙目で私の手を取り、手の甲を擦つた。

「ねえ……お兄ちゃんは？」

一番気になつてゐる事を聞いた。

すると両親は……首を横に振つた。

「まだ……見つからないの。深夜で視界も悪いらしくて……。警察の人からは……覚悟してくれつて……ううう……。」

口に手を当てて……無き崩れるお母さん。

嘘……嘘だよね……

お兄ちゃん……死ないよね?

鷹は私と両親が再会したのを確認すると、声も掛けずに病院から居なくなっていた。

きっと…家に帰ったのだろう。

鷹に感謝し、私は両親と自宅に戻った。

それから一週間が過ぎた。

捜索範囲も、川の流れ等も考慮した上で、かなり広範囲で行われた。でも…私たちに吉報が届く事は無かつた。

警察の人からは、トラックに撥ねられた上に川に落ちた以上、もう諦めてくださいと言われた。

そして…死亡届を出す様に言われた。

遺体だつて見つかって無いのに?

お兄ちゃんが死んだつて思わなくちゃいけないの?
ヤダ!!絶対に嫌!!!

両親は言われた通り死亡届を出し、私は受け入れられないまま、休んでいたKJの仕事に戻る事になった。

お兄ちゃんの事は、すでに社長からメンバーへ伝えてあつたりしく、私が事務所に顔を出すと、皆私に同情の言葉を掛けてきた。
どうして皆、お兄ちゃんが死んだつて受け入れてるの?
まだ遺体だつて見つかって無いのに。

皆酷い!!!!

その日は病み上がりという事もあって、レッスンをしないで帰った。

家に帰つても、考えるのはお兄ちゃんの事ばかり。

私の所為でお兄ちゃんはあんな目に。

お兄ちゃんは私の身代わりに…。

後悔ばかりが頭をよぎる。

もし…お兄ちゃんの事受け入れてたら…お兄ちゃんは繰かれる事も無かった。

お兄ちゃんと喧嘩なんかしなければ…お兄ちゃんは私を探し歩く事もしなかつた。

悪いのは私…全部私。

考えるだけで…涙が止まらない。

そんな時、ドアを叩く音がした。

「由…。お友達がいらしてるので…お通しする?」「お母さんの声…なんで私を由つて呼ぶの?

「…友達って、誰?」

私は部屋の中から聞く。

「えつと…お名前は?」

お母さんは誰かに話しかけている様だ…て事は、既に隣に居るつて事?

「由…俺だよ。鷹。」

「鷹?どうしたんだら?」

私は鷹にちゃんとお礼を言つて無かつた事を思い出し、部屋の扉を開けた。

「鷹…どうしたの?…あつ取り合はず中入つて?」

私は鷹を自分の部屋に招き入れた。

鷹は部屋に入るなり、キヨロキヨロと部屋中を見物している。

「あつあの…何?」

変な態度をする鷹に問いかけた。

「ん?いや…本当だつたなと思つて。」

何の事だろ?」

「本当に…何が？」

「由…子ちゃん？」

鷹は、私の目をしつかり見つめて話しかけてくる。

「なつ何言つてるんだよ！子ちゃんつて…俺はお力マジヤ無い！」

「…」の前、皆お前の事由子つて呼んでただろ？この前から疑問に思つてたんだ。」

なんだ…本名までバレてるのね？

「…騙してごめんな？」

「いや、大丈夫。でも何でオーディションなんか…。」

鷹は何故Kのオーディションに私が参加したのか不思議に思つている様子。

今更隠す事も無い。

私は鷹に全部話した。

「…そつか…。お兄さんのお陰なんだな…。」

「うん、お兄ちゃんは私の恩人。この部屋から出してくれた恩、友達を作ってくれた恩、命を救つてくれた恩…。」

「すげーお兄さんなんだな…。」

鷹は私の頭を軽く叩く…。お兄ちゃんみたいだな。

「鷹、色々有難うね？助かつた…。」

「はつ？何が？」

「あの時、鷹が居てくれたから取り乱さなくて済んだ。病院まで付き添つてくれて…

今日だつてお見舞いに来ててくれたし…。本当に有難うね？」

「いや…勝手にしてる事だから…。」

それはそうと…お前はこのままKでやつて行くつもりなのか？

「えつ？何で？」

「いや…今お前がKに居るのは兄貴の為だろ？でも…。」

鷹は最後の一言を飲み込んだ。

「…正直解らないの。メンバーに性別の事黙つているのも正直辛いし。

鷹…鷹ならどうする?」

鷹に助けを求める。鷹ならどうする?もし鷹が私の立場なら?

「それは…お前が決める。俺が決める事じゃ無い。

ただ…相談とか話とか、色々聞くからさー別に今すぐ答えを出す問題でも無いと思うし。」

そうだよね…鷹に変な事聞いたやつたな…。

「ねえ…もう一つ聞いてもいい?」

「へつ?何?」

「あのせ…鷹は私が女だつて気づいて…どう思つた?」

「なつ何を急に…。」

「もし…私がメンバーに正直に話したら?」

メンバーは私を拒絶する?それとも受け入れてくれる?

鷹…鷹はどう思つた?気持ち悪いとか思つた?」

もし私がカミングアウトするなら…一番怖いこと聞いてみた。

「うーん…俺的には平氣だけど…その証拠に今此処に要るしな…!…メンバーは…どうだろ?…?拒絶する奴も居ると思つぜ?…多分雪辺りがな。

裏切られた…そう思つかも。雪は単純だからな。」

「やっぱ…そうだよね。」

「もしかしたら、それをネタに言つ寄つてくる奴も居るかもな…!…それは…居ました。

「とにかく…カミングアウトこしたつて、話す時期があると思つぜ?」

「だよね…ありがとう鷹…。」

鷹つて話しやすいな！

第二十九章

次の日、思い足取りで事務所に向かつた。
また変に励まされたら…嫌だな。

「由ーーーーおはよーーーー！」

雪は何時もと変わらず、子犬の様に走つて私を出迎えてくれた。

「おはよーーー今日も元気だね！」

以前と同じ態度の雪に安心感を覚える。

「由、マネージャーから聞いたけど、今日からレッスン復帰するのか？」

「うん。何時までも休んで居られないよーーーまた今日から頑張るからーーー！」

精一杯の笑顔で返す。

「そつかーーじやあ、一緒に頑張ろうなーーー！」

雪と私は肩を組みながらレッスンに向かつた。

しばらく休んでいたレッスン…思つてた以上に身体が付いていかなかつた。

「つつ疲れた…」

汗だくで床に座り込む私。ひい…しんどい。

「由、大丈夫か？あんまり無理するなよ？」

雪は冷たく冷えたドリンクを私に差し出し、横にドカつーーーっと座つた。

「あつありがとうーーー！」

私は受け取つて、一気に喉に流し込んだ。

「あのさ…昨日はごめんな?」

雪がいきなり謝つてきた。なんの事だろ?。

「えつ？ こきなり何？ どうしたの？」

「いや… 昨日さ、皆に気を使われて… 嫌だつたんだろう？」

「… 私、顔に出てた？」

「うわっ 顔に出てない自信あつたのに。」

「いや、顔色と言つか… 纏つてる空氣というか…。」

雪自身確証がある訳じや無かつたみたい。自爆した…！

「つうん。気にしないで？ やっぱりまだ落ち込んでて…。」

「だよな、身内にあんな事があつたら… 普通で居られる訳無いよな… なあ、由…。」

雪が私の顔を覗きこむ様に話しかけてきた。うわー 雪のアップ…！

「お前… 辞めたりしないよ… な？」

雪の表情が心配で溢れてる。

「えつ？ 何で急に… 辞める予定は無いけど？」

「本当に？」

「つうん、まあ。でも何で？」

別に身内が死んだからって… 仕事辞める人居ないでしょ…。

「いや… 職場同じだつたし、一人つて… 何て言つか… 異常に仲が良かつたつて言うか…。」

「… 大丈夫。辞めたりしないよ？」

「本当だな？」

「うつ本当だつてば…！」

もう、本当に辞めないつてば…！ 今… はね。

「そつかあーーー良かつたーー！」

雪は大きく息を吐く。

「せつかく仲良くなつてさあ… 辞めたら寂しいじゃん？ 本当に良かつたよ。」

雪は満面の笑みで私に笑いかける。

「雪… ありがとう。」

「いや、お礼言つのはこつちだし…！」

雪は笑いながら私の肩を叩く。

なんか… 親友って感じ?

まあ… いつか! 普通の同僚より親友の方が嬉しいやー!
どうせ正体を明かせないなら… 親友以上のポジションを望んじゃ駄目だよね?

女の私は受け入れてくれそうに無い。でも親友としてなら… ずっと一緒に居れるもんね。

私と雪は一緒に建物の外に出た。

一人して駅に向かっている途中、私達目がけ、クラクションが鳴り響いた。

「おい! 迎えに来たぞー! ー」

鷹が私に向かってヘルメットを投げる。

「えつ?」

何? 約束したつけ??

「おいつ! 飲みに行く約束だろ?」

鷹はウインクしながら答える。

「えつ? あれ?」

身に覚えが無いです。

「由ー、ずるい。二人で飲みに行くのかよ…。」

可愛く雪が不貞腐れる。

「おう! 昨日約束してな? なあ由?」

またウインクする鷹。話を合わせるつて事?

「うつうん…。そなんだー! ー」

雪に向かって嘘をつく。

「ふうーん… ずつるーい! ー」

雪は拗ねてしまった… その拗ねた顔も可愛いけどねー! ー

「じゃあ… また明日ね?」

これ以上居たらボロが出そ…。

私はヘルメットを被り、鷹の後ろに跨った。

鷹の背中にしがみ付く。

痛い位の風が私の身体を包んだ。

そして鷹は、飲みに行くでもなく私を家まで送つてくれた。

「鷹…もしかして私を送りに…？」

私はヘルメットを鷹に差し出し尋ねる。

「ああ…まあな！一応女の子だし？知ってるの俺だけだろ？
まあ、SATOさんの代わりとまでは行かないけどな…！
後、そのメットはお前専用だから返さなくていい。」

鷹は恥ずかしそうに私に言つた。

鷹…鷹はもしかして、お兄ちゃんに悪いって思つてるのかな？
鷹、私を心配してくれてるんだ…。

「あつありがとう…。」

「まあ、俺のユニットって今はまだ暇だし…忙しくなつたら迎えに行くの無理かもしれないけど…

それまでは俺、お前の事送つてやるから…な？

鷹は照れ笑いしながらバイクに跨つた。

「お前、明日もレッスンだろ？」

「うん。」

「じゃあ、また明日も待つてるから…じゃあな…！」

「あつありがとう…。」

お礼を言つた私の頭をポンポンと叩いて、家に帰つて行つた。

私は鷹から貰つたヘルメットを机に飾つた。

ヘルメット…私のだつてさ…！

なんか、恥ずかしい…！

あんなカッコイイ男の子から、女の子の扱いを受けてしまった。

女の子扱いなんて何年ぶりだろう。

鷹つて…本当に優しいんだな。

あんなに見た目は怖そうなのに、見た目じゃないんだな！

雪もそうだけど、私つて恵まれてるんだろうね。

顔の良い人達に囲まれて、その人達から大事にされて（一人例外も居るけど…。）。

男の人つて、怖いだけじゃなかつた。

優しい人だつて沢山居た。

やつと解つた。

でも、それを気付かせてくれたのつて、お兄ちゃんのお陰だよね。

お兄ちゃん…お兄ちゃん…早く帰つて来て…

生きてるなら…お願いだから。

翌朝、私は鷹から貰つたヘルメットを手に家を出た。

メットを持つたままレッスンに向かい、終わつたら外で鷹を待つた。

鷹はちゃんと来てくれて、私を家まで送つてくれた。

「じゃあ、また明日な？」

鷹は私を家の前で降ろし、自分はまたバイクに跨つた。

「あつうん…」

私はお礼を言つけど…ちょっと心配事があつて空返事をしてしまつた。

「ん?どうかしたか?」

鷹は私の様子に勘づき、心配そつに声を掛けてくれた。

「…あのね、雪が…。」

私は鷹に正直に告白した。

実は…雪が拗ねちゃつて困つてるの。

昨日だけならまだしも、今日も一人で飲みに行くつて言つちやつた

から。

だって、送つてもうなんて正直に言つたら、男としては可笑しいでしょ？

男なのに鷹に送つてもうなんて…

明日も雪の前で鷹と飲みに行くなつて言つたら…雪が可哀そつ。どういい訳しようか、帰つてくる間、ずっと考えてた。

鷹は、私話を聞いて…少し考えた。

でも、直ぐに答えをくれた。

「別に大丈夫じゃね？俺が家に連れて帰つた所為で事故にあつたとかさ。

俺が勝手に責任感じて、無理やり送られてるとか言えれば…ね？」
鷹はどうだ！つと言わんばかりの表情。

「まあ…いざれにせよ少し考えなくちゃね！宿題！！」

私は鷹の答えをスル する様に返す。

だって…鷹の考えたいい訳、鷹が悪者になつちゃうじゃない。

親切な鷹を悪者にするなんて…絶対嫌！！

「そつ？いい案だと思ったのに…。じゃあ、思いつき次第メール入
れるわ！」

期限は明日の帰宅時間までな？

「うん、宿題ね？」

「懐かしい…いや、恐ろしい響きだな。まあ…考えるか！じゃあ、
また明日な？」

「うん、また明日ね！！」

私は手を振つて鷹を見送つた。

部屋で一人で言い訳を考える。

なんて言つたら雪の機嫌が直る？

何て言つたら鷹が悪者にならない？

……私、なんだか浮氣の良い訳をしてるみたい。

秘密がバレない為の良い訳だけど……男と会う自然な理由を探してゐる
つて事でしょ？

何か……変なの！！

私は眩しい光で目を覚ました。

時計を見れば……おわ！遅刻する！！

急いでシャワーを浴び、身支度を整える。

早くなったな……男の準備するの。

……んつ？何か忘れてる様な……。

うーん、思い出せない。

つて、こんな考え方してる時間無い！……早く行かなくつけ！

私は朝食も食べずに家を飛び出した。

私は急いで事務所に向かった。
何時もの様に雪が出迎えてくれた。

「おはよー。」

雪が膨れ面で迎える。

あつ……忘れてた事、思い出した。

「おっお早う。」

気まずく挨拶を返す。

「来週……写真集の発売日だな。」

プクツと膨れた頬で喋る。

「あつそうだね。楽しみ！」

そういうえば、来週は以前撮った写真集が発売されるんだった。
私の顔……全国にお披露目なのね。緊張だな。

私と雪が廊下で喋っていると、マネージャーがやつてきた。

「由君、雪君、ミーティングするから集まってくれる?
なんのミーティング?」

私たちは解らないままマネージャーの後を着いて行つた。

部屋には他のメンバーも集まっていた。

「あはようござこます。」

私と雪は元気よく挨拶をした。

「今日は新曲の打ち合わせをします。」

マネージャーが司会進行。

「じつ新曲ですか？」

私と雪はビックリ！もう新曲？

「はい。本当は早くから準備は出来ていたんですが……

由君の事情や人員の手配で延期されてまして……。」

そつか……私たちの事で延期になつて……。

「本当は先週から歌やら踊りやら合わせて行きたかったんですが、時間が有りません。

これ以上は延期出来ないので、一人とも今日中に歌だけは覚えて下さい。」

今日中！…覚えられるかしら、不安。

「解りましたか？」

マネージャーが顔を覗きこんでくる。

むつ無理なんて言えるフインキジや無いでしょ！！

「はっはい…。」

口籠る私と雪。

「では今日は解散します。明日は歌合せを行いますので宜しくお願ひします。」

私と雪は部屋に残り、メンバーとマネージャーが出て行くのを見送つた。

「ふうー。」

部屋に一人で残り、ため息をつく。

「おい…由。自信あるか？」

雪が不安そうな声で話しかけてきた。

「やつやるしかないよね…。」

自分に言い聞かせる様に答えた。

楽屋に戻り、私と雪はマネージャから渡された歌詞を六が空くほど見つめた。

一緒に渡されたCDを聞きながら、必死にメロディーと歌詞を覚える。

2時間ほど一人で暗記した後、成果を確かめる様に、お互い歌を披露した。

「じゃあ、最初は俺が歌つから。少しでも変な所があつたら遠慮なく言ってくれな？」

雪は喋り終えると、深く深呼吸をした。
息を吐き終えると、雪の皿付きが一気に変わった。

雪の口から綺麗なメロディーが流れる。

綺麗な発音、優しい声…。

私は思わず聞き惚れてしまつた。

「よ…し?由…!」

雪の声で現実に戻された。

「あつあれ?」

私はビックリして激しく瞬きをする。

「おーい!—由さん?聞いてました?」

雪が私の皿の前で手をヒラヒラさせる。

「きつ聞いてたよーあつあの…雪の声が綺麗だつたから…聞き惚れちやつた。」

正直に白状。

「あつそつそつ?嬉しい事言つてくれるね?」

雪は照れた様に頭を搔いた。

「で、肝心の歌の出来栄えは?俺、何か間違えてた?」

「きつ聞き惚れて…覚えてない…」めん!もう一回歌つて?..」

手のひらを合わせ、雪に謝る。

「まつマジ?おいおい…。解つたよ。嬉しかつたからまつ一回歌つ。
でも、次はちゃんと評価してくれよ?」

雪は苦笑いしながら深呼吸をする。

雪の歌は完璧だった。

完璧に歌詞も覚え、メロディーも自分のパートを完璧に歌いこなし

ていた。

「はあはあ…今度はどうだつた?」

雪は完全燃焼でもしたかの様に疲れていた。

「うん!完璧!雪つて凄い!!」

私は雪に拍手を送る。

「じゃあ、次は由だな?ほら、聞いててやるから歌え!」

雪は椅子に腰を降ろし、足を組む。

「うつうん。お願いします。」

雪…監督みたいだな。

私は呼吸を整えて…口を開く。

覚えたてのメロディー、歌いにくらいな。

でも、なんとか間違えずに最後まで歌いきった。

「どうどうかな?」

歌い終え、雪に感想を聞く。

「うーん…とりあえず合格。」

雪は渋い表情だ。なんか悪かつたのかな?

「あの…とりあえず?どこか悪かつた?」

「うーん、なんか…聽きずらい。声が固いのかな?」

雪は首を傾げる。

「声が…固い?」

意味が解らず雪に聞く。

「うん。多分緊張の所為だらうな。リラックスしてもう一回歌つてみな?」

雪はホラホラと手で合図を送ってきた。

「うつうん。……ふう。」

深く深呼吸して、気持ちを落ち着かせる。

大丈夫。さつき間違えなかつたし。今度も大丈夫。

.....。

「どうどうへー

歌い終え、私は雪に声を掛ける。

「…やつさよりは良い。でも…まだ固いかも。」

雪は腕まで組んで考え込んだ。

「まだ固い？緊張してるのかな…。」

私も考え込む。

「そうだ。今度は一人で歌つてみようか？」

雪は立ち上がり、私の傍に立つ。

「一緒に？」

私は雪の方を向き、聞く。

「うん、一人で歌えば感じ解るかも…それに…緊張しないだろ？」

雪は笑いながら私の肩を抱く。

雪の温かさが全身に広がると、不思議と気持ちが落ち着いてきた。

私は雪のコードに合わせ、声を乗せていった。

最初は上手く噛みあわない声も、最後には綺麗なハーモニーになつた。

さらり、もう一回最初から歌い直すと…私と雪の声は綺麗に混じり合つていた。

「ほら。綺麗に歌えたろ？」

雪は笑いながら私の顔を覗きこむ。

「うん！有難う！自信付いたよー！」

嬉しくて、ちゃんと顔を見てお礼が言いたくて、顔を雪の方へ向ける。

「うわあ……」

雪の顔が…どうアップで視界に飛び込んでくる。

「どうだつたー！肩抱かれてたんだっけ？」

「おつお前失礼な声出すね。一応芸能人の顔に向かって…。」
「だつて！好きな人のアップなんて…！」

「「うひごめん…！」

雪の顔を見て謝罪の言葉を言ひつ。

…雪の顔、こんな近くで見れるなんて…。

綺麗な眼…長い睫毛…艶々な唇…

思わず見惚れちゃう…

「あ…あの、由さん？あんまりジロジロ見ると…キスしちゃうよ…」
雪が笑いながら「冗談を言ひつ。

「雪がしたいなら…いいよ？」

雪に見惚れていた私は…つい本音を口に出す。

「…うひうわ！ごめん！冗談だよ…！」

自分の吐いた言葉の意味を思い出し、赤面しながら雪に謝った。

「俺…そつちの趣味は…無いんだけどね？」

「へつ？」

「なんか…へんな感じ。」これで由覚めたら、責任取れよ？」

雪が意味不明な言葉を吐く。

すると、雪は私の肩に回した腕に力を込め、私を自分の胸に引きずり込む。

ビックリして慌てる私…。

「ゆひ雪？冗談だつ…うひむぐつ…！」

焦つて雪に伝える。

でも…ちょっと遅かつた。

雪は…私を引き寄せ、自分の口を押し付けた。

口から伝わる雪の温もり。

温かい…胸の奥がキューンと熱くなる。

雪は私の頃に手を添え、頭を逃がさない様に固定している…。
逃げないので。

雪はまるでアイスでも食べるかの様に、自分の唇で私を唇を味わう。
どうしたらいいか…硬直したままの私。

雪は、自分の舌先を私の口内に差し入れた。

雪の温かく、湿つた舌が私の口内を動き回る。

雪の舌…夢みたい。

愛情を込める様に、雪の舌を出迎えた。

優しく吸い上げたり、先っぽで「チヨ チヨ 摶つた。

次第に…雪の動きも激しさを増し、熱い吐息が私の頬に掛る。
私も…なんだか下腹部が熱くなってきて。

雪は突然口を離した。

「ゆつ 雪？」

私は息を荒げたまま、雪に声を掛ける。

「うつ ゴメン…」ここまでするなんて…。」

雪は私の肩に両手を置き、頭を下げる。

「うつ うつん…謝るな…よ。」

なんか…謝られたら惨めじやん。

「冗談のつもりだったのに…途中から本気になっちゃってな…。」

雪は苦笑い。

「おつ俺だつて…冗談だから…忘れよつ…な?」

私は笑つて雪に笑顔を返す。

本当は、「冗談と言われショックだった。

でも、雪は私を男だと思っている以上、「冗談で済まないと…。

「そりだよな?お互い歌が成功して、興奮してたしー冗談だ!冗談。

「

「そつそつだよ！アドレナリン効果！」
でも…素敵な思いでになつちやつた…！」

気が付けば、空はうつすら暗くなつてきた。

「そろそろ帰るひぜ？鷹だつて迎えに来る時間だろ？」

雪は荷物を纏めながら話しかけてきた。

「うつうん。そうだね？」

しまつた…。雪にいい訳考えてなかつた。
もし、行き先とか聞かれたらいど「うつしよう」。

いい訳を必死に考えていたら、雪は帰り支度を済ませ、私の前に立つた。

「じゃあ、今日はお疲れさん！歌は家でも練習じりよ？また明日テ
ストだからな？」

雪は何も聞かずに帰るひつとしている。

「あつありがとう。雪…歌教えてくれて…。」

後ろを向いた雪に感謝を伝えた。

私の声に雪は一瞬立ち止まり、私の方へ帰つてきた。

雪は私の耳元に口を寄せて…エロチックな声で喋つた。

「由…お前の所為で俺…痛い位勃つちやつた。」

雪は意地悪な顔をして、さつさと部屋を出て行つた。
耳に残つた雪の熱…それだけで下半身が熱くなる。

私は荷物を纏め、外でまつている鷹の元に走つた。

「うつごめん！お待たせ！」

小走りで近寄る。

「おう！お疲れさん…！」

私は家から持つてきたヘルメットを被り、後ろに跨つた。

鷹は何時もの様に私の家の前まで送つてくれた。

後ろから降り、私は鷹に礼を言つ。

「ありがとう！」

いつもああ……って、直ぐに鷹から返事が返つてくる。でも、鷹は何か考へてる様だった。

「由、今日何があつたか？」

「えつ？ 何で？」

「いや……お前待つてる時、先に雪が出てきたら？ その時、雪の様子が変だつたから……。」

「へつ变？」

「なんか……真っ赤な顔して、頭抱えてた。思い当たる事……ある？」

思い当たる事は……あります。

でも、私の前では動搖してる様に見えなかつたけど……。

「あの……雪と、チユウじゅやつた。」

「はあ？？ チュウつて？」

「だから……冗談で……しちやつたの。でも、私には動搖してる風に見えなかつたよ？」

「雪だつて、男としたと思つてただろ」つし……」

言つて悲しくなるけどね。

「そつか……だからあんなに……。」

鷹は一人で納得してゐる。

「えつ？ 何が？ 私にも教えて……！」

鷹は不敵な笑いで返してきた。

「それは……教えて欲しい？」

「んもう……焦らさないでよ……！」

「じゃあ……俺が間違つて無いか確かめさせてくれたら良こよ？」

「確かめる？……うん、別にいいけど……。」

「じゃあ、失礼して……。」

チコッ。

「たつ 鷹あ——！」

「あははっ！ 雪ばっかりズルイ！ 僕も仲間に入れてくれ——！」
雪とは違う鷹とのキス。短くて……唇が一瞬触れただけ。

「もう……で、何が解ったのか教えてよ——！」

「ああ。あのな……多分だぞ？」

「うん。」

「雪は……お前を男だと思つてキスした。でも、女相手するみたいに興奮しちゃつて……」

戸惑つたんだと思ひやば？

「戸惑つた？」

「ああ。多分今頃は、あっちの趣味があつたと思つて苦笑じてる筈だぜ？」

「そつそつか……。」

確か……勃つたつて言つてたし……。

「あーあ、可哀そうな雪ちゃん。本当は女相手なのにね。」

鷹が悪そうな笑顔でニヤニヤ。

もつ、鷹面白がってる場合じやないの——！

第二十一章（前書き）

投稿遅くなつてすみません（――）

第三十一章

私は自宅に戻つても猛特訓。

雪が教えてくれた感じを思いだしながら。

……「うん、多分大丈夫かな?」しつかり覚えました!

明日、雪にもう一度聞いて貰おう。

気が付けば既に真夜中。

私は練習を切り上げ、疲れた身体を洗い、寝る準備を済ませ布団に入る。

今日の素敵な思い出を思い出しながら…

翌日、私は事務所に着くなり雪を捕まえ歌を聞いて貰った。

歌い終わると雪は満足そうに笑い、頭をグシャリと撫でてくれた。

その後、メンバー全員で歌を合わせ調整などを済ませた。

…そして踊り。

今回は難しい立ち位置も無く、手の振りだけだった。
思いのほか簡単に事は進み…数日後。

今日はいよいよ新曲の収録。

私は初めてのCD収録で緊張がMAX状態だった。

何時もの様に雪に緊張を解して貰おうと、スタジオの端に居る雪の傍に近づいた。

「…雪?…いよいよ収録だね…。おつ俺…すげー緊張なんだけど…
雪?…」

雪の顔を覗きこめば… 雪は真っ青な顔をしていた。

「ゆつ雪？ 大丈夫？ 顔色が悪いけど？」

心配になり、雪の手を握ると… 冷たい。

極度の緊張の所為で、雪の手は氷の様に冷たかった。

「雪… 大丈夫？」

思わず声が大きくなる。

「んつどうかしたか？」

私の声を聞いたのか、華麗な足音が近づいてくる。KOJICOさん の足音。

「あつあの… 雪が…」

振りかえり、KOJICOさんに助けを求める。

「ああ？ 雪がどうかし……。あつ…。」

KOJICOさんは一瞬で雪の体調を察した様子。

「…雪。おこ…雪…！」

KOJICOさんは少し声を荒げ、雪の肩を掴み揺つた。

「…んああ…あつあ…れ？ KOJICOさん…あつ…でつ出番ですか？」

緊張しそぎて状況が解つて無いみたい。

「おい。しつかりしる。お前はもうKのメンバーなんだぞー。」

「はつはい…そつそつですよ…ね？ おつ俺も…ミロンバー…」

団律すり回りない雪。

「ふう。じゅうがないな… まあ初めての収録だしな。

とりあえず一回、深呼吸でもして落ち付け。」

珍しく？ KOJICOさんが頬笑みながら、雪に優しく話しかける。

「はつはい…すーー、はーーー…。はあ。」

雪の顔色に少し赤みが戻つてくる。

「雪、誰だつて緊張するんだ。落ち付け… それに失敗しても大丈夫

だ。俺達メンバーが居る。

お前は何も心配するな…ただ何時もの様に歌えばいいだけだ。」

KOUJOさんは真っすぐに雪の田を見つめ、穏やかに話しかけた。雪は小さく頷き、KOJIEさんの話を聞いていた。

「落ち着いたか？」

「はい。もう大丈夫です。迷惑かけてすみませんでした。」

喋り終わる頃には、いつもの元気な雪に戻っていた。

「まあ、最初は誰だつて緊張する。そのうち鼻糞穿りながら歌える。心配するな。」

「はう鼻糰？ですか…ふつ。くつくくつ…」「…

思わず噴き出す雪。よかつた…もう大丈夫だね？

「せつそんなに面白かった…か？」

噴き出す雪を見て…今度はKOJIEさんの顔色が悪くなってきた。

「あつ…いっついえ…」

KOUJOさんの顔色を見て何かを察する雪。やつやばい…今度はKOJIEさん…!!

案の定、KOJIEさんは真っ赤な顔でスタジオを出て行ってしまった…面倒くさあ！

収録時間も迫つていて…KOJIEさんの何時もの逃亡癖にメンバー全員の顔色が変わる。

いつ急いでKOJIEさん探しなくちゃ…!!

そして…やつぱり私が一番最初にKOJIEさんを発見。

誰も居ないスタジオの片隅に蹲るKOJIEさんを見つけた。

何で私が最初なんだろう…何時も同じような場所に隠れるのにね…

私はメンバーに見つかった連絡を入れると、KOJIEさんの傍に近寄った。

「KOUJU-Eさん？ まだですか？」

蹲つてゐるKOUJU-Eさんに声を掛ける。

「…五月蠅い。沢山の人間の前で笑われたんだ…。」
つと、返事が返ってきた。

「あつそうですか。残念。」

「…何がだ。」

「折角見直せそうだったのにな…今田のKOUJU-Eさん。
雪を励ましてたKOUJU-Eさん、カツコ良かつたのになあー。
KOUJU-Eさんは奮い立たせるにはプライドを擲るか、自信を取り戻させるのが一番だ。」

「…本当…か？」

ほら、反応があつた。

「はい、本当です。でも…すぐ逃亡する癖は…ちよつとねえ？」

KOUJU-Eさんは絶対に怒つてくれる筈ー
でも…答えは意外だつた。

「ホントだな？ 本当にカツコ良かつたんだな？」

あ…れえ？ 怒ると思つたのに。

「えつ？ ええ。後輩を優しく励ます人つて素敵だと思いますけど？」

「…そつそつか…お前がそう思つてくれるなら…」

そう言つと、KOUJU-Eさんは急に立ち上がり、私の方に振り返つた。

「解つた。お前の言葉、嬉しかつたから頑張る。」

そこには何時ものシンシンしたKOUJU-Eさんの姿は無く…ちよつ
とドキドキした。

表情は何時もの物だけど…纏つてゐる空氣が柔かかつた。

KOUJU-Eさんはそのまま部屋を出て行き、私も後を追う様に付いて行つた。

KOUSHIさんは真っすぐスタジオに戻り、何事も無かつたかの如くメンバーに合流した。

「おっおい、今日は早いな？しかしお前…凄いな。あんな我儘猛獸…。」

つと、尊敬の眼差しで私を見つめるHEYさん。

「いえ、なんかコツを掴んだというか…鍵を見つけたとこ…」

「ふーん、まあ何でもいいけどさーこれからはKOUSHI担当、お

前な！」

「ええ…マジですか…」

「おいい、そんな嫌そうな顔するなよ…頼む…」

「はあ…解りました。」

「良かつた…これで収録とか止まる事無くなるわ…助かった。」

心底嬉しそうなHEYさん。

そんなに困つてたのかな？

KOUSHIさんも無事？」に合流した所で、いよいよ新曲の収録が始まった。

全員マイクの前に立ち、ヘッドホンから流れるメロディーに声を載せて行く。

何回か撮り直しをした程度で、無事に収録は終了した。

「いやあ、今日は由のお手柄だったな…！」

嬉しそうに頷き合つHEYさんとKAJIEさん。

「そつそんな…俺は何もしてません。」

「そんな事無いよなあ！俺、KOUSHIが居なくなつた瞬間、今日中の収録は諦めてたんだ！」

「そうそうーまた一日掛かるのかつて覚悟してたし…」

そつそんなに苦労してたんですか…

新曲の収録が終わった事もあり、私達は打ち上げ…というか、スタッフ達と飲みに行く事になつた。

場所は居酒屋。

でも、一応芸能人という事もあり、貸し切りで行われた。
私はすかさず雪の隣を確保して参加。
雪との楽しいお喋りを楽しんでいた。

「今日はカツ「悪い所見られたな…それに引き換え、お前…よく緊張しなかつたな！」

雪は私を褒めてくれた。

でも…実は貴方とＫＯＵＪＩさんがパニックに陥っていたお陰で私は他の事を考えなくて良かつたの！

…なんて本当の事は言えないけどね。

「そつそう？俺も一応成長したのかな？」

「おっ！ 言うねえー！」

私は、雪との楽しい時間を過ごした。

この前、歌を一人で練習した時の事…

あの後、雪が離れて行くんじゃないか不安だったけど、今日の様子からして大丈夫そう！

良かつたあ！

雪に嫌われたら…JKでなんてやつていけない！

雪は、私が芸能人である為に必要不可欠！

雪が居なきや…芸能人なんて出来ない！男装なんて意味が無い！

それから約一時間が過ぎた。

適当に切り上げるスタッフさんや、既に潰れている人も居る中、会はお開きになつた。

私は家に帰ろうと荷物を持ち、店から出ようとした時、急に入口が開いた。

そしてそこには、見慣れた顔が居た。

「あつあれ？ 鷹？ どうしたの？」

鷹は鼻の先を真っ赤にして店に入つてきた。

「どうしたのつて… 雪に電話したら皆で飲んでるつていうから。」

「ああ、そうだね。鷹にも声掛ければ…」

「そうだよー！ 冷たいな由は…」

少し口を膨らませ、鷹が膨れていた。

「うつごめん。」

「はあ、しかも既にお開きムードだし…。」

鷹は帰り支度を始めたスタッフ達に目線を向ける。

「うつごめんつてば！… そつそつだ！… 一次会… 一次会に行こうつー…」

「二次会？俺と二人で？」

「えつ？ もしかして…俺とじや嫌だつた？」

やつぱり… 女とじやシマラナイよね…。

「いーやー… 一人で飲み！ いいじやん！ 行こうつー…」

鷹は嬉しそうに笑い、私の腕を掴んで店から出て行つた。

今日は遅くなる予定だつたからヘルメットを持ってきていなかつた。だから鷹と二人で近くの別の居酒屋に入つて行つた。

そこは少し暗いフインキで、居酒屋だけビ、プライベートが確保されてるような…

秘密の隠れ場所つて感じだつた。

席は完全に個別で、周りは高い壁で仕切られている。

なんとなく大人な感じで…居心地もいいな。

「さて！飲みますか！」

鷹は楽しそうにメニューを見ていた。

「のっ飲むのはいいけど…俺、さつきまでの酒が残つて…既にちょっと酔つぱらつてます私。

「えー！つまんないじゃん一人で飲んでてもお。」

「うつ…じゃあ、少しだけ…弱めの酒つて何？」

「弱め？…じゃあ、コレなんてどう？」

「これ弱いの？んじゃあコレ頼むね。」

「了解！じゃあ俺は…決まり！すみません！」

鷹は店員を呼び、注文を済ませる。

飲み物が届くまでの間、鷹と何気ない会話をしていた。
そして…鷹が頼んだ飲み物が届くと、一人で乾杯をして、一気に喉に
流し込んだ。
そして直ぐにお代りを注文。

鷹が頼んでくれた酒は、甘く飲みやすかつた。
ジューースの様な味で、私は凄く気に入った。
鷹って何でも知ってるんだな…ちょっと尊敬。

「なあ、由。実は今日な…お前に話があつたんだ。」

「へつ？話？」

「あのな…実は…」

「じつ実は？」
鷹は溜めながら、勿体つけて話す。

なつ何が飛び出すんだ？

「実は…俺のデビューが決まりました！！！
でつデビュー？鷹がデビューするの？」

「デビューツて、鷹のユニットのデビューが決まったの？」

「いや…最初はグループでの筈だつたんだけどな。なんと一・俺。ピンでのデビューだ！」

「うわ！本当？凄いじゃん！！」

「えー！鷹がピンでデビューかあ！凄いなあ！」

「最初は俺も驚いたけど、これってチャンスじゃん？俺つて運が強くな？」

「うん！でも…なんで急に一人でつて事に？」

「それが不思議なんだけどな…マネージャーが言つには…」

「うん、マネージャーが？」

「なんか…大物芸能人がたまたま事務所に来た時に俺を見かけたらしくて…

「誰だかは教えて貰えなかつたけどな。なんかソイツの後押しがあつたらしいんだ。

「大物つて…誰なんだろう。俺…ちゃんと面向かつて礼が言いたいよ…」

「ふーん、大物芸能人か…そんな事もあるんだね…ラッキーじゃん！鷹！」

「まあなーとおりあえずこのチャンスを物にするぜ！」

「鷹は意気込み、新しく届いたばかりの酒を一気に飲み干した。また鷹はお代りを注文し、来た途端にまた一気に飲み干した。

鷹は酒を急に飲んだ所為か、顔を真っ赤にしながら熱く語り、二時間ほど経つた時には…

「テーブルに顔を載せ、グーグーと寝てしまつた。

「鷹…余程嬉しかつたんだな。

「私も嬉しいよ！鷹がデビュー出来る事。

本当に良かつたね！おめでとう…」

私はタクシーを呼び、店員の助けを借り車に放り込み、鷹の自宅へ向かつた。

でも、家の前に着いても、鷹は起きる気配が無かつた。

「おーーい！ 鷹あーー！ 家着いたぞー！ 起きろー！」

思いつきり鷹の身体を揺さぶる。

「うーーん、もうちょっと…」

寝ぼけてるし…こりゃダメだ。

私はタクシー運転手の手を借り、鷹を玄関前に座らせた。ポケットを漁り、鍵を探す。

見つけた鍵で玄関を開け、鷹を引きずり中に入つた。

久しぶりの鷹の家…何時も鷹が付けてる香水の香りがする。私は重い鷹を何とかベットまで運び、一息つく。

軽く首元だけシャツをあけ、身体を楽にしてあげる。さて、私も帰ろうつか…と思つた時、鷹が苦しそうに呻き始めた。

「うーーっ苦しいーーー…みつ水う…」

「えっ？ 鷹、どうか苦しいの？ 水飲みたいの？」

「よつ由…みつ水…水くれ…」

「わつわかった！ 水だね？ ちょっと待つてーーー！」

多分飲み過ぎで気持ち悪いんだな…

早く水飲ませてあげよう。

私は冷蔵庫に入っていたミネラルウォーターを勝手に押傭し、鷹に手渡す。

鷹は真っ青な顔で受け取ると、急いでガブガブ飲みだした。一気に全部飲み干すと、今度は急に口を手で押さえ出した。

「えつ…まさか…鷹？ 気持ち悪いの？」

私の問いに、鷹は頭を上下に振り答えた。

「ちよつちよつと待つてーー急いでトイレに…」

鷹の腕を掴み立たせた瞬間……

「ぎさあ———！」

私は鷹の嘔吐物を頭からかぶつてしまつた……最悪。

「ぐつごつこじめ……うええええ……」

終わらない鷹の……。

仕方なく、私は風呂場に鷹を連れて行き、シャワーの栓を捻つた……。

第三十一章（後書き）

更新が遅くなってしまった。

ちょっと忙しくて…って、いい訳ですか？

でも、見捨てずに読んで下さった皆様、本当にありがとうございます。

これからも私の秘密の話をしよう、読んで下さるところへ

第三十一章

「ほら！しつかりして鷹！！」

私は鷹の頭から温めのお湯を掛ける。

ついでに私も服を着たまま頭から湯をかける。

「うー…ごめん。俺…女の子になんて事…」

少し正気に戻った鷹は反省しているみたい。

「もういいから…ほら鷹、腕上げて？」

私は嘔吐物塗れの鷹を脱がそうと、衣服に手を掛ける。

「うーん…俺…臭い…。」

鷹は自分の匂いを嗅いで嫌そうな顔をし、素直に腕を上げた。
私は一気に鷹の上半身を裸にし、石鹼を使いながら綺麗にしてあげた。

「…はい、もう大丈夫。後は自分でやつてね…」

流石に下半身は…脱がせられない。

後は自分で処理する様に促した。

「あう…ありがとう…ごめんな…。」

「いいから。私も洗いたいから早くしてね？」

「ああ…そつか。お前もグロ塗れ…。」

鷹は私の姿を見て…一瞬固まる。

ん？私…何か変かな？

「なつなによ！そんな見て…何か変？」

「いついや…ちょっと刺激が…」

「へつ？刺激…」

「あわあ…じつごめ…！」

慌てて胸を隠す。

だつて、濡れてスケスケに…！

私は急いで浴室から飛び出し、取り合えず鷹が出てくるのを待つた。鷹は自分の身体を洗い、少しだけ風呂の扉を開け、手を差し出した。

「なつ何よ…」

ヒラヒラと何かを催促する鷹の手のひら…あつバスタオル！

私は側にあつたタオルを扉の隙間から鷹に手渡した。

鷹はざつと身体を拭き、田の前に現れた。

臭い私は対照的に、鷹は既に良い匂いがする。

「大丈夫？ 気分は？」

心配して鷹に尋ねる。

「あ…大分スッキリした。ありがとう。ほら次…どうぞ？」

鷹は壁際に寄り、私に道を譲る。

「うん、お借りします。あつそうだ。何か着る物貸して？」

ベチョベチョに汚れた服じや帰れない！

何か服を貸して貰いたい。

「あつああ。用意しておく。」

鷹は何故か天井を見たまま答えた…そつか、私…スケスケだった。

…気を使つてくれたんだね？

それにしても…上半身裸で腰にタオルを巻いただけの鷹つて、少しドキドキする。

だって、男の人の裸なんて、お兄ちゃんかお父さんしか…

あつ後、KOUJIさんも…

何か、男の人でも裸つて皆違うんだな…

お父さんやお兄ちゃんは温かい感じ。

KOUJIさんは…スケベな感じ。

鷹は…包まれる感じがする。

広い胸板、綺麗な筋肉。私を全てから守つてくれる感じがする。

何か…鷹に抱きしめて貰いたい感じ。ぎゅつ…包んで欲しい。

いかんいかん。私が好きなのは雪でしょ？」これは鷹ですよ？

何か…男の人気が女性の裸にムラムラする気持ち、分かります。

コレって…鷹に欲情してるって事でしょ？

「…あの、由さん？何してるの？」

鷹の声が頭の上から聞こえてくる。

「…へつ？何つて、お風呂入ろうと…何で？」

「何でつて…お前にこそ何で俺の事…そんなガン見なの？」
ガン見つて、私そんなに鷹の事…見てた？

「えつ、そんな見ちゃつてた？」めん…。」

「いや、別にいいけど。」

少し照れた様な鷹の態度。

なーんか…少し気まずいフインキが流れる。

はつ早く風呂に入っちゃえ！！

私はその場の空気に耐えられなくて、急いで鷹の横を通り過ぎた。

扉をしつかり締めて、全身裸になる。

鷹のシャンプーを借りて洗髪。

…鷹の匂い。

石鹼を泡立て、身体に塗る。泡泡！

シャワーで綺麗に流せば、気分もサッパリした。

私は風呂の扉を少しだけ開け、鷹が近くに居ないのを確認してタオルを探す。

扉の近くに、鷹が用意してくれたタオルと着替えを見つけると、それに腕を通した。

少し大きめの鷹のTシャツにダボダボのスウェット。
服から香る鷹の香り…鷹に抱かれてるみたい。
なつなんかエツチ…！

私は着替えを済ませ、ソファーに寝転がる鷹の傍に近寄った。

たつ鷹は…軽くシャツを掛け、ズボンしか履いて無いし…エロい…

「あつありがとう。スッキリした。」

私は鷹に礼を言つ。

「いや、俺こそめんな…お前の事、汚しちゃつて…」

「いいよ！この前は私が鷹に迷惑掛けたんだし。今日はお返しだよ！」

「そういうえば…そんな事もあつたな。」

「うん。だから気にしないで？」

「ああ。ありがとう。」

鷹は笑つてくれた。

そういうえば部屋が綺麗に掃除されてる。自分で後始末したんだ。それに、部屋中に良い香りもする。さつきの嫌な匂いが嘘みたい…これつて…いつも鷹が着けてる香水の香り？

「鷹、良い匂いがする。」

「ああ、さつきのままじゃ…また吐きそうだったしな。」

「あは！確かに。でも…今は凄く良い香りがする。」

「ふーん、お前この匂い好きなの？」

「うん、何か…鷹に包まれてるみたい…」

やばっ！思わず本音が！

「つつつつ…お前、冗談キツイな…」

「冗談キツイって…そんなに嫌なのかな。正直ショックだな。」

「あつ…あはは！冗談だよー！そんな怒らないでよーーー！」

「そうだよね、私みたいなブス、メイクしないと外にも出れない様な不細工女…」

鷹は優しく接してくれるけど本音は…

私みたいな元引き籠り女…勘弁だよね?

「えつ？ そうじゃなくて、何か…勘違いしてない？ お前。」
かつ勘違い…そこまで言わなくても良くて無い？

「なつ何が！…だからさつきのは面白いかなって…本気に取らな
いでよ。」

折角気を許せる友達が出来たと思つてたのにな…ショック。
私…冗談も言わせてもらえない程嫌われてる？

今までの鷹の態度は全部…お兄ちゃんへの罪滅ぼしなんだね。

「だから、やつぱり何か勘違いしてるな由…俺は…」
鷹が喋つてる。俺はの続き…

俺はお前なんかに好かれても迷惑だつて言いたいんでしょう？
もう、最後のフレーズまで聞いたら立ち直れない。

私は鷹が喋り終わる前に席を立つた。

「わつ分かったから！…もう止めて…着替えは洗つて返すから。」

私は汚れた服を風呂場に取りに行き、帰ろうと鞄を持った。

「なつ何やつてんだよ！…いきなり怒りだして…俺の話、最後まで聞
けよ！」

鷹が怒ってる…ちょっと怖い。

早く帰りたい！早く部屋に籠りたい！

早く人目が無い場所に行きたい！！

久々の感情。

忘れてた感情。

引き籠つていた、あの時の感情。

誰の視界にも入りたくない。

自分の顔を見られたくない。

怖い…人が怖い。

私は逃げるよう玄関に向かつた。

「おっおいー由ーちょっと待てよーー。」

慌てて鷹が私を追いかけてくる。

私は逃げたくて急いで靴を履く。

玄関のノブに指先が触れた瞬間…私の手を鷹の手が包んだ。

「やつ…離して…！」

ガチャガチャとノブを回す私。

「おい、落ちつけよ！」

鷹の言葉が耳に入らない。それほど焦っていた私。

「嫌、帰りたい！！」

「何で…！」

「だつて、私不細工だもん！鷹の目に触れたくない！鷹の視界に入りたくない！」

「何で…そうなるんだ？」

「だつて…！鷹は私に欲情されたら気持ち悪いんでしょ？だから帰る…！」

焦つてそつと考えていた気持ちを正直にぶちまける。

「よつ欲情？お前…欲情してくれたのか？俺に…」
やつやばい。はつきり聞かれた。もう…お終いだ。

「そつそうよ！鷹の香り嗅いで、鷹に抱かれてるみたいだつた！

鷹の裸見て、胸の中に入りたいって思つた！鷹に抱かれたって思つた…！」

……気持ち悪い事言つて…ごめん。いつ今帰るから…

話していく涙が溢れる。

鷹は私の言葉を聞いて茫然としている。

やつぱり…気持ち悪かったんだね。

「じゃつじやあ…優しくしてくれてありがとう。もう田の前に現れ

ないから……」

最後の言葉を振り絞る。

そして、頭の上から声が聞こえた。

「ほり、やっぱり何か勘違いしてたじやん。」

「……めん、帰るから……」

「俺、気持ち悪いなんて一言も言ひて無いの。」「

「……へつ？」

「俺、お前の事……可愛いって思つよ?」

「もう、優しくしてくれなくともいいよ?自分が不細工なのは自分が一番知ってるから。」

「何そなるんだよ!俺は不細工だなんて思つて無いし! むしろ、可愛いと思つてる……」

「嘘言わないで……私、この顔が原因で酷い人生だったし……今回だつて。」

「だから…俺は…」

「だつて!冗談キツイつて…言つたじやない!!」

「だから、本当にきつかったよ。あんなエッチな言葉。」「……ごめん。」

「そんな事言われたら、流石の俺も勃つ。」「

「……はつ?」「

「だから!冗談でも俺的には下半身に来たといつか……」

「かつ下半身?」「

「ほれつ。」「

鷹はそう言つて、私を後ろから抱きしめてきた。

「なつなに?」「

「だから…ほれつ。」「

背中に触れる鷹の熱く固くなつた物。

やつやだ！鷹…勃つてゐる。

「お前に触れるだけで…」「うなんだぜ？気持ち悪い訳ないじゃん。」「なつ何で…」

「何でつて…なあ、お前…俺の事好きなの？」

「すつ好きつて…」

「だつて、俺に抱かれたいんだろ？」

「まつまあ。」

「なら好きつて事じやないの？」

「……解なんない。」

「はつはあ？」

「だつて！鷹は優しい友達で…私、好きな人居るし。」

「好きな人…居るのか？」

「…うん。」

「それでも俺に欲情しちゃつたの？」

「すみません。」

「なつなんだあ？意味わかんねえ。」

「だもん。」

「…ふーん、初めてねえ。」

「だから、私も鷹が好きで欲情したのか、ただ身体目當てなのか…解なんないんだもん！」

「…へえ。でも俺に抱かれたいんだ。」

「もう、勘弁してよ。」

鷹との意味不明な会話が続く。

「まあ、いいけどさ！俺は嬉しかつたし。」

「うつ嬉しかつたの？」

「そりや…お前の事は気に入ってるし。そんな女からあんなフレーズ飛びだしたらなあ。」「

「気に入つて…。あつ有難う。」

「嬉しい？」

「そりやまあ、嬉しい…です。」

「そつか…じやあ誤解は解けたな?」

「はつはい。私の勘違いでした。」

「はい。じゃあこれでお終いな?」

「うん、ごめんね?」

「じゃあ、お互いスッキリした所で…してみる?」

「んつ?今…してみるつて言つた?」

「なつ何を?」

「何つて…」「レだけど?」

そう言つて、鷹はまた下半身を押し付けてきた。

「なつ何で?」

「何でつて、お前は俺に抱かれたい。俺もお前を抱きたい。」

「だつ抱きたいの?」

「うん。駄目?」

「駄目つて…」

「俺、彼女居ないし、お前だつて今は彼氏居ないだろ?」

「何で居ないつて解るの?」

「そりや、好きな人がいるつて事は付き合いつまで発展して無いつて

事だろ?」

「まつまあ…」

「なら問題ないじゃん!お前が嫌なら止めるけど…」

鷹は私の首筋に熱い息を掛ける。

あつ頭がクラクラするうー!

「どうする?…してみる?…もしかしたら俺の事…好きになるかもよ?」

「そつそんな簡単に…」

「簡単じゃない。俺だつて精一杯。お前に嫌われいかドキドキし

てる。」

「たつ鷹の事、嫌いになんかなる訳ないじゃん。」

「…本当?」

「うん。」

「良かった…じゃあ、好きになつたら教えて?「好きにって…むぐつ!」

急に鷹に口を塞がれる。

鷹の柔かい唇が私の言葉を奪いつ。

温かい…そして気持ち良い。

鷹は私を抱き上げ、自分のベットに連れて行った。
私も対抗せずに…むしろ自分からキスを求めた。
鷹にしがみ付き、鷹の熱を感じる。

鷹は私を優しく脱がしてくれて…自分も裸になつた。
目の前に現れる鷹の逞しい身体…すごくカッコいい。
思わず指で鷹の胸をなぞる。

鷹は一瞬身体を跳ねさせた。

私は鷹の裸に目を奪われ…心臓の鼓動を速くした。

鷹は私の身体を優しく愛撫してくれた。
触れる指が優しさを醸し出す。

私…この人に抱かれるんだ…幸せだ。

鷹は私を快樂の世界に連れて行つた。

もう何度も意識が飛んで…全身に心地よい疲れが訪れる。

一回終わつても、また鷹を求めてしまつ。

鷹も私の気持ちが高ぶるのが解つて…自信もまた首を擡げる。

私は知つてゐる限りの知識で鷹に囁し、鷹も全身で私を愛してくれた。

朝まで抱きあい、二人で何回も到達した。

エツチつて…こんなに気持ち良いんだ。

KOUJIIさんは無理やり感があったから、肉体的快楽はあっても心が満たされなかつた。

でも、鷹は違つた。

鷹との行為は気持ちが入つてた。

正直、鷹の事が好きか…まだ解かない。

でも、鷹と離れたくなかつた。

鷹と肌が触れていないと凄く寂しかつた。

…身体から始まる恋つて、あるのかな?

第三十一章（後書き）

今…冬ですね?

由子ちゃんは春まつ盛りの♪様子です。

そのうち三十三章の番外編を書きたいと思います。

もし18歳以上の方が居て、ちょっと大人小説み興味がある方が居ましたら、ムーンライトの方も覗いて見て下さい^__^

あの日から……鷹に抱かれたあの日から半年が経つた。鷹とは友人以上恋人未満……いわゆるエッチ友達状態。でも、なぜか一人とも恋人は作らず……そんな感じ。はつきりと告白もされず、でも他の異性とは関係を持たない……暗黙の了解だった。

そんな宙ぶらりんな関係も半年が過ぎれば……当たり前になっていた。

「鷹！連ドラ主演オメデト……！」

あちこちでグラスが鳴る音が聞こえる。

今日は鷹の主演決定飲み会（まあ、何時もの飲み会ですケド……）

デビューして半年の鷹は、驚異の出世街道を突っ走り……今やゴールデンタイムドラマを主演を射止めるまでになった。それは……すべて、この女性のお陰だった。

鷹の隣を陣取り、鷹の腕に纏わりつきながら酒を飲む女……

そう、鷹のデビューに絡んできた大物芸能人……佐藤佳苗さとうかなえだった。年は35歳。タレント業だけでなく、ドラマ、CDなどなど……子役デビュー系だけど、親が芸能界のドンと呼ばれるほどの人物。親の七光りが半端じゃ無い女だ。

彼女に気に入られたタレントは仕事が舞い込み、彼女に嫌われれば……芸能界では生きていけない。

まあ……佳苗が大物というより、佳苗の親が大物で、佳苗の頼みは何でも聞く親ばかなのだ。

つんで佳苗が事務所に来た際、鷹は佳苗のお眼鏡にとまつ……今や鷹はトップスターになつた。

鷹を支えた女だとでも思つてゐるんだろう。

佳苗は、さも当然の様に鷹に纏わりついてゐる。
なーんかムカつくけど…佳苗には誰も逆らえない。
逆らつたら…明日から仕事が無くなるから。

早苗は鷹に足を絡め…必死にアピール。

そうえいば鷹がこの前言つてた…佳苗がしつこく誘つてくるつて。
うーん、私は彼女じゃないけど…ちょっと複雑な感じ。

目の前で鷹にイチャイチャされるのは…何とも腹が経つ。

あつ、鷹の事だけじなくて、私の半年間も説明しなくちや！

私達ＫＪの出した新曲は大ヒット！

写真集の売れ行きも良く、今だにトップ芸能人の地位に…お陰さまで。

それに、最近は私と雪にも熱狂的なファンが付き始めて！
なかなかの芸能人ライフを送つております。

最近はＫＯＵＪＨさんのお猛アタックも影をひそめ…毎日過ごしやすい！

優しい雪の事は…いまだに忘れられないけど…正直今は鷹の方が気になる感じです。

最近、私たちのマネージャーが変わり、新しく加藤徹かとうとおるさんといふ男性になつた。

加藤さんは中々のイケメンで、私なんかより芸能人に相応しいと思
う程、色香のある人。

テキパキとスケジュールを組み、本当に才能な人。

前マネージャーには悪いけど…徹さんがマネージャーで嬉しい。

「由さん、明日は10時から撮影なんで…えっとー、8時には迎えに行きますんで！」

徹さんは手帳を見ながらメンバーに明日の確認。

「はーい、解りました。明日は徹さんが迎えに来てくれるの？」

「ええ、由は一番の遅刻魔・私が迎えに行きます。」

そう、私はKで一番の遅刻魔…一か月前に一人暮らしを始めてから余計に…。

「うう…すみません。8時に出れる用意しちゃいます…。」

「ええ、本当、宜しくお願ひしますよ？」

有能なマネージャー、顔もカッコいい、仕事も出来る。

でも…今までの人生の中で、怒られたら怖いランキング一位！本当に怖い！

私は毎日、マネージャーに怒られない様に過ごす様にしている。

「そろそろ帰らないと…また明日遅刻しますよ？」

マネージャーが時計を指差しながら帰る様に私を促す。

「はーい、じゃあ皆に挨拶してきますね？」

私はメンバーをはじめ、その場に居る人達に挨拶に回った。

「JEWさん、KAJIIさん、お疲れ様です。お先に失礼します。」

二人で固まつて飲んでる二人。

「ああ、じゃあ明日な？」

「おお、気を付けてな？」

ヒラヒラと手でサヨナラの挨拶をくれる。

今日は気になる相手は居なかつたようで、つまらなそつて二人で話をしていた。

「はい、失礼します。」

私は軽く会釈してその場を去る。

「ＫＯＵＪＥさん、御先に失礼します。」

少し離れた場所で女性に囲まれ酒を飲むＫＯＵＪＥさん。

「ああ、帰るのか…送つて行くぞ？」

今にも立ち上がりそうなＫＯＵＪＥさん。

「いえ、大丈夫です。楽しんで下さいね？」

私は気を利かせたつもりだったけど…ＫＯＵＪＥさんはあからさまに不機嫌な顔をした。

「いいよ、送つて行く。」

その場を立つＫＯＵＪＥさん。

「いえ、私が送つて行きますので。私もこれで失礼します。」

直ぐにマネージャーが割つて入る。

「……そう。」

KOUJUKEさんは物凄く不機嫌な顔で再び席に着いた…。あまりにKOUJUKEさんが不機嫌なもんで、周りに居た女性の困惑が気の毒だった。

次に雪。

雪はスタッフさん達とギヤーギヤー楽しんでいた。

「雪？マネージャー命令で帰ります。」

本当は雪と喋つていいたけど…

雪は私と男としか思つて無いから…少し切ないんだよね。でも、鷹のお陰だらうけど、雪とは良い友達付き合いが出来てる。キスしちゃつてお互い意識した時期もあつたけど、今はもう昔の出来事の様。

鷹に感謝。

「おお！また明日な？」

「うん、じゃあ明日なー！」
こんな感じ。

最後に鷹に話しかける。

でも…鷹一人占めの佳苗の田線は少し怖い物があった。
でも、挨拶位はしても可笑しくないだろう。

「鷹、俺…先帰るな？今日は本当におめでとつな？」

勿論、男口調で鷹に話しかけた。

「ああ、今日は来てくれてありがとうなー？」

「うん、じゃあ…またな？」

「ああ…いや、ちょっと待つて？」

鷹は纏わり付いている早苗を優しく退け、立ち上がった。

「あん！鷹つてば…」

気持ち悪いほど女の言葉使いの早苗。

「すみません、ちょっとマイツ外まで送つてくるんで…。」

鷹は早苗に説明する。

「ええーー男の子送つて行くよつ早苗と話でよーー！」

なつ何言つてんだ？」この女…。

「すぐ戻りますから。こいつ…俺の親友なんでー！」

「ふうーん…早く戻つて来てよー？」

「はい。ちょっとすみません。」

鷹は困惑する私の腕を掴み、店の外に出て行つた。

「マネージャーさんは車回してきて下さー。こいつ身体冷えてるみたいなんで。」

「えつ？ そうですか？ 駐車場まで近いんですけど。」

「でも、タレントに風邪ひかせるの…まずくないですか？」

「はあ…では少し待つて下さいね？」

鷹は適当な良い訳でマネージャーを追つ払つた。

「鷹？ 私寒くないよ？」

「いいのー。こうでも言わないとお前と二人っきりになれないだろ？」

「たつ鷹…。嬉しそぎます。

「そつそつだけど…。」

「ばれたとき怖いんですけど…。」

「お前は、俺と二人になりたくなかったの？」

「うう、あの…。まあ、そうですけど。」

「なら良いじゃん！」

鷹は周りに人が居ない事を確認すると…私を急に抱きしめた。

「たつ 鷹？」

「だつて…早苗さんがしつこくて… 今日お前と喋れなかつた。」

「そりや そうだけど。」

「由子切れです。只今充電中。」

そつ言つて鷹は外なのにもかかわらず、激しく私の唇を吸い始めた。
「んつたつ鷹あ…。んん…」

とろけそうな鷹の濃厚キッス！腰碎け…。

「ふはあーー充電終了ー！」ちそうをまでしたー。」

ペロッと舌で口を舐める鷹。なんてエロい！

「もう！誰かに見られたらどうするの？」

「大丈夫！周り確認したもん！」

怒るにも怒れない。

だつて…私も鷹にチュウして欲しかったんだもん。

その時、車のライトが近づいてきた。

「由さん、お待たせしました。」

マネージャーの車…間一髪！

「ほら、危ないじゃん！」

私は鷹の肩を軽く叩く。

「あつあれ？まあギリギリセーフってこう事でー。」

マネージャーに聞こえない位のヒソヒソ話。

「由さん? 行きますよ?」

マネージャーが急かす。

「あつはい、今行きます。じゃあ鷹、またね?」

「ああ、気を付けてな?」

私は鷹に手を振り、車に乗り込んだ。

「由さん、自宅で良いですよね?」

「はい、お願ひします。」

私は助手席に座り、大人しく自宅に向かう。

「マネージャーは戻るんですか? 飲み会。」
流石に自分のタレント残して帰らないよね?

「いいえ? 戻りませんが?」

「えつ? いいんですか?」

「はい、遅刻が心配なのは由さんだけなんで。
ズバッと辛口。」

「はあ、「迷惑掛けます。」

「いいえ、もう慣れました。」

「ぐつすみません。」

マネージャーとの何気ない会話。

怒ると最強に怖い徹マネージャー。

でも、マネージャーと話してると落ち着く。

なんでだろう…。ただ話すだけで気持ちにゆとりが出来る。

私にとってマネージャー以上の存在。

別に恋しいとか付き合いたいとかじや無い。

ただ…この人とずっと話してみたい。

鷹が愛をくれる存在だとすれば、マネージャーは安らぎをくれる存在。

不思議な感情を寄せる相手なのは確かだつた。

だから今日もマネージャーの命令に素直に従つて帰ったの。

「じゃあ、明日お迎えに来ますんで。起きられますか？」

自宅前に私を降ろし、マネージャーが話しかけてきた。

「はい、大丈夫です！おやすみなさい。」

「はい、お疲れさまでした。」

私は挨拶を済ませ、オートロックの自宅に入つて行く。

そして、マネージャーは私が家に入るのを確認してから車を発進させる。

本当に心配症な人だな。

第三十四章

マネージャーと別れ、私は自宅に戻った。

疲れた身体をソファーに投げ出し、今日の出来事を振り返る。

鷹：大丈夫だったかな？佳苗の誘い…断れたかな？
でも鷹だって男。佳苗だって親の七光りはあっても芸能人、美人だ
し…

ひょっとしたら今頃…嫌だな。

私と鷹は正式に付き合つてはいなかつた。ただ身体の関係。
お互に好き同士ではあるのだろうけど告白はしてない。
もし鷹が早苗を受け入れても、私は文句が言えない。
じゃあ告白して鷹を自分の物だけにする？今更？

身体の関係が半年続くと…今更告白なんて出来ない。
だって…お互いその気なら、もうとっくに告白してるだろ？
それが無いって事は…鷹は身体だけの関係を望んでる？
どうしよう…このままだと鷹は…

私は頭を振り、必死にその先を考えない様にする。
恋人でも無い私に鷹を縛る事は出来ない。
…私、かなり鷹の事好きになつてたんだな。
鷹の言つた通りになつちゃつた。

「どうする？してみる？もしかしたら俺の事…好きになるかもよ？」

その通りだよ鷹。

私は鷹の事…好きになつたよ。
鷹の事、独占したい。

鷹の身体…誰にも触らせたくない。

も…、雪を思う気持ち以上に鷹の事…大好き。

優しい鷹、傍にいてくれた鷹。

私の秘密を知つても見放さないで受け入れてくれた鷹…こんな人、他に居る?

KOUJOさんは秘密を知つて身体を要求してきた。
雪は…バラす間もなく否定した。

鷹は無償で助けてくれた…。

もう!一人で悩んでも仕方ない!

私はふつ切る様に服を脱ぎ散らかし、バタバタ足音を立て風呂に入つた。

熱めのシャワーを浴び、何時もより多めにシャンプーを取り、頭に塗る。

思いつきり泡立てれば、泡はボトボト足元に落ちる。
もう顔面泡だらけで、息も苦しい。

でも…なんだか悩みが落ちて行くようでスッキリする。

その泡を一気に流し、リンス、ボディーソープ…身体を綺麗にする。
身体を擦りながら考える。

「最近…筋肉増えたな…男の子みたい。」

連日の歌の収録。最近はハードな動きが多い。

毎日男として振る舞い、男の動きをする。そりや筋肉だつて増えるよね。

鷹…こんな男みたいな身体抱いて、満足なのかな?
急に不安が蘇つて来ちゃつた…泣けてくるよ。

私は浴室を出て乱暴にバスタオルで身体を拭ぐ。
下着を付け、シャツを一枚だけ着る。

冷蔵庫に入つているビールを取り出し、一気に流し込む。
もつ早く寝てしまえ！……

ビールを三本程飲んで、ほろ酔いになつた頃、玄関のチャイムが鳴つた。

時間は深夜一時。誰？こんな時間に…
インター ホンに映つた顔を確認する。
そこには…愛おしい鷹の顔。

「たつ 鷹？どうしたの？」

「いや…お前に会いたくて來た。」

「あ…そつ。待つて今開けるから…」

私はロックを解除し、鷹を家に招き入れる。

「おう！もしかして寝てた？」

「ううん？まだ寝てない。」

「もしかして、また飲んでる？」

「何か…色々考えちゃつて。そつにえれば、鷹は急にどうしたの？」

「どうしたのつて…逢いたいから來ただけ。それにしたつて…酷くない？」

「えつ？何が」

「お前…俺が逢いたかつたつて書いたのに、あつせつて…冷たい
なあ由ちゃん。」

「だつだつて…」

「あーあ、ちよつぴりショックですねー。」

そんな事言われたつて…今さつきまで鷹の事で悩んでたのに。
急に逢いたかつたつて言われて戸惑つちゃつたんだもん。

「そつそんな困つた顔するな！冗談だつてばー。」

鷹は私の濡れた頭をかき回し、笑つた。

「冗談つて！もう真剣に悩んじやつたよ。」

「『めんつて…』」

「で、急にどうしたの？佳苗さんはいいの？」

「佳苗さん…ねえ。正直困つてるよ。」

「えつ？何で」

鷹の事、じんなに有名にしてくれた女性だよ？

「あの人…マジしつ」こんだよ。今さつきも自分の家に行こうつて
…マジ勘弁。

「えつ？断つて大丈夫なの？」

早苗の事適当にあしらつと…後が怖い。

「だつて、そりゃ佳苗さん綺麗だし、魅力のある人だけど…」「
「そうだよ、綺麗だし…何でも思いのままだし…」「
「まあな。でも好きでも無い女…抱けねえーだろ。」

「えつ？」

「えつてお前なあ…俺だつて流石に何でも抱けないんですか…」「
「そつそつなの？」

「そうなのつて…」これはショックですねえ。」

「だつだつて！鷹…私の事は…抱くじやん。」

「私の事つて…なあ、お前さあ俺との事、何とも思つて無いの？」「
「何とも…そりや…」

鷹は体勢を少し正し、私の目を真つすぐに見て質問してきた。

「なあ、お前つて俺の事どう思つてるの？」

「どつどつつて…。たつ鷹こそこどう思つてるの？」

「俺？俺は…お前の事大事に思つてる。誰にも渡したくない。」

「…嘘…みたい。」

「由の事、大事に思つてるよ。だから他の女の誘い、全部断つてる
し。」

「ふつふーん…。」

「ふーんつて。お前は？俺の事どう考えてんだよ。」

「どうつて…鷹の事…私だつて凄く大切に思つてる。」

「大切なだけ？俺の事、一人占めにしたくないの？」

「したい…したいけど…そんな事無理でしょ。」

「何が無理？」

「だつて、鷹の周りには綺麗な人ばっかりだし、私…男装してるし男っぽいし…」

「お前…十分女だよ？」

「ほつ本当？」

「ああ。俺と一緒に時の時のお前…すげー女感じるよ？だから俺も勃つちやうんでしょうが。」

「うう…。」

「お前、自分の魅力知らないだけだろ。俺的にはかなり色っぽい女ですけど？」

「ほつ本当？」

「しつこい！なあ…お前の事、俺だけの女にしたい。まだ駄目？」

「まつまだ？何が？」

「だつてお前…初めてアレした時、好きな奴居るつて言つてただろ？」

「あつ…そういえば…」

「そういうえば…もしかして忘れてた？」

「えつと…あの…その…はい。」

「お前なあー…俺…ずっと我慢してたんですけど…自分の物にするの。」

「がつ我慢？」

「そうだよ。エッチした後だつてさあ、お前の事ずっと抱きしめてたかったのに我慢したり、

「極力避妊だつてしてたじやん！まあ、最初はしなかつたけど…。」

「あつそういうば…。」

「なあ、まだ好きなの？雪の事。」

えつ？私…雪が好きな事、鷹に言ひたっけ？

私が少し困惑していると、鷹は正直に話してくれた。なんで雪の事分かつたかつて。

「前、雪とチユウしたって言ひてた時、お前すげー嬉しそうだったし…

口では悩んでる風だつたけど嬉しこそ…それしかないだろ？俺…なに気にショックだつた。」

「鷹…ショックだつたの？」

「そりゃ。だからムカついて…俺もチユウしちゃつたじやん。」「あれつて…そういう意味だつたの？」

「ああ。それに…雪の態度だつて満更でもなかつたじやん？」「えつ？…そう？分かんないよ。」

「そうだよ。傍から見てりや分かる。結構俺、焦つてたんだけど。「何で？」

「だつてお前…両想いになられたら勝てないだろ俺…。」「勝つつて…もしかして鷹、私の事…」

「好きだよ。」

「…ほつ、本当に？」

「あのさ…俺の態度で分からなかつた？」

「だつて…まさか私の事なんて…思わないよ。鷹位かつここの人が私なんて…」

「俺は毎回伝えてるつもりだつた。お前が欲しこそ…伝わらなかつた？」

「うつ…だつてまさか…」

「なあ、まだ雪が好き？諦められない？」

「雪は…好きだけど…でも…」

「でも？」

「でも…今は鷹の事ばかり考えてる。たつき雪も満更つて聞かされても鷹の事考えて…」

「でも…」

自分でも意外な程だつた。

あんなに大好きな雪。心の支えだつた雪。

もしかしたら両想いだつたかもつて考えても…今は鷹の事が方が気になる。

「俺の事、考へてるの?」

「うん。」

「俺の事…好き?」

「……うん。好き。」

「雪…よりも?」

「…好き。鷹の方が大好き。」

「…やつた…」

「へつ?」

鷹は一言呟いた後、私を急に抱きしめた。

「やつと手に入れた。お前の事…。」

「鷹。」

「欲しかつた。俺だけの物にしたかつた。」

「鷹。」

「俺…お前抱いてても、ずっと雪と一人で抱いてる感覺だつた。

二人しか居ないのに、いつも雪の存在を感じてた。」

「……。」

「いつかは俺の物になるかもつて思つても自信無かつたし…
それに雪の事、すげー好きみたいだつたしな? いつ逢えなくなる

かつて…不安だつた。」

「ばつ馬鹿だね。そんな訳ないのに…」

「俺。今すげー幸せだ。」

「鷹…私だつて。」

「傍に居てくれ…ずっと。」

「……うん、聞る。傍にいる。」

鷹は私を優しく脱がし、体中にキスを落す。

私は鷹の全身を撫で、愛す。

優しく触れ合い、お互いを確かめる。

温かく…包まれる愛情。

初めて抱き合った気分だった。

心が通じるって…幸せなんだな…。

第三十四章（後書き）

鷹とラブラブ突入?」のまま終われば幸せなんでしょうか? 作者は弄ぶのが好きですので…「メンね由子ちゃん。

余談ですが、第三十三章番外編、ムーンライトの方に乗せてみました。

番外編は一人の初めての夜…詳しく書き書いたらどうなのよ的な感じで書いた作品です。

お時間に余裕がある時、しょうが無い、読んでやるよという親切な方で18歳以上の方…読んで頂けたら幸いです。

鷹と気持ちを確認し合つて……毎日幸せな日が続く筈だつた。

『ＴＯ由 今日は時間ある？鷹』

鷹からのメール。気付けばメールが届いたのは数時間前。

『ごめん、今メール見れた。今まで収録でした。今からでも平氣？』

由

返信遅くなっちゃつたけど……平氣かな？

すると、鷹からの着信が入つた。

「もしもし！鷹？」

「おう。俺ー！あのセ…『ごめん、今スタジオ向かつてるんだ。』

「仕事？」

「うん、あんなメール送つといで『ごめんな？』

「つづん？仕事は仕方ないよ！じゃあまた今度ね？」

「ああ。……最近逢えないな。寂しくない？」

「……寂しい。でもしようが無いよね？お互い仕事順調だし……」

「そうだよな。仕事有るのは幸せに思わない」と。

「そうだ！鷹は次のオフ何時？」

「オフ？えつと…ねえ、次何時休み？」

鷹はマネージャーに確認しているみたい。

「もしもし？次のオフって…来月だつて。12日。」

「そつか…じゃあ私もマネージャーに言つてみる！」

「言つてみるつて…そんなのイケんの？」

「うん、頑張る！でも…時間空いたら直ぐ電話してね？」

「ああ。お前もしろよ？電話。」

「うん勿論！鷹に逢いたいし。」

「俺も。あつ…そろそろ局着くから。」

「分かった。じゃあ頑張ってね？」

「お前もちゃんと休めよ？」

「うん。じゃあね？」

「うん。またな…」

後ろ髪を引かれる心地で電話を切る。

逢えないならせめて…声だけでも聞いていたい。でも隠さないと私たちの関係。

知られたら全て終わる。

鷹と気持ちを確認しあつてから、私たちは全然会えなかつた。お互い仕事が順調すぎて。

鷹はアルバムを出し、連ドラと映画も抱えてる。

私もドラマが決まつたり、新曲の打ち合わせしたり…忙しい。何か…付き合い出してからの方が逢えないな…。

鷹との電話を切り、私はマネージャーの車に乗り込んだ。

「由さん、大丈夫ですか？」

「えつ？」

「いや…寂しそうな顔してたから。」

「…分かつた？実は…彼…彼女と全然会えなくて。」

「彼女…居たんですか？」

「えつ？そりや…。」

「…ファンにバレ無い様にして下さいね？一気に人気が下がります。」

「

「もつ勿論！」

傍から見れば男同士の恋愛。バレる訳には！

「…どんな人なんですか？お相手の方は…。」

「何で？」

「マネージャーとしては把握しておかないと…。」

「ふーん、恥ずかしいな…。えっと…優しい人。」

「優しい？」

「うん、それに凄く…綺麗なの。」

「綺麗？」

「筋肉の付き方とか…あと香り…！」

「香り？」

「うん、何時も付けてる香水と混じった自信の香りが大好きなの。」

「…何か、男の人みたいですね、筋肉と香りって…」

「えつ？」

「すみません。由さんのお相手に向かつて…。」

「いっいいよ…。」

一瞬ビックリした。

それ以上マネージャーは恋人について聞いてこなかつた。

ただ…強制で別れさせはしないけど、もし万が一…何か起こつた時は分からないつて。

絶対隠さないと…鷹を失いたくない。

その後、自宅に着くまでの間は、ずっと他愛も無い話をしてた。

私…本当にマネージャーと喋る時間が好きなの！

話していく…落ち着くの。

纏つてる空気。落ち着いた話し方。

でも、一番落ち着いてしまう理由は…声質だった。

少し低くて…でも透明感がある。

この人の声つて…凄くセクシー。

顔も良い。声も良い。

マネージャーの彼女は幸せだろ？

つてか、マネージャーって彼女居るのかな？
結婚は…していない様子。

「ねえ、マネージャーは彼女居るの？」

「はつ？ 彼女…ですか？」

「うん。俺は教えたし…次はマネージャーの番。」

「私は…今は居ません。」

「またまたあー！ そのルックスで？」

「嬉しいですね？ 私の見た目…好きですか？」

「そりや！ 男から見てもカッコいいのに…世の女性が放つて置かな
いでしょ？」

「そんな。芸能人の由さんに言われるなんて…光榮です。」

「あはつ！ つで、本当は居るんでしょ？」

マネージャーは…少し悲しそうな顔をした。

「正確には…好きな人は居ます。でも、俺とその人は結ばれちゃ
目なんです。」

「何で？」

「…神の罰が下るから…」

「…はつ？」

「…いえ、何でもありません。もうすぐで着きますよ？」

はぐらかされた。

でも、口調からして…辛い恋愛でもしてるのかな？

車は自宅の前に着く。

「お疲れ様です。ゆっくり休んで下さい。」

「ありがとうございます！ じゃあ、御休みなさい。」

「……待つて。」

「なつ何?忘れ物?」

「早く!…頭を下げて隠れて。」

なつ何が起こったの?

私は意味が解ららずダッシュボードの陰に身を隠した。

「…今日は私の家に泊まつて下さい。」

「なつ何で?」

もしかしたら…鷹が訪ねてくるかもしないのに。家に帰りたい!

「ファンが数人居ます。」

「ファン?」

「はい。マンションの入り口をキヨロキヨロ監視します。」

「俺がここに住んでるって…ばれちゃった。」

「その様ですね。これでは防犯上危険です。とりあえず数日は俺の家にでも避難して下さい。」

「そんな迷惑な掛ける事…俺は親友の所にでも…。」

「親友つとは誰です?」

「えつ?同じ事務所の鷹の所に。」

「鷹…駄目です。」

「なつ何で?」

マネージャーの家だと化粧も落せないし…何より一緒に住む理由が出来たと思ったのに…

「タレントの所は駄目です。万が一家に押し入られたら…。」

「でも、男一人ですよ?」

「凶器を持つて居たら?」

「それだったらマネージャーだつて…。」

「私は多少傷の残る身体になつても平氣ですが…タレントは駄目でしょ?」

「あつ…。」

「身体の傷なら脱がなければいいんでしょうけど…顔に傷でも出来

たら…お終いです。」

顔に傷…メイクで隠せない程後が残つたら…仕事は来なくなるかも。

「…そう…ですよね?」

「俺の家が嫌でしたらホテルでも…」

「そんな事は…じゃあお願ひします。」

「…車出します。」

マネージャーは車を発進させた。

マネージャーがここまで警戒するのには訳がある。

それはストーカーの存在だつた。

芸能人なら仕方ない事かも知れないけど…最近は常軌を逸してきたから。

最初は後ろから尾けられるだけだつた。

でも最近は…脅迫地味なファンレター や不気味な差し入れ。

終いには私の物を返せとか…意味すら分からない。

そんな事が続いて…私達は必要以上に敏感になつてた。

本当はホテルに泊まりたかつたけど、一人になるのは怖いかも。

私はマネージャーの家に数日厄介になる事にした。

必要な着替え類は時間を置いてからマネージャーに付き添われ取りに戻れたけど…

不便だな、秘密を知らない人と暮らすのは。

マイクだって落せない。

入浴だつて気を使う。

でも仕方ないよね…。

マネージャーの家は広い2LDK。余つてた一部屋を借りる事になつた。

リビングで部屋が仕切られてるし…プライベートは確保できそうな造り。

そして…必要な物以外は置かれて無い家。凄くシンプルだった。私は部屋に荷物を運び、リビングでマネージャーと話を始めた。

「…厄介ですね、ストーカー。」

「うん、でも何だろうね?返せつて…」

「何でしちゃうね。心当たりは?」

「あつ有るわけないよ!」

「そうですか…大方彼女が由さんに夢中で…なんて感じでしょうかね?」

「勘弁してほしい…。」

「早く自宅に戻れる様に手配しますから。」

「お願いします。」

マネージャーには悪いけど、私は早く家に戻りたかった。だつて…ますます鷹に会える時間が減っちゃうもん。

二人で雑談していると…鷹からの電話が鳴った。

「はい。」

「由ーもう少しで収録終わりそうだけど…家居る?」

「あの…実は…。」

私は鷹に事情を説明する。

「なつ!イケメンマネージャーと一緒にマジで?」

「うん、怖いし…」

「分かつた。つで住所は?」

「えつ?何で?」

「何でつて…友達としてなら訪ねても変じやないだろ?」

「まあ、確かに。」

「早く!」

「分かつた。東京都の…」

私はマンションの場所を鷹に伝えた。

電話を切つてマネージャーとの話に戻る。

「お友達ですか？」

「そつそつーあの…友達が来たいって言つんだけど…いい?」

「教えてしまつたんでしょう?」

「聞く前に…すみません。」

「…仕方ないでしよう。」

「やつた!…すみません。」

「これで鷹に会えるー良かつた」

第二十六章

「お友達…来るんでしょう?」

「はい、すみません勝手に…」

「いえ、私は自分の部屋で仕事をしていますので、何かあつたら呼んで下さい。」

「あつはい。有難う」ざいます。」

マネージャーはガサガサと持ち帰った書類を持つて自分の部屋に行つた。

鷹…あとどの位で来るのかな?

時間にして一時間ほどで鷹は来てくれた。

私はマネージャーに宛がわれた自分の部屋に鷹を招き入れる。

「…大丈夫? 困つた事ない?」

「うん、今のところ…」

「なあ、此処じゃなくちゃ駄目なの?」

「えつ?」

「俺の家は?」

「…本当はそうしたい。けど…もし鷹に危害が及んだら…それこそ顔に傷でも…」

「俺は!…俺は大丈夫だよ。今からでも来…」

「駄目だよ。私だつて鷹と一緒にの方が嬉しい。けど鷹、やつと仕事増えたのに…失うよ?」

「それでも!仕事もそつだけど、由の事だつてやつと手に入れたのに。」

「私なら大丈夫。あのマネージャーって如何にも固物つて感じだし、自分の部屋もあるし…」

鷹は少し考えて答えを出した。

「分かった。由がそこまで言うなら。それに……俺は仕事頑張って、早く由との結婚資金貯めなくちゃな……！」

「けつ 結婚？」

「はっ？俺とじゃ 嫌？」

「まつまさか！ただ……ビックリしただけ。」

「嬉しく……ないの？」

「もつ勿論嬉しいに決まってるよ！」

「良かつた……今すぐつて訳じやないけど、一人の将来の事……真剣に考
えてるから。」

「わつ分かつた。」

鷹は嬉しそうに私を抱きしめる。

鷹……真剣に考えてくれてるんだな……嬉しい。

マネージャーも一緒に家に居る以上、今日はキスまでしか出来なか
つた。

鷹は次の仕事に行かなくちゃいけなくて……一時間ほどで帰つて行つ
た。

好きな人が帰つて行く瞬間つて、凄く寂しい。

私は鷹を見送つた後、マネージャーの部屋のドアを叩いた。

「マネージャー？起きてます？」

「……はい。なんですか？」

「あの……今日は有難うございました。今、友達帰りました。」

「そうですか。ではお風呂にでも入つて身体を休めて下さい。」

「あつすみません。頂きます。」

私はドア越しに礼を言い、部屋に戻る。

着替えを持ち風呂に向かつ。

やつやだな……入つて来ないよね……

何故か風呂に乱入される事が多かつた私は警戒してたけど……心配無

用だった。

脱衣所の中に入つてドアを閉めようとした時…ノブに鍵が付いてるのに気が付いた。

自宅なのに鍵?ちょっと不思議に思つたけど私にはラッキー!安心して裸になり、熱い湯が張つてあつた浴槽に身を沈める…

サッパリした所で風呂を上がり、ばっちらり男装を施す。

この調子なら巴rezuにマネージャーとの生活も出来そうだ!

私は汚れた服を持って脱衣所を出る。

するとマネージャーは私が出てくるのをリビングで待つてくれた。

「由さん、湯加減どうでしたか?」

「あつお陰さまで!気持ち良かつたです。」

「それは良かつた。では風呂上がりに一杯どうですか?」

「あつ!頂きます。じゃあ荷物置いてきますね!」

私は汚れ物を部屋に置きに行つた。

「はい。これどうぞ?」

「あつ頂きます。」

マネージャーは私に缶のカクテルを手渡した。

「あれ?カクテル…」

「ビールの方が良かつたですか?」

「いっいいえ…個人的にはこっちの方が…でも普通一杯つて言つたらビールだと思つてたので…」

「まあ普通はそうですね。でも、由さんはこっちの方が好きかと思いまして…」

「うわ!流石敏腕マネージャー!」

「恐れ入ります。では乾杯。」

「乾杯!」

風呂上がりの乾いた喉に甘いカクテルが染みてくる。

「ふはあーー美味しい！」

「美味しいそうに…飲むんですね。」

「えつ？何か？」

「いえ。何でもありません。」

何か可笑しかつたかな…

私たちは楽しく話しながら、お互^いい2、3本飲んでいた。
私も少し酔いが回つて来て…お喋りも楽しかつたけど横になりたくなつてきた。

「ふあーー。」

欠伸まで出ちやう。

「お疲れのようですね。今日はお開きにしましようか。」

「はい…じゃあ…寝ます。おやすみなさい。」

「はい、では明日は10じからスタジオで収録になりますので…」

「うつ分かつてますよ。もう…寝る直前まで…」

「ふふっ仕事ですので。おやすみなさい由…さん。」

「はーーい。おやすみなさいマネージャー…つわづーーー！」

歩き出した私は、机の角に足をぶつけ転びそうになる。

「由ーーー！」

倒れこむ瞬間、身体が宙に浮いた。

「あつあれ？マネージャー？」

「もう、しつかりして下さーー大丈夫ですか？」

「はつはい、すいません。」

気付けば私は…マネージャーに抱きしめられてた…逞しい男性の胸に。

「うわあ！…私…！」

焦つてマネージャーから離れようと胸を押す。

「あぶない！…」

勢い余つて後ろに倒れそつな私を庇い…私はまたマネージャーの胸

に抱えられてしまった。

「ほら… 気をつけなさい… 由… セン？」

「はい… 重ねがさね申し訳ない。」

「歩けますか？」

「はい… 大丈夫です。失礼します。」

ゆっくり… 転ばない様に部屋に戻る。

私は顔から火が出る心地で… 用意してくれた布団に倒れ込んだ。ジタバタ暴れ… 己のドジを反省する。でも… 思い出しちゃう。

「マネージャーの胸… 広くて逞しい…。」

着痩せするタイプなのか… 以外にもマネージャーの胸は逞しかつた。それに… 何だか懐かしい様な香りもした。
包まれる様な… 守ってくれる様な…

思い出すとドキドキする。

… うわ！ 私… なんて事考えてるの！ アンタ… 鷹つていう彼氏が居るじゃない！

自己嫌悪だよ、 本当最悪だ私。

大好きな彼氏が居るのに… マネージャーにドキドキしてどうするの…

その頃マネージャーは… 部屋に戻っている様だ。ドアが締まる音がしたから。

「… つたぐ、あのドジは… 僕じゃなかつたら…」

一人ブツクサ喋るマネージャー。

「何時かバレるぞ？ 気を付けるよ… 由子。」

徹が何か独り言を喋っている時、ほろ酔いの私は… 既に夢の中に居た。

第三十六章（後書き）

久々に連続投稿しました！はつ早く続きが書きたい…しかし、あのマネージャーは何者なのでしょうか…正体を知っている様ですが。

第三十七章

私は酒に酔つて、爆睡していた。それこそ誰かに触られても気付かない程。

「…由さん？起きています？」

声を掛けられても気付く訳ない。

「まったく…本当によく寝る子だな由子は。」

温かい手が触れる。でも…眠りが深く気付かない。

「ずっと…触れたかった、お前に。」

頬に触れる温かな手、そして唇に当たる湿つた感触。

「おに…ちや…ん…」

「…由子、夢見てる？」

私の頬に流れた涙を誰かが拭う…誰？

私は夢を見ていた。

そう、お兄ちゃんの夢。

大きい背中、守ってくれる長い腕。

逢いたい…逢いたいよお兄ちゃん…

何で…何で死んじやつたの？一人にしないで…お兄ちゃん。

「お兄ちゃんーん…！」

ガバッと布団から飛び起きる。

辺りを見渡して…ここがマネージャーの家なのを思い出す。

そうか…昨日避難してきたんだつけ。

突然死んじやつたお兄ちゃんの夢、久しぶりに見たなあ。

何だか心が温かい。そして…思い出しても、また涙が出てくる。

「お兄ちゃん…居ないんだよ…ね。」

そうだ、現実はもう…お兄ちゃんは居ない。

私は涙を拭いて、布団から出た。

時間を見れば、すでに起きなくちゃいけない時間。

私は寝巻を脱ぎ、着替える。

そして…ドアをノックする音が聞こえた。

「由也ん? どうかしましたか?」

「あつマネージャー…おはようございます。」

「大丈夫ですか? サつき叫び声が…」

「すっすいません、久しぶりに死んだ兄の夢を見て…」

「そうですか。あの、朝食の準備は出来てますので用意出来たら来て下さい。」

「はい。有難うござります。」

急いで着替えを済ませ、メイクを直す。
ドアを開ければ…部屋に広がる食事の香り。

「うわつ凄い。」

「お早うございます。良く眠れましたか?」

「あつはい。お陰さまで…んで、この食事は? マネージャーが?」

「はい。お口に合えば良いんですけど…」

「そんな! 淫く美味しそう…しかも、わた…俺の好物ばかりです!」

「良かつた。では召し上がって下せー。」

「あつはい。頂きます。」

私は食卓に着く。

目の前に並ぶ好物達。どれも美味しそう。

凄いなあ、本当に敏腕マネージャーだなこの人。

白いご飯にお味噌汁。甘い卵焼きにウインナーに漬物。実家の定番メニューだ。

実家にでも電話して聞いたのかな?

私は卵焼きに箸を伸ばす。

「……うわ、本当に我が家の中。嘘みたい。

「…実家に電話でもしたんですか？」

「えつ？何故です？」

「いや、あまりにも私の好みの味付けだったのです…」

「そうですか！気に入つてもらえて嬉しいです。じゃあ全部食べて下さいね？」

「えつ？あつはい…」

何か、はぐらかされた様な氣もするけど…まついいか！

私はお腹一杯になるまで食事を楽しんだ。

「うわあ…食べ過ぎました。」

「はい。良く召し上がつていらっしゃいましたね。」

「ご飯が美味しいすぎるんです。俺の所為じや…」

「良かった。でも由也んは痩せてるから…沢山食べないとね。」

「はーい、じやあお言葉に甘えて…夕飯も楽しみにしてます！」

「ははつ！調子いいですね！了解です。」

「やつた！楽しみ！」

「ええ、楽しみにしていて下さご。あつそろそろ出発しないと…」

「はーい、荷物持つてきますね？」

「はーい、私も準備してきます。」

お互に部屋に戻り、準備をする。

私は荷物を持ち部屋を出る。

既に準備万端のマネージャーの後を付いていき、車に乗り込む。

今日はドラマの撮影。

学園物で私の役はちょっと訳ありの男子高校生。
役名は叶^{かなう}。男なのを偽って全寮制の女子高に入学する物語。

叶はある目的があつて入学するんだけど、回室の女の子に恋をする
というストーリー。

女子学生に変装する役という事で、中性的な私がぴったりだと白羽
の矢が立つたのだ。

今日で撮影は三回目。今までNGばかり。

早くドラマの緊張感に馴れなくちゃね！

「…ねえ、今田の授業、面倒だよね…」

「うん、サボつちやう? どつか行こいつよー。」

一人で学校を抜け出すシーン。

相手の女の子は叶の事女だと思つてるので、結構スキンシップが多い役所。

雪に話したら羨ましがられたし。

でも…私にとつたら地獄だよ。女同士で会話してるみたいで。

私、プライベートで同性の友達居ないし…やりにくい。

それに…相手役の女の子、役以上にスキンシップが激しくて困る。
今日も腕を組んで学校を抜け出すシーンなんだけど、そんなに胸を
押し付けられても！

ほら、貴方のマネージャーさん…かなり慌てるよ？

今日の撮影は無事に終わり、私は監督さんやら共演者さんにて挨拶を
し楽屋に戻った。

スタジオから楽屋までの道には、幾つもの楽屋が並んでいて。
その中に、胸躍る名前を私は見つけた。

「鷹」

今日、同じ局で撮影してたんあ！ 偶然！

私は当然の様にドアをノックする事も無く扉を開けた。

「鷹？ 今日同じ局だつたんだ…ね…鷹、何してるの？」

樂屋…覗かぬきや良かつた。

鷹の楽屋には、鷹の他に人が居た。

「あら？幾ら友達でもノック位したら？由君。」

勘に触る声の主、佳苗だった。

鷹も私の声に気付いた様で…目が合つ。

物凄い焦つてる鷹の顔…何でそんな顔するの？

「すっすみません…でも、一体何してるんですか？」

「何つて…野暮な事聞くのね貴方。」

勝ち誇つた様な佳苗の顔。何も言わないで目を丸くして居る鷹…私は、自分が男装していてＫのメンバーだという事も忘れ、その場で涙を流した。

「うつうそ…」

私は鷹の楽屋を飛び出した。

「よつ由さん？どうしたんです？」

私が自分の楽屋で放心していると、マネージャーが慌てて声を掛けてきた。

「…何でもありません。少し…疲れて…うつうつ…」

声を出すと涙が止まらない。

「…何があつたか聞きますん。ただ今は…泣きなさい。」

そう言って、マネージャーは私を自分の胸の中に招き入れた。

精神的に相当きつかった私は、素直に好意に甘え…泣きはらした。私だって同じ部屋に居た位じや泣かない。

でも…さつき見た光景は我慢出来なかつたの。

鷹…何であんな事？

鷹は楽屋で佳苗と抱き合つていた。

鷹はソファードをつぶり、佳苗を受け入れていた。

別に裸だった訳じやない。でも彼女以外の女を自分の上に乗せる？

それに佳苗のあの言葉…野暮つて何？

胸の奥が抉られる様だつた。それに鷹だつて！
何で何も言つてくれなかつたの？私は鷹の何？

冷静に考えれば、その場で口論しなくて良かつたと思つ。
そんな事したら…私たちの芸能生活は一瞬で終わる。
でも…今すぐにでも鷹の楽屋に殴り込みに行きたかつた。
今ここに、マネージャーが居てくれて良かつた。

私はマネージャーに支えられながら車に乗り込み、家に帰つた。
私は直ぐに部屋に閉じこもり、頭から布団を被る。

泣き続け…いつの間にか眠りに就く。

時間にして3時間ほど経つた時、携帯の着信音で私は目を覚ました。
ディスプレイに映る名前は鷹だつた。

今頃良い訳？なんで直ぐに電話すらして来ないの？
出ようか…いつそ無視しようか。

暫く携帯を眺めて考えていると…ふっと音が鳴り止んだ。
私は、また掛つてくると思い電話を持ったまま着信を待つた。
でも、その後電話は掛つて来なかつた。

私…振られたの？

何にも悪い事してないのに…振られたの？
いつ意味が解んないよ…鷹。

頭の中が真つ白になつて、何も考えられない。
考えられないから涙も出ない。

そんな時、ドアをノックする音が聞こえる。

「由さん？起きます？」

「あつはい…起きます。」

「夕食、一緒にどうですか？」

「夕食ですか、ちょっと食欲が…」

「そうですか…朝食の時、楽しみにしてるって言つてくれたから、丹精込めて作つたなんですが…」

「…すみません、今行きます。」

そういうえば私、楽しみつて言つた気がする。

折角私の為に作つてくれた食事、断つたら失礼だよね？
あんまり食べられないかもしねないけど…せめて一口でも。
私は軽くメイクを直し、部屋を出た。

第二十七章（後書き）

鷹は本当に浮き気をしているのでしょうか。
それにマネージャーの正体は?
次回分かる予定です。

第三十八章（前書き）

更新がかなり遅くなりました>（ーー）<

第二十八章

部屋を出ると、夕食の香りが立ち込めてくる。

「うわあ、いい香り！」

心に染みる香り…不思議。

「さあ、召し上がって下さい。」

マネージャーが私の皿の前に、湯気の立つ味噌汁を差し出す。

「頂きます。」

私は、アツアツの味噌汁を少し口の中に流し込む。

「……。美味しい。」

懐かしの味だった。

ネギと油揚げのシンプルな味噌汁。

でも…朝も感じたけど、これってやつぱり…

「あの、今朝も聞いた事なんですけど…実家に電話でもしました?」

「…いえ?何故ですか?」

少し言葉に詰まりながら答えるマネージャー。

「味…。実家と同じなんです。」

「味…ですか?」

「はい。この味噌汁の味、実家と同じです。それに朝の卵焼きの味も…。」

「……。」

「マネージャー?別に私、怒ってないです。電話したんですか?それとも母と逢いました?」

「…いえ、違います。」

認めないの?ただ実家に連絡を取つたか聞いてるダケなのに。

「じゃあ、何で実家の味がわかるんですか?」

「……聞いたんです。お兄さん…」

「おおお兄ちゃんに?」

マネージャーって、お兄ちゃんが面識あったの？

マネージャーは、食事が終わった後に、お兄ちゃんとの話をしてくれた。

マネージャーとお兄ちゃんが知り合ったのは、お兄ちゃんがアメリカに修行に行つた時。

ルームメイトとして出会つた二人は直ぐに仲良しになつて、色々話をしたんだつて。

我が家の中を知つたのは、二人で一緒に食事の用意なんかしたからだつて。

帰国しても一人の仲は相変わらず。よく連絡も取り合つて…暫く連絡が途絶えたお兄ちゃんを心配して帰国したらお兄ちゃんは亡くなつてた。

お兄ちゃんは生前、マネージャーに私の話をしていたんだつて。引き籠りだつた事。男装して芸能界に入つた事まで。

お兄ちゃんは凄く私の事を心配してたらしくて…

お兄ちゃんの代わりじやないけど、代わりに私の傍に居てあげたかつたつて…

マネージャーは正直に話してくれた。

話を聞いている内に分かつた事。

お兄ちゃんは、マネージャーを心から信頼していたという事。

だって、私の男装とか芸能界の事…信用していなきや話がないだらうし。

それに…話を聞いていた以上、私が本当は女だつて事…知つていたという事実。

マネージャーはそんな態度、一度も見せなかつたなあ…。

「あの…由さん？怒りました？」

「へつ？何で？」

「いや、私はお兄さんとの関係を黙っていましたし…」

「まあ、もつと早く打ち明けて欲しかったのは確かですけどね。」

「すみません。言いそびれてしまつて…それに、私が気に掛けなく
ても…」

「…気に掛けなくても？」

「…由さんには彼氏の鷹君が傍に居ましたしね。無粋でしたね。」「
かつ彼氏って。バレてました？恥ずかしいーーもおーー

でも…私は嬉しいです。マネージャーが見守つてくれた事。
何か…お兄ちゃんが傍に居るみたいで。」「里君に…ですか？私似てますかね？」

「いえ、全然…！マネージャーと似ても似つかない感じ…！…」「では？」

「ワインキというか…空氣といつか…」「空氣？」

「はい。兄の纏つていた空氣です。マネージャーの傍に居ると、安心します。
まるで…本当にお兄ちゃんが帰つてきたみたいです。」「そうですか。それは光栄です。」

思わず口から出た言葉だった。

お兄ちゃんが帰つてきたみたい…本心だった。

料理の味付けだけじゃない。マネージャーといふと本当に心が落ち
着いたから。

本当に不思議な人…

私は食事の後片付けを手伝い、自室に戻る。

お兄ちゃんとマネージャーとのアメリカの生活を想像し、一人で笑
つっていた。

不思議…鷹との事、あんなにショックだったのに…

大丈夫という訳じゃないけど、少しだけ気が晴れたのは確かだな。

…よかつた、一人じやなくて。

「由さん？お風呂じゅうぞ…」

ドア越しにマネージャーの声が聞こえてきた。

「はっはい。頂きます。」

私は着替えと、簡単なメイク道具を持ち部屋を出ようととした。

「…あつ、これは要らないんだ…。」

手に持っていたメイク道具。もつ必要無いのか。

だつて…マネージャーは私が女だつて知ってるしね。

でも、いきなり素ツピンで風呂から出てきたら驚くかな？

だつて…素ツピンの私は不細工だしね。

うん、今日…だけじゃなくて、暫くは軽くメイクをして風呂から出よう。

私は脱衣所で裸になり、熱い湯に身体を浸ける。

「…ふあーーー、気持ちいい…。」

冷えた身体に染みる温かさ…ほつとするな。

何か…今日は色々あつたな。

鷹の浮氣にマネージャーの正体。

疲れたなあ…

身体を洗い、再び湯に浸かっていた時だつた。

ドンドンドン！…

急に激しく玄関のドアを叩く音が聞こえてきた。

「誰？」

結構な勢いでドアを叩く音。

何か…急に不安になつて来て、私は急いで風呂から上がつた。

身体を乱暴に拭き、急いで持つていた寝巻に着替える。

「…………」

ハツキリは聞こえない。でも…聞き覚えのある声同士が何か言い争つている様だつた。

「…由…ど…あ…！」

この声って…鷹？

私は恐る恐る脱衣所の扉を開ける。

少しだけ戸を開け、玄関の方へ視線を向ける。

「…鷹。」

汗だくで、必死にマネージャーに迫る鷹の姿が目に入る。

「…つ…由…！」

鷹は、ドアの隙間から覗く私に気付き、大声で私の名前を呼んだ。

「…由さん、御客様ですが…追い返しましょうか？」

「…いえ、大丈夫です。」

「本當ですか？」

「はい。……鷹、私の部屋で話そづ？」

「由…そうだな、とにかく中に入れてくれ…」

鷹を自室に招き入れる。

「…由子、ごめんな…」

「…ごめんつて、何が？」

「何つて…楽屋での事。」

「楽屋…ああ、佳苗さんとイチャイチャしてた事？」

「…俺はイチャイチャなんかしてない！あればお前の誤解だ！！！」

「誤解？何が誤解なの？鷹の上に乗つてたんだよ！あがイチャイチヤじや無いなら一体何なの！」

「俺は…寝ただけだ。」

「はあ？何その良い訳！」

「良い訳じや無い！本当の事だ！！！」

「私は見たのよ？それに佳苗さんだって言つてた！私が野暮だつて！…どういう意味よ！」

「そんなの俺にも意味わかんねーよ！俺は本当に寝てただけだ！目が覚めたら佳苗さんが俺の上に乗つてるし、ドアにはお前が立つてるし！」

「俺も状況把握するまで意味解んなかつたんだ！！！」

「…だから電話もしてくれなかつたの？」

「…ごめん、佳苗さんから話聞くのに手間取つて…

でも、俺と彼女は本当に何でも無いんだ！信じてくれ！」

「…信じたい。信じたいけど…私はあんな現場目撃しちゃつて…」

「信じて…くれないのか？」

「…少し、時間が欲しい。私もいきなりだつたし…頭を整理したい。」

「…どの位…時間欲しいんだ？」

「分かんない…自分でも。」

「…分かつた。俺は何時までも待つてるから。俺、お前なら信じてくれるつて思つてる。」

鷹は重い足取りで帰つていった…

「マネージャー、済みませんでした。」

「もう、大丈夫なんですか？」

「大丈夫…なのかな？私にもわかりません。」

「…お互いが大事に思つてれば、きっと解決する。心配するな。」

マネージャーは私の頭をポンポンと叩いてくれた…まるで本物のお兄ちゃんの様に。

マネージャーは私に甘いカクテルを手渡し、ソレを受け取る。口に流せば、甘く爽やかな酸味が口に広がる。

「…美味しい。ありがとう…」

「一杯飲んで寝てしまうのが一番…さあ、全部飲み干して？」

「はい、頂きます。」

一気に流し込むと、胃がカツと熱くなるのが解る。
結構アルコール強いのかな？

私は空いたグラスをマネージャーに手渡し、礼を言つ。

「有難うございます。なんか…眠れそうです。」

「それは良かった。さあ、ゆっくり休んで下さい。」

「はい、御休みなさい…」

部屋に戻り、布団に飛び込む。

…疲れた。今日は本当に疲れた…

私は寝酒のお陰か、直ぐに深い眠りに就いた。

……………カチヤ、キー。

部屋のドアが空く音がする。

私…鍵掛け忘れちゃった?

起きなくちゃ…でも、面倒くさい…目も開けたくない…
いいや…寝てよつ…

「由…さん?」

あれ?マネージャーの声がする。

何か用事?

でも…眠い。目…開けたくないな…

私は頭では起きなくてはと思っていたけど、眠気に勝てなかつた。

「…寝てるんだね…」

はい、寝てます。起きるの面倒です。話は明日起きてから…

「…今日は大変だったね…由子。」

「由子？今、私の事由子って呼んだ？」

「由子…負けるなよ…俺が…傍に居るから。」

やつぱり、私の事由子って呼んでる。お兄ちゃんから名前聞いてたのかな？

「由子…俺が守つてやるから。今なら…今なら守つてやれる。」

「今なら？…どういう意味？」

「俺が…お兄ちゃんが守つてやる。お前を苦しめる全ての物から…今は守つてやれるから。」

「…どういふ意味なんだろ？…

考えてる内に、私の意識は鮮明に戻つていた。
でも、今更起きるなんて…『気まずいよ。

仕方ない、ここはタヌキ寝入り！

「…『めんな由子、お前…死んだと思ってるんだよな…
死んだと…思ってる？

「『めんなあ…ああするしか無かつたんだ。あの時は…お前との関
係…壊れかけてたし…』

関係…私、前から知つてたつけ？

「今なら他人の男としてお前の傍に居れる。他人として守つてやれ
る。」

他人…他人として？

「他人の…一人の男としてお前の傍に居れる。

由子…安心しろよ？お兄ちゃんが傍に居るからな…お前の傍に…

…もしかして、本当にお兄ちゃん？私の血の繋がつたお兄ちゃん…？

マネージャーは私が本当に寝ていると思い、色々喋っていた。

私も適当に寝返りしたり、深い呼吸をしたり…必死に演技していた。

「…由子、幸せにしてやるから。」

マネージャーは最後にそう呟き、喋らなくなつた。

沈黙が流れ…私は耐えきれず起き上がりうかと悩んでいた時だつた。ふつと風が頬を撫で、マネージャーが動くのが解つた。

あつ部屋から出て行つてくれるんだ…助かつた！

もう限界だつた。それに…ゆっくり考えたい。今までの言葉の意味を。

服が擦れる音が聞こえ、動く気配もする。

でも…ドアに向かう気配じや無い。それどころか近づいてくる…バレてた？

マネージャーは私の顔を覗きこんでいるみたいだつた。息遣いが近くに聞こえ…狸がバレないかドキドキしてた。マネージャーは…私に顔を近づけ…

私はキスをした。

第三十八章（後書き）

かなり遅くなつた更新ですが、呼んでくれて感謝です。
忘れないでいてくれて有難うござります。

第三十九章（前書き）

お久しぶりです。あきチャンです。

久しぶりの投稿なのに…どうどう書いてしまいました。

15歳未満の方は、この三十九章をすっ飛ばして下さい。

第三十九章

マネージャーは私にキスをしてきた。
優しく…触れるだけのキス。

前は兄弟ならキス位する物だと思つてた。
でも、今の私には違うんだって分かる。

本当は、直ぐにでも跳ねのけよつと思つてた。
だって、否定してもマネージャーの正体はお兄ちゃん。
お兄ちゃんの事は本当に大好き。
でも…異性として愛してはいけない相手。
はつ早く逃げなくちや！

でも…出来なかつた。

私の頬に、温かい雫が落ちてきたから。
泣いて…るの？

お兄ちゃん…辛かつたのかな？

今ここで、私が起きていたのをバラして跳ねのけたら…またお兄ち
ゃんは辛くなる?
でつ出来ない…

離れない唇…

落ちてくる涙…

そりや私だつて男性経験を積んで多少免疫も出来たけど…
こんなキスされたら、ドキドキしちゃうんですけど…

「ひひ」

思わず声が出ちゃう。

「…」

ビックリして離れるマネージャー。

私も焦って、寝返りの振りをする。

一瞬緊張が部屋の中を走り…また静寂に戻った。

おっお願い…早く出て行って！

そう思つてたのに…

マネージャーは、私の顔の横に自分の頭を置き、何するでもなくただ見つめていた。

さつさつきよりシンドイ状況だ。

なつ何で顔見てるの？

もつもうこの緊張に耐えるの限界！

私は意を決して目を開けてみる事にした。

「ふつ…」

軽く息を吐きながら、ゆっくりと瞼を開けた。

ぼやけた視線の先に、マネージャーの顔が映る。

うつすらお兄ちゃんの面影があるけど…本当に別人の顔してる。

本当に…お兄ちゃんだよね？

マネージャーは目をつぶついて、私が顔を見ている事に気が付いてない。

私もそれを良い事に、ジックリとマネージャーの顔を見ていた。

「……。」

マネージャーの落ち着いた息遣い…もしかして寝ちゃってる？
うそ、信じらんない。

「……うつん…」

寝言の様な吐息が漏れる。
ふつ。なんか面白い。

あの几帳面そうな顔のマネージャーが、私の隣でクーケー言つてゐる
なんて。

変なの……何か嬉しいや。

「むう……いや……むにゅ……」

口をモゴモゴさせてるし……なんか凄く可愛い。

私も寝ちゃえばよかつたのに……つかり寝顔を見つめてしまつてい
た。

本当に不思議だなあ。

目の前に居る人はお兄ちゃんかも知れなくて……でも本人曰く他人で…
もう、私に位本当の事言つてくれてもいいのに！
もう、何かちょっと腹立つってきた。

そうだ、何か悪戯してやろうか？

うーん、どうしてくれよう。

そうだ、私も……

チユ。

お返しに頬にチユつとしてやつた。

何か悪戯になつて無い様な氣もするけど……

実はさつきのキスの名残がまだあつて……
身体の奥が熱くなつてたの。

かといつて今鷹を呼ぶのはあり得ないし……
まあ、気が紛れるかと思つとしてみたんだけど……

逆にもつと熱くなつてきた。

下半身はドキドキ脈打つて……どうしよう。

私は目の前に居る男性に欲情してしまつた。
あつ頭ではお兄ちゃんかもつて分かつても……顔は赤の他人。
しかも……かなりカツコいい人。

“うわーん…

焦つて目を閉じても、顔に寝息が掛つてゐるし。
やつやだ！襲いかかつちゃいそつ…
この人は、どういう風に女性を抱くんだらう。
もしかして…鷹より上手だつたりして。
それに…この人に抱かれたら、どんな感じがするんだらう。
……うつうわ！私、どうしよう…

もう頭がボーッとして自分じゃないみたい。
頭の中まで熱くなつてきて…涙が出そう。
ちょっとちょっと触れる位なら起きないよね？
ちょっとだけ、だから。

指先でチヨンと脣に触れてみた。
男の人なのに柔かい感触だ。

ブー／ブーしてゐる…可愛い。
ここに唇を重ねたら…きっと気持ちいい。
ちょっとだけ…大丈夫だよね？
だつて私には勝手にしてきたんだし…私だつて少し位。

恐る恐る触れた。

ブー／コつとした温かい唇。
あつ気持ち…いいかも。
頭の中が白くなる。
気持ち良い。

……。

「チユー！」

あつ…思わず吸つちやつた…音まで出ちやつた！
うわあやばい！起きちやつ…！

案の定薄ら田を開けたマネージャー。

そして…ぱっちり私と田が合つ。

焦つてる私は、何も言葉が出ない。

マネージャーは…何も言わないで、私の顔をじつと見つめてる。焦るでもなく…ただジッと見つめてる。

私も、お返しだよーとか冗談口調で喋ればよかつたのに、じつと見つめるマネージャーの視線に吸いこまれて…動けなかつた。

この人はお兄ちゃんなのに…顔は他人だから。

いつ良い訳なのは分かつてる。

でも、頭だけじゃ制御できなかつた。

マネージャーの腕が動き、私の首筋に伸びてくる。

「あっ…んん…。」

ゾクつとして声が出ちゃう。

マネージャーはそのまま手のひらで私の頭を包み、自分に引き寄せる。

吸い込まれるように合せる脣。

柔かい感触は、私の意識を完全に真っ白にしていく。

そのうちに深く差し込まれるマネージャーの舌先。

私の口内を動きまわり、私はそれに応える様に追いかけ…絡ませる。どれだけ合さっていたのか、お互い息が上がつていて…全身が心臓の様にドキドキしてた。

もう止められないかもしね。

「由子、俺の事…受け入れて欲しい。」

突然耳に声が掛る。

やつやだ…何て答えればいいの？

正直私も身体の芯が熱くてどうにもならない。

いつそ無理やり犯してくれた方がいい。

だつて……それならマネージャーの所為に出来るから。
でも……きっとマネージャーは無理に抱いたりしないだらう。
分かってる。絶対にしない。

なら……どうしたらいいの。

今の状況で跳ねのけられる?

お互い意識があつて……分かってる上であんな熱いキスして。
それって同意の上つて事でしょ?

鷹という彼氏がいるのに…

鷹、そうだ鷹だつて…

佳苗と浮氣してたんだ。なら私だつて…

そつだよね、私だつて浮氣したつていいよね。

そう思つた瞬間に、何か私の中の引っかかっていた物が外れた。

私は小さく頷き、自分からキスを求めた。

マネージャーの頭を引き寄せ、吸いついた。

マネージャーは一瞬動きが止まつていたけど、直ぐに戻り……乱暴に私の上に乗つた。

キスをしながら互いの服を脱がせて、裸になる。

マネージャーのキスが私の体中に落ちてくる。

「ああ……んん……あつああ……！」

敏感な場所を愛されて、体中から何かが昇つてくる。

「だつだめ……やつ、そんなに……やあ！」

駄目だ……もう我慢出来ない！

「ああ！あああ……」

思い切りマネージャーの頭を掴み、下腹部に押し付けた。

全身に走る刺激的が感覚で、かるく痙攣してる。

「こつあ……ああ……あ……」

「由ナ…逝つちやつた？」

「ひつひん…やだ…。」

「嫌じやないよ…もつと、もつと感じて欲しい、俺の事だけ…」

マネージャーは私の間に腰を割り入れ、自分を宛がつてきた…来る。

割り入つてくる感覚がしたと呟つと、ズンシッヒー気に奥まで感覚が突き抜ける。

「ああああ！」

かなりの質量で、ちよつと苦しい。

でもマネージャーはもつと辛そつな顔して…それが一層私の欲情を搔き立てる。

無我夢中で抱きつき、快感を貪る。

動く背中にしがみ付か、無くなりそつな意識を一生懸命に探していった。

音が卑猥に響き、部屋中に木靈する。

翌日、私はマネージャーの腕の中で田観めた。

キッチンと服が着せてあつて…身体も綺麗になつてゐる。

ん？昨日…あれ？

そつか…夢だ！

何だあ、良かつた。

この状況だつて、きつと訳があつて腕枕を…
とにかく起きなくぢや！

そつと腰をあげる。

「おう…うう…」

「…これは…確実に何かがあつた証拠だな。
やつやばい。浮氣しちゃつた…
つてか、浮氣所じやない！」

この人は…多分お兄ちゃんなのに！

第三十九章（後書き）

申し訳ありません>（ーー）<
書いちやいました…あれを！
何か…四各関係に発展しそうですwww

「やつぱつ…しちゃったよね。」
この下半身の氣だるさは、間違いなく何かしちゃった証拠だ。
今さらだけど、もしかして大変な事しちゃったんじゃない?
この横に寝ている人は、お兄ちゃんかも知れないのに…てか、お兄
ちゃんだと思う。

なら私…実のお兄ちゃんとエッチ関係に…つわあ――!

「…そんなに後悔してる?」「
横から声が聞こえてくる。

「まつマネージャー…おはよひげれこめす。」

「おはよう。眠れた?」

「あつはい…お陰さままで。」

「ふふつ。よかったです。じゃあ私も起きよつかな?今日まだマタの収
録もあるしね。」

「はつはい。すぐに支度します。」

「ああ、私も支度しなくちゃね。」

マネージャーは私の頭を軽く叩いて部屋を出て行つた。

一人になつた部屋で考える。

勢いで浮氣しちゃつた事、しかもマネージャーと。

これつて…最悪にマズイ事だよね?

どうどうしたらいの…

でも、さつきのマネージャーの態度…何か普通じゃなかつた?
まるで何事も無かつた様に…。

私は支度を済ませ、リビングに行つてドアノブに手を掛けた。
でも、何か気まずくてドアを開く事が出来ない。

どんな顔して話せばいいか解んないよ。

私がドアノブを握つたまま問答していると、外から声が掛つた。

「由さん？準備できましたか？」

「あつはい。直ぐに行きます。」

私は意を決してノブを捻つた。

朝食の匂いがする朝のリビング。

マネージャーはテーブルに座りコーヒーを飲んでいた。

「由さん？時間も無いんで早く食事を済ませて下さいね。」

「口やかに笑い私に朝食を勧めてくれる。

「あつひやい…はい。頂きます。」

動搖のあまり噉み噉みな私は、真っ赤な顔でテーブルに着いた。とにかく食事を済ませようと必死にご飯を口に運ぶ。シーンとした空気が流れ、ちょっと気まずい。

「…由さん。昨日の事何ですけど…。」

話しを切り出したのはマネージャーだった。

「ひや！ひやい！！」

「…ふつ。」

「ひやい？」

「ふふふつ。」

「あつあの…」

「じめん、余りに面白い顔してたから。」

「はあ…。」

「あのね、昨日の事は忘れていいんだよ？って、男のセリフじゃないけど…。」

「…はあ？」

「いや、由さんが余りにも気まずそうにしてたし…それに彼氏と喧嘩した後の事だつたし…」

もしかして間が射しただけのかなって。」

気まずそうに口ひいて言つた？

そりや誰だつてそうでしょ！彼氏居るし貴方は兄弟かもしけない訳だし。

動搖しない人なんか居ないと思いますけど？

もしかしてパニックなのは私だけ？マネージャーは平氣なの？朝の態度といい、今だつて気にしないでつて、間が射したつて…マネージャーにとつては忘れてもいい程の出来」とだつたつて事？なんか…凄いショック。

「…氣まぐれ…ですか？」

「えつ？」

「昨日の事は貴方にとつて、忘れても良い程度の事なんですね。」

「そつそれは違つ！」

「でも！さつきだつて態度は何時も通りだし、忘れてつて言つし…。

「それは由子が嫌がつてゐると思つて！」

「嫌がつてたら…嫌がつてたら大人しく抱かれたりなんかしない。」

「…由子。」

「私は…私はただ鷹が居るのに他の人と…しちやつて、自分から望んでしちやつて…」

最初は鷹への仕返しの気持ちもあつたけど…途中から本当に気持ちが入つちゃつて…。」

自分でも何言つてるか解らない。

ただ昨日の気持ちを知つて欲しかつた。

最初は仕返しの気持ちが強かつた。

でも途中からは、自分でも止められないほどマネージャーを欲した。仕返しなんてどうでも良くなつて、ただ私がマネージャーに抱か

れたかった。

好きかは分からない。でもあの時は少なくとも……気持ちは入つてた。

言つてて涙がこぼれてくる。

悔しいのか悲しいのか分からない。ただ胸の奥が熱い。

「…由子、『めんな』ありがとう。」

マネージャーは咳いて、席を立ち私を抱きしめた。

温かく…包み込んでくれる優しい胸だった。

ピンポーン！

玄関のチャイムが鳴る。誰か来た？

私は一瞬で我に返り、マネージャーの胸の中から出る。

「誰だ？こんな朝早く…うわあ…！」

インター ホンを覗きこんだマネージャーがビックリしてる。一体誰？

「たつ鷹だ。」

マネージャーは私の方を見て怖い顔で誰が来たか教えてくれた。

「鷹が…来たの？」

「ああ。どうする？」

「えつどつする…て？」

「居留守使う？それとも…殴つてくる？」

「なつ殴る？」

「どうする？由さんの言うとおりにするけど…」

由子から由さんに戻っちゃった…って、そんな事考えてる場合じやない！

どうしよう…たつ鷹が来た…！

「とつ取り合えず部屋で話しあります。入れて下さい。」

「…では何かあつたら直ぐに呼んで？」

「はい。」

マネージャーは鷹を家の中に招き入れ、自分は自室に入る。私は自分の部屋に鷹を招き、ドアを閉めた。

「……どうしたの？こんな朝早く…。」

「じめん、どうしても会いたくて…。」

「時間欲しいって言つたじゃない。」

「ああ、分かってる。でも…今離れたら一度とお前に触れられない様な気がして…」

「…鷹。」

「なあ、本当に佳苗さんとは何も無いんだよー信じてくれないか」「でつでも！私見ちゃつたし…。」

「見たつて何を見たんだよ！俺が佳苗を抱きしめてたか？キスでもしてたか？」

「そつそれは…、でも！佳苗さん上面に乗つてたし変な事言つてたし！」

「それは佳苗さんが言つてた事だろ？俺じゃない。佳苗さんの嘘だ。」

「なつ何で嘘なんて言つの？男だと想つてる私に鷹との事嘘言わな
くたつて。」

「それは…俺がお前の話しばっかりしたり、お前との約束ばかり優先するからだつて言つてた。」

「…は？」

「佳苗さんから聞いた。自分が誘つても乗つて来ないのにお前とは頻繁に会つてるし…

男だと分かつても嫉妬したつて。

俺が寝てる時に悪戯しようとしたらお前と鉢合わせして…つい嘘ついたつて。」

「本当？本当に佳苗さんの嘘なの？」

「信じてくれ。頼むから…」

鷹のこんな真剣な顔、今まで見た事無い。

鷹の言つてる事は本当なんだろう。

鷹…浮氣してた訳じやんさそ。良かつた！私は裏切られた訳じやない！

「分かつた、信じる。信じる事にする。」

「本当か？」

「うん。本当。」

「…よつよかつたあ。」

ヘタヘタと床に座り込む鷹。

「たつ鷹？大丈夫？」

私が手を差し出すと鷹は私の手を握り自分の方へ引っ張った。

「きやあ！」

ビックリして思わず声が出ちゃった。

「良かつた…本当に良かつた。」

鷹は私の胸に顔を埋め、抱きしめて震えている。

「鷹…大丈夫？」

「んつ、もう大丈夫。」

鷹は顔を上げ私の顔を見る。

「由子…俺はお前の事だけ愛してるから。」

愛してる…初めて言われた。ドキッとする。

鷹は私に顔を近づけて…キスをしてきた。

その時だつた。

「由さん！大丈夫ですか！…」

バンッ！と大きな音を立てて、マネージャーが部屋に飛び込んでき
た。

私は慌てて鷹から離れる。
驚き過ぎて声も出ない。鷹もビックリして固まつてゐる。

「…すみません。悲鳴が聞こえた気がしたので…。」

一瞬凄い形相をしていたマネージャ、今は悲しそうな顔をしている。

「あつそれは俺がコイツの事務かしちゃったダケで…いつ今のキスも[冗談なんで！」

鷹は慌てて良い訳をする。

そつか、鷹は知らないんだよね…マネージャーは私の正体を知ってるって。

「そうですか、では仲直り出来たんですね…。由さんそろそろスタジオに行かないと…。」

「あつ、はい。直ぐに支度します。」

「では私は車で待っているので、家の戸締りお願ひします。」

「はつはい。分かりました。」

マネージャーは今にも泣きそうな顔で部屋を出て行つた。
胸の奥がチクンと痛む。

「…ふはー！あぶねー！…男同士つて誤解されたかな？」

「だつ大丈夫だと思うよ？ほつほら私急がないといけないから…今

日は、ね？」

「あつああ、分かつた。じやあまたな？」

鷹は二コ二コしながら私を抱きしめ家を出て行つた。

一人になった部屋、マネージャーの香りがする部屋。
さつきのマネージャーの表情が頭から離れない。

マネージャー、凄く悲しそうな顔してた。

私…昨日の今日でマネージャーに酷い仕打ちしちゃったんじや…
さつきまで気持ちの入った行為だつたつて言つてたのに、鷹とキス
してる所見られるなんて…

痛い…胸の奥が物凄く痛い。

この痛みは何？私を優しく抱きしめてくれたあの人にに対する罪悪感？

それとも

番外編～兄と少し男として～（前書き）

お兄ちゃんの気持ち… 番外編です。

お兄ちゃんの本当の気持ちは 一体どうなんだ？

番外編～兄として男として～

由子…俺の妹。俺の思い人…

俺は由子の為に自らを殺し、そしてまたお前の前に現れた。
そう、お前を兄でなく男として守れる様に…

由子…お前は気付いてたよな、俺の気持ちに。

何時だつたか…俺はお前に妹以上の愛情を持つてしまつたんだ。
いけないと知りながら、お前は俺の全てになつてしまつたんだ…。

前にお前を困らせてしまつた時、そつ…俺が無理やりお前を押さえつけたあの日…

お前…泣いたよな？怖かったろ？

でもな？俺…あの時は本当にお前を抱きたかったんだ。

抱いて…俺以外の男の事なんて忘れさせてやりたかった。

…由子、お前を殺して俺も死のうとさえ思つたんだ。

馬鹿な事考えたよな？ごめん。

でも…お前が好きでも無い男に抱かれるのは我慢出来なかつた。
あの後、お前が出かけた後な…俺はアイツを殺しに行こうかと思つてたんだ本当に。

でも…俺が犯罪者になつたらお前、悲しむよな？

だから我慢出来た。俺を動かすのは全てお前次第なんだよ。

俺…思いついたんだ。

俺の特技を生かして、別人としてお前と生きていけなかつて。
でも、化粧じやお前は誤魔化せないだろ？

そんな時にあの事故。正直チャンスだと喜んだよ。

俺ね…嘘吐いたんだお前に。

俺の事兄貴じやないかって聞いただろ?

それね…半分本当なんだ。

留学時代に知り合った友人。

家族もなく友人もいない徹。俺ね…ソイツの身元保証人みたいな物だつたんだよ。

そして徹が死んだと連絡が来た時、とっさに入れ替わる事を思いついたんだ。

チャンスだつた。

俺は死んだ振りをして、別人に生まれ変わつた。

事故で傷ついた顔は整形し別人に…あとは化粧で誤魔化した。

徹の遺体と共に受け取った身分証明書…これを自分の物にしたんだ。

今度こそ…今度こそお前を陰から見守る筈だつたのにな。

俺…お前とあんな関係になつちました：

俺、自分が抑えられなかつた。

目の前で弱つてるお前を慰めてやりたかつた。

そしたらお前は俺を求めてくれた…

俺…お前と関係した事、後悔なんてしない。

たとえお前に嫌われても、俺はある日を後悔しない。

だから…落ち込まないで？

俺…何もなかつた様に接するから。

悲しまないで？

俺一人が罪を背負えばいいんだから…

お前は好きな風に生きて行けばいい。

俺が必要なら俺は何だってしてやる。

俺が要らなくなったら、俺はお前の前から消えてあげる。

だから…もう少しだけ傍に居させて？

お前が俺を必要としなくなるその日まで。

俺はいつでもお前の為だけに生きてあげる。

お前は俺の全てなんだから…

番外編～兄と姉としらべ～（後書き）

やつぱりマネージャーはお兄ちゃんでしたね！
由子の為に自分の殺すお兄ちゃんの愛。
その愛は由子の心に届くのでしょうか？

第四十一章（前書き）

お待たせしてしまい、申し訳ありません。

第四十一章

あの気持ちは何だったのだろ？。

鷹とのキスをマネージャーに見られて…心が痛んだ。

私は一体どうしちゃつたんだろう。

マネージャが待つ地下駐車場に向かう。
何か顔合わせ辛いなあ…。

「お待たせしました。」

ドアを開け、車に乗り込む。

「いいえ、あの…仲直りできたんですか？」

「えつ？あの…はい。」

顔が見れない。今朝まで貴方の腕に抱かれていたのに…。
自分から望んで貴方と寝ましたなんて言つた後、鷹との事を見られるなんて。

正直どういう顔をしていいのか分からぬ。

「由也ん、気にしないで下さいね？そんな顔…しないで下さい。」

「えつ？私…変な顔してましたか？」

やだ！気付かれぬ様にしてたつもりなのに…。

「泣きそうな顔…しますよ？…ふつ、だから気にしないで下さい。」

もう昨日の事は、お互い忘れましょ？。

「マネージャー、『めんなさい。私…』

言葉が出ない。私自信が自分の事分からぬのに…整理付いてない
の。」。

「ほり、そんな顔しないで？貴方はＫ－なんですよ？」

女の子皆が憧れるアイドルKのメンバーなんですか。」「…はい。自覚が足りなくてすいません。」

「…はい。自覚が足りなくてすいません。」
「そうだ、私は芸能人になつたんだ。」

「こんな凹んだ顔をしてちゃ駄目だ。」

「これは、お兄ちゃんが私に用意してくれた仕事なんだから…」

程なくして車は仕事場に着く。

マネージャーと一緒に局に入つて、控室で準備をする。

今日はドラマ撮影の続き、男として主演しているドラマ。
もうかなり撮影は進んでいて、今日はクライマックスシーンの撮影。
相手役の女優とのキスシーンがある。
念入りに歯磨きをして撮影に臨んだ。

「今日は宜しくお願ひしまーす！」

相手役の女の子、狩野沙希かのの さきが現場に入る。

「お願ひします。」

私も沙希に挨拶をする。

「由さん、今日はキスシーンですねーリードして下さー。」「キャピツとした態度。超ぶりっこだ。」

「えつ？ああ…こちらこそお願ひします。」

人前でキスするなんて、まあ相手は女子だからマシかもしれないけど。

「やだあー男の人リードして下せーよー！私からなんて…恥ずかしい。」

「そつそつだよね。あの俺…頑張るから。」

「ふふつ。今からでも予行練習…します？」

沙希は口を尖らせて私に迫つてくる。

「…いつ今はちよつと…。」

動搖しますよ。こへり同性とはいえ可愛い顔で迫られたら…

「あはっ！冗談ですってばー由さんのHッチ。」

沙希は笑いながらセットに入つて行く。
本当、勘弁してよね。

「では、本番いきまーす。5、4、3…。」
カウントが始まり本番。

「叶…もう別れるしかないの？貴方は…いいの？」
沙希のセリフ。

「別れたくない…お前とずっと…。」

私のセリフ。

「なら！何で？…。もういい…私は彼と一緒に行くわ…。」

沙希は後ろを向いて歩きだす。

「待てよ…くつ、おい…！」

私は止まらない沙希の手を掴み引き寄せ…！こだあ！

沙希の口にキスをする。
…えっと、ここは大胆に思ひをぶつける感じでって言われたっけな?
なら…このかしい。

ブチュ
!!!!

沙希の口をそつと舌先で開き、自分の舌を突っ込んだ。
沙希の身体はビックリと跳ねあがつたが、沙希も女優。そのまま氣
丈に演技を続ける。
…これで正解？でもOKが出ない…。
もつもつと官能的にした方がいいのかしい…！これでどうだ…！

差し入れた下を、沙希に絡ませる。

もつ画面からでもテイー卜なの分かるだりうな…。ちよつと嫌だ
なあ。

でも私は女優…じゃなくて俳優なのよー。ちよつと監督の期待に応
えなくちゃ…！

「…カー……ト…！」

監督の声がして、沙希から離れる。

「…沙希さん、ありがと…あれ、沙希さん？大丈夫？」
沙希が地面に座り込み、顔を真っ赤にしている。
そうだよね、いくら女優とはいえた人前で男とキスなんて…
私からすれば同性だから、まだ多少気が楽だけど…

「ちよつとー由田さん…」

監督から声が掛る。

「あっ、はー！…沙希さん監督が呼んでるから行くね？」

私は座り込んで居る沙希の傍を離れ、監督に向かつて走つて行く。

「…あの監督、じつでしたか？」

「あのさ、大胆にとは言つたけど…あれは大胆過ぎるよ…。」

「えつ？ 大胆過ぎ？」

「あのわ、激しく舌を突つ込めって事じゃない。抱きしめたり苦悶
の表情だつたり…

あれじや放送できないよ…。これは学園ドラマ…深夜じやないん
だから。」

「…うわーすみません！ 勘違いしちゃつて！」

はつ恥ずかしい！ 激しくキスしろって意味じやなかつたのね！

…沙希さん、ごめん！

「まあ、綺麗な女優さんとキスして興奮するのは仕方ないけど、そ

「わはハイハイでねー！」

「う、すみませ。むつ一回やり下せ。」

私はやつらの立位置に戻る。

「沙希さん…、俺勘違いしちゃって…。「めんね？」

沙希に謝る。だからもう一回チャンス下さい…。

「…私は別に。結構感じちゃったし…あんな情熱的なのは今度一人でね！」

流石女優さんだ。共演者に気まで使つて…

「じゃあ、もう一回こきまーす。5、4、3…。」

再び氣合を入れる。

「叶…もう別れるしかないの？貴方は…いいの？」

沙希のセリフ。

「別れたくなんかない…お前とずっと…。」

私のセリフ。

「なら！何で？…。もうこ…私は彼と一緒に行くわ…。」

沙希はやつらと同じ様に、後ろを向いて歩き出す。
よしー今度こそー！

「待てよー…くつ、おーーー！」

私は止まらない沙希の手を掴み…今度は軽くキス…そして抱きしめて…苦悶の表情！

「…んーーーOKOKOKーばつばつーーー
監督のOKが出る。

そして撮影は着々と進み…いよいよ最後のシーン。
実は叶は病氣で、死んでしまうと言つただ。

…どんな学園ドラマなんだ。

「叶…なんで言つてくれなかつたの？知つてたら私…。」

「いいんだ。もう俺の命は…最後に君に会えて幸せ…だよ。」
パタン…手を落して…死んだ振り！

「叶…、嫌あああー叶ううう…。」

・・・・・・・・・・・・・

「はいカーットー！お疲れさでしたあーーー！」

撮影は無地に終了する。

私と沙希が花束に埋まつて行く…。

うわあ、何か感動しちゃう。終わつたんだなあ…

「では、」の後打ち上げを行いますので、都合付く方は参加の方宜しくお願ひします！

ADさんが大声で話す。

打ち上げか…。行つてみようかな？何気に撮影楽しかつたし！

「マネージャー、打ち上げ行つとかと思つんですナビ…。」

着替えをしながら相談する。

「ええ、主演ですから行かないとね。では私もお供しますので。」

「えつ？一緒に来てくれるんですか？」

「はあ、一応マネージャーですか…。」

私達は打ち上げ会場に向かう。

バーを貸し切りにして、食べ放題飲み放題！楽しみだなあ。

スタッフさんとドラマの話で盛り上がるつー。

暫くして会場につくと、中は既に盛り上がりつた。
音楽が鳴り、大声で笑う声が聞こえる。
うーん、楽しそうー早く混ざりたい！！

私はドリンクを受け取り、監督の所に挨拶に行く。

「あの監督、お疲れ様でした！」

「おーー由樹ー！君も良く頑張ったねー！最初はどうなるかと思つたんだが…

しかし、今日の君のキッスは凄かつたねえーー！
ガハガハと笑う監督。もづ…言わないで下さい。

「もう、監督つてば酔いすぎー！」

隣で監督に媚を売つてているのは沙希。次のドラマも使って欲しいのだろう。

「いやいやースマン！君も由くんのキッスに腰砕けになつてたなんあ！

なあ、やつぱり凄かつたかい？あのキッスは。感じぢやつたかい
？ガハガハ！！！」

セクハラ大爆発の監督。すでにかなりの酒を飲んでいるのか顔が真っ赤だ。

「やだあーそんな私の口から言えないですよー！気持ち良かつたな
んて…あら、言つちやつた。」

「ガハガハー！沙希君もやるなあーほー、もつと飲みなさいー！飲みな
さいー！」

監督は沙希のグラスに酒を注ぎ、そして今度は私のグラスにも…

「ほー、今日の主役が飲まないなんて駄目だろーーほーー早く飲んでー！」

「はっはい！頂きます。」

注がれたウイスキーを一気に流し込む。

…きつキツイ！気持ち悪いよーー。

「おお！良い飲みっぷりじゃないか！ほりーもつと飲んでくれよー！
ガハガハ！」

さらにウイスキーをグラスに注いでくる。

…もう飲みたくないよお。でも飲むのも仕事！頑張るつー。

「…つぶはああー！」馳走様です！

嫌々ながらも、取り合えず胃に流し込む。

…つええ、酔っぱらうぞ。

「本当に若いだけあつて凄いなあーほり、遠慮せずにもつと飲みな
さい！」

さらにはグラスに注がれる。もう…限界ですよ。
でも、これだけ。これ飲んだら逃げよう！

「じゃあこれだけ頂きます。明日も仕事があるので…。」

グラスに口を付けて…グイッ！

うえええ、本当に不味い！でも…あと少しへ…

「ふーっ、ふーっ…行きまーす！」

大げさなアクションで流し込む。僕は飲んでもますよーつてアピール
する為に。

…でも、すでに2杯のウイスキーは意外にも私の神経を緩くしちゃ
つたみたいで…

「あつ！…うわあ、冷たい…。」

口から零れた酒が胸元を大胆に濡らす。…お酒臭ーい！

「おお、やつたなあ！勿体ない！」

監督は私の失敗を見てガハガハ笑っている。アンタねえ
「すみません。着替えてきます。」

私はチャンスとばかりに席から離れる。
もひ監督の傍に近寄るのは辞めた方が良さそうだ。

「…由さん、いらっしゃります。」

傍で見ていたマネージャーが私の手を引き裏に連れて行く。

「由さん、もう監督には近づかない方がいいですよ？」

あんな飲み方したら急性アルコール中毒で死んじゃいます。」

マネージャーの言葉が私の耳から入り…抜けて行く。
もひ醉っちゃったもーーん！

「…由さん、視点が定まつてませんよ？とにかく着替えましょう。」

マネージャーは辺りをキヨロキヨロして確認。

人気が無いのを確認すると、私の服を脱がしてくれた。
うふっ、昔みたいだね？お兄ちゃん…。

「ねえ、マネージャー？何で本当の事言つてくれないの？」
酔っぱらつて…つい本音が出てしまう。

「由さん？いきなり何を言つんです？」

「…お兄ちゃん、忘れちゃった？昔…着替えさせてくれたよね？」

「…私はお兄さんじや…。」

何でそんなに否定するの？何で自分は兄だと言つてくれないの？
私は分かった上で抱かれたのに…何でそうだと言つてくれないの？

「お兄ちゃん…私の事嫌いなの？何で言つてくれないの？」
自然と涙が出てきて…マネージャーを見つめる。

「…由さん、もう止めましょう。貴方は酔つて…。」

「何で！何で言つてくれないの…私はお兄ちゃんだと分かつた上で

昨日…

お兄ちゃんだから抱かれたのに！何で？」

口にして初めて分かつた。自分の気持ちが…

私はお兄ちゃんだから抱かれたんだ。

鷹に傷つけられたからじゃない！お兄ちゃんが…何時も守ってくれたお兄ちゃんだから…

マネージャーの胸に抱きつく。

お兄ちゃん…正直に言つて？認めて？

そうすれば私は…どんな辛い事でも受け入れる。
貴方が私を受け入れてくれれば…私は…

「由子…お前…何時から？」

「お兄ちゃん…。」

「何時から気付いてた？俺の事…。」

認めた？今…認めたよね？

「…」飯。あれはうちの味だった。それに…お兄ちゃんのキス。同じだつた。

「…はあ、俺は何の為に死んだ振りまで…。」

「お兄ちゃん…、もう離れないでね？」

「…お前、それがどういう意味だか解つて言つてんのか？俺たち…」

「兄弟もいい。大事なのは気持ちでしょ？」

「…鷹は？仲直りしたんだろう？」

「…した。でも鷹にキスされてお兄ちゃんに見られて…恥ずかしさより辛さの方が勝つて…

その時気付いた。自分の気持ち…。」

そう、あの痛みは罪悪感だった。

鷹にじやなくて、お兄ちゃんに…

それが解れば、自分の気持ちも分かつてくる。何で罪悪感を感じたか…

自分に嘘を付いているから… 罪悪感なんか感じたんだ。

「由子、辛いぞ？」

「大丈夫、お兄ちゃん… 傍に居てくれるでしょ？」

「当たり前だ。俺はお前の物だから…。」

お兄ちゃんからのキス。

これから待ち受けるであろう困難を、一人で分かち合つ為に…
一人で立ち向かっていく為に…
きつく抱き合い、お互いを励まし合いつ。

大丈夫… 傍に居るから…

私達は気付かなかつた。

まさかこれを人に聞かれているなんて…

床に紙が落ちる。

電話番号が書かれた小さなメモが。

「…信じらんない。」

小さく呟く女…沙希。

沙希は私に電話番号を教えようと私の後をつけっていた。
そこで目撃した二人の抱擁。

沙希のプライドは傷つき、嫉妬の心が燃え上がる。

「…でも、使えそうね…由…くん。」

沙希は不敵に笑い、私達の前に姿を現した…

第四十一章（後書き）

お兄ちゃんだと白状しましたね！これで一人は順調に…とはいかな
い様ですね。

沙希が一人の前に姿を現して…どうなるんでしょう。

第四十一章

「…でも、使えそうね…由くん。」

沙希が不気味な笑いを浮かべながら私達の前に歩いてくる。
私達は歩いてくる沙希に気付いて、すぐ離れたけど…遅かった。

「由さん、今日はお疲れ様でしたあ！」

「さつ沙希さん、お疲れ様です。」

ふふっと笑う沙希。何を考えてるのか分からない。

「…あのね、折り入つて相談があるんだけど…由君ちょっとといい?」「相談ですか?あの…俺でいいんですか?」

「ええ!貴方じゃなきゃ駄目なの…。」

「なら…いいですよ?」

沙希が私の腕に纏わりついてくる。

「では私はフロアでお待ちしてます。」「マネー…、お兄ちゃんは表に出て行つてしまつた。

「あの、俺に相談つて?」

沙希と二人での会話。こんな所写真にでも撮られたら!
早く皆の所に戻らないと…

「あのね…私、貴方に折り入つてお願いがあつて來たの。」

「お願い…ですか?」

「うん、あのね…私、KJの大ファンなのよね!」「有難うござります!貴方みたいな綺麗な人にファンだなんて言つて貰つて…。」

ファンが増えるのは嬉しい事。私だってKJの事大切に思つてるし…

沙希は急に真顔になり…恐ろしい事を口走り始めた。

「あのね、貴方にお願いと言つのは…私をKOUのメンバーに紹介して貰いたいって事なの。」

「…紹介ですか？あの…。」

紹介つて、貴方の事はメンバー全員知つてると思いますけど…

「そう、紹介よ。」

沙希は笑う。笑顔の裏にどんな考えがあるのか分かり辛い。

「あの、紹介つて普通に沙希さんの事を共演者つて紹介すればいいの？」

なら今度歌番組の撮影があるからスタジオ来る？」

別にメンバーに紹介する位なら…サインとかあげれば満足でしょ？

「…普通に紹介されても嬉しくないいだけど？私ね…KOUの大ファンなの。

KOUと一緒に付き合いたいの。」

「つつ付き合いたいんですけど？それは…。」

紹介する位なら出来るけど…私が付き合つてあげてと言つてもKOUヒエさんが納得するか…

私に好意を持つてくれてる様だつたし…ちよい無理だよね。

「あの、沙希さんを紹介するのは簡単ですけど、男女の事は一人の事だし…。」

私はやんわり断る。だつて私には無理だから…。

「…そう、でもね…貴方に断る権利は無いと思うのだけど…。」

私ね今…聞いちゃつたのよ？貴方とマネージャーの関係。

「…ヤリと笑う沙希。…まさか全部？

「あの…、俺とマネージャーの関係つて…何か変ですか？」

どこまで知つてるの？

私は沙希から聞きだそつとする。

「ふつ、何かですって？それを私に言わせたいの？由…子ちゃん。」

私の名前…沙希は全て知つてて…

「あの、私とマネージャーは怪しい関係じやないです。それに名前も。」

顔が女っぽいから皆に子を付けられて…「冗談なんですよ？」

我ながら苦しい良い訳。でも…お兄ちゃんとの関係は絶対知られたくない。

「あのさ、全部知つてるって言つてんでしょう…さつき聞いてたの貴方達の会話！」

…女なの隠してただけじゃ無くて、まさか兄弟で…汚いわね。」

「汚い…そこまで言う？私とお兄ちゃんは！…！」

「あら、目の前で認めたのね！本当にヤラシイ人ね。」

汚い…私達の事汚いって。

確かに許されるとは思つて無いけど…でも汚いなんて言わなくたつて！

何なの…この女は。

「…話しさ分かつてくれた？私はＫＯＵＩＥだけじゃなくてＫＵのメンバー全員と寝たいのよ！」

貴方はそれを手助けして頂戴。」

「手助け？手助けって…。」

「だから！貴方は私とメンバーが一人きりになれる状況を作つてくれればいい。」

まあ、私と二人きりになつた男で落ちなかつた男は居ないから…。

「自信タップリの沙希。」

「私にメンバーを売れつて言うの？そんなの酷い！」

「酷いのは貴方じゃない！私にあんなキスして…しかも男だなんて

…。」

「沙希さん？ それって…。」

「とにかく！ メンバーとの事お願いね？ 私に逆らつたら… 全部マスク流すから。」

「…沙希さん。」

沙希は本気だ。目が真剣だから…。

私はメンバーを売らなくちゃけないの？

J E Y さんや K A J E さんはともかく、K O U I C H O さんが簡単に落ちるとは思えない。

それに雪…、やつぱり雪には汚れて欲しく無い。

雪は私を励ましてくれて支えてくれた大切な人。

その人を沙希みたいな女に汚されたくない！

でも協力しないと沙希はマスクミニ… それは絶対に嫌！

折角K として売れ始めて、それにお兄ちゃんとの事も…

今まで頑張つて来た事を全部白紙に戻すなんて無理！

… K O U I C H O さんのアレが終つて、でもまた脅される日が続くの？

なんで？ 何で私ばかり…

メンバーを売るか自分を売るか… 簡単には決められない。ならあの一人を沙希に紹介して… 妥協して貰うしかない。

私は沙希と強制的に連絡先を交換させられ、フロアーに戻つて行った。

… お兄ちやんに相談する？ いや… もうお兄ちやんを失うのは嫌。K O U I C H O さんの時は、私が対象だったからバレてしまつた。でも今回はメンバーの事。私さえ黙つていれば…

K A J E さんJ E Y さん御免なさい。生贊になつて下さい…。

打ち上げ会場に戻つた私は、酷い表情をしていたらし…。

お兄ちゃんは私の傍にすぐさま来て、もう帰らうと言つてくれた。
何があつたのか聞かれると思つたけど、お兄ちゃんは何も言わなか
つた。

家に帰つても気分が晴れる事は無かつた。

お兄ちゃんが好物を作ってくれても、食事が喉を通らない程。
私の所為でメンバーに迷惑掛けちゃうんだろうし…辛いよ。

そして何事も無く数日が過ぎて…今日は歌番組の収録だった。
普段は個別に忙しいメンバー、今日は久々の全員集合だった。

「お久しぶりです！」

後ろめたい気持ちを隠して、皆に挨拶をする。

「おお！由ーー！久しぶりーー！」

相変わらず元気一杯の雪。

「うん！久しぶり！雪のドラマ見たよー良い演技だったね！
雪も私と同じように最近はドラマ撮影で忙しそうだったの。
雪も学園物で、元気一杯のスポーツ少年の役。雪にピッタリのイメ
ージだね！」

「由のドラマも見たよー由サマーじゃん！超純情少年！いいなあ
の役。」

「そお？でも死んじゃう役だし…。」

「まじ？叶つて死んじゃうのぉ？ショックー！」

あら、まだ最終回放送されてないんだった。ネタばれ？

「『めん…言っちゃつた…。』

「むーつ。別にいいけどさあ…んで、沙希ちゃんとはどうなるの？..」

「さつ沙希？」

「うん、何か役のイメージ弱くて役名出でこないんだけど、あの沙

希ちゃんって超俺の好みだしい！

ねえ俺に紹介してよ！」

「…紹介して欲しいの？」

「えつ？ まじ紹介してくれんの？ そりや今一押しだし男なら皆あの手は好きでしょ！」

「 そうなの？ あんな女… 雪もタイプなんだ…。」

ショックなんですけど。雪の口から沙希の名前は聞きたく無かつた。まあ見た目は本当に可愛いく思つけど… 人の弱みを握つて齧るような女なのよ！

雪… 騙されないで。

雪に言いたい！ でも言えないよね…

雪… お願い、間違えないで！

たとえ世界中の男が沙希と寝ても、貴方は汚れないでいて。

私に言えた義理じゃないのは分かる。でも貴方には綺麗なままでいて欲しいの。

雪、お願いだから失望させないでね。

収録準備は進み、リハーサルに入る。

メンバー全員で舞台に立ち、そして皆で歌う。

うん、やっぱり気持ち良かもしね、皆の前で歌うのは。

お兄ちゃんから紹介され、嫌々始めた仕事だった。

でもメンバー達と一緒に過ごして、タレント兼アイドルになつて…

人前で歌う事、人前で演じる事の楽しさを知つてしまつた。

今の私にとつて芸能人で居る事はとても大事な事になつていい。

やっぱり辞めたくない。Kノのメンバーとして皆と一緒に歌つたい。

それを邪魔してくる沙希…私は貴方が憎いよ。
どうか放つておいて。

でも、私の願いは届かない。

「おいつ…由見てみるよ…あそこお…」

リハーサルを終えた私達は、スタジオの隅で休んでいたんだけど、
何故か雪が興奮し初めて…スタジオの入口を指差して居る。

「なに? 大物でも来たの?」

あまりにも雪が興奮するから…大物芸能人が来たのかと思った。
でも、違った。

「由い、何言つてんだよ! ほらあそこ…沙希だよ…さ・せー…」

沙希…もしかして本当に来たの?

いくら私が収録に遊びに来いと言つたからって、それは挑発を受ける前の話。

今更スタジオに来るなんて…一体何がしたいの?

「ああ! 由くーん! 遊びに来ちゃつた!」

思い切り笑顔の沙希が私の傍に駆け足で来る。

「…沙希さん、本当に來たんですね。」

「やだあ! 由くんから言つたんじゃない! 遊びに来いって!」

「…それは…。」

私と沙希の不穏な空氣に、和ませようと口を挟んできたのは雪。

「おいつ! 由! 俺たちにも紹介してくれよ!」

「…余計な事言わないでよ!」

私は貴方達を守りたいのに…

「沙希でーす！貴方は雪君でしょ？超カッコイイ！…」「まじでえ！俺超嬉しい！改めまして雪です！宜しくね！…」

雪はテレッとした顔で沙希に手を差し出す。

そして沙希は、私の方をチラッと見てから雪の手を握り返す。

やめてー…そう叫びたかった。

別に私は雪の彼女でも無いから、そんな事この場で言えやしない。だから、私は下唇を思い切り噛んでその場を耐えた。
…やだ、もう離しなきよ…！

そして沙希は次々にメンバーに挨拶していく。自ら握手を求めて…

「沙希でーす！宜しくお願ひします！」

「トヽよつ可愛いじやん！俺はＫＡＪ－。宜しくねー！」

「沙希です！これからも宜しくー！」

「…＼＼＼です。」

…＼＼＼さんの好みは沙希では無かつた様で…握手も嫌々していた様だ。

沙希ざまあーー！

そして沙希はＫＯＵＪＩＫUさんの前に立つ。

「沙希でーす！ＫＯＵＪＩＫUさんの大ファンなんですー！」

「…そづ。」

沙希は今までより氣合いの入った笑顔でＫＯＵＪＩＫUさんに話しかける。

でも…ＫＯＵＪＩＫUさんの表情は明らかに不機嫌だ。

差し出された手を握り返す事も無く、ただ短い一言しか会話しない。正直…胸がスッとした。

沙希の方もそれを感じた様で…一いつ口こと笑ってスタジオから出て行

つてしまつた。

「…ＫＯＵＪＩ、お前もつちゅつと愛想よく出来ないの？一応同じ

業界人だしさあ。」

ＫＡＪＥさんのが注意する。

「そうだ、俺なんて握手まで…。」

ＪＥＹさんも茶々を入れる。

「…あんな女と挨拶を交わすなんて、あり得ない。」

ＫＯＵＪＩさんは、キッパリと言い切る。

ビタやら沙希の事を気に入つたのは、雪とＫＡＪＥさんのみ。

ＪＥＹさんとＫＯＵＪＩさんは眼中に無い様だ。

沙希…この一人落せるモンなら落してみなさいよ…！

第四十一章（後書き）

もう少し鷹は蚊帳の外になりそうですが。
でも忘れた訳じゃないので我慢してね鷹。

第四十三章

KOUSHOさんとEYさんの態度に、私は胸がスカッとした。
沙希… そんなに自信があるならこの一人… 落してみなさいよ！

私達は本番まで楽屋に戻る事にした。

そして皆で雑談が始まったんだけど… 話題は当然沙希の事。

雪が先頭を切って話し始める。

「なあー！ 沙希ちゃんってTVで見るより超かわいいな！」
雪が私に話しかけてくる。

「えつ？ んまあ… 顔はね。」

「何何？ ヤキモチ？ 僕に沙希ちゃん取られると思つてるの？」

「なっ！ そんなんじゃ！ ただ… 僕は…。」

ヤキモチのかな？ 勿論雪を取られる事に対してもだけ。

でも… なんか違う気がする。

雪を取られたくないのは本当だけ… 私は雪を愛してまではいない。
まつ前は… 本当に大好きだったよ？ でも… 今の私にはお兄ちゃんが
居る。

でも沙希には取られたくない。

これつて… 私の独占欲のかな？ 私の我儘？

正直、雪だけじゃなくてKAJIIさんもEYさんもKOUSHOさん
も…

皆沙希と寝て欲しくない。

沙希を抱く事によつて、大切なメンバーが汚れる気がして…

大切なメンバーを騙して居るみたいで…

私の秘密が沙希にバレタた所為で、メンバー全員を人身御供にして
しまつた。

私の秘密の所為で…

「どうした？顔色が悪いが…。」

KOJII-Eさん…が私を気遣ってくれる。
KOJII-Eさん…「めんなさい。

最初は最悪な関係だつたKOJII-Eさん。

私を無理やり抱いて、秘密を盾に私を脅して…
何度も身体を奪われたか分からぬ。

でも、繰り返す内にKOJII-Eさんに對する感情は少し変わって行
つた気がする。

憎しみだけの關係、でも最後までそうだつた？
ううん、違うと思う。

憎しみが消えた訳じゃない。でも…ほんの少し愛情が沸いて居たと
思う。
だから逃げないで抱かれていたのかも知れない。

「KOJII-Eさん…「めんなさい。」

償いの言葉が勝手に口から飛び出す。

「…はあ？」

意味…分からないよね？

うん、それでいいの。

意味は私が解つていればいい。

そう…私だけが。

暫くしてADさんが樂屋にやつてくる。

「KJさん、そろそろスタンバイの方を宜しくお願ひします。」

「へーい。じゃあ…久々に暴れますか…」

珍しくクールなJ-E-Yさんが皆に声を掛ける。

私は「クンツと睡を飲み、立ち上がる。

一生懸命に歌おう。

そう…後悔しない様に…

私は決めていた。

メンバーを差し出す位なら…自分で身を引ひくと。

最初は女好きのメンバーに犠牲になつて貢う予定だった。

でも…それは違うと思う。

一度でもあんな女抱いてしまつたら…きっと一生付きまとわれる。
そして暴露本とか出版されちゃうかもしれない。

そんなの…絶対に許さない！

沙希に頼んでみよう…私は引退するからと。

そう、引退すれば…沙希も私にK-1を紹介しうなんて無理には言えないだろ？

だつて、脅すネタが無くなるもん。

…そうよ、私が引退すれば、沙希からメンバーを守れるかもしねない。

嫌だ…引退なんて。

でも、元々こうなつたのは私の所為だし。けじめ…つけなくちゃね。

そう思うと足が震えてくる。

ガタガタと…止まらない。

歌番組は順調に収録が進んでいく。

そして司会者に紹介され、メンバーは舞台の上でスタンバイをする。

…これが最後の仕事になるかもしねない。

そう思うと足が震えてくる。

「由…。」「

隣から雪の声がする。

「落ちつけ。大丈夫だから。」

「…うつうん。」

「…ふつ。ほら、緊張しないのー失敗しても…俺たちが助けてやるから。」

「雪…。」

雪の言葉に気持ちが落ち着く。

「…由。」

反対からKOUUさんの方の声がする。

「…心配するな。俺たちが居るだろ。」

低いけど綺麗な声で私に話しかけてくる。

「…はい。」

「OK! いべぞ!」

KOUUさんの声は私の気持ちを奮い立たせてくれる。

そしてKAJIIさんに「EYさんも。

言葉は交わさなくとも、目が合えば大丈夫だと頷いてくれる。

…こんな、こんなに温かいメンバーを私は…

本番はスタートを切る。

力一杯声を出し、遅れない様に踊りを合わせる。

息が苦しくても…身体が重くても…私は必死にメンバーに着いていった。

「ではまた来週!」

司会のタレントが番組を閉める。

私達は手を振りながらホールアウト。

…終わった。

私達は楽屋に戻り、帰宅する準備をする。

お兄ちゃんと家に帰る所とした時、私の前に沙希が現れた。

「由君…今日もカッソ良かつた！」

「…有難うございます。」

「ねえ…、これから一人で出掛けない？」

「あの…それは…。」

何？今日誰か一人差し出せと言つの？

決心はしたけど…こんなに早く？

お兄ちゃんは私の顔を見て、助け舟出そうか？と田代に言つてくれる。
でも…私は首を少しだけ横に振った。

…大丈夫。

このままメンバーを沙希に差し出す訳にはいかない。
遅れれば遅れるだけ…沙希の行為に拍車を掛ける筈。

「…では、行きましょうか沙希さん。」

「よかつたあ…じゃあ…私の車で出かけよつよー。」

「…はい。」

私は沙希の車でスタジオから出る。

沙希の車…と言つても沙希は免許が無い為、沙希のマネージャーも
同伴。

KUの為には、まずマネージャーの口を封じなくちゃ！

いくら私は引退するから…と言つても、マネージャーに聞かれても
元も子もない。

「…沙希さん、散歩でもしませんか？」

私は沙希に合図を送る。

マネージャーの方に一瞬田線を送り、沙希に知らせる。

沙希も一瞬マネージャーに田線を送り…「やつと笑う。

「いいわね！でも、公園だと人目に付くし…私の部屋はどう？」

「沙希さんの家…ですか？」

私は沙希の提案に、頭を上下に軽く振り答える。

「ちょっと…沙希ちゃん？」

慌てたのは沙希のマネージャー。

「大丈夫だつて！由君は男の子が好きなのよ？」「なつ何言つてんだこの女。

確かに男のお兄ちゃんが好きだけ…でもそんな事言つたら…バレちゃう！

「… そ…う…な…の…？ な…ら…見…ら…れ…ない…様…に…入…る…に…よ…？」

…マネージャーが天然系で良かつた。

ホモセクシャルにされちゃつたけど、バレンよりマシだ。

車は沙希のマンションに着く。

マネージャーは私達を降ろして帰宅。

私は沙希の後に付いてマンションの中に入つて行つた。でも…

… 私達は気付かなかつた。

一瞬だけ光つたフラッシュに…

第四十三章（後書き）

いよいよ直接対決か？

引退を決めた由子ちゃんの気持ちは沙希に届くのでしょうか…

第四十四章

沙希のマンションに入つて行く。写真を撮られている事も気付かず
に…

「…」が私の部屋。さあどうぞ。」

沙希はドアを開け私の中に誘導する。

「…失礼します。」

私は靴を揃えて部屋の中に入つて行つた。

沙希の部屋、玄関からして少女趣味。
全体がピンクに統一されている。

でも、嫌みの無い感じがするのは沙希のセンスかもしねりない。
いいなあ…、これぞ女の子の部屋つて感じ。

「由ちや…、由君はここに座つて?」

沙希はソファーを指差す。しして私は沙希の言つどおり素直に腰を
降ろす。

沙希は台所に立ち、何やら飲み物を作つてゐる様だ。

…別に飲み物なんか要らないから、早く話しき詰めようよ!
…と思つていたけど、沙希の感情を刺激しない様にしなとね。

「お待たせ!これ…取り寄せた紅茶なの!飲んでみて!…」

沙希は私の前にティーカップを差し出す。

ほのかに湯気の立つカップからは、凄く良い香りがしてくる。
…頂きます。

「…」
一言礼を言つてから口に運んだ。

…うわあ…これ美味しいわ!スッキリしてゐるのに濃厚で。

えつと……気を許しちゃ駄目よー」これは私を油断させる作戦に違いない！

「気を許せでメンバーを紹介させようとしても無駄よ！
そうよ……お茶なんて飲んでる場合じゃあいー。

私は……沙希に断りに来てるんだから！

沙希は自分の分の紅茶をテーブルに置いて、ソファーに腰掛けた。

「……沙希さん。」

「なあに？」

沙希は紅茶を啜りながら余裕の表情。

「お話があります。」

「……何かしら。」

「メンバーの事……なんですけど。」

私は思い切って切り出した。

沙希も話を聞いてくれる様で持っていたカップをテーブルに置く。

「……メンバーの事？なあに？今日にでも一人紹介してくれるの？」

「……その事でお話があります。」

「……紹介してくれるまで付き纏つわよ。」

沙希に先手を打たれる。

「……沙希さん、お願いがあるんです。あの……この話は無にしてもらえないませんか？」

沙希の目を見て……私なりに真剣に語りかけた。

「……嫌。」

沙希は考える事もせずに拒否の言葉を口にする。

「……では、私が引退するとしたらどうですか？」

「……貴方が引退？……それだけ？」

「それだけって、他に私に出来る事ないですし……それにいくら貴方

が美人だとしても、

脅されてメンバーを紹介するのって…なんか騙してゐみたいで。」

沙希は少し考えて言葉を選ぶように喋った。

「貴方が引退すれば済む問題ですか？」

「…えつ？」

「引退しても…貴方がKJのメンバーで居た事には変わりないでしょ？」

ましてドラマや写真集、歌のCDまで作つて…今更世間が許すと

でも思う？

ファンはお金を出して貴方達5人を応援してた。その人達が眞実を知つたら…ねえ？」

沙希は一度でもメディアにメンバーとして出てしまった以上、今更引退した所で何も変わらないと言いたいのだろう。

女だったと世間に公表されてしまえば…KJにとつてはマイナスでしか無い。

「…では、私はどうすればいいんですか？何をしたら…貴方の気が済みますか？」

もう沙希自信に決めて貰うしか道はない。

「だから！メンバーを紹介…。」

あくまでも紹介してくれと言わん沙希に、私は言葉を遮る様に話した。

「ですから、私は絶対にメンバーを売つたりしません！絶対に…！」

少し声を荒げる。だって…私の気持ちが絶対だといつ事を沙希に知つて欲しかったから。

私は不純な動機でメンバーを売つたりはしない！沙希に分かつて欲

しかつた。

沙希は何を考えているのか、答える事も無く黙つたまま下を向いている。

「沙希さん、私が気に食わないなら私の事だけにして下さい。
もし貴方がKJのファンで居てくれるなら、公表だけは止めて貰えませんか？」

貴方が公表すれば…KJはお終いです。寝る価値もない集団になつてしましますよ？」

何も言わない沙希に、私が追加で語りかける。

寝てみたいとまで思つてゐる人、嫌いでは無いでしょうか？
それに…貴方が公表すればメンバー全員が迷惑するのよ？
ファンで居るなら…メンバーが困る様な事はしないで。

「…私と齎してるの？」

やつと沙希が口を開く。

「別に…、本当の事を言つてるダケです。」

「…まあ、確かにそうね。じゃあ公表だけは止めてあげる。だから紹介は絶対にしてよ。」

メンバーだけは諦めないと沙希。

もう、どうしたらしいか分からぬよ。

「何でそんなにKJに拘るの？芸能人と寝たいなら他にも沢山いるじゃない！」

なにも人を齎してまで寝なくとも、貴方が誘えればいくらでも居る筈よ！」

流石の私も大声で怒鳴る。だつて…幾らなんでもあり得ないでしょ

う。」「

「…何で拘るかって？それは…貴方、分からないの？」

「分からぬから聞いてるんです！」

「…私、顔に出やすいタイプだと思つてたんだけどな。」

沙希は急に笑つてテーブルの上のカップに手を伸ばす。

「由君。貴方…本当に私が意地悪している理由わからないの？」

「…分かりませんよ。」

騙してまで男と寝たい貴方の気持ちなんて分かる筈無いでしょう！
「私…別にＫのファンでも無いし、寝れば良いとも思つて無いわよ。」

…えつ？違うの？

私つてば沙希の事誤解して…、いや？…これは作戦かもしねな。
油断しちゃ駄目だよ。

「じゃあ、理由…聞かせて下さい。」

沙希…行つてみなさいよ！私が納得できる良い訳を…！

「…私、貴方の事…本気で好きだったのよ？知つてた？」
「…えつと…はい？」

あまりに突然で、私は言葉が上手く出でこない。

「嫌だ。本当に気付いてなかつたの？私なりにアピールしてた積り
なのに。」

沙希は私の表情を見てクスクス笑つている。
こつこつは陽動作戦？

「私…貴方と一緒に収録日には必ずスキンシップしに行つたり、
何気に好き好きオーラ出したり…ねえ、本当に気付いてなかつた
の？」

「…まあ、今思えばそういう事も…。」

沙希の言葉に記憶が蘇つてくる。

今思えば確かに必要以上のスキンシップを受けていた気がする。
でも…流石に好きと思われてるなんて思わないよ！

「…嫌だ。本当に氣付いてなかつたのね。」

「あの…、本当に私を？」

「…貴方じやない。ＫＪの由君が好きだつたの。女じやなくて男の由！…！」

由君と一緒に共演して…あんな激しいキスを人前でされて…。

「すみません。私…。」

「別に謝らないでも良いわよ。私が勝手に思いを寄せていたダケ。でもね…ショックだつたの。」

「ショック？」

「当たり前じや無い！あんなキスされたんだもん。貴方も私に気があると思っても不思議じやないわ！」

そして告白しようつと打ち上げの時…。なのに貴方は女で、しかもお兄さんと…。

「…沙希さん。」

沙希の表情が一気に変わり、今にも泣きそうだ。

これは…本当に悲しんでるの？それとも女優さんだし演技？
私には見わけが付かないよ。

「…沙希さん、騙して居て済みませんでした。」

「別に謝らないでもいいわよ。ただ…自分の事が恥ずかしくて悔しくて…。

だから貴方に意地悪しちゃつたの。」

「沙希さん。」

沙希は残つている紅茶を一気に飲み干し、そつとソーサーの上に置いた。

「…メンバー紹介しどうのは撤回するし、貴方の事も一切口外しないわ。」

落ち着いた口調で私に語りかける。

「あの…本当に？」

いきなりの展開に、信じられない私は沙希に伺いを立てた。

「本当。それに最初から紹介してもらおうて思つて無かつたし。ただ…」

「…ただ？」

「…ただ、あのまま失恋するのが悔しかつたのよ！…だって…初恋よ？初恋。」

「…初恋ですか？貴方みたいに可愛らしい人が？」

「…どうも。嫌味にしか聞こえないけどね。」

「そんな！本心です。」

沙希さん、今時幼稚園の子供だつて好きな人は居ますよ？
なにの…初恋だなんて。そりやショックだよね。

沙希の話は本当なのだろうか。

初恋って…マジですか？

「あの…、本当に無かつた事にしてくれるんですか？」

「…ええ。何回も言わせないで。」

「…」めんなさい。」

「あのや、謝らないでくれない？別に貴方が悪い訳じゃないし。」

「えつと、はい。すみません。」

沙希は、思わず謝る私の顔を見て噴き出す。

「…ふつ。あははは…！…何で私、女の子の事好きになっちゃったのかな。」

「沙希さん。」

「あのね、私…『デビュー』当時に嫌な思いばかりしてきて、ちょっと男性不審でさあ。

そんな時に女の子みたい…って、本当に女だつたんだけど貴方と会つて…。

胸押し付けても抱きついても反応しない貴方に興味持つて…。」

沙希は自分の思いを語り始めた。

沙希は『デビュー』当時、事務所から過剰な接待やらを要求されて、新人の彼女は従つてたんだつて。

男たちの沙希への欲望やら人間の汚い部分とか沢山見てきた沙希は、心が壊れ掛つてたらしい。

そんな時私と会つて…。最初は悪戯半分で私に近づいてきたらしいんだけど、

色気にも押しにも反応しない私に、心底安心感を覚えたらしくて…。

私は女なんだから当然なんだけど、彼女にしてみれば新鮮な風に見えたんだって。

この人なら自分を大切にしてくれるかもしれない…そんな希望を持つた時、私の正体を知つて…

可愛さ余つて憎む100倍つてな風に、私に嫌がらせをしちやつたんだつて。

沙希は…真剣な顔で私に謝つてくれた。

私は、彼女の気持ちを信じる事にしようと想つ。

「由…ちゃん。これからも仲良くしてくれない?」

「…えつ? 私で…いいんですか?」

「むしろ貴方がいいの。何か…汚れて無いって言つか…綺麗つていうか…。」

「ええ…沙希さんにそんな事言われると…逆に凹みますよ。」

「あはははっ! まあとにかく、仲良くしてよーそれに…貴方の為にも私にみたいな女…

一人位は居た方がいいと思うよ? これからも芸能界で生きて行きたいなら…。」

沙希のいう事は最もだつた。

いくらお兄ちゃんがマネージャで協力してくれるとは言え、男である以上限界があると思う。

そんな時同性の協力者がいてくれたら…それは前から思つてた事だつた。

沙希の申し出は正直助かる。

「…あの、私からもお願ひできますか?」

「…勿論! お詫びじゃないけど私に出来る事あつたら何でも言つてよ…!」

私は沙希のマンションに泊まり、一晩中話しきりだ。

久しぶりの女同士としての会話は、本当に楽しくて…。

女性で私の秘密を知ってくれている人が居るのは本当に良い事なのがもしかりね。

そして次の朝、私は沙希の作った朝食を駆走になりマンションを後にした。

こんな晴れやかな気持ちの朝は久しぶりかもしない。

朝の少し冷たい空気も、肺に吸い込むと気持ちが良い… そうだ深呼吸なんてしちゃつたりして！

私は被っていた変装用帽子を脱ぎ、両手を広げて深く呼吸をする。少し身体が冷える感じは、凄く気持ちが良い。

私は、今までの疲れが取れた様な心地で、スキップしながら自宅に帰つて行つた。

「只今！」

私は自宅（お兄ちゃんのマンション）の扉を元気よく開ける。

「…由子、お前…大丈夫か？」

「うん！大丈夫！！」

心配そうなお兄ちゃんの顔、アレ… 一応電話では説明した筈なのにな？

私はもう一度、お兄ちゃんに今までの事を洗いざりに説明し始めた。

「良かつたな由子。でも、ちゃんと相談しろよ？」

「…」笑いながらお兄ちゃんは頭を撫でてくれる。そう…昔の様

一度お互いの気持ちを確認し合つた私達は、もつつかり打ち解けていた。

まだ問題は沢山あるけど…一人で居れば乗り越えられると思つて、そつしていくつもり。

鷹との事、両親の事…結婚は出来なくはないけど…肉体的に妊娠も望めないだろ？

これから乗り越えて行かなくてはならない問題…本当に沢山あって大変。

私は着替えを済ませ、お兄ちゃんと一緒に事務所に向つた。

今日は新曲の打ち合わせで、メンバーも全員集合。

玄関でお兄ちゃんとは別れ、私はメンバーの待つ部屋のドアを開ける。

「お早'づ'やります！」

気分のいい私は、大声で皆に挨拶をする。

「おお！！超元気じゃん！」

雪は私の元に走つて来てくれる。相変わらず朝から元気！！

他のメンバーは…私の方を見て手を上げてくれたり振りてくれたり…。まだメンバーと一緒に仕事が出来る…本当に良かった。

暫くして、KOUICHIさんがデモを流し始める。

まだピアノの音とKOUICHIさんの歌声しか入つてない曲だけど…

凄く素敵なメロディー。

バラードなのかな？優しい曲で、KOUICHIさんの切ない声が凄く綺麗。

「…素敵。」

思わず声に出して感想を言つてしまつ。

「…お前、気持ち悪いよ。」

顔を真っ赤にしているKOUICHIさん。どうやら褒められた事が恥ずかしいらしい。

…あれ？何やら俯いて震えてる。
やばい！久々に出でちゃつつかもーー！

KOJII-SANは黙つたまま部屋を出て行き、残された皆は溜息を吐く。

「…由さん…やつてくれたね？」
「ええ…！…ただ褒めただけなのに…」
「もう、何回遭遇すればポイント分かるんだよー！お前責任もつて探して来い…！」
「ひつーわつ分かりましたーー！」

追い出される様にKOJII-SAN搜索で出かける私。

…発見するのは楽勝なんだけど、連れ戻すのは一苦労なんだよね。
つて考えてる傍からKOJII-SAN発見…！

誰も居ない部屋の隅つ。

体育座りで蹲るKOJII-SANの姿。

久しぶりに見たけど…ちょっと可愛いかもしれない…！

「…KOJII-SAN？時間掛りそうですか？」

「…ああ。」

馴れた様に会話をする。

「あの、なるべく早く戻つて下さいね？私が皆に怒られちやつ。」

「…ああ。」

私はKOJII-SANが復活するまで、反対の隅に寄り掛かり時間を潰す。

「…由、ちょっと話…しないか？」

突然KOJII-SANさんが私の方に歩いてくる。

「…はい？」

「あの…俺、お前に聞きたい事があるんだ。」

まだ真っ赤な顔のＫＯＵＪＥさんは、真剣な顔で私に話しかけてきた。

思えば久々に向き合つたＫＯＵＪＥさん。

色々な事があつて…それに私の初体験の相手で…。

嫌な思い出が沢山あるけど、最後は私を解放してくれて見守つてくれる人。

「…由、お前…今誰か居るのか？相手…。」

「あつ相手ですか？」

「…そうだよ。相手…男だよ。」

「あの…、彼氏が居るか聞いてるんですか？」

「そうだよ。…居るのか？」

これ…正直に答えた方が良いんだろうか？

私の事まだ好きで居てくれてるとすれば…こりは正直に言つた方が良い気がする。

「…はい。います。」

誰とは言えないけど…私には愛する人が居ます。目を見てハッキリ

答えた。

「…そか。」

下を向いたままのＫＯＵＪＥさん。表情が解らない。

「あの…、ＫＯＵＪＥさん？」

「…あああ！…！…くそおおお…！」

なつ何ですかいきなり！

「…ちよつＫＯＵＪＥさん？」

「…じょうがねーか。あんな始まりだつたしな？」

ＫＯＵＪＥさんは私の肩を抱き、そつと額にキスをしてきた。
「ひやああーなつ何するんですか…！」

「…もう何もしないから。最後…な？」

私に笑いかけ、まるでお別れの様にきつく抱きしめてきた。
抵抗しようとも思つたんだけど…何故か動く事が出来なかつた。

「…はい。これからもよろしくな?」

いきなり私を離し、握手を求めるKOUJIROさん。これ…どういつ
意味なんだろう。

「はあ?…まあ宜しくです。」

差し出された手を握りかえす私。

KOUJIROさんは私の手をブンブン上下に振り、そつと手放した。

「あの…KOUJIROさん?」

何が何だか分からないんですけど?

「…ほら、階待つてんだろ?早くこい。」

先に部屋から出て行くKOUJIROさん。ちょっと!貴方の所為で此処
に居るんですけど!!

KOUJIROさんの後を追つ様にメンバーの元に戻つた。

第四十六章

「おお！今日は早かつたなあ！」

私達の事を出迎えるメンバー。

皆馴れた様子ですね。

KOUJUKEさんは何事も無かつた様に椅子に座り、足を組む。それも何時もの様子。そして…

「…始めるだ。」

自分の所為で遅れている事など感じさせない…といつか氣にも留めない様に、

KOUJUKEさんは打ち合わせを開始してしまつ。

でもね、それも何時もの事で、私達は大人しくKOUJUKEさんのペースに巻き込まれるんです。

部屋全体に音楽が掛り、KOUJUKEさんの手懸けた新曲が皆の耳に入つて行く。

「素敵な…。ぐう。」

新曲は、何度も聞いても素敵な曲で…また禁断フレーズを口走りそうに。

すかさず歯で私の口を塞いで…」迷惑かけます。

「KOUJUKEさん、タイトル何で言うんですか？」

「この曲に合つタイトル…きっと素敵な筈。」

「…My secret story」

KOUJUKEさんの「コアンスは凄く綺麗だ。

でも、どういう意味なんだろ？。英語2だつた私には難しい。

KOJIさんから渡された歌詞。

そこには一人の男の…切ない思いが書かれていた。

My secret story

僕は知っていたよ 君が素晴らしい女性である事を
世界中が知らなくても 僕だけは君の事を信じてる
だけど君は誤解している 僕の本当の気持ち
僕は君さえ居てくれれば何も要らないのに

My secret story

これは誰も知らない秘密

My secret story

君と僕だけの秘密だよ

いつも陰から君を見る だから僕を嫌わないで

君の事を何時も応援してる 支えて行きたい
出来れば僕も入れて欲しい 君の世界の中に
叶わないならせめて 見守る事を許して
僕は君さえ居てくれれば何も望まないから

My secret story

せめて君との思い出は

My secret story

僕の誇りと信じたいんだ

いつも陰から見守ってるよ だから僕を許して欲しい
もう一度君を傷つけないと誓うから…

これ…私に対する手紙？

この歌詞から感じるのは…私に対するKOUSHIさんの謝罪。

私、KOUSHIさんの事誤解してたのかな?

歌詞から感じる温かい愛情…思つだけで涙が流れる。

「…KOUSHI、これ…お前何かあつたのか?」

KAJIさんが突っ込む。

「嫌?俺じゃ無い。最近知り合つた男の事を…代弁しただけだ。」

KOUSHIさんは、顔色一つ変えずに言い切つた。

「だよなあ!こんな一途な男…お前の筈ないよな!!」

KAJIさん初め、メンバー全員がそう思った。

この曲の本当の意味を知つてているのは…この場では私とKOUSHIさんだけ。

そう…二人の秘密の話。

でも、私には一つの不安要素。

それは…私とKOUSHIさんの関係を知つてゐる唯一人の存在。

そり…お兄ちゃんだ。

この曲を聞いてお兄ちゃんがどう思うか…それだけが心配だった。

でもこの曲、本当に素敵で…優しくて切なくて。

これを聞いた人は、絶対に好きになつてくれる。

今までと違つて、きっと皆が喜んでくれる。

この曲なら…

誤解させない様にお兄ちゃんに伝えよう。

KOUSHIさんとの事は過去の事で、今は貴方だけが好きだと。

そしてKOUSHIさんの事はもう恨んでは居ないと。

この曲を愛してくれとは言わないけど、せめて認めて欲しいと…

私はお兄ちゃんと車で自宅に戻りうつした。

お兄ちゃんは車を取つてくると駐車場に向い、私はロボレーで待機していた。

すると…後ろから私を呼ぶ声がしてきた。

「…由君…」

この声は…沙希?

後ろを振りむけば、チョコソンと私の方を見つめる沙希の姿。

「…うわあ…さ…沙希さん?」

「えへっ、ビックリした?」

「そりゃビックリしますよー。ビックリしたんですか?」

「ええ? 友達に会いに来ただけ! …何よ、嬉しく無いの?」

沙希は久々のオフで、近くにショッピングに来ていたらしい。
事務所の前を通り掛つた時、たまたま私の姿を発見したみたいで。
ランチでも一緒にと誘つてくれたんだ!!

そりや沙希と居れば女の自分に戻れるから嬉しいけど…。リヒは事務所だし。

それに、沙希と待ち合わせしてて写真にでも撮られたら…!
「うつ嬉しいけど、ここ事務所だし、場所は考えないよね?」

「…ああ、そつか。いくら友達でも今は、由君だもんね。」

「そう、由君なの。ごめんね?」

「分かった! ジヤあ…此処出たら電話して…」

「うん、分かった。」

沙希はそのまま事務所の出口に向かい、私は沙希に向かい中から手を振つていた。

その時、信じられない事が起きてしまつ…

私と沙希を、無数のフラッシュが襲つ。

「沙希さん！Kの由とどうしていづじ関係ですか？」

「沙希さん…お泊まりデートは昨日が初めてですか…」

「アーティストがシカドですか？」

「無事に暮らせば、何事もあらぬ」

あれ…これって、スクープされちゃつてるのかな？

卷之三

沙希は下を向いて、必死に顔を隠して居る。

私は：とにかく沙希の頭から自分の来てましたシャケットを被せ
事務室のドアを開け、

身動き出来ない状態の沙希を、あのまま放置するのは可哀そうだつ

だから。

「沙希さん、これ。

うん、
ヤラレタね。

和と沙希は、□数少なく茫然としてしまひ

暫くすると警備員数人が飛んできて、記者達を目の届かない所まで追い出してくれた。

由ハ一體とシカドレ

「ヤー シヤー サニエのお兄ちゃんが飛んできただ
」「うつ マヌーナー、マヌーナー」

卷之三

「へん、そうかいたのです。」

私達は裏口から逃げるよう事務所を後にした。

第四十七章

その日は家から一歩も出る事が出来なかつた。

窓から覗けば、外には無数の記者達が私が出てくるのを待つてゐる。そんな中に飛び込む勇氣は無い。

沙希…沙希の方は？

私は携帯を取り出し、沙希に掛けてみた。

「…あつ！もしもし沙希ちゃん？そつちはどう？」

「由ちゃん？…うーん、こつちは凄い記者の数だよ。由ちゃんの方は？」

「うん、こつちも物凄い数。これじゃプライベート所じや無いね。」

「そうだねえ。残念だけど一人で合ひつのは無理かもね。」

折角同性の友達が出来たのに…。

学生時代、引き込もつてから初めての同性の友達。

私の秘密を知つても友達になつてくれた人だったのに！

何で私は友達と上手く行かないんだろう。

それから私達は、何処に行くにも記者達に後を追われる様になつた。番組の収録、新曲の打ち合わせ…何処にでも記者は現れる。

家の中だけは盗撮されない様にカーテンをしつかり締めたけど…締め切つた部屋の中はジメジメしていて気分が悪い。最悪な環境だな。

…芸能人ってこんな感じなの？これが芸能人なの？

…鬱になりそうだよ。

実は最近、私には記者以外に不安があった。

それは、鷹の存在。

こんなに私の事が報道されてて、あの日以来連絡すら無いって…可笑しくない？

正直お兄ちゃんとの事話もなくちゃいけないからドキドキはあったけど…

仮にも付き合つてる相手に電話一本寄こさないって…あり得ないでしょ！

…まあ、私からも電話していない以上、人の事言えないけど。TVでは良く見かけるから生きては居るんだろうけども。

こういう場合、どうしたらいいの？

こっちから電話した方がいいのかな？

でもあんなに優しくしてくれた鷹に…言つのは辛いな。

でも、二股掛けてるよりはいいよね？

それに、相手がお兄ちゃんだとは言つつもりは無い。

うん、私の自己満足なダケなのは分かってるけど。
どちらにせよこっちから電話するのが筋だよね。

沙希の事説明するのも、別れたいと言うのも。

私は意を決して携帯に手を掛けた。

…プルルル、プルルル、プルルル…

あれ？出ないのかな？もしかして仕事中だつたりして。

「…はい。」

ああー！出たー出ちやつたー…どうしよう…何で切りだす？

「あつあのー由だけど…。」

「…由?…ああ!Kの由君?」

この声…鷹じや無い?鷹にしては高いといふか…これって女の声だよね。

「あの…、鷹出して貰えませんか?」

震える声で電話に出た女に話しかけた。

「鷹?ああ今は…お風呂入つてゐけど

「ふつ風呂?何で!?!」

「なつ何でつて…、汗かいたから?」

「何で?…何で汗かいてんの?」

「…ちよつと、いくら鷹の友達でもさ…聞かれたくない事つてあると思ひよ?」

私は…その後何も言わずに電話を切つた。

電話を切つても私の身体は動かない。

浮氣…してゐつて事だよね鷹。

この前はあんなに私の前で必死に説明して…あの鷹は何だつたの?

私…鷹の何だつたんだろう。

頭に血が上つてくる…自分の事を棚に上げて。脳みそが沸騰しそう!つてか沸騰した!!

ムカつくぅ!…!

佳苗との時はまだSEXつて意識薄かつたからここまで沸騰しなかつたけど…

今回は汗…汗つてさあ…した後つて事じやない?

でもさ…浮氣されるつてこいつ氣持ちなんだよね。

これ、私も鷹に同じ事をしようとしてた。人の事言えない…。

鷹の事…怒る資格ないよね当然。

そう考えると、私の心は急に軽くなつた。

喧嘩両成敗じゃないけど、浮気両成敗。

…ズルイ考えだな。

でも…するくても、少しホッとしたのは事実。最悪な女…私つて。

電話に出れないならメール…。

『電話したら女性が出たよ。汗かく様な事してたんだね。

鷹…一度田は無いよ。一度と逢う事は無いから。由より』

これなら女に見られても大丈夫だよね。

暫くしても鷹から返信は無かつた。

つという事は、お別れ成立?

人と人の別れつて…こんなに呆気ないの?

私、鷹からの連絡受けられるように携帯持つて待つてたのに。

別れのメール位返信くれても良くない?

呆気無さ過ぎ。

ここまでシンプル過ぎちゃうと、喜んでいいのかすら分からなくな
る。

私と鷹の交際つて一体何だつたんだろう。

まるで…一人の間には、何も無かつたみたいだね。

私…鷹への気持ち、申し訳ない部分まで消えちゃつたよ。

自分を責める事すら馬鹿らしい。

鷹からの連絡が無いまま数日が過ぎた。

相変わらず私と沙希は記者に追いかけられる毎日。

私達がいくら否定しても、記者者達の追及は止まらかっただ。

マスコミ各社にFAXでコメントも発表したけど…結果は変わらず。余りの過熱に、お互いの事務所からは記者会見をした方が良いのでは?

といふ話まで飛び出してきた。

「別に誰と付き合っても良いじゃない。誰かを愛する事はいけない事なの?」

人を愛する事は罪になるの?もう放つておいてよ!」

私は正直、鬱状態にまで追い詰められていた。

今日はスタジオで歌番組の収録があった。

無事終り、メンバーと一緒にテレビ局を出ようとしたら時…ある事件が起こった。

それは…私の一生を左右する、重大な事件だった。

「由さん、車に乗つて下さい。」

お兄…マネージャーは局の入口まで車を回してくれる。

それは私が記者に追いかけられる様になつてから毎回の事。

マネージャーの手によつて開かれた車のドアに、私は乗り込もうとする。

そして車に足を突つ込んだ時、いきなり腕を誰かに掴まれた。

「由さん!沙希さんとの交際は本当なんでしょう?」

私の腕を離すまいと力を込めて握る記者。

この記者…毎日私を付け回してゐる。

「ちょっと…止めて下さい!」

「由さん…いい加減認めて下さいよ!貴方も疲れるでしょう?」

「止めて下せ……」メントはFAXで出した！それが本当の事なんです！」

「嘘言わないで下せ……私はこの田でお泊まりを確認してるのですから！」

「この記者が、全ての原因の写真を撮ったのは……アンタの所為で、私達はどうだけ困ってると思つてんの？」

怒りが込み上げて……私は記者を睨みつけた。

「おお！その表情良いですね！ゾクゾクしますよ！」

「いい加減にして下さいよ！アンタの所為で……」

私は力任せに腕を振り払った。

余りに勢いよく振り払つたから、記者はようめいてしまひ。

「……ああ！今僕に暴力をふるいましたね？これは明日の朝刊に載せて頂きますよ！」

「ヤリと笑いながら私の写真を撮る記者。

ムカつく……掴まれた手を振り払つただけじゃない！これが暴力だといつの？

私は更に怒りが増して……記者の顔を激しく睨みつけた。

「由さん！早く車に乗つて！」

私と記者の様子に気付いたマネージャーが、二人の間に割り込んでくる。

私はマネージャーの背中に守られる様に車に乗り込んだ。

扉は閉められ……マネージャーと記者は少し離れた所で良い争いを始める。

どうにかして私に近寄りたい記者に、それを阻止したいマネージャー。

最初は言葉同士、それが次第に身体がぶつかる様になつて……

記者の強引なタックルは、マネージャーの身体を弾き飛ばしてしま

つた。

決して力で負ける筈は無い。暴力と書かれるのを防いだ結果だろう。

運命の時は来る。

弾き飛ばされたお兄ちゃんの直ぐ目の前に：

第四十八章

パパ
！！！

激しいクラクションが鳴り響く。

そして…宙を舞い、地面に叩きつけられるお兄ちゃんの身体。

「…嘘…何？何が…。」

分からぬい、私の目の前で何が起つてるの？

お兄ちゃんの身体が宙に舞つて…飛ばされて…血まみれで地面に横たわつて居る。

私はよろめく足でお兄ちゃんの傍に寄つた。

「ねえ…何してんの？早く起きてよ…。」

ピクリとも動かないお兄ちゃんの身体。

私はどうにかしてお兄ちゃんを起こしそうと、必死に身体を揺すつた。

「起きてよお兄ちゃん…ねえ早く家に帰りつよ…ねえ…。」

「駄目だ！動かしちゃいけない！」

急に頭の上で声がして…私は腕を掴まれる。

「でも…起きないの…お兄ちゃん…寝ちゃつてるの…。」

「…今、救急車呼んだから！動かさないで…。」

「お兄ちゃん…お兄ちゃん…！！！」

私は動かないお兄ちゃんに縋るよつて救急車を待つた。

暫くして救急車は到着して、お兄ちゃんは中に乗せられる。

「誰か状況分かる人居ますか？」

白い服を着た隊員に声を掛けられる。

「あの…俺…見てました。」

「では一緒に来て下さい。」

私は頷き乗り込んだ。

サイレンを鳴らしながら走る救急車の中。

私は処置をされるお兄ちゃんから目が離せなかつた。

…お兄ちゃん、また車に…

また私の所為でお兄ちゃんは傷ついて…今度は血まみれで動かない…どうして?どうしてお兄ちゃんだけこんな目に?

私が…私の秘密が招いた結果。

病院に到着して、私はお兄ちゃんと一緒に処置室に向かつた。

「付き添いの方は外でお待ち下さい!」

中まで入ろうとした私は、看護師に止められ待合室の椅子に座らされる。

…どうしよう…お兄ちゃん死んじやう…!

誰か助けて…お兄ちゃんを助けて…

私が椅子で震えていると、バタバタと数人が走つてくる音が聞こえてくる。

「おい!由一マネージャーの具合は?」

「しっかりしろ!俺たちにも状況説明しろ!」

顔を上げて確認すると…そこに居たのはKUのメンバーだった。

「雪…KOU…KOUさん…KAJIさん…JYEさん…。それに…鷹…?」

そう、居たのはKUのメンバー以外に鷹も。

何で鷹が此処に?

「鷹…何で…。」

私は震える口で鷹に話しかけた。

「嫌…お前に会いに事務所行つたら丁度病院行くメンバーに会つて事情聞いた。

俺が来るのさびつかと思つたけど、昨日の誤解を解きたくて…。

「…今それどこのじや無いの。出なおして。」

「嫌だ！今話し聞いて貰えないと俺…一生後悔するーなあ、聞いてくれよ。」

「…止めてよー本当に今はー。」

周りにメンバーが居る事も忘れ、鷹に怒鳴りつける。

私は今、愛する人が生きるか死ぬかって状況なのよ~。

アンタの良い訳聞いてる場合じや無いのよ！

お兄ちゃんの事故で動搖している私は鷹にイライラつきをぶつけてしまう。

「由…落ち着けって。」

雪が私の肩を抱いて落ち着かせようとする。

「つーーー由から離れるー！」

それを見た鷹が、私と雪を引き離す様に身体を入れてくれる。

「はあ？何だよお前…少しは場所を弁えりよ。由はお前の物じや無いだろ？」

「…俺のだよ。マイツは…。」

「はあ？何言つちやつてんのお前。」

雪と鷹が睨みあう様に顔を近づけている。

もう嫌だ。

何でこんな状況になつてるの？

私はお兄ちゃんの心配だけしていいのー…もつ放つておこへよーーー！

突然処置室の扉が開き、看護師が慌てた様子で飛び出してきた。

「あの、患者さんのご家族と連絡が取れる方居ますか？」

「あの…何が…。」

「…それはお話をさせんが、急を用するので急いでお願ひします。」

連絡先を…」

「何？何が起こってるんですか？教えて下さい！」

「それはお教えできません！患者さんの事は言えない決まりです…」

「…お願いです…教えて下さい…今、危ない状況なんですか？」

「…正直難しいです。ですから早くご家族の連絡先を…！」

危ない？お兄ちゃん…本当に死んじゃつたり…嫌…嫌だあ！

「私！私が家族です！妹です！だから教ええ！！」

メンバーの事も忘れ、パニックになつた私は看護師に縋りついた。

「…いつ妹…さん？貴方…男の人ですよね？」

「これは変装です！ですから兄の事を…兄の事を教えて下さい！」

泣いて…思い切り泣いて縋つた。

「でも…。貴方KJの…」

信じてくれない看護師に、私は彼女の手を引っ張つて自分の胸に押し付けた。

「…つ嘘…！…では、急いでこちちら来て下さい。」

看護師に連れられ奥に入つて行く私。

そして待合室に残されたメンバー+鷹。

「…なあ、妹つて言ってたよな…。」

「ああ…しかも兄だつてさ。」

メンバーは今日の前で起こつた事について話しあつていた。

「…由は女だ。」

口を開いたのはKOHJI-EIだった。

「…はあ？マジかよ…俺…気付かなかつた。」

ビックリするKAJIIとJEWY、それに雪。

「本當ですか？ってかKOHJI-EIさんは知つてたんですか？」

雪はKOUJO-Eに詰め寄る。

「…ああ、俺は知っていた。それに…ソイツも知つてた様だな。」

KOUJO-Eは顎先をクイッと鷹に向ける。

鷹に視線が集まり…鷹は今までの事を説明し出した。

「…はい、皆さんに黙つていてすみませんでした。アイツ…由は女で俺の彼女です。

あつ！でも皆さんを騙していたとか…そういうんじや無くて。アイツはふざけた気持ちでメンバーで居た訳じゃないんです。それだけは信じてやって下さー。」

鷹が頭を下げ謝罪する。

「…おい、さつき誤解を解くとか何とか言つてたけど…何かあったのか？」

KOUJO-Eが鷹にキツイ視線を向ける。

「…昨日、俺の電話に妹が勝手に出しゃつて…それで由子が誤解して…

「…何で今なんだ？誤解が生じたなら昨日の内に謝るのが筋だらうが！」

珍しく声を荒げて怒鳴るKOUJO-E。

待合室でそんな事が繰り広げられるとは夢にも思わない私は、皆の元に一時戻った。

「…由！大丈夫か？」

私の元に走つてくる雪。

「…うん、私…俺は大丈夫だよ。でもマネージャーが…」

「マネージャー…悪いの？」

「うん…今から手術。」

「そつか…。」

雪は私の頭を撫でてくれる。でも……何時もより優しいのは気の所為かな？

「……で、家族が呼ばれるのは同意書か？」

KOUSHIさんに声を掛けられ、私は視線を上げる。

「……はい。後…肝臓と腎臓も移植した方が…生体肝移植？だから家族が…。」

「そうか。……で、お前のを移植するのか？」

「……へ？ 何で…。」

さつきはパニックだつたから意識して無かつたけど…もしかして私が言つちやつた？

「……マネージャーの妹…なんだろう。」

KAJIIさんが私に話しかけてくる。

「あっあの…その…。」

「ふつ。今更良い訳しても無駄！ 全部聞いちゃんだから！」
KAJIIさんの横から顔をのぞかせ、ニヤニヤと話すのはJIEYOさん。

「あれ、もしかして私…全部喋つちやつてた？」

「……由子……！」

またパニックに陥つてゐる私を落ち着かせようと、雪が肩を掴んで話しかけてくる。

「後で良い訳はゆつくり聞くからー！ とりあえず手術…頑張れー！」

何時もの雪の笑顔…。

メンバーの顔を順に見つめる。

皆…怒つている様子は無い。

有難う…皆さん。

勇気貰いました。

私は仕事を暫く休む事を告げ、お兄ちゃんの元に戻った。

第四十八章（後書き）

私の秘密の話をしよう…次回で最終章になります。
宜しければ最後までお付き合い下さい。^_^(ーー)^(ーー)^_

最終章（前書き）

私の秘密の話しおとつの最終章になります。
長い間お付き合い頂き感謝致します あきチャン

お腹が千切れそつ…痛い…

激痛で目が覚める。

そうだ…私…手術したんだ。

私の所為で事故に会つたお兄ちゃんの為に、私は自分の肝臓と腎臓を差し出した。

そして…手術は無事に成功し、お兄ちゃんは一命を取り留めた。今日は手術して一回の朝、私はベットの上で動き出来ないで居た。

実家には知りせてない。…お兄ちゃん生きてましたなんて言えないもん。

本当は知らせた方がいいのは分かってる。でも…お兄ちゃんの行為を無駄にしたくなかったから。

「めんね…お父さんお母さん。

それから一週間後、私は漸くお兄ちゃんと面会が許される。ドキドキした…手術が成功したのは知つてるけど、まだ顔見て無かつたから。

…生きてるよね?ちゃんと元に戻つてるよね?

お兄ちゃんは集中治療室に居た。

身体から色々なチューブが出てて…見えていて痛々しい。

でも、ちゃんと息してる。私に気付いて微かに手も動かしてね…。

私はその手を握る様に、お兄ちゃんの指にそつと触れた。

「お兄ちゃん…良かつた…お兄ちゃん…。」

心配させまいと泣かない様に決めたのに…勝手に涙が出てきちゃう。

「由子…ごめんな…俺…お前の肌に傷を…」

「いいの…お兄ちゃんは私の為に事故に…。」

「…ふつ。それが俺が決めた…道だつての。」

満足に動かす事も出来ない身体で、私の頭を撫でてくれる。

「早く…家に帰ろうね。」

「ああ…一人の家に帰ろう。」

私は自分が退院するまでの毎日、お兄ちゃんの病室に入り浸った。
看護師に怒られるまで、お兄ちゃんの傍から離れなかつた。
そして私は先に退院の日を迎える。

「おーす由子！元氣があ？」

花束持参の雪が迎えに来てくれた。

「あつ雪！ありがとー！」

花束を受け取り、雪に礼を言つ。

雪は私の荷物を持ってくれて、運んでくれる。

「…そうだ、マネージャーにも一言挨拶してくかなあ…」

「うん…きつと喜ぶよーでも…あの事はまだ秘密にしてね?」

「分かつてるつて…心配すんなよー！」

一般病棟に移つた（個室）お兄ちゃんに、退院の挨拶に行く。

「…失礼しまーす。…おおーマネージャー元気そうですね!…」

何時も明るい雪は、そのままのテンションで病室に入つて行く。

「…あのね雪さん。元気なら入院して無いですよ。」

顔で笑いながら口では嫌味を言つお兄ちゃん。

「あははっ！そんだけ言えれば退院も近いですね！」

「まあ、早く退院しないと心配ですかね…雪さんが。」

「あーーっ…ひでえ！」

病室に笑い声が響く。

でも私は心の底から笑えなかつた。だつて…冷や冷やしてたんだもん。

雪…暴走してばらさないでよつて…監視してた。

何でかつて言うと…実はお兄ちゃんには嘘を付いて居たの。

だつて、メンバーに正体を知られた事…言えなかつたんだもん。

だからお兄ちゃんに仕事を休んだ良い訳を聞かれた時、咄嗟に嘘言つちやつたのよね。

『お兄ちゃんと一緒に事故に巻き込まれて、一人して救急車で運ばれた。

メンバーが駆け付けた時には、移植も終わつて入院した後だつた。

こう説明したのよつてお兄ちゃんには言つていた。

予め雪には口止めしておいたんだ。でも…ちょっと今不安です。

でもね、そのうち本当の事を言つつもり。でも今はその時じや無い。

私が本当の…秘密を打ち明ける時は、私が由子に戻る時。

そつ…K-を引退する時つて決めたから。

私ね、入院してる間…考えたんだ。

どうしたらお兄ちゃんを守る事が出来るのかつて。

どうしたらお兄ちゃんを心配させずに済むかつて。

答えは一つしか無かつた。

そう、私がK-を引退してお兄ちゃんと一人で生きて行く事だけだつて。

引退すれば追いかけられる事も無い。

秘密がバレてメンバーに迷惑を掛ける事も無い。

折角受け入れて貰えそうだつたけど…これ以上迷惑はかけられない。

KOUJIさんの新曲…My secret storyの制作が

終つたら私は…

引退するつて決めたの。

私は数日家で休養した後、スタジオに顔を出す。
メンバーに挨拶と休んでいた謝罪をして、収録に挑む。

「…おい、ちゃんと出来るんだろうな。」

KOUJI-Eさんの厳しい視線。

「はい。入院中もずっと聞いてました。イメージも膨らませました。」

「…そうか。」

KOUJI-Eさんは私の頭を撫でてくれる。

3 … 2 … 1 …

カウントの後流れる綺麗なメロディー。

私達は各自マイクに向かって歌い出す。

私の歌を…皆で歌う。

無事収録も終え、スタジオは歓声に包まれる。

皆で手を叩き合い、褒め合う。

これが最後…Kとして居る最後の…瞬間。

私は忘れる事が無い様に、持参したカメラで写真を撮った。

Kとして輝いて居られた私の場所を…

私は先にスタジオを出て、そのまま事務所に向かった。
社長に事情を説明し、深く頭を下げ辞表を出した。

社長は止めるなと黙つてくれたけど……口々感謝の事で理解してくれた。

私はKJの控室に、一通の手紙を残して事務所を後にした。

『皆さんに挨拶すらできなかつたけど…許して下さい。

皆わんに「迷惑を掛け…心配ばかり掛けすみませんでした。

私はKJのメンバーで居られた事を誇りに思つてます。
償いの出来ない私を許して下さい。』

暫くしてお兄ちゃんは無事に退院し、家に帰つて來た。

普通の恋人とまではいかないけど、それなりに幸せに過ぐして居た。
お兄ちゃんは以前のマイクの仕事に戻り、生活も安定してきた。
たまにKJのメンバーと顔を合わせる機会があつたみたいだけどね。
お兄ちゃんを見かける度に私の様子を聞いてくるメンバーに、
お兄ちゃんは元氣で居ると言つてゐるみたい。

KJは以前よりグンと売れ、もう私には直接見る事も叶わない…雲
の上の存在になつてゐる。

鷹とはあれつきり連絡もないまま…自然消滅を迎へてしまった。
鷹もTVで見ない日は無い。私の彼氏だつたなんて嘘みたい。
…ちよつ！私つてば何考へんのよ！もう…専業主婦つてこれだか
らね。

…専業主婦。

えへつ！良い響きでしょ？

実は…先日お兄ちゃんと入籍したんだあ！

世間的には他人だし、戸籍も違う。だから入籍出来たって訳。入籍なんて意味無いし、他人の戸籍を奪つてるんだからお兄ちゃんと結婚したという実感は無い。

でも、これから一人で生きて行くにはこの方が都合いいからって一
人で話した結果です。

私…実のお兄ちゃんと夫婦になつちやつたよーーー！

今日はKの新曲、My secret storyの発売日。

私が急に引退しちゃつた所為で発売日が伸びてたのよね。

それでようやく今日発表されるんだけど…

何かね、家に封筒が届いたの。

開けると中には…チケット？しかも日付は今日じゃない…！

…Kのライブコンサート…私が行つても良いのかな？

…あれ？中に一通の手紙が入つてる。

～由子ちゃんへ～

久しぶりー！元気だつた？

ライブのチケット贈つたんだけど見ててくれたかな？

俺達は由子ちゃんが来るの待つてるからね…！！

それで、悪いんだけど裏口から入つてもらえると助かります。

由子ちゃんの顔、ファンに知られちゃつてるからね…！

絶対、絶一一一対に見に来てよね！

それが、僕達に対する償いだと思つてね…！

雪より

雪 … ありがとう。

皆、忘れないで居てくれて有難うござります。

私 … 行つてもいいの？ 私なんかが皆の生歌を聞いても良いの？
客席から見ている位なら、皆に逢う事は無いけど…

一緒に感動を味わう事… して良いのかな？

うん、折角手紙くれたんだもん！ 見に行つてみようかな！
… それんしても雪、私さあ… 誰にも気付かれないと思つよ？
お兄ちゃん仕込みの化粧してれば別だけど。
ナチュラルメイクで私の事分かるのつて… お兄ちゃん位だもん。
まあ、裏から入れつて言つならそりするけど。

私はドキドキしながらコンサートホールに向かつ。

途中、KJの団扇やらタオルを持った女の子たちに沢山逢つたけど…
誰も私がKJの由だという事は気付いてない。
… 雪、我正面から入つても大丈夫だと思うんだけど？

… コンサートが行われるホールは、沢山の人数が収容できると有名な場所。

こんな大きな会場を満員に出来るKJは本当に凄い。

私も…メンバーとして居た時期があつたんだよね。ちょっと鼻高こう。
誰にも言えない秘密なんだけど。

私は指示された通りに裏口に向かった。

「「！」だよね…。」

荷物が搬入される場所。沢山のスタッフが出入りしている。
…私、止められないよね？ だって…ネームプレートも腕章もしてない。

…不審者扱いされないよね？

足を進める。一歩…一歩…

「…お客様、「」こはスタッフオンリーなので。」

進む私の前に、遮る様に伸びる腕。

スタッフシャツを着て、ネームプレートを付けている女性。
見た事の無い顔…アルバイトの女性？

「あの…私…。」

「あのね、Kのファンで居てくれるのは有り難いけど、迷惑だから止めてねこうこうの。」

「私は別に迷惑なんて…。」

「あのね、ちゃんとルール守らなこと駄目でしょ？」

「だから私は！ちゃんと…。」

「しつこいファンは嫌われるよ？」「

しつこいファン…今の私はそう見えるんだ。

その時、私の耳に聞きなれた声が響いてくる。

「あれ？ もしかして…ああ……やつぱり由子ちゃん…」

犬の様に可愛らしい笑顔で走ってくる雪。

…久しぶりの雪、走つてくる光景はまるで昔に戻つたみたい。

「雪！きやあーー！」

私は嬉しくなつて雪に向かつて走り出した。

「ちよつ！いい加減にしないと通報するよーー。女性が私を羽交い絞めにする。」

「きやあーちよつと止めてーー。」

「貴方ねえ！今警察に突き出していくやるーー！」

私の腕を強く引っ張り、何処かに連れて行こうとする。

「痛つー止めて下せーーー。」

「ほりーーじつに来なさいよーー。」

「うわあ、ちよつと何処行くの由子ちゃん。」

近くまで来た雪が、面白そうに見ている。

「ちよつー雪つてばー見てないで助けてよーー。」

「…えつ？お知り合いですか？」

私が雪に怒鳴るのを見て慌てる女性。

「…君さあ、ちゃんと確認した方がいいよ？」この女性はKJKにとって一番大切な女性。

それに…由子って人が来たら楽屋に案内する様にスタッフ全員に伝えてあつたよね？」

「…この人が…すっすみませんでしたーー。」

慌てて私の腕を離し、顔を真つ赤にして走り去る女性。

「1)めんね由子ちゃん、俺…ちゃんと伝えたツモリだつたんだけど。

「…あのさ、どう風に伝えたの？」

「え？うーんと…KJKの由の妹で、超美人の女の子だよって。」

「口二口しながら答える雪

「それじゃあの人間が間違えるのも納得だよ。

「まあ、とにかく今日は来てくれて有難う！始まる前に皆に挨拶してつてね！」

「…私は…皆の前に顔出す資格なんて…。」

「そんな事ないよーそれに…挨拶も無しに居なくなつて…皆寂しかつたんだよ？」

「雪…でも…。」

「もういいから…ねつ！早くひつけ…！」

私の腕を掴んで、無理やり楽屋に連れて行かれる。

「皆ーー由子ちゃん連れてきたよーー！」

勢いよくドアを開け、心の準備も出来ない間に中に通される私。

「あっあの…お久しぶりです。」

とつとにくく挨拶！

「あーーー由子ちゃんだあー元気だつた？」
「口二口話しかけてくれるのはKAJIIさん。

「…お前…ちゃんと肌の手入れしてますのか？荒れてるぞ。」「…ちょっと辛口なHIDEOさん。

そして…

「…来たか。」

短い言葉のKOKOUEさん。

そして、KOKOUEさんは私の傍まで歩いて来て…一枚のCDをくれた。

「家に帰つてから聞け。」

これ、カバーは無いけど多分…あの曲だよね。

「有難う…御座います。」

前と変わらぬ無かつたメンバーの態度、私は胸の底が熱くなってきた。

まだライブも始まつて無いのに…涙が止まらない。

「由子さん、そろそろ会場の方に…。」

スタッフがメンバーを呼びに来る。

「あつ！ もう時間？ 由子ちゃんともひと話したかったのに…！」

「…来るのが遅いんだよ。」

雪とKOUJOHさんの会話

…私が悪いんですか？

KAJIさん、HEIさん、雪をして…KOJIOさんと握手をして送り出す。

「ちやんと見てて。俺達の姿を。」

KOUJOHさんが私に話しかけてくる。どぎもじの笑顔で。

「…はい。見てこます。必ず…。」

私の頭を撫でて会場に向かっていく。

私も会場に向かおつと楽屋を出た時…聞きなれた声で私の名前が呼ばれる。

「由子。」

「これは…お兄ちやん？

振りかえると、胸にネームプレートを着けたお兄ちやんの姿が。

「なつ何でお兄ちやんが？」

「…いや、今日は俺がメイク担当だもん。」

「…そうなの？ 知らなかつた…。」

「…そりゃ言つて無かつたからな。でも…俺は由子が来るの知つてた

よ。」

「…嘘…本当に？」

「ああ。メンバーから相談されたし…お前を誘つて良いかって。」

「…なんだ。知らなかつたのは私だけか。」

「怒るなよ?…まあ…ほら始まるから一緒にに行ひ。」

「うふ…。お兄ちゃん…有難う。」

お兄ちゃんに手を引かれ、私は客席に向かつ。

雪が用意してくれた席は…ちよつと真ん中の特等席だつた。

暫くすると辺りが暗くなり…音楽が流れ始める。

曲は進み、私の思い入れのあるイントロが流れる。

My secret story:

心に染みる…

マトモに聞いて居られない。

涙で視界はぼやけ、ステージ上のメンバーが霞んでしまひ。

生涯忘れない様に…この曲に焼き付けておきたいのに。

曲は終わつてしまひ。

プログラムからして最後の曲だったのに…。

場内割れんばかりの歓声と拍手に包まれる中、KOUICHIさんがマイクを握る。

「…今日は、来てくれてありがとう。

予定には無かつたんですが…今日、この会場に俺たちにとって大切な人が来てします。

その人の為に…俺達はこの曲を捧げます。聞いて下さい…Our secret stories…。」

Our secret stories

僕達は君の事を知っているよ 本当の君の事を
君が何処で何をしようとも 僕達は君の傍に
離れていても一緒にいるよ 気持ちは同じ場所
心配しなくて良いよ 僕らは君を受け入れる

Our secret stories

これは僕達だけの秘密にしよう

Our secret stories

誰にも言わないと君に誓うよ

秘密が僕らを結び付ける だから僕達は誰にも話さない

僕達だけが知っている 君の秘密の話を

僕達だけが感じてる 君の秘密の姿を
隠さないで 隠れないで

僕達と一緒にいよう 僕らは君を受け入れる

たとえ一緒に居る事が 君にとつて難しいとしても
秘密が僕らを結んでくれるよ だから胸の深い所に

君はただ信じて居れば良い それだけで僕らは輝けるんだ
君の瞳に映る様に だから僕らは頑張れるんだ

これは僕らの秘密の話 誰にも言わない秘密の話
秘密が僕らを結び付ける だから僕達を愛してくれ

I am watching you
Therefore you also are looking
at us
We are proud of you

これもバラード、そして綺麗なメロディー。
そして歌詞に載せる私への温かい感情…

私…KJになつて良かつた。

私…皆と一緒に入れて良かつた

お兄ちゃんに勧められて入つた芸能界…

KJのメンバーになつた事は間違いじゃなかつた。

私は…KJで居て良かつた

KJのメンバーで居れた事を誇りに思うよ…

KOUSHIさんから渡されたCD…
その中にはこの曲が入つていた…。

これで…私の秘密の話はお終いです。
聞いてくれて有難う。 KJ 由

最終章（後書き）

皆さんに支えられ、何とか最終章まで来る事ができました。
本当はもっと後日談的な事が書きたかったんですが…この辺りで止
めておきます。

長々…いえ、ダラダラと長い作品になりましたが、最後までお付き
合い頂…

本当に感謝しています。

皆さん、有難うございました。

あきチャン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9633m/>

私の秘密の話をしよう

2011年2月7日11時13分発行